
イシュハ

川上彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イシュハ

【Nコード】

N4198R

【作者名】

川上彩

【あらすじ】

囚人によって語られる物語。未来が見える、しかし希望のない貧しい町の少年イアソン、裕福だが、希望も何もなく、祖国イシュハを憎んでいる少女ヘレン、そして、二人を取り巻く人々……。

1 囚人11番 独房

冬。

この国ではありえないほどの寒さが、人々を襲っていた。この牢獄にも、異常なほどの冷気が押し寄せてきた。なにせ、暖房はない。囚人に金を使うような国ではない。毛布が1枚余分に支給されたが、それで防げるような寒さではない。

そういえば、最近、25番が掃除にやってこない。どうしたのだろうか？

雑居房で凍死したのか？

いや、代わりの掃除係もやってきていないが……。

鉛筆を持つ手が震える。

ノートの端が凍りついている。

もう時間は残されていないかもしれない。

これから、不幸な子供たちの話をしなくてはならない。そして、その周りを取り囲む、やはり不幸な人々の話を。

1-1 ヘレン イシュハ

ヘレンは、まっ白い、ありきたりなパジャマに身を包んで、なぜかベッドではなく床に、手足を縮めて横たわっていた。

目は半分開いていて、空中を見つめているのか、単に何も考えていないから視線が宙をかすめるしかないのか、ともかくどんよりとしていた。

目の色は珍しくオレンジ色をしていて、本来であれば、この、十五歳になったばかりの少女の目は、太陽のように輝いたに違いないのに、なぜか、雲に隠されてしまったかのようにぼんやりとして、動かない。

彼女の周りには読みかけの本（彼女が読みたいと思っていた本ではない。読みたい本を与えられず、仕方なく許された、どうでもいい本を手にしていただった）が散乱していて、鉛筆が転がっており、何かを書こうとして止めた、かすれた跡の付いたノートが拡げられていた。

部屋のドアが開く。今度は白いエプロンをつけた女が（この家の家政婦だろう）は、床に転がっている彼女を、眉ひとつ動かさずに一瞥した。こんなのはいつもの事だった。そして、いつものように、こう言った。

「早くお起きになりませんと、遅刻なんてしたら、お父様がお怒りになりますよ？」

人形のように動かない目をしていた彼女が、その言葉に突然、反応した。

宙に浮いていた目はカッと開き、顔中が緊張に引きつった。身体は電流にでも打たれたように跳ね起き、おびえた声が部屋中に響き渡った。

「私のバッグ！私のバッグはどこ！？」

1-2 少年 老人 管轄区

同じころ。隣の国、管轄区のある街。

古ぼけていて今にも崩れそうなアパートがあり、二階に通じる階段に、一人の少年が座って、眠りこけていた。

身なりの汚い、いかにも貧しさに襲われているという雰囲気だ。

そこに隣人（年寄りで、競馬が趣味）が出てきて、ドアの横で倒れているサボテンを立て直し、

「誰だあ？ 毎日蹴り倒しやがって」

と悪態をついた。

そして、階段の少年に気がついた。

「なにしてやがんだい、朝っぱらからよォー!!」

少年はそのどなり声で目が覚めた。しかし、彼は老人が怒っていないことを知っていたので、何度か目をパチパチさせたあと、すぐに老人の顔を見て笑った。

「また親父にたたき出されたのか？」

「違うね。女が来てるから気をきかせてやったのさ」

「ガキが偉そうに何を言うか」

これもまたいつもの事だったのだ。少年の父は仕事がない鬱憤を少年を殴ることか、女と寝ることとで晴らしていたのである。

だから、老人が朝家を出ようとすると、必ずこの少年が、放り出されたのか、自ら出てきたのか、いつも階段にいるというわけだ。

「今日も競馬？」

「当然のことを聞くんじゃないよ」老人がばつが悪そうに言った。彼も仕事がないのだ「で、今日のお告げはなんだ？」

「たまには自分で考えたら？」

「いいや、お前のほうが勘がいいじゃねえか」

この老人、いつもこの少年の予想通りに賭けていた。そして、いつも（大した金額ではないが）儲けていた。あまりにもよく当たる

ので、老人は『このガキ、競馬場の持ち主と知り合いか？何かやらぬことをたくらんでやがるのか？』と疑ったものだ。しかし、いっこうにそういった不審な気配は見せないし、この少年、他に話し相手がいないのか、老人を見かけると寄ってくる。

どうやら、ただの貧しい、さびしい、みじめな、この辺にはありふれている子供（ただし、ひどく勘の良い）にすぎないのだと思い直した。

「今日は6と4だ」

少年が笑った。痩せていてぼろぼろの身なりなのに、何かを予想するときだけはいつも自信ありげだった。

「ふむ」老人は少し人をばかにしたような目つきをした「覚えておこうじゃないか」

歩き出した老人のあとを、少年があわてて追いかけていく。

「覚えておこう、なんてダメだって。絶対に今日は6と4に賭けてよ。それで僕になにかおごってくれなきゃ。きのうの朝から何も食べてないんだ……」

1-3 クラハ・メイシン 布地屋

管轄区の、同じ街、でも、少し裕福なエリアの布地屋。

クラハ・メイシンが、部屋を飾るレースを何色にするかで、ここ数日悩んでいた。

レースは白いに決まってるじゃないかって、何も知らない人は言うけれど、それではつまらないし、かといってミス・ベリルの好きな黒いレースでは下着に見えるし、妖しいし……ピンクは？子供じみているかしら？空色のレース……きれいだけど、テーブルの色に合わないのだわ。どうして空はあんなにきれいなのに、空色の布や糸はマホガニーに合わないんだろう……。

今年ちょうど30になったクラハは、見た目は十八か九に見えるほどに若々しかった。もともと派手な遊びには縁もなく、良心に富み、それでいて遊び心もある彼女は、色白で目鼻立ちも優れ、世俗にいながら聖女のように清らかに見えた。目は輝くエメラルド色。地味なロングスカートに、栗色の髪を無造作にうしろで束ねている、そんなありふれた格好でも、その美しさは人目を引いた。

「何かお探ですか、ミス・メイシン」

すでに顔なじみになっている、赤毛の店員が寄ってきた。

「マホガニーのテーブル」クラハはひとり言のようにつぶやいた「美しい、丸いテーブルよ。おととい、譲っていただいたの。レースをかけて、花を飾ったらさぞ美しいと思うのだけど」

「白ではない糸がお望みですね？」

「そう！そうよ！」クラハは、今始めて店員に気がついたように、急に声を大きくした「ピアノにかかっているのと、カーテンが白、ベッドにかかっているのはベージュ、枕は淡いピンク……」

「それなら、グリーンはいかがですか。木と葉の色ですから、合いますわ。もちろんどぎつい色ではなく、天然の淡いものです」

「でも、淡すぎるとおばあさんみたいでねえ……」

クラハは、寝食を忘れてレース編みに没頭すること自体がこの国ではすでに『年寄りくさい』と思われることに気が付いていないのだった。彼女にとって、自分で使うものを自分で作るのは当然のことだった。屋敷中のレース、カーテンから、雇い主のミス・ベリルが使う『妖しげな黒レースの下着』や、特殊な天幕まで、彼女の作品なのだ。

さまざまな濃さのグリーンの糸球を手に取りながら悩んでいた時、外からけたたましい声が聞こえてきた。

「だからついてくんなって言ってんじゃねえかよ」

「いいじゃないか！なんかおごってくれよう」

「稼げたらいくらでも食わせてやらあ」

老人と、男の子の声。

男の子、ああ！ドゥーシン！！

クラハは遠い昔（といっても大して大昔ではない。先ほど述べたとおり、クラハはまだ30になったばかりだ）恋をした男性を思い出した。不幸な事件があつて彼は死んでしまった！生きていたら、もし、生きていたら、二人は結婚していて、子供がいたかもしれないのだ。彼にそっくりな男の子か、自分にそっくりな女の子か、あるいは……。

いや、そんな空想はやめましょう。

糸球に意識を戻した。

「この、ポトスの葉のような色をいただくわ」

クラハはたまたま手に持っていたものを店員に渡した。もう色なんてどうでもよくなっていた。早く屋敷に帰り、かぎ針と糸を手にとって、レース編みに没頭したかった。そしてすべて忘れてしまおう。昔の悲しみも、夢でしかない子供たちも……。

店員が商品を包んでいる間、クラハは通りを眺めた。晴れていた。人影はなかったが、老人のけたたましい声だけが、何やら叫んでいるのだけは、かすかに聞こえた。

1-4 ヘレン イシュハ 自分の部屋

学校から自分の部屋に戻ってきたヘレン（本人は『連れて行かれて、ふたたび連れ戻された』と認識している）は、また朝のように、床に転がってぼんやりと宙を眺めていた。

なにがなんだか、さっぱりわからない。

ヘレンの気分は、いつも混沌としていた。

学校では周りののがやがやとざわめく物音に怯え、内気さが外から見えるせいか、誰も彼女に話しかけたりしなかった。でも、ちょっとした物音にびくびくしている姿がおもしろいのか、くすくすと笑った。それを聞いたびに、ヘレンは燃え上がるような恥ずかしさを感じて顔が真っ赤になる。

そして、もはや授業の内容など耳に入らないのだ。

しかも、クラスメートの声だけじゃない、廊下から聞こえるだれかの足音、何をしゃべっているのかわからないのに音だけが聞こえてくる彼らの会話（それらすべてが自分の悪口を言っているようにヘレンには思えるのだった）窓の外を見るのだけが救いだったのに、教師は彼女の席を窓からもっとも離れた、廊下側に移してしまった。こわばった手でペンを握ろうとする。うまく取れない。ペンが落ちる。遠くどころがっていく。椅子に座ったまま、身体を捻じ曲げるようにしてペンをとうとうとするヘレンを見てみんなが笑う……。一日が終わるころには、すっかり疲れ果ててしまい、部屋に戻ってもただ横たわるだけ。しかも、ベッドではなく床なのだ。

なぜか、夜、本当に眠ることが適当な時間にしか、ヘレンはベッドに乘ろうとしないのだ。夜だけ利用するものだと思い込んでいるらしいのだが、家政婦や家の雇われ者から見れば、それは、昼間から深く眠ってしまわないための用心か、それか、生まれつきの気違い（ヘレンって子はむかしから頭がおかしかったんだから！）に見えていた。

ヘレンはぼんやりした目のまま、転がっている本に手を伸ばした。それは、この国の英雄たちの本だった。父親が好んで読み、演説でよく引用するたぐいの本で、ヘレンには難解すぎた。

彼女は国の運命とか、歴史の重要性にはまるで興味がなかった。その代わりに、勇敢な登場人物の少年時代の物語、彼らの母親がいかに温情厚かったか（あるいはその逆だったか）父親たちがいかに厳しかったか（あるいは、もう死んでしまっていなかったか）どれだけの貧乏を耐えたか（あるいは金持ちで、どのようないたづらを楽しんだか）そういうところだけ拾い読みして、架空の世界を楽しんでいた。

ヘレンにはある才能があった。

物語の世界に入り込んでしまって、出てこないのだ。

森の中をうろうろと散歩しているうちに空想の中の主人公になりきってしまい、森の中をさまよったまま行方不明になった。ヘレンが7歳のころだ。三日後に発見されたが、彼女は、なんと自分が道に迷ったことに気がついていなかった！

発見されたヘレンは、やはり今のようにはぼんやりした顔をしていた。普段の彼女を知らない近所の住民は、恐ろしさに気が違ったのだ、かわいそうだと口々に言ったが、ヘレンの父、ヘイゼル・シュッティファントはそうは思わなかった。

自分の顔を見ていつものように怯えた顔をするヘレンに、

「こわかっただろう？ どうやって夜を過ごしたんだい？ 暗かっただろう？」

と、いつになくやさしい声で質問したところ、ヘレンはこう答えた。

「エバが一緒だったもの」

エバ。

父親はそれが誰か知っていた。それはある本の主人公が、森で迷った時に出会った松の木の妖精の名前だったのだ。

その日以来、父親はヘレンを『障害児』と呼んだ。もともと薄か

った彼女への愛情はほとんどなくなってしまい、ヘレンは家政婦と、数人の召使い、たまに訪れる『専門医』に託された。父親の関心は元通りにもう一人の『優秀な息子』であるヘレンの兄に移っていき、そして、自分に娘がいることすら忘れてしまったのだった。

母親は？

家の者はみんな、母について話すことを禁止されていた。なぜなら『この子を遠くへやって！』と、家族から引き離れたのが、他でもないヘレンの母親フランスだからだ。いくつになっても物事を理解せず、にこりとも笑わない娘に嫌気がさし、ある事件をきっかけに、母親はヘレンの存在を無視し始めた。ヘレンも母親の話をしようとしなない。まるで、自分に母親がいることを忘れてしまったようだ。

エバが約束してくれたわ。

ヘレンはそれ以来、周りの人間に言い続けていた。

私はいつか妖精の国に招待されるの、そしたらそこに行って、銀色の椅子に座って、楽隊に囲まれて暮らすんだ……。

そう、楽隊と、歌う人もいるの、とても可愛い……。

現在の、学生になったヘレン、床に転がっているヘレンが、だれにも聞こえない小声でつぶやいた、数年たった今でも、森のまぼろしから抜け出られないようだった。

歌を歌うの。彼女の声はとてもきれい。私も一緒に歌うわ……。

歌！

ヘレンは何かを思い出したように跳ね起きた。目に生気が戻った。ベッドの横には小さな机があり、ランプと、女の子向けの小さなオーディオがあった。数年前に父親が『顔も出さずにただ送りつけてきた』誕生日のプレゼントだった。

ラジオのスイッチを入れた。雑音、そして、何かの番組の開始を告げる、男の甲高いナレーション、それから、リズムカルなピアノ、そしてのびやかな、そして悲しげな女性の歌声……。

ヘレンはスピーカーに耳を当て、ひざまづくようになかったようで、

音楽に聞き入った。そのまま、何時間も、いろいろな音楽に聞き入っていた。

ヘレンにとって、音楽は本と同じく一つの『新世界』であり、実際に生きている世界より生き生きと彼女を迎えてくれた。特に異国の音楽は、彼女にもう一つの、今より平和な生活、あるいは今より面白い、希望のある（今の彼女にはあまりにも希望がない）熱意あふれる（そういえば熱意も意欲も彼女にはない）世界を見せてくれる。

腰を曲げて、くらいつくように音楽を聞くその異様な姿勢が、また召使たちに『あのお嬢様は頭がおかしくて』と日々ささやかせたのだった。

1-5 ウェストン 老人 管轄区の安レストラン

「ヘレンも聞いているんだ、この番組は。昔の、まだ変な素人が音楽の世界に乱入する前の、古き良き音楽ってやつばかり流すんだね。それがヘレンは大好きなんだ。ちゃんと楽器と人間の歌だけが流れて、今の流行みたいな、耳をつんざくような雑な音は入っていないだね。だから安心して聞ける」

えらそうに番組を解説しているのは、さきほどのやせこけた少年だ。

すでに夕方になっていた。競馬レースは終わり、予言どおりに老人は儲けた。しかもいつもとはけた外れに多い。数か月生活できそうな金額だ。すっかり浮かれて、町の安レストラン（老人はなじみのところにしか入ろうとしない）で、幸運の主にめいっばい『謝礼』を食わせていたのだった。

「まあたその女の話か。ヘレンヘレンってうるせえよ。お前の空想にはうんざりだ」

言葉とは裏腹に、老人は上機嫌だ。なにせ好きな酒を好きなだけ飲んだのだから。

「空想じゃない！ほんとにいるんだ！」

「何の話さ？」

店の女主人が空き瓶をつかみながら尋ねた。彼女は酔っぱらいは嫌いだが、たくさん払ってくれるのなら話は別だ。

「ヘレンだよ、今この曲を聞いているよ」

少年……そうそう、まだこの少年の名前を出していなかった。ウェストンがそう言って、カウンターの上的、今にも壊れそうな古くて大きなラジオを指差した。

流れる音楽は既に『古くも良くもない』ロックに切り替わっていた。

「ヘレンは自分の部屋で一人でこの番組を聞いているんだ、毎日」

「で、誰、その子は」

「こいつの作り話だよ」ろれつの回らない声で老人が言った「いつもこいつは何かあるとヘレンが、ヘレンがって言うが、そんな名前の女はこのあたりには住んでねえ」

「ヘレンは遠くにいるんだ。イシユハの首都にいるんだよ」

「おまえ会ったことあるのか」

「ないよ。あと何年かしたら会えるさ」

老人と女主人、それに、周りの客もいっせいに笑った。

「本当だって！」ウェストンが叫んだ「本当さ！ぼくらはいずれ一緒に暮らすんだ！ぼくが弁護士になったらヘレンが……」

「わーかったって！もういいから食え！食え！な？」

もう何年も毎日のように『ぼくのヘレン』の話を聞かされている老人は、つきあうのが面倒になって、料理の皿をウェストンに押し付けた。

「食え！お前は痩せすぎだ！それじゃヘレンちゃんに嫌われるってのよ」

周りが一斉に、爆発したようにどっと笑い出した。ウェストンは怒りで顔を真っ赤にしていたが、黙って料理を口に運んだ。実際彼は飢えていたのだ。フォークを持っている手はほとんど骨だけになっていて、指は関節が透けて見えそうなほどだったから。

ラジオは、有名なギタリストのインタビューに切り替わった。

『ところでケンタさん。エレノアとの関係は？』

好奇心旺盛な声が尋ねる。

『よく聞かれるよ』ギタリストが鼻に抜けたような声で笑う『でも、ほんとにただの友達なんだ。そして、俺が一番リスpektしてる歌手』

「ただのトモダチなわけねえな。きつと寝取られたのさ」

老人はラジオに向かってつぶやき、それから周りの顔見知りには酒を勧め、自分は下品な冗談を飛ばしながら、ふと考えていた。

いつもあのガキの予想は当たるじゃないか。案外、ヘレンちゃん

とやかも、本当にいるんじゃないか？ 実際この世界のどこかで、ヘレンという名前の女の子が、番組を聞いているかもしれない。そういうことがあってもまあ、不思議ではない……。

いや、くだらない、まあいいさ。かわいそうな飢えた少年の哀れな夢じゃないか、壊すことはない。見させてやればいいさ。それにヘレンなんて名前はありふれている。そのうち本当に偶然に、どこかのヘレンちゃんに会う可能性だってあるわけよ。

二人と、あとからやってきた知り合いとのドンチャン騒ぎは、夜中まで続いた。驚いたことに、さんざん飲んで食ったにもかかわらず、たいして高い支払いにはならなかった。それほど今日の稼ぎは大きかったのだ。

1-6 ミス・ベリル クラハ・メイシン ポートタウン

「あんたは、ほんとに、レースの悪魔だねえ」

ミス・ベリルが、目をあきれたように細めながらつぶやいた。

彼女は今、クラハ・メイシンの部屋にいる。窓にはバラの模様をあしらった白いレースが、本棚には少し卑猥な写真集や画集（これはミス・ベリルの仕事道具だが、クラハが保管している）を覆い隠すための深紅のベール、壁には大きな、網目の粗い、何か蔦のような模様のレースが飾られていた。そして、椅子に座ってまた何か「編んでいる」クラハ・メイシンは、茶色の髪にピンク色のレースでできた花を飾っていた。

『ポトスの葉』を編むことに熱中しているのか、クラハはミス・ベリルの言葉には反応しなかった。何か丸いものを一心不乱に編んでいる。

こういうときのクラハは、たいそう穏やかな顔ではあるけれども、どこか貫禄を感じさせる。ミス・ベリルはいつもこう思っている。

『クラハには、女主人の雰囲気がある』

もちろんこれはクラハに敵意があるわけではなく、むしろミス・ベリルはこういうクラハだからこそ信頼していたのだった。年は20以上離れているが、二人は友人なのだ。

ミス・ベリルがクラハの鏡台の椅子に座った。化粧品はほとんど置かれていない。振り返って編み物に熱中しているクラハの顔をまじまじと見つめる。

必要ないねえ、クラハにはさあ。

たまごみたいな顔してる……。

ふん、と何やら声を出したかと思うと、今度は鏡に映った自分を眺める。

年をとったもんだ！

でも、五十過ぎにしちゃあ、悪くない。

目元に明らかに年をとった証が見えたものの、瞳の色は薄くなっていない。相変わらず『深い琥珀色』だった。唇はそれ自体が別な生き物のように生々しく光っているが、これは最新のリップグロスのおかげである。

むき出しになった肩、悪くない。誰よりも白い。しみもない。

ミス・ベリルはいつだって、真冬でさえ、その肩を惜しげもなくさらけ出す服を着た。形の良い大きな胸から太ももまでを覆っている薄い黒のワンピース（若い女でさえ、こんなにはつきり体のラインを出せはしない！）そこから突き出た、ほどよい太さの足。お気に入り黒の、ダイヤやクリスタルで飾られた、いつか、男の顔をふみつけた黒い、光沢のあるブーツ。

ああ、いつ見ても完璧な悪女じゃないか！

しかし、なぜだろう？何かを失った気がするのは。

「皮の鞭がちぎれた」

ミス・ベリルはひとり言のように、でも半分、クラハの反応を期待して、つぶやいた。

「またですか？」期待通りにクラハが声を上げたが、編み物の手は止めない。「もっと強いものをお使いになつては？今はいろいろと便利な新素材がありますよ。アクリルだとか、縄とびに使うあれをご存じ？普通の縄に何か『コーティング』してますの」

「『コーティング』」ミス・ベリルも鏡の自分を見たまま言った。

この、目の前でぶつぶつと動いている唇は誰のものだろう？「どうも好かないねえ。皮がいいよ、やっぱりさあ。手触りもいい、よくしなるし、光沢もある。男はやっぱり皮で鞭打たないと。女の腰みたいになるやつじゃなきゃあ……それに、もともと家畜から生産されたものだろ、なんせ最近、家畜扱いされて大喜びで昇天する変な男が増えたからね……」

ミス・ベリルの職業が何かは、あえて書かないことにするが、勘のいい人ならもうお分かりであろう。こういう職業の女に、クラハのような、純粹で善良な、本来なら愛情あふれる家庭にいるのがふ

さわしい人間が仕えているということが、この二人を知るだれもが抱く一つの謎であった。そして人々は、この純真無垢なクラハにも、なにかおそるべき性癖があるのでは……とか、ベリルが彼女を手放さないのは、二人が夜中に『淫靡な遊び』にふけっているからだとか、噂した。

もちろんそんなのは噂にすぎない。クラハはあくまで自分の職務、館の管理、食事の手配、時に大人げないミス・ベリルの世話などに忠実だったにすぎない。クラハ自身はそういう妖しげな噂を面白がって、人に聞かれるたびに笑い転げるのだった。

あの人たち！ミス・ベリルが、あのリリック（ミス・ベリルの本名）が夜中に私をいじめて楽しむのだって！きつと、私が裸で鎖につながれて、あの人に鞭打たれているところでも想像しているんだわ。笑ってしまう！どうして男たちって、自分の欲望に忠実に他人を想像するのかしら！そうよ、そういう空想は自分のためにするものよ。人の不道德や汚い性癖を攻撃しようとして、自分にその気があることを暴露してしまうのだから。

ほんとうの夜中のあの方は、すべての男を魅了する性の悪魔、あのミス・ベリルは……怯えているのだから。雷や風の音が嫌いで、私や女中の部屋にやってきて、私たちの肩に顔をおしあてて、ずっと怯えているのだから。雷だけじゃない、自分を取り巻いてつぶそうとするものすべてに、怯えているのだから。本当は私なんかよりずっと良心があって、それで苦しむのだから。

クラハの考えが完全に当たっていたわけではない。けれどもそれに近い感情を、ミス・ベリルは持っていた。でも誰にも言わなかった。

「あんた、結婚しないの？」

しばらく黙っていたミス・ベリルが、不意に言った。

「何を突然」クラハがあきれたように笑った。ああ、また始まった！「何度も言ってるじゃないの、私は結婚なんかしないのよ」

「でももったいないねえ……」

「何が？私、独身女を見るとすぐに結婚を勧める人、嫌いですわ」
「いや、勧めてるわけじゃない。私だってあんたがいないと困るんだ」

「御自分はどうかの？」

「バカ言ってるんじゃないよ」せせら笑うようにベリルの吐息が響いた「くだらないよ」

「そうよ、こんな話題はばかげてます。やめましょ」

そして二人とも黙り込んだ。クラハは編み物に夢中でまわりのことにはおかまいなし。

ミス・ベリルは、相変わらず鏡の中の『この国始まって以来の悪女』の身体を、隅から隅まで点検していた。

1-7 ウェストン 老人 フレア 管轄区の貧しい町

午後。

人口の少ない町にも人の活気が感じられる。ウェストンは安レス
トランでサンドイッチを食べていた。もちろん老人のおごりである。
あの日すっかり喜んで酔っぱらった老人は、この少年に連れられ
て（というよりほとんど泥酔状態の中引きずられて）部屋に戻った
のだった。次の日の昼ごろに、頭痛と共に目を覚ました。懐に手を入
れると、儲けた金がぱらぱらと床に落ちた。

ああ、夢じゃねえんだ！しばらく安泰だ！それとも次のレースで
大勝負に打って出るか……いや、ここはつつましく暮らしたほうが
いいんじゃないかねえかなあ。いや、こんな勝負はめったにできるもんじ
ゃない。

大きな賭けに勝ったところを想像して興奮したり、かと思えば、
つつましく、ここは以前から気になっていた作家の全集を買って読
みふけろうか、と考え込んだり、とにかく老人の心は落ちつかなか
った。もともとの性質は真面目であるために、よけいに心の振れ幅
は大きくなり、迷いも深くなるのである。

とにかく飯でも食いながら考えるか。

老人がドアを開けると、外は今にも雨が降りそうなどんよりした
曇りで、老人の心にはなんら似つかわしくないように思われた。サ
ボテンはまた倒れている。そして階段には、いつものことだが、死
んだように眠っているウェストンの姿があった。

サボテンを直し、ウェストンに声をかけようとして、ためらった。
こいつは、起きないほうが幸せかもしれない。

昨日この少年を『報酬』に連れて行った時、老人は改めて、餓死
寸前としか思えない異様な痩せ方に気がついたのだった。昨日ガイ
コツのように見えた手だけではなく、すりきれたズボンから出てい
る足も、もう、肉を剥がれた鳥の骨のようだ。それでいて寝顔は安

らかであった。ただし、額の大きな、蒼黒い痣を除いての話だが。ほっとこう、と思ったが、老人は散歩がてら歩いたあと、立ち止まり、戻ってきて、ウェストンをゆすり起こした。

「おい！起きろ！昼だぞ！」

「昼？」ウェストンが眠そうな声でつぶやいた「ああ、昨日遅かったから寝過ぎした」

「飯食いに行け」

「いいよ、きのう食べたもの」

「いいから行ってこい！」

老人が怒鳴りながら数枚の紙幣をおしつけた。ウェストンは驚いた。

「俺は用事があるからお前にゃつきあえんのよ、今日はな」老人は声を荒げすぎたかと反省し、何の用事があるのか自分でもわからないまま言った「だから、お前、一人でなんか食え。昨日食ったから今日食わないなんてのはなあ、おかしいんだ、ああ、おかしいんだ」ぶつぶつ言いながら、老人は階段を下りて行った。

ウェストンはしばらく呆然といていたが、父親に紙幣をとられてはたまらないと思って、あわてて汚れた服の中にしまいこむと、走って町の中心へ向かった。

「あんた、一体何日食べてなかったの？」

レストランの女主人（彼女も昨日、この少年の不審な痩せ方に気がついた）が、好奇心いっぱい目の目で言った。

「きのうここで食べたじゃないか」

「きのうはいんだよ、昨日の前は」

「ちょっとしか食べてないよ」

「おとといは？」

「食べてない」

「ああ、なんてこった」女主人は、嘆くというよりは喜んでいるかのように天井を見上げ、くると身体を一回転させた「それじゃ、あんたは死にかけてたわけだ」

「別にめずらしいことないじゃないか。あのイシュハだって数万人が貧困の中で暮らしてると言うじゃないか、ラジオでそう言ってたよ。ましてこの国じゃ、食べるものが何日もないのは当たり前なんだよ。少なくともこの辺はそうなんだ。きっとそうなんだ。だから毎年何千何万と人が死ぬんだ。ぼくは死なないからまだ大丈夫だよ。大丈夫……」

最初は意気揚々と、最後は自信がなさそうにウェストンが言った。本人も自分の境遇が惨めになってきたのである。いつもはどんなに飢えていても樂觀的だった。まるで貧乏を楽しんでいるみたいに見えたのだ。そして、そんな彼は時々、狂っているようにも見えるのだ。

「あんた、学校は」

「行っていない、でも、刑法の入門っていう本をきのう読んだ」

「刑法？」

「学生が捨ててたから、くださいって頼んだんだ」

「そんなつまらないものを」

「つまんなくないよ、ぼくは弁護士になるんだからね」

「ハッ」心底バカにしている顔で、女主人が笑った「そりゃ高い志ですこと。でもねえ、学校に行かないでどうやってそんな資格を取るの？大学に行かなきゃいけないだろう？高校の卒業資格は？金がないんじゃない、せいぜいお情けの職業訓練でも受けるのがおちだろうさ」

「そうだけど……」

ウェストンが全く顔を失くしてしまったので、女主人も喋るのをやめることにした。いつもの彼女なら、このうぬぼれたガキをこっぴどくいじめるために、大学に入るのにかかる費用の計算と、金持ちだけが苦勞に報われるという『常識』の告知（貧しく、前途のない子供に、こういう現実を知らしめるのは、死刑宣告に匹敵する衝撃になるだろう）くらいはしたかもしれない。

「ま、いいさ、せいぜい夢見て、今は食いなさい、な、お客さん」

女主人は店の奥に入って行った。ウェストンは残りのサンドイッチを口に入れたが、なんだかもぐもぐと口の中でもてあそんでいるだけで、味を感じなかった。

いや、ぼくの未来はもう見えてるんだ。

彼は必死に自分に言い聞かせて、自分自身を奮い立たせようとした。

もうすぐぼくの前にある女性たちが現れる。彼女たちがぼくを引き取って学校に行かせてくれる。そこで、ヘレンに会えるはずだ。それから同じ大学に行って、ぼくは弁護士になる。そして彼女と婚約するんだ。ぼくにはすべて見えてるんだ。競馬のレースほどはつきりはしていないけれど。

……でもどうして、自分の姿ははっきりと見えないんだろう？ 関係のないことははっきりと見えたのに。もしかして、本当は誰もぼくを迎えに来ないんじゃないだろうか？ ただの空想で、ここであの父親と一緒に、ずっと暮らしていかないといけないんじゃないだろうか？ それじゃ、何の希望もないじゃないか。何より……。

もし、ヘレンがどこにもいなかったら？

いや、そんなはずはない！

自分を励まそうとすればするほど、彼は不安に陥った。

残っていたサンドイッチを紙ナプキンに包み、外に出た。ぼんやりと歩き、貧しい、今にも崩れそうな建物ばかりの通りに入った。

バシャバシャと水を引っかけ回す音が聞こえた。薄汚れた頭巾をかぶった女の子が、何かを洗っている。ウェストンはしばらくぼんやりとその子を見ていた。そのうち、女の子が顔を上げ、ウェストンに気づくと、微笑んで、駆け寄ってきた。ウェストンはサンドイッチを彼女に渡した。ウェストンは、何かいいものや小銭が手に入るたびに、いつも彼女や、他の兄弟たちに渡していた。

この家はいつもにぎやかで、いつも貧乏で……いつも、ウェストンを同じ兄弟のように扱った。いい意味でも、悪い意味でも。お祝いがあれば巻き込んで乏しいながらも手の込んだ料理をふるまい、

人出が足りなければ末っ子のようにこき使う。

「いつも何か洗ってるね、フレア」

「兄弟が5人もいるせいよ！」

フレアがサンドイッチをすごい勢いで口に入れながら（早く食べないと他の兄弟に取られる！）叫んだ。

「いいね、兄弟」

「よくないわよ！うるさいし、何もかも奪い合い。よく知ってる癖に。兄さんたちのほうが力が強いから、私はほとんどいいものをもたえないわ」

「でも、一人ぼっちよりいいよ」

ウェストンが寂しそうにつぶやいた。フレアもそれに気がついた。
「何かあったの？」

「何も」ウェストンは強がるように斜め上を向いて笑った「何か手伝う？」

「必要ないわ。それよりあなた……具合が悪そう。母さんより痩せてるわ」

フレアの母親は病気でいつも寝込んでいる。

「いつものことじゃないか、そんなの」

ウェストンが、洗いものの入ったたらいの傍に座った。フレアも隣に座る。

「何かあったんでしょ？今日は何か……変」

「何でもないって。ただ……」

「ただ？」

「ヘレン、見つからないかもしれない」

ウェストンはこの家族にもヘレンの話をしていた。フレア以外はみんな信じていないが。

「どうしたの？絶対何かあったでしょう？変よ？」フレアが驚いて大声を上げた「いつもはあんなに自信満々なのに！父さんや兄さんがいくら『ばかばかしい。目を覚ませ』って言っても猛然と『ヘレンは本当にいる！』って言い返してるのに」

ウェストンは黙って下を向いている。

「ウェストン？」

「何？」

「もし、ヘレンが見つからなかったら……」フレアが愛しげな眼でウェストンの顔を覗き込んだ「私と結婚して」

ウェストンが驚いて顔を上げた。

「大人になって、あなたにも私にも、相手がいなかったら」

フレアが頬を赤く染めて笑った。ウェストンの顔も赤くなった。

「そんな、保険みたいで、嫌だな」

「保険？」

「イシユハの金持ちがよくかけてるやつ。自動車保険に入っておけば、万が一起故にあっても、医療費と車の修理費用が……」

「ウェストン」フレアが急に不機嫌な顔になった「どうしていつも話題を法律にそらすの？」

「保険と法律は違うよ」

「そういう問題じゃなくて……」

家の奥から、フレア！フレア！と神経質な呼び声がした。たぶん上の姉だ。

「今日の話、覚えておいてね」フレアが立ち上がってウェストンに笑いかけた「姉さんは機嫌が悪いの。早く帰らないと、あなたまでこき使われるわよ」

「別に手伝ってもいいよ」

「だめよ。帰って寝なさい。そんな顔色で」

母親のような口調でそう言うと、フレアは崩れそうなぼろぼろの家の中に消えて行った。

ウェストンも立ちあがって歩き出した。後ろからかすかに『ボタンをつけなおしておけって言ったでしょ!!』『だって洗うものが多すぎるんだもの!自分でやってよ!』という叫び声が聞こえた。ウェストンは立ち止ってふり返った。口元だけかすかに笑いながら。

ヘレンとは全然違うな。いつもおしゃべりをしていて、うるさくて、元気で……。

しばらく姉妹のケンカする声を聞いていたが、通りに別な人影が現れたので、慌てて歩き出し、大きな通りに出て、あまり帰りたくない自分の家に向かった。

うちに帰ったって、僕を待っている人はだれもない……。どうして僕には、母親も兄弟もないんだろう……。

1-8 ヘレン イシュハ 自分の部屋

そのころ、ヘレンはいつものように、自分の空想の王国、つまり、自分の部屋の床に寝ころんでいた。

いつも定まっていけない視点は、今日もどこを見ているのかわからない。それでいてどこか一点を凝視しているようにも見える、そんな妙な光をその目は放っていた。

朝食をとつても、昼を過ぎても、一ミリも動くことなく、床にピツタリと「くつついた」ままだった。

隣にはある本が転がっている。古く、すっかり変色していたが、ヘレンにとってはそんなことはどうでもいいことだ。昨日の夜、ラジオを聞いた後、この本を徹夜で読んだヘレンは、いまだにその世界から抜け出せないのだった。それは少女には残酷すぎる話だった。彼女より少し年上の女性が男に襲われて、その後発見されるまでまる一晚放置されている場面があった。その娘はその後波乱の人生を歩み、しっかりと立ち直るのだけでも。

ヘレンは、まるでその襲われた娘のように、床に倒れていた。時刻は昼で、外は快晴。けれども彼女の周りは闇で覆われ、だれも助けに来なかった。

だれも彼女を見つけることはできないのだ。
誰も来ない。だれも私を知らない。

ヘレンは娘の境遇と今の自分の状態をしっかりと重ね合わせていた。そして、ヘレンという名前も存在も完全に忘れてしまった。そして、夜中に襲われた恐怖と、闇と静けさがもたらした絶望を、味わっていたのだった。

誰がこんな本をヘレンに渡したのか？みな不思議がっていた。でも単に、学校の同級生が、古本の中から見つかったこの『大人向けの』ものを、面白がって彼女に渡したただけのことだった。

「大統領のご令嬢様に読ませてあげなさいよ！」

誰かが叫んだ。教室の生徒はみな笑った（ちなみに、この学校は由緒正しいイシュハの名門校である）

「たしかにこの子の年代には早いかもしれませんが、いつかは読むであろうイシュハ文学の名作ですよ？ そんなにたいしたことじゃありませんよ」

医者が床に『くつついた』ヘレンを横目でちらちらと見ながらそう言った。

ヘレンの『いつもの異常』は数日で止まった。次の本に手を伸ばし始めたからである。周りの人には全く興味を示さない代わりに、ヘレンは偉人の伝記をよく読み（医者や教師が推薦したものでもあるが）彼らの幼年時代を参考にして独特の価値観を形成していった。特に彼女が気に入ったのは、ある女性科学者の生涯だった。貧しかったこの女性は、生活費を切り詰めて、昼も夜も熱心に勉強し、自分の力だけで偉業を成し遂げた。

ヘレンは彼女のようになりたいと思った。でも科学は苦手だったので、代わりに外国語を勉強し始めた。当時流行していた国際語の教科書をねだり、手に入れたあとは懸命に覚えようとして、例文を声をあげて読んだり、ノートに書き写したりしていた。そんな彼女を見て周りの人間は、

「あの気違いお嬢様も少しはまともになってきた」
などと囁き合った。

しかし、あいかわらずヘレンは学校ではだれとも話さず、些細な物音に怯え、学校から帰れば疲れ果てて、勉強する気力もなくしてしまうのだった。床に倒れ、なにやらうろ覚えの例文をつぶやいて、そのうちに眠ってしまい、目が覚めたらベッドの上で、あわててバツグを持って飛び出していく。

変わらない日々が続いた。

1-9 ウェストン 管轄区 街中

ウェストンの父親は、昼間は寝て、夕方にはどこかに消えていき、夜遅く、日付が変わるころに、いつも派手な女を連れ込んで、ウェストンを外に放り投げた（比喻ではない。ほんとうに、彼の服の背中をつまみあげ、ドアの外に投げるのだ！）彼は息子にはほとんど話しかけることがなく、ただ、邪魔な置物のように彼を扱い、機嫌が悪いと、ものに当たり散らすように彼を殴りつけた。

ウェストンはそれでも悲観的にならないという、天性の楽観というものを持っていた。

喋り方はいつも偉そうに、あるいは、少し皮肉めいたコメディのような響きを持っていて、同じような境遇の子供には優しく、そうすることで自分の余裕を見せているようでもあった。

彼は近所では人気があった。特に、とくに自分の子供にすら見捨てられた、極貧の老婆たちは、彼を見かけると、力仕事を頼みに走り寄ってきて、お礼に乏しい夕食の残りや、ありったけの小銭を渡そうとした。フレア以外にも、同じ境遇の小さな女の子たちは、みんな彼に幼い恋をしていたし、男たちにしても、態度が大きい割に『痩せていて弱そう』彼を軽蔑しながらも、手に入れたものをすぐ分けてくれる彼を嫌いではなかった。

そんなわけで、彼はこの町にうまく居場所を作っていたわけだけども、楽しそうにしているもどこか、ものを考え出した年頃の間人間が持つ、暗い影がつきまといっていた。それは、他の、両親のそろった子供たちがいっせいに学校に通い始めたころ、いよいよ深くなった。食事の事はあまり心配していなかった。父親の事もそうだった。少なくとも今までは。

もうすぐこの父とは別れることになるはずだ。

彼ははっきりと、自分を迎えに来る『二人の女性』と『最愛のヘレン』の姿を見ていた。

しかし、いつまでたっても彼らが現れる気配がない。

町の同じ年頃の子どもたちは、すでにもっと上の学校に移っていた。

このまま誰も来なかったら？

来なかったら？

どうする？

ウェストンは町を歩きながら考えていた。

しかし、どうすればいいかは何も思いつかなかった。

町の商店街は閑散としていた。店は開いているが、客の気配が全くなかった。歩いている人間もまばらだった。

きつと『まともな』子どもたちは、学校か、母親と家にいるのだろう。

母親！ウェストンはそれがどんなものか知らなかった。ただ、自分を好いてくれる老婆たち、町の子供の、ほとんどが夫のいない、あるいは夫が飲んだくれの、子どものほかに希望のない母親たち、そんな不幸な女たちに、その断片を見るだけだった。

どこへ行けばいいか考えているうちに、布地屋の前を通りがかった。

店をのぞいてみる。女性の後ろ姿が視界に入った。長い栗色の髪を三つ編みにした古風な人だ。黒いロングスカートは葬式のようにも見える。

ウェストンはまた道を歩き出したが、数歩歩いて立ち止った。まるで巻いていたねじが切れた機械人形みたいに、びくっと、突然に。そして振り返り、布地屋の前まで戻ると、また中を覗いた。

さっきの女性は見当たらなかった。

でも彼は、彼女がどんな人間か、知っていた。

奥まで入り、白いドアの前に立った。中から女性の話し声が聞こえた。

あの人だ、まちがいない！

とうとう来たんだ！

ウェストンは震える手で、そのドアを開けた……。

1-10 クラハ・メイシン 少年 老人 布地屋の前

「ええ、すっかり合いましたの。最初はテーブルの上だけに乗るものにしようと思ったんですけど、だってこのあいだ買った糸じゃ、そんなに大きくはできませんものね。でも、これはやっぱり大きくすっぽりとテーブルを覆って、床すれすれまでたれるくらいにしたほうが、美しく見えるのではないかと思ったのよ」

半ば興奮しながらしゃべっているのはもちろんクラハ・メイシンである。

先日てきとうに選んだ『ポトスの葉』が気にいってしまい、あるだけの糸をすべて編んでしまったのだった。

「それなら、この色は在庫すべて買わないと足りませんわ、ミス・メイシン」

こういう客に慣れている店員は、あらかじめ多めに取り寄せておいた糸を運んできた。

「まあ、それしか置いてないの？」

「このあたりは黒や白や、ありふれた色しか売れないのです。残りはおかの国からの注文ですよ」

「まあ、もったいない」

そういえば、この店も白っぽい糸や布地が多く、他の色は棚に収まっていて、特殊な客に指名される日を、辛抱強く待っているように見えた。

管轄区の人っていつも保守的なのだわ。クラハはそう思った。北の大国イシュハで、数千ものきらびやかな色の布地や糸を目にして以来、どうしてこちらにはそういう色彩がないのかといつも考えていたけれど。

きっと教会や家がやたらに白黒ばかりだからよね。きっとそうだわ。

通称『管轄区』は、大陸の南半分を占める大国で、いくつかの教

会が治めている。

信仰するのは女神ファナティであり、節制を求め、華美を嫌う。

一方、北の大国イシュハは女神アニタを信奉している。こちらは美の女神であり、欲望を肯定するといわれている、そのため、イシュハには節制とか規制という概念が薄い。

でもねえ、女神さまだってこんな地味な色ばかりじゃ面白くないでしょうよ！

クラハは糸球のたくさん入った紙袋を抱えながら店員にあいさつをし、出口に向かおうとした。すると、突然目の前のドアがバン！と勢いよく開いた。

目の前に、異様にやせた、けれども目だけは妙に輝いている少年が、立っていた。

クラハは、あっ！と声をあげて、少年を見たまま立ち尽くした。

この店に男の子がいたことはなかったし、それよりも、少年の汚い服装、異様に細い手足（服の上からでもその異常さははっきり見て取れた）そしてなにより、クラハの顔を見上げたまま、何かに感動しているかのように、恍惚とした顔で目を輝かせている、その顔つきの異様さに驚いたのだった。

数秒の奇妙な沈黙ののち、女店員が、

「ここは坊やの来るところではありませんよ！」

と、少々とげのある声で叫んだ。

「大丈夫です。僕は乞食じゃない。すぐこの人と一緒に出ていきます」

少年がクラハを指差して笑った。クラハはますます驚き、危うく糸球の袋を落とすところだった。

「さ、出ましようよ」

少年はドアを手で支えて、もう片方の手を『どうぞお通りください』と言っているように、ドアに向けた。

「あ、ありがとう」

クラハはやさしく、ぎこちなく笑い、ドアから外に出た。出たと

たん、大声で助けを求めたくなったが、はたして何と言って叫んだらいいのだろうか？『ヘンな男の子が！？』とか？

『異様な目つきの男の子がドアを開けて『出る！』と言ったんです！』とでも？しかしこの変な状況は何だろうか？『知らない男の子が突然ドアを……』

「すみません、驚いてしまったんですね？」

少年がクラハの正面に回って、本当にすまなさそうに言った。クラハは叫ぶ文句を考えるのをやめた。

「いいえ、ご親切にドアを開けていただいて」

「クラハさんですよね？」

少年が何かを期待するようにそう言った。クラハはまた叫びたくなった『知らない男の子が私の名前を知ってるわ！』

「そうですけど、どこで私の名前を聞いたの？」

「ミス・ベリルのところにいるんですよ？」

「私の質問に答えてくれるかしら？」

「未来が見えるんです」

「は？」

「あ、あの、信じてもらえるかどうか……」少年が顔を赤らめた「僕は、生まれたときから未来がわかるんです。もちろんなにもかもしゃなくて、断片的に。明日は父が窓から僕を放り投げるだろうな、とか、隣のじいさんについていて、競馬に勝たせてやったら何か食べられるとか、あ、僕競馬をはずしたことないんです」

「あまり良い趣味じゃないわね、その年で」クラハは苦い笑いを浮かべたが、それは競馬のせいではなく、少年の話があまりにも奇妙だったからだ「おいくつ？」

「正確にはわからないんです。13か15だと思います」
「えっ？」

クラハは驚きを隠せずに、見開いた目で少年の全身をくまなく見た。せいぜい10歳にしか見えない。いや、それにしては話し方がまるで大人だし、でも……でも。

「ともかく」相手が何に驚いたか察した少年は、ますます赤くなりながらしゃべりつづけた「そんなふうに、未来が見えるんです。で、ぼくは見たんですよ。ミス・ベリルとあなたが、うちの父のところにやってくるのを。やってきて、僕をつれて行くんです。ポートタウンのあなたがたの屋敷に」

確かに、クラハとミス・ベリルの屋敷は、この町から数十キロ離れたところにあるポートタウンにある。クラハはお気に入りのレストランのためにわざわざこの町まで通っているのだ。

クラハは呆然と少年を見た。

と、突然、背中あたりに悪寒がさっと走った。少年の顔を見ているうちに、あることを突然思い出したからだった。

ああ！なんてことを！リリック！！なんてこと！この子はある方にそっくりだわ！

「信じてください！決して、あなたがたから金を取ろうとか、そういうことを頼むために作った話じゃないんです。はっきり僕は見たんです。黒い……なんていうのかな、服装でムチを持ったあのミス・ベリルと、茶色い髪に白いリボンをつけたあなたが、僕の目の前に……」

声は突然途切れた。少年の後ろから老人が現れ、少年の首をそのしわだらけの右手でつかみ、自分のほうに引き寄せたからだ。

「ウェストン！何を昼間から夢見てやがるんだ？」老人が怒鳴った

「失礼しました奥様、こいつはちよつとした夢遊病でして」

「違う！」

ウェストンが抵抗して手足をばたつかせたが、老人のほうが強かった。しかし、そのクラハはその『ばたつき方』にまた恐怖を感じた。

毎日会ってる誰かさんが、興奮して暴れたときにそっくりだわ……。

「あなた、この子の父親？おじい様かしら？」

「いやいや、隣のものですよ」ひさしぶりに美女と話す機会を得て、

老人は機嫌がよさそうに、流暢にしゃべりだした「こいつは父親にも毎日放り投げられまして、いや、この町には飲んだくれのダメ人間があふれておりますからな、めずらしいことじゃありませんよ」

「この子の母親は？」

「とっくの昔に行方不明ですよ。なんたって父親が飲んだくれで」

「飲んだくれなのはよくわかりました」クラハはできるだけ『貞淑な』いつもの笑顔で老人に話しかけた「ずいぶん痩せているみたいだけど」

「いや！いや！その通りですよ！」老人は突然興奮したように叫んだ「私はね、この子がかわいそうでときどき飯と一緒に食いに行ったり、金をやったりしてるんです。でも、私だって貧乏のどん底ですからね、毎日はやれません。そうになると、こいつは二日も三日もいや、もっと長く何も食わずに、そこらをぶらついたたり、本を読んだりしてるんですよ。そのくせ、弁護士になるだの、ヘレンと結婚するだの……」

「弁護士になるの？」

「僕は学校に行きたいんです！！」

ウェストンが老人につかまれたまま、もがくように言った。

「そんな金はどこにもありません」急に神秘的な声で老人が囁き、ウェストンの首を右手から解放した。哀れな少年は地面にしゃがみこんで咳き込み始めた「この辺にはこういう未来のない子供がたくさんいるんですよ。夢の中にしか希望がないもんだから、おとぎ話を勝手に作っちゃってね。それで、夢に似た美しい奥様に話しかけたってわけです」

「夢じゃ、ないって」

小声でウェストンがつぶやいたが、老人の耳には入らなかったようだ。

「いやあ、私はこのガキ……オホン！（老人は妙に気取った咳ばらいをした）この子の親類ではありませんが、かわりにお詫びしますよ。ミセス……なんでしたかな？」

「ミス・メイシンですわ。あいにく独身ですの」

「そりゃ、もったいない」

老人は心底からそう思ったのだが、クラハの口元はすこし歪んだ。
「おほほ。それじゃ、私仕事に送れますから、失礼しますわ」

夕方まで用事など何もなかったのだが、クラハは早くこの場を離れたかった。老人に笑いかけると、ちらりとウェストンを見た。

やはり似ている。あの方に似ている。

いや、気のせいだわ。

でも、似すぎているわ……。

何かを振り切るように、クラハは道を早足で歩き始めた。

「ミス・メイシン！ 忘れないで！」 後ろから叫び声がした。必死で助けを求めているような叫び！ 「きつとあなたはまたここに来るよ！ 僕のところに、ミス・ベリルと二人で！ それから、近いうちに、あなたと長くつきあうことになる男が屋敷にやってくるよ！ そうしたら、僕がうそつきでも！ 夢遊病でもないってことを信じてくれるよね！？」

クラハは振り返らなかったし、立ち止まりもしなかったが、言われたことと声は深く心に刻み込まれた。

ああ、どうしよう。そういえば声まであの方にそっくりだわ。顔も声も話し方も！ それにリリック！ ああ！

手に持った糸球の袋のことをすっかり忘れてしまったクラハは、帰りの列車にそれを忘れてしまい、翌日、駅の事務所まで取りに行かなくてはならなくなった。

1-11 ヘレン 散歩中

『大統領のお嬢様』は、学校の近くにある林を散歩していた。道からはずれた所にあるので、町中だけでも、人は少ない。

天気はよく、空は青く、雲もなく、風が少しあった。ヘレンはおだやかな風が好きだった。ただ、みなが思ったり、本に書いてあるほど、風が自由でないことも知っていた。

気圧に押されて、いや、重力だったかしら？ どうでもいいわ、とにかく、力に押されて流されているのが風。大気の流れ、授業で習ったわ。細かいことは忘れたけれど。

誰かに押されて、圧されて、飛び回らなくちゃいけないのよね。不自由だわ。でも、その押す力がなかったら、風の存在自体がなくなってしまう。理不尽だわ。『理不尽』ってこういうときに使う言葉よね。

そんなことをとりとめなく考えながら、ヘレンは黄色く変わり始めた葉や、冬にそなえはじめた枝を眺め、風が頬に当たるたびに『彼ら』を慰めた。

私だって同じようなもの。同じように不自由だわ。どうして私は夢の世界のように魔法が使えたり、仲間と旅に出て笑ったり、できないのだろう？ どうして、学校の女の子たちは私を笑うのだろう？ どうして人の声を聞くのがあんなに苦痛なのだろう？ あの声、あの笑い声！ 耳に刺さるようだ……。

どうして私が『大統領のお嬢様』に生まれなきゃならなかったのかしら？ そういうのは、エリザ（クラスで一番明るくて人気者）のほうが似合ってるわ。偉い人と会って、作り笑いをして、そんなのは出来ないわ。どうしておもしろくもないことに笑える人ばかりなの？

風がひととき強く、彼女の頬をなでて、消えた。

木々がざわざわと揺れ動き、葉がこすれるあの音がした。いくつ

もの黄色い葉が舞い落ちてきた。

あなたたちまで私を笑うのね！

ヘレンはかっとなったが、すぐに、次の風に冷やされた。

ええ、私も同じよ。私は風。お父様やまわりのみんなに追い立てられて存在しているだけなんだわ。なんて理不尽なの。

ヘレンは泣いていた。自分があまりにもかわいそうになったからだ。でも、数分座りこんで涙をふくと、そんな気分も、風の事も、すべて忘れてしまった。

そしていつも通り、自分に疲れ果てて、『大統領の別宅』に帰っていった。

1-12 ミス・ベリル クラハ・メイシン ポートタウンの館

「それは、さあ、物乞いの一種なんじゃないかい？」

鏡台の前に座って、手に持った新しい皮の鞭を撫で、ひゅつと地面にたたきつけながら、ミス・ベリルがつぶやいた。

「そうよね、そう思うわよね」

クラハが興奮して言った。一応断っておくが、ここはクラハの部屋で、別に変な遊びにふけているわけではない。ただ、新しく買った『丈夫な皮の鞭』を見せにきたミス・ベリルにクラハが、

「リリック！リリック！」

と叫びながら飛びかかってきたので、驚いたのだった。

ミス・ベリルはそんなクラハを見たたん、嫌な予感がした。クラハが自分の本名を言うときは、何か個人的な話か、とんでもない話か、どちらにしてもろくなことになるからだ。

クラハは昼間会った『ウェストンという名の奇妙な少年』の話をしていた。

「あの子は私の名前を知っていましたわ」

「私は有名だからねえ。ましてあんな荒れたところだろ？ 猥談にでも登場したんじゃないのかい？ 鞭を持ったベリル様が」

興奮気味のクラハに最初は驚いていたミス・ベリルも、今では興味なさそうな顔で、鏡に映る自分の姿をいつものように点検していた。しかし、どこかいつもと様子が違う。いつもなら、町の話題や風変りな話を好んで、興味津津の顔をする人なのだが……。

「それだけじゃないのよ、気を悪くしないでちょうだい。あの子、そっくりなのよ」

「誰に？」

「はつきり言っているのかしら？ エブニーザ様よ！ この館のほとんどの持ち主によ！ ちょうど十五年前に亡くなった！」

「あっそ」

ミス・ベリルはあいかわらず鏡を見つめたままだ。

「そっくりだわ、ええ、あと数年したら全く同じ顔になるわ。ええ、そうですとも」

クラハはミス・ベリルを怖い顔で睨んでいた、いや『リリック』を！

「どうしてそんなに怖い顔してんのさ、落ちつきなよ」

「いいえ！」クラハが叫んだ「あなた、あの方が死んだあと、急に姿を消したじゃないの。半年で帰るから探さないでなんて置手紙を残して！しかも、半年どころか丸一年帰ってこなかったじゃない！」

「だから何さ」

「どこで、何をしていたんですか？」

クラハは鏡台とリリックの間に割って入り、無理やりリリックを正面に向けさせて言った。

「だから、何度も言ったじゃないか、あまりにもショックだったから、ほら、なんせあんな殺され方しただろう？相手が相手だから裁判も何もできやしない。気晴らしに旅をしていただけなんだって、なんせ相続した金はどっさ……」

「もう十五年も経っているんですよ？私だって15の小娘じゃないんですからね！もう何を聞いたって驚きません！さあ！具体的に！何をどこでどうしてたのか説明してちょうだい！」

「どうしてそんなことを今更説明しなきゃいけないんだよ！ほっとけ！」

嫌な過去を遠ざけるかのように、リリックは両手でクラハを押しつけた。立ち上がり、ムチを肩に乗せ『ミス・ベリル』に戻り、足早に部屋を出て行った。

クラハはそんな『リリック』の後ろ姿を見て、疑惑が真実であることを悟った、というよりは、勝手に『決めつけて』しまった。

ああ！リリック！そうだったんだわ！ああ！

しばらく熱に浮かされたように、少年とリリックのことを考えていたが、そのうち、出かける用事があったのを思い出して、あわて

て『ミス・ベリル』を追いかけた。

「今夜はイシユハに行く予定ではなかったんですか！？ミス・ベリル！もう四時を過ぎましたわ！」

けたたましい声が屋敷の廊下に響き渡った。何人かの女中が部屋から飛び出してきた。クラハは彼女たちに車の手配や荷物の整理を頼み、自分はミス・ベリルを『引きずり出しに』二階の部屋に向かった。

万事がいつもこんな調子だった。だから、誰がこの屋敷の本当の主人だか、ここで働く人々は時々わからなくなる……。

1-13 大統領 イシュハ 官邸

イシュハ共和国の大統領、ヘイゼル・シュツティファント氏のところ、

『お嬢様が、学校の窓から落ちました』

という連絡が入ったのは、十一月の半ば、北国の首都にはすでに雪が降り始めていた。

「窓から落ちた？」

「しかも十二階です」

「なんだって!？」

大統領は急に狼狽し始めた。てっきり、二階か三階くらいだろうと思っていたのである。自分の娘が通っている学校について、彼は少しも知らなかったのだ。そもそも、何階から落ちようが大事件に変わりないはずなのだが、彼は家族に関してはかなり冷淡だった。

「ご心配なく」黒メガネの秘書、ノーマン・ヘステイアが、何の感情も交えずに言った「木にひっかかりまして、軽傷です。奇跡的ですな。ちよつとした怪我で済んだようです」

「どうして落ちたんだ？」

「ご本人にお聞きしては？」

「そんな暇はない。これからアケパリの首相と対談なのだぞ、忘れたか？」

「お電話をするくらいなら今できるでしょう」

「む……」

悩んだ末、大統領は電話しないことに決めた。面倒だったのだ。

1-14 ヘレン 自分の部屋

ヘレンは自分の部屋のベッドに寝かされていた。左腕をちよつと打っただけで、別に骨にも何も異常はないのに、医者は『しばらくベッドから出ないように!』と厳しく言いつけた。

ヘレンは機嫌が悪かったが。それは医者や教師に怒られたからではない。夜でもないのに無理やりベッドの上に寝かされたからだつた。

私! なんともないのに! みんなで狂人扱いするのね!

ヘレンは怒っているわけではない。混乱していたのだ。

数時間前、教室で、ある勝気なクラスメートが、ヘレンにこう言つたのだ。

「ヘレン! 窓から飛び降りてごらん!」

教室にいた生徒がいつせいに笑った。

ヘレンは前から、言われたことを言われたとおりに忠実に実行することで、クラスの笑いを誘っていた。

ヘレン、消しゴムちょうだい。

ヘレン、教科書なくしちゃったの、ゆずってくれる?

図書館に忘れものしたわ、取ってきてくれる?

廊下を一周してきなさいよ、邪魔だから。

すべて、型どおり、ロボットのようになぎくしゃくした動作で実行したのだった。可憐で残酷なイシユハの娘たち! 毎日ヘレンで遊んでいたのである。

ヘレンは、ただ、指示されたからそうしたというだけだった。もともと誰にも興味はないし、話しかけられたところで話すことなんて何もない。ヘレンはずっと一人だった。何をしに学校に来ているのか自分でもわからなかった。

そして今日。

窓からとびおりてごらん。

ヘレンは青白い顔で、窓に顔を向けた。窓からは背の高い木のてっぺんが見えた。窓のすぐ隣にある。手が届きそうだ。

晴れていた。空は青く、風が吹いて木の枝を揺らす、まるでヘレンを誘っているようだ。

きれい。

ヘレンは突然確信した。

わたしもあそこへ行かなくちゃいけない！

一直線に窓に向かっていく、窓に手をかける。

「ちよつと待って！まさか本当に……」

だれかが叫んだ。

窓が開いた。強い風がヘレンの髪の毛を揺らした。

ああ！お友達！迎えに来た！

ヘレンは両手を差し出すように、窓から身を乗り出した。

私の場所はここよ！

ヘレンは転落し、教室には悲鳴の輪唱がこだました。

ベッドの中で、ヘレンは自分をうけとめてくれなかった風や、彼女を魅惑したまま拒絶した青い空について考えていた。

私の居場所はあそこだわ。

『あそこ』がどこを意味するのか、具体的にはヘレンもわかっていなかった。でも、ヘレンの頭には『私の居場所はあそこ』という言葉と、窓から見た空の色しか浮かんでこなかった。

なのに、どうしてここにいるのだろう？先生はおそろしいことを考えたって私を責めるし（空と一緒にいることがどうして恐ろしいことなのかしら？）家の人はみんなびくびくしてるわ。『腫れもの扱い』ってこういうことなのね。でもこんなのはいつものことだわ。怖いのは、お父様が来ることだわ。怒るに決まっている。どうして怒るのかは知らないけど、怒るのはわかるわ。

ヘレンは長く会っていない父の顔を思い出し、びくつと震えた。しかし父親は結局やってこなかった、かわりに、アケパリのドウ

首相と会談をしていたと次の日、医者に聞かされた。

「アケパリ？」

「東の島国さ、ほら、あの、キモノとかヒスイとかサンゴとか、修行の国さ」

「修行？」

「何か、宇宙的なものとながるために修行をする人々がいるらしい」

医者は説明するのがめんどくさかったので、かなり省略してそう言った。

宇宙とつながる？それはどういうこと？

ヘレンの目が輝き始めた。

「どうやるの？どうやるの？つながるってどういうこと？宇宙って星がある宇宙の事？それとも何か内面のほうの事なの？それとも空？」

「まあ、落ちついて！落ちついて！」突然氣力がみなぎったヘレンに医者は驚いてしまった「今度本を貸してあげるから」

「今度っていつ？時間がかかるのなら自分で買いに行くわ」

ベッドから出ようとしたヘレンを医者があわてて制止した。

「だめです！あなたは休んでないといけません。今日中に持つてきますから。絶対にベッドから出ないように！もちろんトイレとか、具合が悪くなったとか、そういう場合は別ですよ（こういうことまで説明しないとかたくなにベッドから離れなくなるからなあ……）食事はちゃんと取るように。約束です。破ったら本は持つてきません」

「約束するわ」

医者は、やれやれ、めんどくさいことになった、と思いながら部屋を出て行った。

いつもは伝記や物語にしか興味を持たないのに、どういうことだろう？前だって、イシュハの女神アニタの本を渡そうとしたら投げられた……。何で修行に反応するんだ？第一アケパリはいまだに古

代のような国じゃないか。いや、そんなことはどうでもいい。

困惑気味の医者とは対照的に、ヘレンは喜んで思考を回転させていた。

アケパリ！聞いたことがあるわ。私たちとは全然違う文明をもっているのよ。たしか……そうだわ、イシュハと戦争をしていた国じゃない。私たちが侵略したのだわ。

どうしよう。嫌われているのかしら。

大統領の娘らしいことをめずらしく考え始めた。しかし、学校の同級生が飛び降りの事をどう思っているのかということは、一切考えなかった。どうでもよかったのだ。

次の日、夢中になってアケパリの思想書を読むヘレンのもとに、父から手紙が届いた。

『転校せよ』

と書いてあった。ほかの文章は一切なかった。

1-15 ウェストン 老人 管轄区

未来なんて、見えないほうがいいんだ。

ウェストンは自分の家のベッド（父のベッドである。彼自身にはベッドはなかった）に寝ころびながら、ふてくされた顔で考えていた。

中途半端に未来がわかるおかげで、余計につらくなる。自分の空想と未来の区別がつかないじゃないか。余計な期待をして、いいことは一つも起こらない。がっかりするだけじゃないか。

いや、でも、今までいいこともあった。でも競馬くらいか。それと、知らない学生が要らない本をたくさんくれた。でも、父親にほとんど売られてしまった。それもわかっていた。取られるのをわかっていて本をもらったんだっけ。

ウェストンは上半身を起こして部屋を見回した。汚れた服、冷蔵庫、その周りには酒の空き瓶がぎっしりと並んでいる。遊びに来た女が残していった下着、父が持ってきたのであろうポルノ雑誌。

なにもかも汚いし、それに、僕のものが一つもないじゃないか！
再びベッドに倒れこむ。

このベッドにしたって、数時間後にはまた帰ってきた父親に『投げ出される』ことを知ってて、僕はこうして倒れているわけだ。

女が来るのに子供がじゃまなのは、わかる。でも、どうして父はあんなにも僕に興味がないんだ？ 隣のじいさんが僕の競馬の予想で儲けていることも、近所の人が僕の予感が当たると話していることも、よく知ってるだろうに、自分も利用して儲けようとは思わないんだろうか？

とにかく、興味がないんだ。そこらへんの物と一緒になんだ。邪魔なら投げ捨てて、どうでもいいときは放置するんだ。

守ってくれる人も、必要としている人もこの世にはいないんだ。どうやって生きていこう？ いっそ家出して、町のばあさんのところ

へでも行こうか？ずっと無視される生活よりずっといい。

きつと連れ戻しにはこないだろう、あの父親は。

そんなことを考えていたが、あるビジョンが浮かんだため、彼は家出をやめた。

ほんとに追いかけてこない。しかも……あのばあさんはもうすぐ死ぬんだ！

ウェストンは体中を刺されているかのように、急にばたばたと暴れ出した。

もう嫌だ！もう嫌だ！見たくない！考えたくない！

ドアが開いた。父親が帰ってきた。感情のない目つきで、ベッドの上ではたばたともがいている息子を見ると、何もなかったかのようには彼の首をつかみ、いつもどおりドアの外へ放り投げた。いつもと違ったのは、ウェストンが「僕は物じゃない！もう嫌だ！」と叫び続けていたことだ。

「おい、何だよ、今日はいつもに増してうるせえじゃねえか」

隣の老人が出てきた。そして、驚きのあまり硬直してしまった。ウェストンが大声をあげて泣いていた。

「おいおいおい、どうしたんだよ、お前らしくもない」

老人がなだめるように声をかけ、ウェストンをなでようと手を伸ばしたが、彼は両腕で老人を押しのと、道へ飛び出していった。

「おい！どこへ行く……ありゃ、まずいな」

隣のドアからは、男女が仲良くしているときの独特の嬌声が響いてきた。老人の耳にはその声が、全世界を侮辱しているように聞こえた。

いまいましい！しかし、探してやらにゃいかんかなあ。

老人はため息をついて、歩き始めた。

1-16 宝石商バリー・トイシン ポートタウンの館前

同じ日の夕方、バリー・トイシンという男が、ミス・ベリルの館の門の前で立ち尽くしていた。

入りたくないなあ、この淫靡な館というやつには。

バリーは宝石のセールスマンである。四十過ぎ。わりとがっちりとした、それでいて相手に圧迫感を与えない、物腰の優しい男だった。ただ優しすぎたのか、強引にものを売りつけることはできない。業績は芳しくなかった。

今までクビにならなかったのが不思議なくらいだよ！

昔を思い出して顔をしかめた。

実際彼は運が良かった。上品に見えるというだけで、わりとすぐに高価な宝石を買ってくれる客、つまり、最初から注文をするつもりで彼をよびつける富裕層を担当できたのである。彼は真面目に働いたけれども、会社のこの決定には不満もあった。

まるで『お前にはセールスの才能は一切ない』と宣告されたようだな！

そして、上司はこの『淫靡な館』の女主人が宝石を求めているから、行け、と言った。そのとき、周りの同僚が浮かべたニンマリとした笑い方が、彼の気をさらに重くしていた。

俺は真面目なんだ！もちろん女に興味がないわけでもない、もてないわけでもないが、変態相手の商売なんかしたくないんだ！

しかし、彼はすでに門の前に立っていて、そんな自分を軽蔑していたのだった。

断るべきだった、ああ、このまま何事もなかったように帰りたい……。

しかし、それは無理である。ミス・ベリルは会社にとってはほぼ最高額を買い上げる『最上位の顧客』なのだ。前の担当者が引退してしまったために自分に回ってきた、大事な役回りなのである。

会社の売り上げの1割を左右するのだ、大変なことだ。

彼は門の前で、鉄柵に顔をおしつけて中の庭を覗いた。

見たところでは、すばらしく古風で上品な家なんだがなあ。もともと貴族が住んでいたのを、あの悪魔と言われたエブニーザが買い取ったとか……。

柵の中を念入りに観察する、黄色いバラが植えてある。手入れはしっかりされているようだ。何に使うんだろう？これが本当にあのいかがわしい……いや、そういう空想はいかん。空想でさえ罪なのだ！女神ファナティは空想で女を犯すことさえ禁止しているではないか！ましてこの館の……。

ああ、どうしよう、俺は地獄に落とされるに違いない。

何度言っても足りないが、彼は真面目な男である。

物音がした。燃えるように咲いている、今度は赤いバラの陰から、一人の女が姿を現した。

ミス・ベリルか？

バリーは顔をますます強く柵におしあてて中を見た。女は十八くらいに見えた。でも服装は保守的で、中年の婦人のようだ。黒いロングスカートで足は完全に隠され、白地のブラウスの柄は黄色いフリージア（バリーは花の名前にも詳しい。顧客のご婦人がたのために暗記したのだ）だ。栗色の髪はこれも古風に、後ろで束ねてあった。バラの花を撫でている手ははっとするほど白い。

古き良きご婦人のようだが、まさかこれがミス・ベリル？いや、年齢が合わない。女中か、庭師かもしれない。

女がこちらを向いた。あわてて目をそらそうとしたバリーに向かって、女は、これまで彼がみたことのない、安らぎに満ちた笑顔を見せた。

……女神だ！ああ！お許しを！

バリーは女の顔から目が離せなかった。美しかったのだ。そして、何よりも、清らかだったのだ。そこには全く俗世間の影がなかった。彼が女性に求めているつも得られなかった、完全なる清純が、女全体

から光を放っていた。それは日光を浴びて、世界全体を輝かせていた。咲き誇った色とりどりのバラに囲まれて『天使』は彼に向って微笑みながら、極上の美しさを放ち、きらめいていたのだった。

柵に顔を押し付けている妙な男が気になったのか、女が近付いてきた。

「あのう」女が言いにくそうに言った「柵にさわらないほうがいいですわ」

「え？ ああ、すみません……ああっ！」

バリーの悲鳴があたりに響いた。女はため息をつき、頬に手を当てて、言った。

「さっき、塗り替えてもらったばかりですの……柵……」

だでさえ短いスカートから豊かな太ももが飛び出し、今にも見えてはいけないところが見えそうだ。バリーは目のやり場に困った。

「心配しなくたっていいんだよ！アハハ！あたしは商売でペンキなんて使わないんだからさ！それより」

急に笑うのをやめて、真面目な、挑発するようなめつきで、ベリルがバリーの目を見つめ、笑った。

「私の宝石は？見せてごらん」

「あ、ああ、そうでしたそうでした……」

すっかり商売の事も、先ほどの門の前での苦悩も忘れていたバリーは、あわててケースを床から持ち上げ、テーブルの上に載せ、開き、ミス・ベリルに中身が見えるように角度を変えた

「これです。28カラットのベリル。ブリリアントカット。この大きさはめったにないんです」

「だろうねえ。こんなでっかいのは初めて見たよ……」

ミス・ベリルが驚いたように、大きく開かれた目を宝石に向けている。バリーは慣れたいつもの説明をしながらも、そんなベリルを見つめずにいらなかった。

まるで、宝石を初めて目にした少女のようだ。本当にこれがあの淫乱のミス・ベリルなんだろうか？夜な夜な自分に忠実な『奴隷』に鞭打って楽しんでいるという……。

ミス・ベリルとバリーが宝石について長々と話しているのを尻目に、クラハは部屋を出て台所に行き、女中にお茶と夕食の指示をし、廊下に出てため息をついた。

まったく、変なことが起こるものだわ……。

しかし、クラハが考えていたのは、縞模様のセールスマンの事だけではなかった。

『近いうちに、あなたと長くつきあうことになる男がやってくる』

ああ、まさかあのセールスマンかしら、あの少年が言ったのは。

確かに、長く付き合うことになりそうだった。ミス・ベリルはその名の通り、ベリル系（アクアマリンやエメラルドと同じ種類の石

だ）特に薄い黄緑色の宝石を使ったアクセサリーを好んで身に着けていたし、今のところ、ベリルが発掘される鉱山を一人占めしている会社が、バリーの勤めている『シュタイナー・メルケリ』という会社なのだ。

つまり、私じゃなくて、ミス・ベリルと長く付き合うことになるってわけよ。でもどうして、突然担当者が変わったのかしら？ 前のご老人は亡くなったのかしら？

いや、クラハが本当に心配しているのはそんなことではない。

さっきあの人『あなたは女神だ』とかなんとか言ってたのよね。私に。

まさか、一目ぼれじゃないでしょうね。そりゃ、わたしだって普通の三十歳よりはきれいなつもりですけど。でも私は一人で生きることにもう決めてるんですからね！

それに……。

クラハは、二人のところに戻ろうと歩きながら、考えた。

もしそうだったら、あの少年は本当に……ああ！ リリック！ なんてことしたの！

いや、責めてはいけないわ、責めては。

だいいち、ベリルに執着するのだって、エブニーザ様がリリックにプレゼントなんかするからよ。パワーのある薄緑色のベリルだか何だかを！ だからこだわるんだわ！ そうに決まってるわ！ リリックはあれでも本当に、本当にあの方を愛していたのだから。それにしてもパワーがあるってどういうことかしら？ 占い？ 言い伝え？ 宝石商はそんなの好きなようにでっちあげるでしょうよ！

それとも、特殊な能力のある方だったから、何か感じられたのか？ ……ああ！ そうだ！ だからあの少年も！ あああ！

クラハは、恋愛小説のきわどいところを読んでいるときのように、一人で興奮していた。

1-18 ウェストン 老婆の家と墓穴

次の日、ウェストンは自宅でも外でもなく、近所の老婆の家にいた。

つい数分前に、小さな暗い部屋で、彼女は息を引き取ったのだ。

『欲しいものはなんでも持ってお行き、安物ばかりだけどさあ』
そんな言葉を残して。

彼女の魂と一緒に、ウェストンの意識までどこかに消えてしまったのではないかと、駆けつけた女たちが思ったほど、彼の顔は真っ青で、目は死んだようにうつろだった。

部屋には腐りかけたベッド、小さな机、針と糸、少しの衣類、それしか残っていなかった。

近所の一人身の女や、かわいがられていた子供たちが集まってきた。彼らが老婆の、子供のように小さい身体を拭き清め、乏しい衣類からできるだけまともなものを着せた。棺桶を買う余裕は誰にもなかった。

そのうち、どこからか男たちがやってきて、老婆を担架に載せ、外に出て行った。

ウェストンは追いかけた。近所の子供たちも後を追ってきた。老婆は貧しい子供たちに好かれていた。何でも彼らのために投げだしてくれたから。乏しい食糧とか、小銭とか。

町はずれの墓地には大きな穴があった。それは、墓が作れない貧しい人間の遺体が無造作に落とされる、そういう穴だった。

どうしてこんなところに葬られなきゃいけないんだ？

すぐ近くに並んでいる『まともな人間たち』の石でできた墓と、目の前の大穴を交互に見つめながら、ウェストンは言いようのない気持ちに襲われた。悲しみと、絶望。

あのお婆あさんはだれよりも真面目に、静かに、暮らしてたじゃないか。賭けごともしない、だれかみたいに子供を放り投げたりし

ない。自分が貧しいのに、近所の子供にいろいろなものをくれたじゃないか……。

穴を見た。貧しい人間を吸いこんでいく穴。

恐怖だ。

いずれ自分もここに落とされて、みなに忘れられていくんだ……。

その場にしゃがみ込んで、ウエストンは両手で顔を覆った。

考えたくない！

周りの子供たちも、母親たちも、彼に声をかけることができず、一人、二人とその場を離れ、家に、彼ら自身の居場所に、帰っていく。

女神様！誰か！助けてください！

ミス・メイシン！ミス・ベリル！

どうして来てくれない！？ヘレン……ヘレン！

今のところ、彼を救おうとする人物は、誰一人として現れない。

1-19 ミス・ベリル バリー氏 館の中

「全部置いていきな。すぐ払う」

ミス・ベリルがそう言った。バリーは耳を疑った。

「全部ですか？」

「ぜ・ん・ぶ。ほかの女に渡したくないし、気に入ったのさ」

上目づかいで色っぽく笑う『淫靡の女王』ミス・ベリルに、バリーの顔はまたしても赤くなった。

「アハハ！何を真っ赤になってんのよ！あんたって純粹！めったにお目にかからない……まあ、怒らないで」

立ち上がったバリーをなだめるように、両手を彼の肩に置き『行かないで』というような媚態を作る彼女は、まるで二十代の魅力的な娼婦のようだ。

いや、たしか、五十は過ぎているはずだが。いや、年齢を偽っているという噂だから、六十かもしれん。しかし、そうは見えないな……。

バリーは不服そうな顔を浮かべながらも、座りなおした。

「うわさには聞いているだろうけど、ここには、男の中でも最高にいやらしい、あんたには想像もできないようなのが、やってくるのさ。ま、今では月に一度くらいだけだね」

「どうしてこういう商売を？」

バリーは質問を口にしてから、自分の大胆さに驚いた。

「あはは！はっきりと聞くじゃない！」ベリルはさほど驚いたようでもなく、よくぞ聞いてくれた、とすら思っているように見えた「私はねえ、ええ、十三か、もっと前から、こういう職業なの！他にとりえ、ないよ」

終わりの部分を言い終わったとき、ふっと、ベリルの顔から笑いが消えた。そして、五十代の、人生の半分以上が終わった、疲れた女の顔が、見えた。

「いや、なんでもないさ」ミス・ベリルがそう言うと、疲れた女は瞬時に消え、もとの妖艶な女に戻った「とにかく、全部置いていきな」

「わかりました。ありがとうございます」

バリーは何が何だか分からないという顔で、契約書に今日の日付を入れた。

と、ドアの開く音がした。クラハが部屋に戻ってきたのだ。

ああ、女神が！いや、天使か！

バリーの目がクラハに向かって、輝いた。ベリルがそれを見逃すはずがない。

『リリック』がいたずらっぽい笑顔を浮かべた。

なあゝるほど。宝石の話をしているときにもやたらにドアをちらちら見ていたっけね。

「夕食を召し上がってくださいな。もうすぐできますから」

クラハがいつも通りの接客の声で、言った。

「それはありがたい！」

バリーの声あまり大きかったので、女二人が驚いて目を見開いた。

「あ、いや」自分の大声に気づいたバリーが弁解し始めた「いつも夜は一人なものですから。いや、ありがたいものですよ。だれかと食事ができるというのは！」

「喜んでいただけで、うれしいわ」

クラハは愛想よくそう言ったが、実は気が気ではなかった。相手の目つきから、明らかに自分に好意を持っていると確信したのだ。

ああ、どうしよう。めんどくさい……。

1-20 ヘレン 医者 イシュハ

転校？

転校って？

また別な学校に移るってこと？

また学校なの？嫌！

ヘレンは父親の手紙を見て、パニックに陥ってしまった。空と風の世界に行けないどころか、また学校！！彼女は医者や、会う人間すべてに、学校に行きたくないと言ったが、すべての人間は『とんでもない』と叫ぶだけだった。

「いいですか」医者がいつもの、思いやっているような、それでいてどうでもいいような声で言った「確かに君はほかの子と違って、音に敏感だし、妙なところが神経質で、精神年齢も低い。十歳以下だ。本当は十五歳なのにね。学校でまわりに合わせるのがつらいのはよくわかる。でも、勉強は大事なんだ。君みたいな、まわりに合わせられないような人間が生きていくためには、特に、大事だよ。そのためには、学校に行かなくてはね」

「勉強なんて一人でできるわ！」ヘレンが叫んだ「お金持ちのお嬢さんは家で家庭教師を雇うほうがいいって、だれかが言ってたわ。お父様ならできるはずでしょう？どうして学校なの？」

「お父様の教育方針はね、人とかかわり合いを」

「そんなこと聞きたくない！私とかかわりは？どうなの？どうなってるの！どうして会いに来ないの？」

「忙しいんだ、普通の人とは違うんだよ、ヘレン！」

似たようなやり取りが数時間続いた。

外で強い風の音がし始めた。空が黒い雲で覆われている。

「北から雨雲だ。天気予報で言ってたな」疲れ切った医者がつぶやいた「今日は帰りますよ、とにかく、興奮しないように、おとなしく寝てなさい」

「私は病人じゃないわ」

「いいから、本でも読んでなさい。山のようにもってきてあげたから」

医者が、アケパリの本や女神の本、精神世界の本などの山を指差した。人を使って買い集めさせたものだった。

「もう全部読んだわ」

「何だって？」

「きのう、全部、読んだわ。だから寝てないの」

「な、な、ならなおさら、ね、寝なさい」医者の声は震えていた「ああ、寝たほうがいい。連続して文字を追っていると、目も疲れるからね……本当に全部読んだ？」

「私はうそをつかないわ」

「ああ、わかってるよ、わかっているとも」ドアに向かう医者の足がよろけた「じゃ、また明日」

医者は逃げるように部屋を出て行った。

昨日からずっと、ヘレンは本を読んでいた。そして、すっかり本の内容を自分の空想にとりこんで、上機嫌だったところに、次の学校の案内が届いた。

ああ！学校！

どこだって同じだわ！また！

ヘレンはベッドの上で、何か得体の知れない苦痛にうめいた。

1-21 ウェストン 老人 管轄区

老人が、墓地で倒れているウェストンを発見したのは、夜遅くになつてからだつた。

昼間、町じゅうを探したが見つからず、家に帰ってきたとき、近所の、醜いことで評判の娘が、老婆の死を告げに来たのだった。

老人はあわてて墓地へ向かったが、そのときは誰も見つけれなかった。あきらめてまた街へ戻り、悪友たちに会って飲み、帰ろうとしたところ、誰かが、放心状態で町をさまよい歩いている『餓死寸前みたいに細い』少年の話をした。

「どこへ行つた!? そいつ! どこへ!？」

酔いはすっかり醒めてしまった。そのあと何人もの住民を質問攻めにし、脅し、どつき、時に小銭を与えて、墓地へ向かつて歩いて行つたという情報をつかみ、ようやく、倒れている彼を見つけ出したというわけだ。

ウェストンを担ぎあげ（空き箱のように軽かったので老人はぞつとした）自分の部屋に運び込んだ。部屋のドアの前には、心配した近所の子供たちとその母親が、待っていた。

「水! 水だ! 水持ってきてくれ! いや!」部屋に入ろうとした彼らに老人が怒鳴りつけた「うちにはねえよ! 酒しかねえって! 水道は汚くて飲めねえ! まともな水を持ってこい!」

みんなが外に走って行つた。老人はウェストンの顔を手元にあつた汚い上着で拭いた。彼の顔の不気味な青さからは、もう生きた人間の力を感じることができなかった。ただ、かろうじて、かすかな呼吸をしていることだけはわかつた。

キャハハハハハハ!

突然、隣の部屋から女の声がした。ウェストンの父親が女と遊んでいるのだ。

老人は全身の血が頭に上るのを感じた。

がまんならん!!!!!!

老人は部屋を飛び出すと、隣の部屋のドアを乱暴に叩いた。

「おい！遊んでる場合か！テメエの息子が死にかけてんだ！出てこい！」

中から声がした。

「あんた、子供いるの？」

「いねえよ」

老人はドアをたたくのをやめた。急に、冷水をあびせられたかのように、全身が冷たくなった。

これ以上ここで怒鳴っても無駄だ。

急いで自分の部屋に戻った。

さきほどの親子が、水の入った茶色いビンや、硬くなったパン（彼らにとっては貴重品だ）なんかを抱えて、どたどたと足音を立てて部屋に入ってきた。

入口のサボテンが倒れて転がったが、誰も立てなおそうとしなかった。

1—22 ミス・ベリル クラハ・メイシン ポートタウンの館

館の二階、手に入れたばかりの『新しくて大きなベリルたち』を身につけて、しごくご満悦だったミス・ベリルは、自分の部屋に入ってきたクラハが、立派なよそ行きと、お気に入り白いリボンのついた髪飾りをつけているのを見て、嫌な予感がした。

「どしたの？ お出かけかい？」

「あなたも行くんです！」

クラハ・メイシンは正装すると、本当に位の高い貴婦人に見える。その彼女が、半場睨むような鋭い目で自分を見たので、ミス・ベリルはちよつとした恐怖を感じた。

「どこに？」

「あの子のところですよ！ もう車は手配しましたの！ 迎えに行くのですわ！」

「なんで？」

予想していた事態とはいえ、ミス・ベリルの声は、驚きと非難に満ちている。

「行かなきゃいけないのですわ、だから行くんです！ それだけです！」

「だからなんで？」

「なんでじゃありません！」

クラハが怒鳴った。

ミス・ベリルは、長年の付き合いでよく知っていた。

クラハがこうなったら、女神だって止められやしない！

肩をすくめておびえた表情をしたミス・ベリルを無視し、クラハは女中たちに、

「ミス・ベリルにコートを着せてちょうだい！」

と指示すると『早く下りてこないと本っ当に怒りますわよ！』という目で主人を睨みつけ、階段を下りて行った。

「子供が欲しいだけじゃないのかい？三十女がさあ……」

ミス・ベリルはぶつぶつ文句を言いながら、上着を運んできた女中に身を任せていた。

いまどきボランテアじゃあるまいし。なんでそんな、自分から連れてつてくれなんていうような貧乏なガキを引き取らなきゃいけないわけ？

でも、本当に『あの子』だったとしたら……。

そこでミス・ベリルの思考が止まった。

本当に、

本当に『あの子』だったとしたら？

廊下に出る。

階段の前で立ち止まり、後ろを振り返った。

誰もいない。

でも、ミス・ベリル、いや、『リリック』は、そこにある人影を見た。

誰よりもよく知っている男の、気配を、感じた。

まだ、いるのか？

彼女はしばし廊下を見つめ、天井を見回し、何かを探しているような様子を見せたが、すぐにまた歩き出した。

階段を下りる。

館の美しい階段。かつて愛した男が所有し、自分に残した階段。

多くの物を彼女に残しながら、彼自身は、愛される資格はないと思ひ込んでいた……。

いや、本当にそうなのか？本当の彼はどんな人間だったのだろうか？人に対しては妙に愛想がよく、陰ではいつも何かに脅えていた男。ありえないほど巨額の財産を築きながら、人に好かれないことを真剣に気にしていた男……。商売相手を死に追いやっても平然としていて、でも自分の使用人たちには異様に優しかった男……。

外はすでに暗かった。幸か不幸か、最近は客の予約も少ない。相続した金は、ありあまるほど残っている。こんな仕事、やめたって

生きていける。彼女も分かっている。

暗闇の中で、植物や、遠くの町並みの明かりが、きらめいていた。ポートタウンは最近、世界一の人口を抱える都市になった。人口だけじゃない、金も、欲望も、おそらく人の悲しみも。イシュハと管轄区の国境が市内を走っている。いわば、二人の女神が存在する唯一の場所。

すべての欲望を肯定し、転落したものを救って拾い上げる、しかし悪を嫌う、アニタ。

あらゆる欲を嫌い、節制を求め、清らかな愛に満ち、それでいて罪人は容赦なく地獄に突き落とす、ファナティ。

二人の女神が競い合っている都市……。

「何をぼんやりしているんですか！早く乗ってくださいさらないと出発できませんわ！」

黒塗りの、二人で乗るには大きすぎる車から、クラハが叫んでいた。

……私を罰しようとしている女神は、どっちだ？

車に乗り込んだミス・ベリルが考えていたのは、そんなことだった。

1-23 老人 クラハ 布地屋の前

近所の子供たちと母親にウェストンの看病をまかせて、老人は夜の闇をさまよい歩いた。雪が降っている中をコートも着ないで歩いていった。

辛くなったのだ。

目の前で『仲間』が死にかけている。もちろん競馬の配当がどうかとそういうことを気にしているのではない。何の罪もない少年が、目の前で苦しんでいる。そして、親にはとっくの昔に見捨てられている。そんな不条理がたまらなくなったのだ。

ああ、ファナティ様！我らを助けたまえ！

老人は祈った。

祈っているうちに少しは落ちついた。

どこをどう歩いたのか、すっかり静けさに包まれた通りに出た。

布地屋の前に立つ。人の気配はしない。

いつかのウェストンの、ご夫人に対する珍しい『口説き落とし』

（老人はあのとこのことをこう呼んで、さんざん彼をからかっていたのだった）を思い出した。

ああ、本当に来てくれたらなあ。身なりから言って金持ちに違いない、あのご婦人。しかもそうとうな美人だった。しかも貞淑そうだ。今時珍しい。金持ちのところまで育てばあいつだって、いや、おれだって昔は……。

老人は自分が若かったころを思い出した。かつては自分も正義に燃えていた。裕福ではないが、勉強に励んでいたし、世の中の不正や貧しいものの運命に涙を流したりもした。そして仲間たちはそんな自分を笑った。ばか正直すぎると。

そして彼の故郷。美しい国だった。イシュハのせいで滅んでしまった！

あまりにもひどい運命、それから老人は各地を転々とせざるを得

なくなった。そしてだんだん身を落としていったのだ。

ああ、あの小さな国は、確かに実在していたのに！真面目な時代だってあったのだ！どうしてみんな忘れてしまったんだろう？どうしてまっとうな道から外れて、賭けごとや酒に身を任せるような愚劣な人間になったのだ！？

老人は泣き顔で空を見上げた。明かりの少ない貧しい町には、星だけは豊富にきらめくのだ。老人はそれを眺めた。そして、それらの美しさが、神秘が、世の中や、自分の、悪さを吸い取ってくれることを願った。感傷的すぎるとはわかっていた。

地面が揺れた。道の向こう側を見る。車のライトがこちらに近づいていた。車は布地屋の前、つまり、老人の前で止まった。街の景色には不釣り合いな、豪華な車。

「ああ！あなたよ！そう！あなただわ！」

興奮した叫びをあげて、車の窓から顔を出したのは、ほかでもない、あの貴婦人だった。

老人は信じられない思いでクラハと車を見た。

俺は気が狂ったのか？

「ねえ！私を覚えているでしょう！？おじいさん！あの子はどこにいるの？」

その声で我に返った。俺は狂ってない！これは夢ではない！

「ああ、あなたを忘れるわけがねえ」老人が息も絶え絶えの声で言った「覚えていますとも」

「どうしたの、顔色が悪いわ」

「悪いのは俺じゃねえ。あの子が死にかけてるんです」

「何ですって？」

「死にかけてるんです。近所のばあさんが亡くなってね。墓穴までついていって、そこでぶっ倒れちゃった。ばあさんはあいつと仲が良かったんですよ」

「まあ、それはお気の毒に」クラハは本当に悲しそうに言った「もちろん、案内していただけますわね？」

「もちろん! もちろん! でも、もう死んじまったかも……」

1-24 ミス・ベリル クラハ 老人 ウェストン 管轄区

ミス・ベリルは後ろの座席で、身動き一つせずこの会話を聞いていた。

もう死んじゃったかも、か。

それならそれでいいけどさ。

そんなことを考えているのに、なぜか、身体の奥底から、何か黒々とした、不安と恐怖の入り混じった感情が、芽生えてくる。

走っていく老人のあとを、車がのろのろと微妙なスピードでおいかけていく。

どうしてあのじいさんは、懸命に、よそのガキを助けようとするんだろう？

ミス・ベリルはその必死の背中を見ながら考えた。クラハが気にかけていることを知って何かよからぬことでも考えているのか、それとも単に人が良い田舎の老人なのか。

いや、そんなことじゃない。

本当に気になるのはそんなことじゃない。

自分を脅かすものが何なのか一向につかめず、ミス・ベリルは終始無言だった。

クラハは時々窓から顔を出して老人に声をかけようとしては、運転手に『顔を出さないで！』と怒られていた。

老人と車が、闇に包まれた小さな、汚い建物にたどりついた。老人が階段を駆け上がる。クラハが車から降りて、運転手に待っているように言うと、運転手は、

「この辺は治安が悪いんですよ。あまり長居しないほうがいいですよ」

と言った。当然クラハはそんな言葉は無視して老人を追いかけた。ミス・ベリルも車を降りた。運転手にちらりと軽蔑の視線を向け、クラハの後を追っていまにも崩れそうな階段を上っていく。クラハ

がドアの中に入るのが見えた。なぜかサボテンが通路に転がっている。

と、どこからか、女の、あの、絶頂に近い喘ぎ声が聞こえてくる。

貧しくてもあっちのほうはお盛んだね。

自分の職業柄、この手の声には慣れているはずだが、今日は妙に癪に障る。

部屋は汚かった。しかし、若いころ『仕事』をしていた部屋よりはるかに清潔そうだ。

ミス・ベリルが入ろうとすると、中のおそらく親子であろう、痩せた女と子供たちが、よりそいながら怯えた視線を向けた。自分の格好を点検してみる。コートの下はいつもの黒いワンピースだった。胸元は破れたように開いているし、丈だって、尻が隠れるすれすれの高さしかない。しかも首にも腕にもベリルやその他の宝石がわんさと輝いている。自分でも気付かなかったが、右手には新しい鞭まで持っている。

ああ、子供に見せる格好じゃないねえ。

我ながら呆れた。いつもなら誇りにするものが、輝きを失う場所もあるのだ。

胸元にきらめいている黄緑のベリルのブローチは、かつての主人に送られたものだ。大粒の宝石が、なぜかいつも以上に、ゆらゆらとした光を放ち、きらめいているように見える。まるでこの日を待っていたかのようだ。何かを期待しながら。

老人とクラハがベッドの横にいた。おそらく寝ているのであろう少年の姿は、二人の陰になって見えなかった。

「ミス・ベリル、ご覧になってくださいよ、ひどいわ。早く医者に診せなくては」

クラハが、入り口で立ち尽くしたまま動かないミス・ベリルに声をかけた。老人が驚愕の顔でミス・ベリルを凝視した。

ああ、私をご存じだね、じいさん。

声に出さずに、ベッドに近づく。

そこに寝ていたのは、彼女の想像をはるかに超えた、まるで『病
気そのもの』のようになった少年……頬はやせこけて、手足は骨だ
けになっていて、もう生きているとは思えない、そんな『人間らし
きもの』だった。

しかし、変わり果てていてもその顔は、ミス・ベリルが良く知っ
ている、あの面影を残していた。

何だ、これは。

ミス・ベリルの顔に戦慄が走った。

そのとき、隣からひとときわ高い嬌声が聞こえた。

「いやだ、なあに」

「こいつの父親ですよ、女と遊んでやがるんだ、子供が死にかけて
るってのに」

それが何かの合図であるかのように、ベリルはくると向きを変
えると、ドアの外に出て行った。隣のドアを乱暴に開け、驚いた顔
をしている男女二人を憎悪のこもった目で睨みつけ、唇をきつく噛
みしめながら、両手で、ゆっくりと鞭を構えた。

何の声だろう？

誰が叫んでるんだろう？

悪魔の声？

するとここは地獄かな？

ウェストンは目を覚ました。ぼんやりと、女の人らしき顔が見えた。きつと近所のあの母親に違いないと思った、しかし、少しずつ、その輪郭がはっきりするにつれて、ウェストンの青白い顔に赤みがさしてきた。

「目が覚めたのね！目を覚ましましたわ！……あら？」

女が誰かに声をかけようと後ろを向いたが、部屋には他に誰もいなかった。そこが老人の部屋だということに、ウェストンは気がつかなかった。そんなことを考えている場合ではなかった。

「ミス・メイシン」

消え入りそうな声が響いた。茶色い髪を『白いリボン』で飾った、美しい女性、それはまさしく、あのクラハ・メイシンだった。

「そうよ、そう、ちよつと、待っててね」

クラハがドアの外に走って行った。男の叫び声と、妙な、何かを打ちつけているような音が同時に聞こえる。どうやら隣の部屋であるらしい。かすかにドアを閉める音がした。そして『子供が見るものじゃないのよお』というのんきな声。そして足音。

「お待ちせ」クラハが、ウェストンに向かって笑いかけた「あなたはすぐに医者に診せないといけないわ。ここにいてはいけないわね」
「ほんとに？」ウェストンの目が一瞬輝いたが、すぐに曇った「でも、もう遅いよ」

「あら、どうして？」

「わからない、そんな気がする」

消え入るような声で返事をしたかと思うと、ウェストンは激しく

咳き込み始めた。

「何も遅くなんかないわ」クラハが微笑みながらウェストンの背中を撫でた「でも話は後だわね。とにかくあなたをつれていかないと。ああ、あのおじいさんったら、まだミス・ベリルを見ているのかしら」

「ミス・ベリルも、来てるの？」ウェストンは咳をこらえながら言った「本当に？」

「あら、知らなかった？だってほらあゝ」

と言って、クラハは男の悲鳴と鞭の音（ミス・ベリルという名前を聞いたとたん、奇妙な音が鞭だということが彼にもわかったのだった）の聞こえる壁を指差して、コミカルに笑った。

どう返事をしていいかわからず、ウェストンはとりあえず笑っておいた。彼は自分の予想が遅すぎるにしても、ようやく実現したのを実感した。

自分は救われるのだ！

でも、本当に？

まだ疑いが彼の心に残っていた。長く待ちすぎたせいで自信を失くしていたから。

そのあと、『お仕置きの時間』を見物していた老人と親子は、ふたたびクラハに軽く叱られて、ウェストンを車に運ぶのを手伝った。クラハは、激怒のあまり悪魔のような形相になって鞭をふるっている（本当に怒りだけで、そこには一片の快樂もないことを付け加えておく）『リリック』を部屋から引きずり出し、助けを求める男にこやかに蹴りを食らわせ、啞然と成り行きを見守っていたベツドの女にっこり笑いかけると、そんなクラハに驚いて立ち尽くしている『リリック』の腕をつかみ、一緒に部屋から『優雅に』出て行った。

ウェストンを後部座席に載せ、クラハとミス・ベリルが運転手に出発を告げた時、突然、それまでだるそうにうずくまっていたウェストンがぱっと跳ね起きて、外で見送っている、疲れた顔の老人に

向かって叫んだ。

「3と7だ!!」病人とは思えないような大きな声だった「次のレースだよ! ありったけ3と7にだけ賭けるんだ! それが最後だよ! それ以降はいっさい賭けごとなんかしないんだ! もともとあなたはそんな人間じゃないんだ! 忘れないで……」

車が走り出す。老人は呆然と車を目で追った。母親と子供たちは車の後を追って走りだした。でも、すぐに車はスピードを上げて、暗闇に消えてしまった。

1-26 ヘレン イシュハ 自分の部屋

ヘレンは部屋の床に色とりどりの石を丸く並べて、その中に、つまり床の上に、寝ころんでいた。最近流行っているパワーストーンの本に書いてあったのだった。ヘレンは宝石が好きだった。でも、他の女の子たちみたいに、身につけて人目を引きたいわけではなかった。ただ、何か不思議な力のありそうな、物語を感じさせるものが好き、ただそれだけだった。

占いも好きだった。ありとあらゆる占いの本を読み、管轄区でも昔行われていた女神の儀式とやらを試してみたり（女神ファナティは水晶を道具として使っていたとされる）イシュハでは女神アニタが紫の髪をしていたことから、アメシストと紫のフローライトが神聖視されているのを思い出すと（今まで自分の国にはまるで興味がなかったのに！）さっそく探しに出かけた。アケパリの名産の翡翠や珊瑚も探した。

「せっかくですから、指輪とか、ネックレスをお買いになっては？ そんなただの石ころみたいなものをたくさん集めなくなっただけ」

という、家の者たちや医者のもっともな意見は無視した。店員に勧められて断れなかったときだけ、ブレスレットやペンダントを買っていた。ヘレンはいくらでも金を使ってよかったが、安いものしか買わないクセがあった。もともと服にも見た目にも興味がなかった。丸い、安っぽい石ばかり買い集めるのも、手の中で弄んだり、太陽の光に透かして眺めたりするのにちょうどいいからだ。

次の学校が決まるまでのくらいかかるのだろうか？

ああ、この円から出たくない！

ヘレンにとっては、安心できるのは自分の部屋で一人にいるときだけだった。一人で、石を手にとって眺めたり、本を読んだり、空想の世界に紛れ込んだりすると、ヘレンはあの『空』に近づいたような、部屋にいながら風を全身に受けたような気分になれる。

だけど、誰かが近付いてきた途端、まるで彼らが絶縁体か壁にでもなったように、全てが消えてしまうのだ。どうしてそうなるのかはヘレン本人にもわからない。

水晶を手にとって、眺める。管轄区の教会の人はみな水晶を身につけているらしい。

何か見えたらしいのに、遠くの国の風景とか、未来とか。

私に未来なんてあるのかしら。学校に行って、そのあと何があるんだろう？ 私に出来ることなんて何もない。何にもない。何もしたくない。

ヘレンには、自分の未来なんて、全く想像できないのだ。

1-27 ミス・ベリル クラハ ポートタウンの館

ミス・ベリルは、長年使われていなかった『あの部屋』を、哀れな少年の寝室にすることに決めた。

クラハに医者の手配その他を任せると、ベッドに横たわっている少年の上に伏して、震えていた。

「お医者様、すぐ来てくださるそうですよ。今時親切な方ねえ。最近近は病院から一歩も出たがらない医者が多いっていうのに……あら？ どうしたの？」

水の入ったポットとカップを運んできたクラハは、ミス・ベリルの様子がおかしいことに気づいた。

「どうしたの？」

「クラハ、どうしよう……どうしよう！」

『リリック』が、クラハにしがみついて叫んだ。全身で震えている。

「どうしたの？ 落ちついてくださいな。大丈夫ですよ」

「違う、違う」クラハの服が引きちぎれそうなほど、しがみついた手には力が入っていた「あいつら！ あいつらは、ちゃんとした家庭で、管轄区の、ちゃんと、育ててくれるって、言ったのに……」

声がだんだん小さくなっていくうちに、気が動転して話し方がめちゃくちゃだったが、クラハはこの怯えている『リリック』が何を言おうとしているか、理解した。

「リリック！ ミス・ベリル！ しっかりしてください！ 昔の事は気にしないのですわ！ それより、今日の前にいる子を助けなくては、ほら！」

クラハは胸元で怯えている目をまっすぐに見て、微笑んだ。

「お医者様がもうすぐ来るんです。いつもの自信たっぷりのあなたに戻っていたかなくては、ね？」

数分後、医者が到着したときには、ベッドの横にはいつも通り、

宝石をたくさん身につけて不敵に微笑む『ミス・ベリル』がいて、
医者に病状をくわしく尋ねていた。

全く！親子そろって手間のかかる……そうだわ、もう間違いない
わ！リリックったら！どうしてあのおしゃべりの好きな人が、私に
十五年も隠し通せたのだろう？私にくらい教えてくれたっていいじ
やない！いや、それにしても……。

クラハは眠っている少年の顔を見ながら、思う。

そっくりだわ、この主に。

あの幽霊に……。

1-28 イアソン

数週間後の朝。

イアソン・ウェストン・アンシューンは、ベッドの天井で華麗に飛んでいる天使たちの絵を眺めながら、ぼんやりと横になっていた。顔色はあいかわらず悪かったが、すっかり健康を取り戻していた。なんでベッドに天井をつけるんだろう？

最初にこの天蓋を見たときからずっとそう思っている。

この天蓋自体が一枚の絵画のようになっていて、おそらく男であろう天使が、女神であろう長い金髪の女性に向かってひざまずいていた。女性は右手に空を掲げ、左手に丸いものを持っている。クラハの説明によると、

「あれねえ、女神ファナティは水晶を持っていて、あれを使うと遠くの景色が見えるの。宇宙の果てまでもね」最初に彼がベッドで目を覚ました時、クラハがそう言って笑ったのだった「私は信じてないけどね」

信じてない、とはどういうことだろうか？水晶の話だろうか？それとも女神の存在自体だろうか。イアソンにとってはどうでもいいことだったけど、いかにも敬虔で優しいクラハから、そういう言葉を聞いたのが、ひどく意外に感じられた。

もうひとつ意外だったのが、ミス・ベリルが彼の名前を強硬に変えようとした事だった。

ここに連れてこられた次の日の夕方、いつもなら昼間は寝ているミス・ベリルが下に降りてきて、こう言った。

「名前変えな、名前。今日からアンシューンなんだから、私の本名はリリック・アンシューン。アンシューンにウェストンなんて合わないよ。そうだね……」

どこから持ってきたのか、人名事典をめくりながら、ふんふんと何かつぶやいていたミス・ベリルは、突然ひらめいたように顔を輝

かせた。

「今日からあんたはイアソン。決まり」

彼はそのときまだ体調が悪かったが、これには猛然と抗議した。なんで名前を変える必要があるんだ！まるで人格を否定しているみたいじゃないか！

しかし、ミス・ベリルも黙ってはいなかった。そんな運の悪い名前やめろとか、あんな父親の事はとっと忘れろとか（これには彼は反対しなかったが）言い張った。

「両方使えばいいじゃないの。イアソン・ウェストン・アンシューン。決まり」

クラハがそう言いながら、勝手に書類を記入してしまったため、この問題は終結した。おかげで、長ったらしい、しかも語呂の悪い（ミス・ベリルは未だに文句を言い続けている）名前に決まってしまった。

そしてその一件で、この家の真の支配者がだれか、彼も悟ったのだった。

この館！

前もってここに来るのは知っていたのに、実際に来てみると、なんとという大きさだろう！？彼はまだ一階しか見ていなかった。二階は『仕事場だから』来ないように、とミス・ベリルに言われていた。身体はすっかり元気になって歩き回れるようになったが、まだ外出禁止だったので、毎日のように館の中を散策していた。この家で働いているのは、車の運転手以外みんな女だった。廊下ですれ違ったりにみなが彼に笑いかけ、年寄りの洗濯女アキは、追いかけてきて噂話をしたり、飴玉を渡したり、孫を可愛がるように彼に近づいてきた。みんな好奇心が強く、イアソンを見かけると必ず何か聞き出そうとするので、廊下から別な部屋に移動するのにひどく時間がかかってしまう。

やっとたどり着いた館の真ん中にある広間に、人影があった。近づくと、それは人間ではなかった。ほぼ人と同じ大きさの、アメシ

ストでできた女神像だった。足元を見下ろすと、台座にANITAと文字が彫られている。つまり、女神アニタなのだ。アメシストの紫の部分が髪とドレスに、白い部分が顔や手、肌に、石のともとの色を生かして彫ってあった。両手が祈るように胸元で重なっている。

ベッドの天井はファナティ。こっちはアニタ。よくわからない。

しばし女神像を眺めて、自分が今いるのがポートタウンだということに初めて気がついた。この街の半分はイシュハだ！女神アニタの国！ヘレンの国だ！

ミス・メイシンとミス・ベリルが本当にやってきたのだ。ヘレンだってきつとどこかにいる。学校が大嫌いなヘレン。行きたくても行けない人間だっているのに。

いや、ヘレンが悪いわけじゃない。彼は学校の事を思い出した。完全に健康を取り戻したら、イシュハの学校に行かせてもらうことに、もう決まっていた。それまでに遅れを取り戻さないといけない！そういえば、あの町の人はどうしているだろう？老人はちゃんとあの番号に賭けたのだろうか？あの親子はどうしているだろう？フレアの家族は？

彼はそんなことを思い出し、今そばに彼らがいないことを悲しんでいた。自分にとって彼らだけが、家族のようなものだったから。

とはいえ、自分は救われたのだ！

暇と気力さえあれば、本がたくさん並んでいる奥の部屋（この館には図書室まであるのだが、本の管理をしているマルシー・ファイ以外は、めったに入らないようだった）何でも読みふけていた。この不毛の十数年を取り戻さなくては！

まず法律の本からありったけ、読んだ。そして、ついうとうとしたころ夢を見たのだ。

どこか、公園のようなところで、彼と、ヘレンが並んで座っている。おや、もう大人になっているんだな、僕は。

『あなたって、この本のイアソンにそっくり』ヘレンが手に持って

いた本を振りながら笑った『女神像に頭を割られないように気を付けてね!』

そこで目が覚める。一体ヘレンは何を読んでいたのだろうか？女神像に頭を割られる？

ヘレンが手に持っていた、赤と黒が入り混じった色の本を探してみたが、ここにはないようだった。

それ以来、彼は、自分の改名については文句を言わなくなった代わりに、広間の女神像を見るたびに、何か冷たいものが背中を走って、あわててその場を立ち去るのだった。

1—29 ヘレン 大統領 イシュハ パーティ

怖い！

怖い！怖い！！

どうしてこんなところにいなきやいけないの！？

ヘレンは別にホラー映画を見ているわけではない。大統領が自分の誕生日を祝うパーティーを開き、いつも無視されるヘレンがなぜか無理矢理、参加させられたのだった。

朝起きたら突然黒塗りの車がやってきて、数人の女中と黒服の男たちがヘレンを半ば脅して赤いドレスを着せ、化粧をし、ぱさぱさの金髪を結いあげた。

「あら？この子目が青くないのね」

メイクの女は、まるで人形の話でもするみたいにそう言った。

今までそんなこと気にしていなかったのに、ヘレンは突然、自分のオレンジ色の目が恥ずかしくなった。

目が青くないから空に近づけないの？

つまり、パーティーなんて彼女にはどうでもいいのである。それなのに、むりやり車に押し込められ、到着したホールでは、車のドアが開いた瞬間からさまざまな人種が彼女を取り囲み、勝手に写真を撮り『あら、思ったよりかわいくないわね』などと言ったり。

もともと音や光に敏感なヘレンはすっかり怯えてしまった。

そして、今、世界で最も恐ろしいあの父親の横に、座らされているのだった。

しかも、そのさらに隣には兄リュエフがいる。父親そっくりの、才能あふれる、そして父親をはるかに超える冷酷さを持った男！彼はヘレンの顔を一度も見なかった。ヘレンも彼が嫌いだったので、話しかけられたところで反応しなかっただろうが。

まわりに人がいるため、父親は常に『温和な大統領』の顔である。時々わざとらしく（ヘレンにとってはそれは笑いとは言えないが）

笑みを娘に向かって投げかけた。ヘレンは笑おうとしてもうまくいかない。どうしても口元が、目元が歪む。周りではやはり写真を撮っている人ばかり（報道陣だが、ヘレンはそんなことに気づく余裕がない）その隣のリュエフはもちろん、大統領と同種の笑いを浮かべて、父親に小声でこう言った。

「どうしてヘレンを連れてきたんですか？ なにもわからないのに」
わかってないのはそっちだわ！ とヘレンは思ったが、口に出せなかった。

大統領に付き添っていた秘書のヘスティアが挨拶を始めた。

「大統領閣下の誕生日を祝うために、この偉大なるイシユハの著名な方々にお集まりいただき……」

報道陣と、その場にいた全員（リュエフと大統領は除く）の視線が、3人に集まる。

息が詰まる。

「ヘレン、こういう席では微笑むものだ」

となりの父親が低い声で言った。ヘレンは耳を疑った。

笑え？ ですって？ 無理だわ！

嫌だと思いながら、無意識に表情をゆがませたヘレンだったが、やはりうまくいかなかった。フラッシュの光と人々の声の重なりが渦になってヘレンの意識に襲いかかる。

もうダメ！ もう嫌！

ヘレンは叫び続けた。ただし心の中だけ。身体は全く何にも反応しなくなっていて、外からは、ぼんやりとした、間抜けな娘にしか見えなくなっていた。

幸いなことに、このあと誰もヘレンに話しかけることはなく、人々の関心は、現在紛争中の隣国ドウロソへの戦略や、管轄区の教会との和解案、アケパリとの経済摩擦、跡取り息子の今後などに移って行った。

ヘレンがこの地獄のような喧騒から解放されたのは、夜二時を回った頃だった。パーティーの間、わざとらしくヘレンに声をかけて

いた大統領は、何も挨拶せずに彼女を別宅に送り出した。

ようやく部屋に、自分の聖域に、戻ることができた。でもヘレンは落ちつかない。さきほどの強烈な恐怖心が抜けないのだ。

一体なんのために私があそこで、怖い目にあわなきゃいけなかったの？

しかも今回は兄リュエフまで一緒である。この兄の残酷さは有名だ。小さい頃、近所の動物をことごとく銃で撃ち殺し、動物では飽き足らず、使用人まで撃った。どうもみ消したかは知らないが、なのお咎めもなかった。しかも、怖がっているヘレンの真横の壁に向かって連続で何発も発砲し、恐怖で動けなくなったヘレンを見てせせら笑っていた。

それが、まだ二人とも十歳にもならないころの出来事なのである。ヘレンが別宅に移されたのもこの事件の直後だった。

ヘレンはそのころのことをはつきりと思い出して、ぶるっと身を震わせた。

リュエフなんかもう知らないわ！勝手にどこかの戦場にでも行って死んでしまえばいいのよ！それより、お父様は何を考えているのかしら？『微笑みなさい』ですって？あんな恐ろしいことをどうして言えるの？

考え込んでいるうちに、ヘレンの胸には二人への、特に、父親への恨みが急激に、何かの熱の塊が動き出したように、感じられた。

酷いわ！みんな嫌い！大嫌い！

ヘレンはその夜寝付くことができず、朝の光が差し込んでくるまですっと、床の上で震えながら泣いていた。

1-30 バリー氏 クラハ イアソン アニタ像の前

昼頃、新しいブレスレットを持つてくるという名目で、実はクラハに会いに来たバリー・トイシンは、アメシストの女神像の前に立ち、目を近づけたり、鞆からレンズを取り出してくまなく像を調べ、頭を抱えていた。

「何をそんなに悩んでいらっしゃいますの？」

そばで見っていたクラハがおかしそうに笑った。その隣には、何か怯えたような表情で女神像を見つめる少年、つまり、イアソンがいた。

ミス・ベリルの息子だって！それならなんでミス・メイシンにべったりくっついてるんだ？一瞬親子かと思ったぞ。しかしなんでこんなに痩せてるんだろう？まるで骨と皮じゃないか！しかも、今まで見かけたことがなかったが……？

「すばらしい出来です。ただ、気になるんですが……」

「なんですの？」

「どこから手に入れたんですか、この女神を」

「さあねえ……ずいぶん前からあるわあ。たしか私がまだ若いころに、エブニーザ様のお友達が持ってこられて」

エブニーザ。もちろんバリーはこの名前を良く知っている。金の亡者だ。極めて冷酷な男で、取引に絡んだ人間が多数自殺、破産、もしくは暗殺されている。商売相手が突然原因不明の病に倒れたとか、黒魔術を使うとか、呪いをかけたとか、暗殺団を雇っていたという噂まであった。

確か自分も暗殺されたはずだが……。

「ケリサリの宮殿の盗難事件はご存知ですか？」

ケリサリはイシュハの中央にある都市で、女神アニタにまつわる土地である。

「知ってますわ。大騒ぎでしたものね。あなた知ってる？」

クラハがイアソンに尋ねた。バリーが少し渋い顔をした。

「いいえ」

「そうよねえ。若いものねえ、なんせ私が十三か四か、それくらいの年の話よ」

十三か四のクラハ・メイシン。

バリーは想像できる範囲で最高に清らかな少女を思い描いた。

『ああ、この目で見たかったなあ!』と思うが、次の瞬間には、

『いや、いかん! こういう空想がいかんのだ!』

と、いつものように反省するのだった。

「あの時、盗まれたリストの中に、紫のアニタ像が入っていたはずですが」

「ほんと? でもそんなものをここに堂々と飾るわけないわよねえ」

クラハがまたイアソンのほうを見て確かめるように聞いた。バリ

ーはこの少年がだんだん憎らしくなってきた。

「盗まれたのはいつなんですか? 飾られたのと同じころですか?」

イアソンがはっきりした声でそう尋ねた。

「いいえ」クラハが女神像を見上げた「そういえば、ミス・ベリルが帰ってきたときに」

「帰ってきた?」

「旅行よ」クラハが強く言いなおした「とにかく、帰ってきて、急にこの女神像をここに置かって言ったのよ。それまで裏の倉庫に放り込んであったの。自分はファナティよりこっちのほうがいいって。でもあの人、首都の出身なのよねえ」

「首都? 教会本部の近くですか?」

バリーが大声をあげた。彼にとって、女神ファナティの関わる都市はみな聖地である。ミス・ベリルは予想ほど墮落した人間には見えなかったものの、彼女と聖地はどうしても彼の頭の中で結びつかない。

「そーなのよねえ」

「でも、この屋敷にはいろんな人が来ますよね? だれもこれを見て

気がつかないなんてこと、あるんですか？」

イアソンが指摘した。何を偉そうに、とバリーは思った。

「ありえないわ。きつと似てるだけよ。ねえ？」

クラハがバリー氏に向かって同意を求めるように笑った。彼の不機嫌は一瞬で治まった。

「まあ、そうですね。それにしても、すばらしいものです。うむ」
微笑んで、再び女神像に目をやる。

しかし、バリー氏は思う。大振りの天然アメシストだけでも珍しいのに、さらにそれを地の色を生かしてここまでうまく、全く同じに彫りあげる、そんなことができるものだろうか？

いや、できるわけがない。

心ひそかに、これは盗まれたものに間違いないと確信していた。

1-31 館の幽霊

夕方、ミス・ベリルが起きて、バリーとの商談に入ったので、イアソンは自分の部屋に、奥の本棚がたくさんある部屋から本を何冊か運んできて、読んでいた。しかし内容はあまり頭に入らず、目だけがいたずらに文字を追いかけていた。

いつもの冬であれば、ひたすら寒さに震えて過ごしていたところだが、今彼は、暖炉もヒーターもある部屋にいる。快適なはずだが、どうも慣れないのだった。

暖炉の火。それを一人で独占している。火を眺めながら考える。

女神像は盗まれたものだ。そうに違いない。

実は彼もバリーと同じことを考えていた。ただ、彼はそんなことはあまり気にしていなかった。さきほどクラハが話していた、前の館の主人の死と、そのあとのミス・ベリルの旅行のことを考えていた。話した時にクラハの声が、めずらしく、何かを隠すように言いよんだこと。そして、同時に彼の頭にある男の顔が浮かんできた。金髪で、端正な顔だった。瞳が特徴的な、まっ白に近い灰色だった。

今までの未来の見え方から考えると、あれはこれから会う人のはずなんだけど……？

でも、何かがいいつもと違った。その男の目つき、顔立ち、その全体から伝わってくる何かが、イアソンに異様な不気味さを与えていた。

立ち上がり、部屋を出た。

ミス・メイシンに、前の主人の事を聞いてみよう。

イアソンは、不気味な男はこの館の前の主人、エブニーザではないかと考えていた。しかし彼はもう死んでいるはずだ。予知に出てくるはずがない。しかもあんなに不可思議な印象で。

写真が残っていないか、聞いてみよう。

クラハの部屋の、マホガニー色のドアをノックした。返答なし。

「ミス、メイシン？ 僕です。ウエ……イアソンです」

応答なし。もしかして二階にいるのか？

もう一度ドアを叩こうとした時、誰かが彼の後ろを横切った。

男性らしい大振りの足音が廊下に響き渡る。

振り返ると、グレーのスーツを着た金髪の男の後ろ姿が、ホールに向かって動いているのが見えた。

おかしい。バリー氏はブラックスーツに白髪交じりの黒髪だし、ここに僕以外に男は住んでいないはずだ。

どうするか。

イアソンは迷った。と、影がこちらを振り返った。

その顔は、先ほどイアソンの頭に浮かんだ、あの不気味な男その人だった。

男が左手を上げて、何かの合図をした。

ついてこい、とその無色に近い、瞳孔がむき出しになった目がイアソンに命令していた。ふたたびその人影は前を向き、階段をゆっくりと登って行った。

イアソンは背中を氷が伝うような恐怖を感じ、小刻みに震えながら、あとを追って階段を上がった。

二階の廊下。人影が消えた。一階と同じような風景だが、一面に黒いじゅうたんが敷きつめられている。窓も全て黒いカーテンで覆われている。それでいて、ヒーターがつけっぱなしになっているのか、真夏のように暑かった。

どこに行ったんだ？

イアソンはまわりを注意深く見まわしながら、少しずつ、壁に手をあてて、探るように進み始めた。廊下は真っ暗だったが、突然前方でドアの開く音がし、光が廊下に現れた。

「上には来ないように、と言われてなかったかね？ 君」

それはバリー氏だった。イアソンの顔を、あからさまに不愉快な表情で見た。

「誰かが階段を上がっていくのが見えたんです。グレーのスーツに、

金髪の、不気味な」

「家のものではないのかね？」

「違います。この家には僕以外男はいないんです」

「ふむ」

不愉快な顔のまま、バリーもあたりを見回した。

「不審者だといかん。ミス・メイシン！！」ドアの中に戻りながらバリー氏が叫んだ「この家に金髪の男がいるようですが、お知り合いですか？」

「さあ……ミス・ベリルのお客様かしら？」

イアソンが中を覗くと、ミス・メイシンが白いテーブルに向かって座り、緑色の分厚い帳簿のようなものをめくっていた。部屋は廊下とは正反対で、白い壁に金色の縁の窓、レースのカーテンに、白い陶器でできているように見える棚と、部屋を埋め尽くすように飾られた豪華な白い百合や薔薇の花。まるで昼間の宮殿のように光に満ちていた。

「今日は誰もいらっしやらないみたいだわ……あら？」彼女はドアの外にいるイアソンに気がついた「あらあ、駄目じゃないのお、上がってきては」

おどけたような声だった。怒るどころかおもしろがっているようにすら聞こえる。

「不気味な男が階段を上がって行っただんです」

「ミス・ベリルの部屋を見えますわ」

クラハは立ち上がると、男二人の間をすりぬけて、廊下をまっすぐ歩いて行った。数歩先で振り返り、

「ついてきちゃだめよ！部屋でお待ちになって！」と叫んだ。

「中に入っていよう」

バリーがイアソンの背中を押した。

「ミス・ベリルと商談してたんじゃないんですか？」

「いや、彼女はまだ寝てるんだ。だから、それまでミス・メイシン

と世間話でもしようかと」

嘘だ。

イアソンは思った。

ミス・メイシンは思ったために商談に来てるんだ！

「この館には他に人は住んでいないのかね？」

「住んでます。でもみんな女の人です。食事を作っているのがミセス・カルマンで、奥の部屋で本と調度品の管理をしているのがマルシー・ファイ。いつも洗濯してるのがアキ。えーと、たしかもう一人いたと思うんだけど、どうしても名前が覚えられないんです」

「ほう」

あまり興味のなさそうな声が返ってきた。

「ところで君、今いくつなのかね？ 妙に顔色が悪いが」

「それは……」

イアソンが答えようとした時、廊下から足音がした。大振りな、あきらかにミス・メイシンではない足音……。

二人はそろってドアのほうを凝視しながら耳を澄ませた。足音はだんだん大きくなり、ドアのすぐ前を通ったかと思うと、また少しずつ小さくなっていった。

「見てくる」バリーがドアに向かって歩き出した「心配だ」

「僕も行きます」

バリーが再びむっとした顔をしたが、何も言わず外に出た。

二人は足音が消えた方向へ歩き出した。突き当り、ドアはあと一つしかない。

バリー氏がドアをノックした。

「だれかいますか？」

返答はない。イアソンがドアノブに手をかけた。カギはかかっていない！

ドアは開いた。

そこは書斎のようだった。四方の壁が本棚になっていて、難解そうな分厚い事典類がぎっしりと詰まっていた。真ん中に年代物の鈍

い色の机がある。

そこに座っていたのはミス・ベリルだった。いつもの黒っぽい、体に密着した服で、目を閉じて、椅子の肘かけに身を傾かせていた。胸元にはお気に入りであろう、大粒のあのベリルのブローチが光っている。どうやら眠っているようだ。

しかし、バリーとイアソンが目を見張ったのは、本の数でも、書斎の机と不釣り合いなミス・ベリルの格好でもなかった。

彼らが見たのは、ミス・ベリルの横にいる、グレーのスーツを着た男の横顔だった。

彼は眠っているミス・ベリルをその盲人のような目で覗き、いたわるように彼女の肩に手を当てていた。二人とも、侵入者には全く気がついていないようだ。いや、彼ら二人はまるで別世界にいるようだった。まったく世俗を離れて、二人だけの世界を作り上げてしまったようだった。

バリーとイアソンは二人から目を離せなかった。しかし、どれだけ見つめても、目の前の二人がほんとうに実在しているように見えないことに驚いた。

まるで亡霊だ。

もしくは、映画のスクリーンを見ていて、今にも画面が暗転してしまいそうだ。

「あれは、エブニーザじゃないか……」

バリーの口から、小さな驚きの声が漏れた。イアソンはそれを聞き逃さなかった。

あれが前の主！

いや、言われなくともわかっていたのだ。さっき予知でこの男の顔を見たではないか。

イアソンは、あいかわらずミス・ベリルに愛しげな視線を送っている、蒼白な男の顔をじっと見つめた。優しげな表情、金色の髪、端正な顔立ちなのに、どこか不気味な影がつきまとう男。

「そこにいるんですの？ ミス・ベリルは！ 部屋にはいらっしやらな

かったんですわ！」

後ろから響いてきたミス・メイシンの大きな叫び声で、二人は我に返った。

「ミス・メイシン」

バリーはほっとした。イアソンは顔面蒼白だった。

「どうしましたの？」

「あれは何ですか？」

バリーがミス・ベリルを指差そうとして、はっとした。

男は消えていた。ミス・ベリルだけがそこにいて、相変わらず目を閉じたまま、机に向かっていて。

「いやだわあ、こんなところであんなかっこうで寝てちゃ風邪をひくじゃないのお」

ミス・メイシンのんきな声で言いながら、ミス・ベリルに近づいた。

「起きてください！もう日が沈みますよ！バリーさんも来てますよ！」

ミス・ベリルが目を開けた。眠りから覚めたというよりは、考え事から抜け出した後のようだった。ぱっと目を開き、肘掛椅子から身を上げた。

「なんだ、全員そろってこんなところに」

ドアの前で立ち尽くしている二人に気がついたのか、ミス・ベリルが呆れたように言った。

「二階に上がるなって言わなかったかい？」

こんどはイアソンに向かって言った。ミス・メイシンと違って、怒っているようだ。

「いやでも、さっき階段を上がって行った男が」

「ああ、それなら大丈夫よ、みんなに探してもらったけど、だれも入ってきてないわ」

ミス・メイシンがイアソンの言葉をさえぎるように言った。

「でも」

「とにかく下に降りてな！バリ、持ってきたものを見せてよ、ここで」

ミス・ベリルが机を指でコツコツと叩いた。

「え？ああ、わかりました。今持ってきてきますよ」

「私は下に降りてるわ。行きましよ」

ミス・メイシンがイアソンの腕をつかんで廊下に引っばって行った。彼はされるがまま呆然と、一緒に下まで降りた。

1-32 クラハ イアソン クラハの部屋

ああ、ようやく一人になれるわ！

バリー氏がミス・ベリルと商談を始めたとき、クラハはほっとした。なにせ相手はこちらに好意を持っているらしいが、こちらは全く相手に興味がないのだから。

「ミス・メイシン！離してください！」

おっと、いけない、イアソンまで部屋に引きずってきてしまったわ。

あわてて手を離す。

「二階にあがっちゃだめよお。怒ってたじゃない、ミス・ベリル」
「でも本当にいたんですよ、あの」

「いいからいいから、書斎の幽霊はほっておきなさい」

クラハが部屋に入ってドアを閉めようとしたが、こんどはイアソンがクラハの腕をつかんだ。

「ちょっと待って！」自分を見上げる顔があまりにも真っ青なのでクラハは驚いた「書斎の幽霊ってなんですか？やっぱり前の主ですか、ここの」

「まあ、そうね」クラハは笑ったが、少しさみしそうだった「たまにああやって現れるのよ。ただ、だれかが大声をあげると消えるの、さつき私がしたみたいだね」

クラハはイアソンから自分の腕を離した。イアソンはクラハの部屋にむりやり入ろうとしたが、部屋の人影を見てぎよっとした。

「どうしたの？」

「何でも、ないです」

よく人影を見ると、それは何のことはない、鏡台の鏡に映った自分の顔だった。

一瞬だが、さきほどの不気味な顔の男に見えたのだ。
いや、今でも。

ああ、なんてことだ、僕は彼にそっくりだ！

「気にしないのよ、何も怖いことはないわ。それに」 怯えた顔の
イアソンに向かって、クラハはドアを閉める前に付け足した「リリ
ックは、ミス・ベリルは、気がついていないと思うわ。ただ、あの
宝石に、彼の力が残っていると思い込んでいる。それだよ」

ドアが閉まった。取り残されたイアソンは、なんとかふらふらと
自分の部屋のベッドにたどりつくと、そのまま倒れこんで眠りに落
ちてしまった。

1-33 バリー氏 ミス・ベリル 書斎

「あなたにお子さんがいるとは知りませんでしたよ」

バリーがブレスレットを取り出しながら言った。彼は一刻も早く、この不気味な書斎から出て行きたかったのだが、仕事だからそういうわけにはいかない。部屋は暗くなり始めていた。ランプがつけられていたが、照明の中に浮かび上がるミス・ベリルのシルエットと書斎の本棚の異様さは、まるで魔女の館のようだ。

「まあ、実質世話をしているのはクラハだけだねえ」ミス・ベリルは表情を変えずに言った「病気でずっと寝ててね、でも元気になったから、イシュハの学校に送ろうと思ってる」

「イシュハ？管轄区のほうがいいんじゃないですか？あちらは風紀が乱れているっていうじゃないですか。この前、首都の大学構内で銃の乱射事件があったばかりですよ？」

バリーが興奮気味に喋り出した。

「イシュハの連中は女神アニタの欲望がどうのっていうところだけを都合よく解釈して、道徳や善悪っていうものをまるで考慮していないんですよ。あちらの子供たちは親を尊敬しないし、平気で自分のじいさんや親を殴りつけたりするんです。それに若い女どもの格好ときたら、破廉恥極まりない！」

「風紀がどうのなんて私が言えた義理じゃないよ」ベリルがおかしそうに笑う「本人の希望なのさ。あっちで法律がやりたいんだそうだよ」

「そうですか」

「心配しなくても、行くのはイアソン一人さ。クラハは私から離れないよ」

そう言うと、ミス・ベリルは意味ありげにバリーの目を琥珀色の目で覗き、ニタリと笑った。

バリーはかすかに赤くなって目を伏せた。彼女の言うとおりに、彼

はクラハも一緒にイシュハに行ってしまうのではないかと心配していたのだ！

「ところで、もうすこし色の薄い石が欲しい。エメラルドはもういない。たくさんあるから。アクアマリンか、若葉色のベリル、これが一番いい、私に合う」

「色の薄い石、アクアマリン、若葉色……」

バリーは真面目に手帳に書き込んだ。

「でも、まっ白はだめ」

「真っ白は駄目」バリーが書きこみながら繰り返す「ところで、一階の居間にあるアニタ像は、どこで手に入れられたんですか？あんな見事な宝石彫刻はめったにないですね。天然で、あれだけの透明度、しかも白い部分をうまく肌に使っている」

「ああ、あれね。エブニーザの友達が盗んできたんだ」

世間話のようにさらっと、ミス・ベリルがそう言っただけだ。バリーは手帳から顔を上げ、彼女を凝視した。

「知ってただろう？あんたが気がつかないわけがないもんねえ」ミス・ベリルがいたずらっぽく笑った「前の担当のじいさんだって気がついてたよ。よく眺めながらご満悦って顔をしてね。どうもじいさん、自分だけの楽しみにあの像をとっておきたかったらしいね。じゃなきゃ、すぐに警察に通報しただろうよ」

ミス・ベリルはいかにも楽しそうに笑っている。バリーの驚愕の顔が見れて満足という感じなのだ。

「なんで、盗んだんですか？」

「知らないよそんなこと。盗んだ奴に聞きな。エブニーザは頭を抱えてたよ。どうして自分のところにそんなものを運んでくるんだってね」

「でも……」

「私はあんな像、どうでもいい。好きにしたらいい。でも、窃盗にされては、困るんだ。私はエブニーザの事を、世間にこれ以上思い出してほしくない」

1-34 ヘレン イシュハ 森

新しい学校は、全寮制だそうだ。

ヘレンはショックでしばらく動けなかった。

全寮制、しかも部屋は相部屋。誰かと同じ部屋に住まなくては行けないらしい。二人で。

そんなの耐えられないわ！

部屋の本と、ころころとした石やアクセサリーを箱に詰める。ヘレンはまるで人生がもう終わったような気がしていた。

授業だけじゃなくて、部屋に戻ってからもある子たちと一緒にいなきゃいけないなんて。きつとおかしいとか風変わりだとか、なんだとかいって、人の物を取って行ったり、悪口を言ったりする人ばかりに違いないわ。

ヘレンにとって、学校というのはすべからず、邪悪な人間の宝庫なのだった。考え事を中断され、風や空からヘレンを引き離す悪い人たちだ。

どうしよう。

手に本を持ったまま、しばし呆然としていた。

しかし、良い考えなんて浮かぶはずもない。

「学校はアルターにある。ポートタウンのすぐ北だよ。あの辺は天候も穏やかだし、買い物も便利だ。それにポートタウンはこの大陸で一番の都市だからね。本だってたくさんあるし、見るところもたくさんある」

医者はいいかかわらず、ヘレンにとってはどうでもいい話を長々としていた。

「いいかね、これは人づきあいの訓練でもあるんだよ。いつまでも子供でいるわけにはいかない。いろいろな人と関わり合っていかなきゃいけないんだからね」

そんなこと言われなくなっちゃってわかってるわ！ヘレンはそう言いた

かったが声にならなかった。ただ無表情のまま、黙々と箱に持ち物を詰めていた。

せめて、ヘレンは思う。アルターが風のあるところなら、木々や森があれば、少しは楽かもしれないわ。森を歩いているうちは一人になれる……。

しかし、そう簡単に外に出してもらえだろうか？

「それと、リュエフ君が同じ学校にいるはずだが……」

医者がいいにくそうにそうつぶやいた時、ヘレンは恐怖で全身を硬直させた。

「心配しなくていいよ。校舎が離れているし、女子寮には絶対に入ってこない。ただ、大統領の子供がそろって同じ学校にいるわけだから、いろいろ言われるかもしれないけど、そこは上手く話を合わせて……」

「そんなの嫌！リュエフと同じ所にいるくらいなら死んだほうがましだわ！」

ヘレンは両手で顔をおおって叫んだかと思うと、部屋から飛び出して行ってしまった。

「待ちなさい！……困ったな」

医者は後を追いかけながら、まあいいさ、とつぶやいた。この困ったお嬢さんともしばらくお別れだ！

ヘレンは外の森の中を走り抜け、地面から盛り上がったように出ている木の根に足をひっかけて転倒した。そのまま仰向けになって、青黒い木の葉の隙間から、かすかに見える空を見上げた。目からは涙が流れていた。

お願い！助けて！殺されるわ！

風が強くなり、木々が少し揺れた。波のような音が辺り一帯を満たした。それはまるで風の悲鳴だ！押しつぶされるがまま走り抜けるしかない風の、泣き声のようだ。

ヘレンは倒れたまま、その、世界を揺らすような声に耳を傾けていた。

どれほどの時間が経ったろう？いつしか涙も乾いた。ヘレンの気分も、絶望だけは残っていたけれど、いくぶん落ちついた。

もう、どうしようもないの？

立ち上がり、服についた土や、足にくっついてきた蟻を払い落とし、もう一度、何かを確かめるように空を見上げた。先ほどの晴天とは違い、葉の隙間から見える空はどす黒く曇っていて、今にも雨が降りそうだ。

帰り道を歩き始める。彼女の顔は死人のように青白く、目には生きた人間の輝きが全くなかった。

1-35 イアソン 嵐の夜

イアソンは雨の音で目を覚ました。身体を起こすと、窓の外は真っ暗で、ときどき稲妻らしき閃光が部屋を照らしたかと思うと、すぐにあの大きな音が聞こえてくる。

近くに落ちたな。

ぼんやりと考える。昼間起きたことを思い出そうとしたが、上手くいかなかった。ただ、あの不気味な男の顔と、書斎の風景。そして鏡の中の自分の顔があのだ、エブニーザにそっくりだったことを思い出すと、背中がぶるっと震えた。今まで彼は、自分の顔を鏡でじっくり見たことがほとんどなかった。

あれはどういうことだろう？

今まで、すべて予知どおりになるってことしか考えてなかった。でも、よく考えたら、どうしてミス・ベリルが僕を引き取る気になったんだろう？名前まで変えさせて。

そして、エブニーザの幽霊。

ミス・ベリルは彼の愛人だった。いつか、町の酒飲みからそんな話を聞いたことがあった。もしかして、僕が彼に似ているから、引き取る気になったんだろうか？それにしても、なんで似てるんだ？そこまで考えたとき、また閃光が、今度は爆音とほぼ同時に部屋を照らした。

近いぞ。

しかもこれは雨じゃない。雹だ！

弾丸が降り注ぐような音が窓から響いてくる。

先ほど二階で見た風景を思い出した。眠るミス・ベリルと、横にいたエブニーザ。

どうして死んだあとまであの場所にいるのだろうか？そして、どうしてイアソンの前に現れて、ついてくるようにと感じさせたのだろうか？

まるで、自分とミス・ベリルの関係を知らせたいみたいじゃないか。

そこまで考えたとき、ドアの開く音がした。

入ってきたのは、ミス・ベリルだった。

部屋が暗いにもかかわらず、シルエットから、彼女がほとんど服を着ていないことが分かった。ただ、何か薄い、黒いレースのようなもので全身を覆っていた。しかし、体の線やその特徴は、暗闇でもはっきり分かるように透けていた。

また閃光と、爆音！

ミス・ベリルの、光に照らされた、どこかぼんやりとした目つきが自分を見つめていることをはっきりと感じた時、イアソンは恐怖のあまり動けなくなってしまうた。

ミス・ベリルはゆっくりとベッドに向かって歩いてくる。イアソンが考えていたのは、自分に似ているあの男の事だった。

まさか身代りにする気では？

肩に重みを感じた。ベッドに座ったミス・ベリルが、イアソンの肩に頭をもたれかけさせていた。ほとんど上半身を彼に預けていた。何か、きつい香水の香りがする。

どうしよう？

イアソンは自分が動いていいのか、このまま止まっていたほうがいいのか、わからなかった。彼は動けなかった。しかし、身体の奥底で何か、得体の知れないものが動き出しているのを感じた。興奮と恐怖が入り混じったような、クモの巣のようにじわじわと広がっていく、何か。

また窓の外が光った。彼の肩にもたれている重みが、ぴくりと震えたのを感じた。

あれ？

少しして音。

イアソンは、ミス・ベリル頭が、さらに強く肩に押し付けられたのを感じた。そして、震えているのを見て取った。

ああ、なんだ。

身体から力が抜けた。先ほどのまでの得体の知れないものが、急激に姿を消し、ただの同情に姿を変えていた。

この人は、雷が怖いだけなんだ！

「怖がらなくてもいいんですよ」イアソンは片手を上げて、ミス・ベリルの肩を抱いた「ここには落ちないですから」

「大聖堂には落ちたよ」

「大聖堂？」

「ずいぶん前に、エブ……この館の主が、落ちるって予想して、その通りに」

雷が落ちるのを予想したって？

先ほどとは別の、焦りにも似た胸騒ぎがイアソンをとらえた。

「雷が落ちるのを予想したんですか？」

ミス・ベリルは答えない。

「その人、僕に似てますね」

二人ともそれ以降、全くしゃべらなかった。ミス・ベリルはあいかわらず、雷鳴がとどろくたびに身を震わせているだけだったし、イアソンは懸命に彼女を抱き抱えながら、新しく浮かんだもう一つの疑問について頭を巡らせていた。

全く同じだ。目の色は違うけど、ほとんど同じ顔で、しかも未来まで予知して。だから僕はここに引き取られたんだ。そこまで似てるなんておかしい。もしかしたら……。

いや、違う。だったらあの、小さな町で僕を投げていた父親は何だ？まさか、赤の他人を引き取るような男ではなかったし、でも……。

「許してね」

不意にそんな声がしたので、イアソンは驚いてミス・ベリルを見た。

顔を覗く。目はしっかりと閉じたままだった。普段起き上がって颯爽と歩いている時とはずいぶん違う。怯えた子供のようだ。

ずいぶん前にも、その顔を見たことがあるような気がする。イアソンは思った。

でも、どこで？

そして、彼女をいたわるように見ていた幽霊のことを思い出した。「何のことですか？何を許すんですか？」

返事はない。しかし、急に彼の頭に、ある考えが、感情が、なだれこんできた。それが誰のものだったか、彼はすぐに了解した。

この二人は、イアソンは思った。完全に結ばれていたんだ。なのに気がついていないんだ。少なくともお互い生きていたときは気がつかなかったんだ。きっとそうなんだ。

まだこの館に来てそんなに月日は経っていない。でも、イアソンは今日の一件からその全てを、二人の全てを、見たような気がした。肩の重み、二人分の重みだ。

なぜここに引き取られたのか？イアソンは何となく、その答えを二人から受け取っていた。だけど、それははっきりと言葉にならないものだった。曖昧で、断定を許さないものだった。

ああ、ヘレンは今頃どうしているだろう？

彼は突然『予知の中の恋人』を思い出した。

今頃雷に怯えているだろうか、いや、ヘレンは雷は好きなんだ。

「そういえば、ヘレンは雷が好きなんですよ」

「誰？」ミス・ベリルが薄眼を開けたが、また雷鳴がしたので閉じた「ヘレン？」

「そのうちわかりますよ。彼女は、雷が落ちるたびに、自分の嫌いなところに落ちた光景を想像して楽しんでるんです。学校とか、嫌いな子の家とか」

「暗い発想だねえ」

「いいじゃないですか。少なくとも怖くはないんですから」

また雷鳴！でも今度はミス・ベリルは震えなかった。じっと身を固めたままそこにいた。雨がまた強くなった。イアソンが彼女の顔を覗くと、彼女も彼を見上げ、うっすらと、笑った。小さな子供の

ような笑い方だった。

「あらあ！嫌だわあ！子供の部屋にそんな恰好で入るなんてえ！」
例ののんきな叫び声。二人がドアのほうを見ると、白いネグリジェ姿のミス・メイシンが、手に小さなランプを下げて、立っていた。雷が鳴っているのに、めずらしく尋ねてこない『リリック』が心配になって、探していたのだ。

「雷を見てただけですよ」ランプのせいで、レースの下からミス・ベリルの、女そのものの全身がはっきりと見えた。顔を真っ赤にしたイアソンは、言い訳のように喋り出した「それとヘレンの話」「ヘレン？」

「そのうち会えますから」

イアソンは誰とも目が合わないように、窓に向けて目をそらした。「まあ、とにかくミス・ベリル、二階に戻ってくださいな」

ミス・ベリルは言われたとおりに立ち上がり、クラハとともに部屋を出て行こうとした。

「雷はここには落ちませんよ。僕が言うんだから間違いないでしょう？」

イアソンが後ろ姿に向かって叫ぶと、ミス・ベリルが振り返って、笑った。クラハは、まあ偉そうにと言いたげな顔で、二人を交互に見ていた。

二人が出て行ったあと、イアソンは横になったが眠れず、起き上がって座りなおし、窓の外を眺めていた。

ミス・ベリルとエブニーザ。

二階の二人。あの二人。

頭から離れなかった。あの光景が。

早くヘレンに会わなくてはいけない、なぜか彼はそう思った。

そのとき、彼の目に強烈な光が飛び込んできた、

それは雷鳴ではなかった。しかし、彼にとっては、何よりも恐ろしい光景であった。

彼が見たのは、人間の手だった。しかし、生きている人間の手で

はない。

死んだ後何日も土の上に放置され、すっかり変質した『朽ちた手』だった。

恐怖のあまり顔をひきつらせ、ベッドに倒れこむ。両手で顔をおおって身を震わせた。

嘘だ！そんなの嘘だ！

彼は頭の中で叫び続けた。

そんなことが起こるわけがない！きっと何かの妄想だ！間違いだ！予知なんかであるはずがない！

雷が鳴った。

嫌だ！そんなことは信じたくない！見たくない！

彼は必死でその光景を打ち消そうとした。しかし、彼自身、その『朽ちた手』が誰のものか、よく知っていた。

それは悲惨な死の予言だった。

1-36 ヘレン イシュハ 嵐の夜

同じころ、ヘレンは窓辺で雷を楽しんでいた。

南の管轄区では、雷は女神の怒りの表現なのよね。本で読んだことがあるわ。

でも、科学的には雲から生み出されるんだったかしら？ やっぱりいやいや誕生させられて、地面に落ちて何かを破壊して、終わりなんだわ。なんて悲しい人生。

また光！雷鳴！

どこに落ちたんだろう？ 学校に落ちてしまえ！

それともあの医者の家がいいかしら？ とにかく何でもぶち壊しにすればいい！

でも森には落ちないでね。

避雷針があるから人の家には落ちないの？ つまらない。

たしかにここに落ちたら嫌だけど。

でも、落ちて、一瞬で死ねたら、そのほうがいいのかもしれない……。

雷鳴と轟音が同時に聞こえる。

近い！ 近くに落ちなくてもいいわ！

リュエフの頭上に落ちてしまえ！

ヘレンの顔に歪んだ笑いが浮かんだ。

どうせあんな男、生きていてもろくなことは起こさない！ きつと

いつかまた誰かを殺すに違いない。その前に誰かに殺されればいい！

また雷鳴！

お父様の上に落ちればいいのよ！ あんなわからずや！ 大統領になりたい人間なんていくらでもいるわ！ 私の親が大統領である必要なんかないんだから！

雷鳴！ 雷鳴！ ヘレンはありとあらゆる人間に雷を落とし続けた。

まるで自分が女神となり、こんな風に自分の人生をゆがめてしまっ

た罰を与えているようだ。

イシュハなんて大嫌い！侵略ばかりして、昔アケパリを占領して、今はロンハルトやドウロソに侵攻して……こんな国、とっととなくなってしまうばい！

そして、ひととき大きく雷がとどろく。強烈な光と音が、ヘレンの目と耳に飛び込んできた。

さよなら！

窓の外が真っ白に輝いた。その瞬間、彼女の世界から、イシュハという国の存在が、消え去ってしまった。自分の世界だけにひたすら生きていたヘレンにとって、この国は、周りの人々は、とうとう、いないも同然になった。

そして、将来大きく芽吹くことになる、祖国への強烈な恨みが、この嵐の夜に、開花したのである。

囚人11番 独房

凄まじい、つんざくような悲鳴が、どこからか聞こえてきた。
ここ数日、独房は騒がしい。

ほぼ毎日、いろいろな方向から、怒鳴り声や、暴れているような音が聞こえる。

看守が廊下を走る足音が響く。その数分後には、暴れている本人が廊下を運ばれていく。

彼らは二度と戻ってはこない。

この国では、牢獄の中で暴れたものは、即刻処分してもいいことになっている。

ただでさえ狂人が出やすい独房で、さらにこの異常な寒さだ。耐えられなくなって精神に異常をきたしても無理はない。

『死んだ方が楽だ』という考え方もあるだろう。

人はみな、自分が何か偉大なことをするために生まれた、あるいは、何か意味があるから生かされていると思いたいのだ。しかし、私はもうそんな風に考えることができなくなった。

人は、ただ偶然、何の目的もなく地上に産み落とされ、何の意味もなくさまよい、何もわからないまま死んでいく。

別に悲しくもない。それでいい。それが本来の生物の姿だ。

私は心からそう思っている。

続きを聞かせようか。

2-1 イアソン クラハ・メイシン ポートタウンの館

冬は終わり、春が過ぎて夏に入ろうとしていた。庭の薔薇がいつせいに、黄色や白の花をつけはじめた。クラハと、すっかり健康になったものの、まだやつれ気味のイアソンは、よく二人で庭を散歩した。

咲き誇る大輪の薔薇の間を、ロングスカート姿でゆったりと歩くクラハ・メイシンは、物語から抜け出たように美しく、どこから見ても良家の令嬢のように見えた。でも、イアソンに家族について尋ねられると、

「いないわ。親戚は誰もいない。12のときにここに来て、それからずっとここにいろわ」

と答え、それ以上自分の事を話そうとしなかった。

ミス・ベリルは、あいかわらず昼は寝て、夜起きて、クラハと食事をし、イアソンの部屋に入ってきて、今までどうやって暮らしていたのかと、いろいろ彼の事を聞きたがった。

イアソンは出来るだけ正確に、ただし面白く脚色して（ありのまま話すのは辛かったのだ）説明した。競馬好きの老人や、近所に住む親子、それに死んでしまったあの優しい老婆のことなどを。ミス・ベリルは時々大笑いしたが、たいていは深刻な顔で聞いていた。

クラハは毎日のように、館の女たちから聞いた話（それはだいたいいアソンのほうが先に聞いて知っている内容なのだが）や、町で聞いた話、『偉い人』のスクヤンダルなどを熱心に話した。

週に一度はバリー氏もやってくる。イアソンの事を最初は気に食わなかったようだが、最近、味方につけたほうがいいと判断したのでらう。気さくに話しかけてくるようになった。

「わが社はだね、シュタイナーという男がメルケリという宝石商と出会ったことで出来た会社なんだ。シュタイナーは知っているだろう？」

「管轄区一番の大金持ちで、教会の後ろ盾ですよね？」

「そう。ヨシユア・クルツ・シュタイナーがそのすべてを握っている。シュタイナー氏は宝石が大好きなんだ。メルケリが呆れるほどだそうだよ。なんせ、娘たちに宝石の名前をつけたくらいだ」

「へえ」

「フローライト様、よくエブニーザ様に会いにいらしてたわ」

クラハが話に割り込んできた。バリーがしめたとはかりに微笑む。「ええ！ええ！有名な話ですよ！」バリーが興奮気味に顔を赤らめて話す「フローライト様はエブニーザに夢中でね、もともと物静かで控えめな方なのに、エブニーザに会うときだけ、とんでもない豪華な衣装と宝石を身に着けていたと聞きますよ」

「そうね、たしか、いつも舞踏会みたいな恰好をしていたわ。十五年以上前の話よ。とても美しいお嬢様でしたわ。ウェーブのかかった長いブルネットに緑の目の」

「大変だったそうですよ。エブニーザが暗殺された後、今にも後をおいかけんばかり嘆いて、部屋から半年、出てこなかったんですから！あのときはシュタイナー氏も困り果ててすっかりやつれてね。引退するんじゃないかなんて言われてたんですよ。これは、私がシュタイナー氏から直接！聞いたんですが」

バリーは『直接』を強調して言った。彼によると、シュタイナーとエブニーザは敵対していたから、本来は喜んでもいいところだが『実際は途方に暮れてたってわけです』などと気取った口調で話をしめた。

「まさか私がその、敵対しているところに来るとは思いませんでした」

バリーがそんなことを言った。イアソンは、クラハがぼんやりと、暗い目つきで黙っているのが、気になった。

「どうかしましたか？」

「いえ、ただね、昔、シュタイナー氏がここに来たことがあったから」

「本当ですか？」バリーが驚いた「何のために？」

「いえ、昔から知り合いだと言ってましたし、私もよく会いました」クラハがあわててそう言った「私、片づけなきゃいけないものがあるから、失礼しますわ」

去っていくクラハの後ろ姿を見て、イアソンは、そしてバリーも、こう思った。

『昔何かあったんだ！エブニーザとシュタイナーの間に！』

とにかく、こんな噂話だけはたくさん入ってくる、なのに、イアソンの知りたいこと、つまり、エブニーザがなぜ、どのように死んだのかということだけは、みな頑なに教えてくれないのだった。

「暗殺されたんですよ、暗殺」

「撃たれたんですか？それとも殴られてたんですか？」

「そんなことどうでもいいじゃないですか」

「墓はどこにあるんですか？」

「さあ……」

誰に聞いてもそんな調子だ。

館に来てから半年経っていた。イアソンはすっかり健康になっていたのに、まだ一度もこの屋敷の敷地内から出たことがなかった。

まあ、いいや、もうすぐイシュハに行ける。そうしたら……。

イアソンは、イシュハの南側、ポートタウンのすぐ北にある、アルターの学校に行くことになっていた。そこは全寮制なので、せっかく会ったミス・ベリルやクラハ・メイシンともお別れである。

出発までの一週間、彼は極力二人のどちらかについて回ることにした。あの亡霊……館の前の主について、もっと詳しく聞きたかった。しかし、ミス・ベリルはあまり昔の事を話したくないようだ。彼女にとってはずべて遠い過去の事であり、思い出したくないことだったらしい。

それに、ミス・ベリルに客が訪れる日は、部屋からなるべく出ないようにと言われていた。彼も客を見るのが嫌だったので、言われるとおりに部屋で本を読んでいた。

「いろいろ言われると思うけど、気にしないのよお」

あいかわらずのんきな声のクラハ・メイシンが部屋にやってきた。
「別に気にしてません」

イアソンは嘘をついた。本当は気になってしょうがなかった『こんな仕事はやめてください!』とさえ言いたかった。生活できる財力はすでにあるはずなのに。でも、世話になっている身分でそんなことを言っているのだろうか? 実際、彼を助けに来た時も、ミス・ベリルは鞭をふるっていたわけだし……あれが天職だと言われたらどうしようもない。

いや、でも、もし僕があの子だったら?

絶対に『やめて!』って言うに決まってる!!

あの二人、というのはもちろん、ミス・ベリルと、彼女を見守るように現れた前のこの館の主人の幽霊、エブニーザである。最近イアソンの考えを占めていたのは、この二人が自分の親に違いないということだった。でなければ、ミス・ベリルが自分を引き取るはずがない。

それに、僕はあまりにもあの幽霊に似てる。

イアソンは最近、館のいたるところに掛かっている装飾的な鏡に自分が映るたびに、あの、白に近い灰色の目の、不気味な男を思い出し、怖くなるのだった。

「ミス・メイシン?」

「なに?」

「ミス・ベリルの職業ですけど、あれは、その、昔から、ここ前の持ち主も?」

顔を赤らめながら尋ねるイアソンをじっと見て、しばし何か考えたかと思うと、クラハは突然大声で笑い始めた。

「どうしたんですか?」

「いえ! いえ! 何でもないわ! そんなことはないわ!」 笑いを何とか抑えようとして、妙な声で身体をゆすりながらクラハが言った「あなたも男だったのねえ、どうして男の人ってみんな、あの人を通

して自分の欲望を見るのかしら？ええ、そうよ、みんなあの人を通して自分の欲望を見てるのよ。嫌っているように見えてみんな、あの人のイメージが大好きなのね！」

「別に僕はそういうつもりで言ったわけじゃない……」

イアソンが顔をそむけた。

「あはははは！ごめんなさいね！寝室を覗いたわけじゃないから詳しくは知らないけど、エブニーザ様にそういう趣味はなかったと思うわ。あの方真面目だったもの。ええ、あの職業は、死んだあとよ、彼が。リリック、いえ、ミス・ベリルだってもとはただの恋人ですもの。メイドとして館に雇われる前は、娼婦だったそうだけど」イアソンは耳を疑った。『恋人』と今聞こえたが……。

「愛人じゃないんですか？」

「だってえ、エブニーザ様、独身だったもの。確かに、噂になっている人はたくさんいましたよ。シュタイナーのお嬢様でしょ？ザンムルの汚染地帯にいる女医者でしょ？それから、ノレーシュの女王様とも！ほかにもたくさんいるわ。でも、館に住んでいた人は、リリック以外の女が寝室に入るのを見ていないのよ」

クラハの顔から笑いが消えた。真面目な瞳でイアソンを見つめる。こういうときのクラハは本当に美しい。誠実が身体から光を放つようだ。

「結局、いろいろ悪い噂を流したのは、何も知らない人だけよ。私が見ている限り、リリック、つまりミス・ベリルには、いえ、エブニーザ様にも、やましいところは、ないわ」

クラハはそう言うと、ニコツと笑って、部屋を出て行った。いつもこうなのだ。家中の人の機嫌を見て回り、話をし、自分はというと、完全に一人になりたがる。

ミス・メイシンが母親でもよかったのにな。でも、あの方はどうしてここで働くことになったんだろう？前聞いた話だと小さい頃からだって……。何かあったんだらうか？

しばらくぼんやりとそんなことを考えていたが、あわてて打ち消

した。

誰が本当の親なのか、はっきり教えてほしい。いや、もうほとんど判明しているのに、だれも決定的に『その通りだ!』と断言してくれないのだ。むしろやんわり否定されるのではないだろうか? そう思うと彼も口を開けなくなる。

いいや、ともかく今は勉強しないと。なんせ学校に行ったことがないし、ただでさえ年下に交じって授業を受けなきゃいけないのに。

彼は本を開いた。

それはイシュハと、近隣諸国の戦いの歴史だった。女神同士の対決と言われる、女神アニタを信仰するイシュハと、女神ファナティを信仰する旧教会の百年にわたる戦争。現在の国境が、大陸の真ん中に引かれたのは二百年前。

その後、近隣の小国と友好関係を保った新教会『管轄区』とは異なり、北のイシュハはずっと戦争を続けていた。東のアケパリとの人種戦争。勝ったはずなのにほとんど領土を奪うことも、賠償金を得ることもできず、現在ではアケパリはただの『同盟国』である。

南の大陸で核実験を行えば見事に失敗し、広大な大陸を一つ壊滅状態にし、そこにあった国々も消滅。

そして最近北西のロンハルトへの侵攻。

西に国境を接しているドウロソとは、ここ数十年、同じ女神アニタを信仰していながら、常に国境紛争が絶えない。欲望を肯定する、という言葉の解釈が両国でだいぶ異なるのだ。ドウロソのアニタは、荒野らしい厳格さ、神聖さも併せ持っている。欲望をなんでも肯定するという超寛大な解釈のイシュハとは合わない。そしてお互いを『異端者だ!』と呼んではばからない。

2-2 ヘレン アルターの国立公園

ヘレンはアルターの森を歩いている。さきほど学校的女子寮にいたばかりだ。

荷物の事はすべて家政婦にまかせて、自分は逃げるように建物を飛び出し、今、すぐとなりの国立公園にいるのだ。

なんていい天気！なんて青い空！まるでターコイズのようだわ！それにこの木！

大きな木々にはプレートが打ち込んであり、木の名前が彫っている。白樺、榆、楓、杉など、ヘレンはくまなくプレートを見て回った。まったく手つかずの自然と、人口の道や噴水、休憩用の小屋などが、うまく共存していた。

蝶がいるわ！しかもたくさん！

ヘレンは野の花の中につっこんでいった。白や黒の蝶が一斉に飛び立った。ヘレンは夢中になって追いかける。公園にいるほかの人々が奇妙な目で自分を見ていることにはまるで気がつかない。太陽がさんさんと輝く。

もうヘレンの前からは、学校の事も、自分の惨めな気分の事も、かき消えてしまった。

2-3 レーナ・ウルコネン 変な子に会う

レーナ・ウルコネンは、アルターの女子学生寮のリーダーである。彼女は夏の休暇中である今も、寮に残っていた。

金髪を後ろで無造作に束ね、活発に動けるように常にジーンズにシャツという格好だった。しかし、青い目はいかにもイシユハの上流階級の人間というふうに輝いていて、顔は痩せて顔がこけていた。それが彼女を少し大人びて見せている。

姉妹の世話に追われるのもうごめん。

彼女には妹がなんと6人もいる。そして全員がわがままいっぱいだ。物どころついたときから、自分の世話より妹の世話を優先されてしまった。そして、やっと学校に入り、寮で一人になれると思ったのだが。

結局、人の世話ばかりしてしまうんだよね。それで、余計なことが起こるんだ。

というのも、先日、レーナのルームメイトが出て行ってしまったのだ。

彼女は学校みんなに嫌われていた。表情は暗く、皮肉を言い、『私は何も信じない』という顔をしていた。レーナは率先して彼女の友達になろうとした。ほかの友達の約束を断っても、彼女と一緒にいる時間を大事にした。

しかし、先日、彼女はこう言い残して、学校を去った。

「あんただってみんなと同じよ！私が嫌いなものよ！見下してるんだわ！ただ、私に親切にして人より上に立とうとしただけでしょ？」

ああ、その通りだった！レーナは彼女にうんざりしていたけど、同じ部屋にいる以上、顔に出さないようにしていた。だけど、相手には全部、伝わっていた。

そして今、公園に散歩に来たレーナは、噴水のすみっこに座り、部屋から持ってきたオレンジを手でもてあそびながら、途方に暮れ

ていたのだった。

どうしても保護者になってしまおう。私は。自然な付き合いって、何だろう？私はなにがしたいんだろう？

私はどうすればよかったの？

ああ、早く大人になりたい！

レーナは心で叫んだ。彼女は子供が大好きなのだ。姉妹の世話は嫌なくせに、保育士の資格を取るべく今から勉強しているのだが、レーナは学校や勉強が好きではない。ただ、人と関わりたいのだ。ボランティアにもよく行く。子供に会いたかった。人と接して生きたかった。今すぐにでも！

これからまだ五年くらい学校に行かないといけないわ。もしかしたら大学か、もっと先まで。ああ、たまらない！！

そこまで考えた時、強い風が吹いた。

あれ？今日はいいい天気のはずなのに、どうしたんだろう？

あたりを見回した時、杉の林の陰から、だれかがこちらをじっと見ているのに気がついた。おそらく麦わら帽子だろうが、妙につばの広い帽子に、何か石をつないだチェーンがついている。その先は白いブラウスになっていて、スカートも白くて、たくさんレースがついている。まるでおめかしさせられた幼稚園の生徒のようだ。しかし、背丈は明らかに高い。

私と同じくらいの身長だ。顔がよく見えないけど。

レーナが相手の顔を見ようとした時、風が吹いて、相手の帽子がずれた。その下から真っ白な顔が、見えた。

うわあ、不健康。しかもあの目！オレンジ色！？

レーナは手元のオレンジと、女の目を交互に見た。

ああ、なんだか嫌がらせみたい。

どうして私、今日に限ってオレンジなんか持ち歩いてるんだろう？女もレーナに気がついたのか、まっすぐ噴水に向かって歩いてきた。妙にきびきびとした、軍隊の訓練のような歩き方。少女のような格好とまるで合っていない。

女はレーナの隣に、ぴったり身体がつくくらい近くに、座った。しばらく二人とも無言で、お互いそっぽを向いていた。そのうちまた強い風が吹いた。

「あれは、悲鳴だわ」

女が帽子を手で押さえながらつぶやいた。レーナが、帽子の下の女の顔を覗く。すると、女は今初めてレーナの存在に気がついたみたいに、びくっと身体を震わせて目を見開いた。

「ごめん、おどかした？でも私、さっきからここに座ってたけど」
レーナもあわてて言った。

「知ってるわ」

消え入りそうな、でもきれいな声で女が答えた。風にブロンドのウェーブのかかった髪が揺れた。腰まで届きそうな、自然に伸ばしっぱなしにしたような、無造作なロングだった。

「髪、長いのね」

レーナはつぶやいた。返答はなかったが、かわりに女がレーナの顔を見た。笑わなかったけど、嫌がってもいないようだ。

「私、レーナよ、あなたは？」

「ヘレン」

「いい名前ね、ヘレネ」

「ヘレネじゃなくてヘレンよ、リーナ」

「リーナじゃなくてレーナよ、エレン」

「エレンじゃなくてヘレン」

似たような問答を何度も繰り返した結果、二人とも実は人の名前を覚えるのが苦手だということがわかって、笑い転げた。

そのあと、当たり障りのない会話をし、『もうそろそろ帰らないと怒られるから』というヘレンの言葉で、二人は別れた。

いったいどこの子？低級学年にしては大きいし、でも私と同じくらいにしては……幼すぎる。

帰り道、半分になったオレンジ（ヘレンに半分割って渡したのだ）を見つめながら、レーナはそんなことを考えていた。

2-4 イアソン クラハ バリー氏 館の広間

「買い物に行かない？ 部屋にばかりいちゃ退屈じゃない？」

次の朝、朝食を終えて本を読んでいたイアソンに、クラハが言った。

「レースの糸ですか？」

今すぐにも飛び出したい気持ちを抑えて、イアソンが尋ねた。

「いいえ、今日は別のもの、あと、学校で使うものを用意しないといけないでしょう？」

「そうですね」

学校で使うもの。すっかり忘れてた。何が必要なのかさっぱりわからない。

シャツに着替えながらふと思う。そういえば、勧められるままに着ていたこういう服は、いったいどこから来たんだろう？ 買ってきたのか？

死んだ人のものでないことを祈りながら、彼は新しいシャツに袖を通した。

廊下を歩く。静かだ。仕事の後だから、ミス・ベリルは眠っているだろう。それとも、起きているけど降りてこないだけなのか？ 確かめたかったが、やめた。

広間では、バリーと、シュタイナー・メルケリの幹部が、例の女神像を見上げて何か相談をしていた。バリー氏以外全員の頭が禿げあがっているのが印象的だ。

「ああ、持っていくんですね。アニタ像」

「おう、おはよう」バリー氏はにこりともせずにあい拶した「ああ、教会所有の博物館に売ることになったのだ」

それはミス・ベリルの希望でもあった。盗まれた女神像は、どこか『別なところ』から発見されたことにできるなら、無償でシュタイナー・メルケリに譲ってもよいということだった。

長年女神像を探していた幹部たちは驚き、色めきたった。そしてさっそく、自ら女神像を『救助』しようとやってきた、というわけだ。

禿げた幹部のうちの一人が、イアソンをちらっと見ると、意味ありげなにやけ笑いを隣の仲間に送った。

『これがあの淫乱の息子だな！？』

とその目が語っていた。イアソンにとってはひどく不愉快なことだ。もちろん、真面目なバリーにとっても同様である。

「おまたせ。あら？いらしてたのね」

上機嫌で出てきたクラハがバリーに気づき、少々がっかりした顔をした。

「おはようございます、ミス・メイシン」バリーはそれとは正反対の満面の笑みだ「残念ですが、今日は忙しくなりそうです」

「そうですの」

どうでもいいんだけどなあという感じでクラハが答えた。イアソンは笑いをこらえて少々足踏みをした。

「お出かけですか？」

「ええ、お買い物ですわ、それじゃ」

クラハはイアソンの腕にわざとらしく自分の腕をからめると、二人並んで（正確に言うところ『すさまじい早足でイアソンをひきずって』）外に向かって歩いて行った。

2-5 レーナ ヘレン アルターの女子寮

レーナが部屋に戻ろうとした時、ドアが開いていて、数人の女（みんな中年）が部屋に積まれたダンボール箱を開けて、中身を取り出しているのが見えた。

やばっ！レーナは舌打ちした。

新しいルームメイトが来るの、今日だった！忘れてた！

「ああ、お嬢様はいつになったら戻ってくるんだろうねえ」

女の一人がそう言うのが聞こえた。お嬢様ですって？レーナは部屋に入らずに、廊下でしばらく聞き耳を立てることにした。

「しばらく帰ってきませんよ。たぶん森に迷い込んで、永久に帰ってこないかも」

もう一人が不機嫌そうに答えた。

「まったく、あんなとんでもないわがママと一緒になんて、この部屋の子はかわいそうね」

ガーン、最悪。

レーナは来るべき『わがままなお嬢様』を想像し、頭の中で対策を立て始めた。

とりあえず、私の物は私のもので、私はあなたの召使じゃないって言うっておかきや。なんたって、他人は自分のために動くと思ってる子が多いのよ、最近は！

そしてレーナは、ケレス・ヘステシアのことを思い出した。彼女はわがままではないが、気が強すぎて、そして精神的には恐ろしく『もろい』のだ。議論には必ず勝たないと気が済まないと決まってるし、とんでもない負けず嫌いだ。

先日は、大統領の誕生パーティで社交界デビューを飾ったにもかかわらず、父親が大統領とその娘ばかりに気を使って、自分にはきれいの一言もなかったと怒り狂い、

『私はどうでもいいって言うのね！あんなボケた顔の娘のほうがいい

いんだわ!』

とまるで裏切られた恋人のようにレーナに泣きつき、かと思えば、数十分後には平然として、水の入ったコップ（レーナのだ!）片手に、

『父さんなんて、よく考えれば大した男じゃないわね。大統領の秘書なんて、犬みたいなもんじゃないの。いつも人の言うことばかり気にして! 私のほうが政治の才能があるわ!』
とまで言い出す始末。

そういえば、ケレスも寮に残っているはず。いざとなったら彼女とカナデの部屋に逃げ込もう。ケレスは強気だし、カナデは変人だから、きっと追い払えるわ。

カナデ・アンジはアケパリの政治家の娘で、政治経済を学ぶために留学している。イシュハの言葉は外国人だから不正確だけど、話す内容はケレスが認める（ケレスが認めるなんてありえない! とレーナはひどく驚いたものだ!）真面目さだ。しかし、アケパリの『文化』ごと『持ち運んで』いるので、言動がひどく奇怪に見える。いつもたいてききれいでもない石をつないだアクセサリーをじゃらじゃらと身につけ、引きずりそうなほど長い民族衣装を着て、ぶつぶつ何かをつぶやいていた。

レーナは思い切ってドアをぱっと開いた。

「こんにちは! この部屋のレーナ・ウルコネンです!」

精一杯の社交的笑顔で自己紹介した。

「こんにちは」

「まあ、きれいな子」

そんな言葉が返ってきた。おせじだろうが悪い気はしない。

「何か手伝うことはありますか?」

「いいえ、おかまいなく。もうじき終わりますから」

太った女が笑顔で答えた。レーナは荷物を眺める。本の山! 題名を覗く。

『アケパリの神秘と文化』『伝承による宝石の役割』『国際語文

法』『バスカの丘』

……難しい本ばかりね。しかも『バスカの丘』って、いきなり女の子が襲われる話よね？

本の山の横には、石がたくさん入った箱が置いてある。

寶石の原石？流行ってるわよね。でも一人でこんなに持っててどんな願い事をする気？強欲そう……。

箱から、おそらくローズクォーツであろうピンク色の石をつまみだし、目の前でかざしながら、レーナは『お嬢様』の帰りを待った。
「あ」

ドアのほうから声がした。レーナは振り返ってその声の主を見て驚いた。

大きなつばの帽子に、全身白の服装。何より、オレンジの目。手にはさっき半分に割ったオレンジを持っている。

まあ、ヘレン！それともエレンだったかな？

「おかえりなさいまし、ヘレン様」太った女が不機嫌そうに答えた。
ああ、ヘレンか「こちらの方とこれから一緒に暮らすんですよ、お名前は……」

「レーナ」無表情のヘレンがそう言った「知ってるわ」

ヘレンは同意を求めるようにレーナのほうを見た。どうも怯えているらしい。

「ええ、さっき公園で会ったのよね」

「へえ、公園ねえ」

もう一人、空き箱を片づけていた女が、妙に軽蔑のこもった声で言った。

どうして二人とも機嫌が悪いの？この子とはうまくいってないのね、きつと。

レーナはヘレンと二人の『召使』の間に、分厚い『敵意の壁』のようなものを見て取った。

「もう一人で片付けるから、帰って」

ヘレンが命令というよりは怯えているような声で言うと、二人の

女は顔を見合せながら、無言で部屋を出て行った。

ヘレンはしばらく二人が出て行ったドアを見つめたまま、動かなかった。

レーナは、声をかけるタイミングをうかがいながら、本を手にとった。

「ずいぶん難しいものを読むのね」

本をめくりながら、ひとり言のようにつぶやいた。ヘレンが振り返る。

「別に難しくないわ」

「そう？」

レーナは本を置き、握手を求めて右手を差し出し、笑った。

「レーナ・ウルコネン。女子寮のリーダーよ。よろしく」

ヘレンはちよつとだけ戸惑っていたようだけど、恐る恐る、ゆっくりと手を差し出して、レーナと握手した。

「何も心配いらないわ。あとで私の友達を紹介するし……でも、みんな変人。この学校には変な人が集まるの。きっと面白いよ」

レーナがそう言うと、ようやく安心したのか、ヘレンはかすかに口元に笑いを浮かべた。

オレンジの目はあいかわらず、怯えたままだったのだけど。

2-6 イアソン クラハ ポートタウン

ポートタウンの人の多さに、イアソンは圧倒されていた。道を歩くのもよほど気を使わないと、すぐに誰かにぶつかってしまいそうだ。しかもみんな、ろくに前を見ずにすさまじい早足で突っ込んでくるのだ。

そして、一緒に来たはずのクラハまで、彼らと同じか、もっと早足で歩くので、ついていくのにかなり苦労した。

「早くいらっしゃい」

百メートル先からのんきな大声でそんなことを言われ、何人かの通行人に振り返られ、恥ずかしさのあまりマンホールにでも落ちてやろうかと思い……目的の店に着いたところには、すっかり疲れ果てていた。

「とりあえずスーツは買っておいたほうがいいわね。やっぱりグレイがいいかしら？」

「グレイは嫌です」

「そう？ 無難だと思うけど、シャツはピンクとか、あ、さっきトラみたいな柄のネクタイがあったわ」

「……それ、ほんとに無難ですか？」

店員に言いつけて、いろいろと品物を運ばせているクラハは、とても浮かれているように見える。人に何かを選んであげるのが楽しくてたまらないのだ。しかし、さっきの人混みが平気だなんて、イアソンにはそのことが信じられない。

ああ、これからあの何千何万の人と関わっていかなきゃいけないのか……。

疲れていた。おかげで、この日に買ったものは、あとから見ると明らかにどこか『ヘンな』ものばかりだった。

店を出ると、ようやくイアソンが疲れ果てていることに気付いたクラハが、

「何か冷たいものでも飲む？」

と言った。

「昼間から酒は駄目ですよ」

「アハハ！あたりまえじゃないの！今日は暑いからカフェで休みましょうって意味よ！」

相変わらず上機嫌のクラハと比べて、イアソンは不機嫌に横を向いて、通行人を一人一人観察していた。ようやく人混みの歩き方がわかってきた。

みな早足で歩いていて、話しかけられる雰囲気ではない。

しばらく歩くと、交差点の建物の陰から、通りを覗いている顔があった。小さな男の子のようだ。何か、敵を見るような鋭い目でイアソンをじっと見ている。

「何か用？」

イアソンが話しかけると、驚いたのか、男の子はびくつと震えたかと思うと、そのまま建物の裏側へ、ものすごい勢いで走り去ってしまった。

「あまり子供に話しかけないほうがいいわよ」

クラハが口元だけ笑いながら、言った。

「どうして？」

「最近、子供の誘拐とか殺人とか、多いのよ。みんな警戒しているの」

「でも、話しかけないでどうやって知り合いになるんですか？」

「趣味の集まりとか、学校とか、仕事場でしょね」

「でも」

イアソンが考えていたのはあの、貧しい町の、老人や近所の子供たちのことだった。あの人たちは貧乏すぎて趣味なんてないのだ。せいぜい競馬か、新年を祝うくらいだ。でも、近くに住んでいれば、みな、仲間のようなものだった。

「ここだとねえ、隣の部屋に誰が住んでもだれも気にしないのよ。さみしいけど、どこの町でも今はそうだし、イシユハのような国な

らもっと、酷いと思うわ。路上で人が倒れていても誰も気にしない
っていうし」

前を歩くクラハの顔は見えない。声だけは優しい。

「あ、ここここ」クラハが緑色の看板を指差した「ここ、知り合い
のお店なの。夜はいいかわしいけど昼は普通。それにしても暑くな
ってきたわね、夏だからよね」

「そうですね」

イアソンは暗い気分で答えた。永遠に誰とも知り合いになれない
ような、そんな予感すら、した。

ケレス・ヘスティアは、親友のレーナが連れてきたぼんやりした顔の女が『大統領のお嬢様』だとすぐ気がついた。ほかにはめったにないそのオレンジの目と、不健康な肌の白さ、何より、硬い表情と眠ったようにぼんやりした目つきからそう確信した。

「カーネリアンの目をもっているねえ、きみーわ」

不正確な発音でそう言ったのは、同室のカナデ・アンジだった。床に届くほど長い、赤地に白い花が散っている着物を着て、腰に太めの黒い帯を締めていた。首にはじゃらじゃらと数珠やネックレスを重ねてつけていた。目の色が濃く、瞳孔が全く見えなくらい真っ黒だ。長く垂らした髪もオニキスのような完璧な黒で、肌も浅黒い。背は低く小柄で、まるで旅行土産のアケパリ人形のように見える。

ヘレンはそんな『外国人』を見て、目を丸くしていた。

「カナデはアケパリから来た留学生よ。いつも寮ではこんな格好」

レーナは、ヘレンが期待通りの反応をしたのを確認すると、カナデに笑いかけた。

ケレスはなんとなく、仲間外れになった気分になった。

「新しく来た子よ」

やっとレーナがケレスに話しかけたが、ケレスの目は不機嫌に吊り上っていた。

「ヘレン・シュッティファント」ケレスが敵意をこめてつぶやいた。一度聞いた名前は絶対忘れないのだ「存じてますわ、大統領のお嬢様！」

「そうなの？」

レーナは今初めてそのことを聞いたので、驚いた顔でヘレンを見たが、ヘレンの顔は、ケレスのその声とその敵意を敏感に感じたのか、ただでさえ青白い顔がますます蒼白になり、目が大きく開いて

いて、顔中がひきつっているようだった。

「ヘレン、どうしたの？怖がらなくていいのよ」

「私、嫌い」かすかな、かろうじて聞き取れる、あえいでいるような声でヘレンが言った「シュツティファントなんかきらい……」

部屋にいる三人がみな、この発言に驚いた。

「じぶんのいえがきらいーとわ、なにごとか」

カナデが怪訝な声で、手で胸元の数珠を弄びながら言った。

「別にめずらしいことじゃないでしょう。政治家なんて忙しいんだから。選挙のとき以外全く家族と会わない議員だっているし、家族だってそれくらいの覚悟がなくちゃ」

ケレスは勢いよくそう言ったが、自分の発言で、ヘレンが今にも倒れそうなくらい弱ってしまったので、困惑していた。

「ケレス、少し黙ってて」レーナがめずらしく厳しい声で言った「ヘレン、そのソファアに座って」

「クレエプジュースがあるからとってくる」

カナデが隣の部屋へ、長い服を引きずりながら出て行った。ケレスはあいかわらず敵意を含んだ目で、ヘレンと彼女を氣遣うレーナを見ていたけれど、前のパーティほどの憎悪は感じなかった。目の前の『お嬢様』はあまりにも怯え、弱々しい。つまり、ケレスが闘争心を感じる『社交性』とか『権力』とか『名誉欲』というものが、どうもこのヘレンという女から、感じられないのである。

もつとふてぶてしい、意地悪な女かと思っていたけど。いや、まだわからないわ……。

人の名前はすぐに覚えるケレスだが、新しく知り合った人間はめったに信用しない。

「あなた、私を知らない？ヘステシアの娘よ。大統領の秘書の」

先ほどよりは柔らかいトーンで、ケレスがヘレンに尋ねた。

ヘレンはしばらく、ケレスの顔をぼんやりとした、焦点の定まらない目で見ていたが、首を横に振った。

「大統領は、部下の話はあまり家族になさらないの？」

「わかんない。一緒に住んでないもの。もう7年くらい」

これにはレーナも驚いた。

「こないだのパーティは？」

「私、ああいうの、嫌い」ヘレンがぼつぼつとつぶやくように答える「朝起きたらいきなり化粧させられて、つれていかれて、笑えって言われて、終わり」

なるほど、あの呆けたような顔はそれが原因か。

ケレスは一人で勝手に納得した。

父さんが、大統領の娘は知能が低いって言ってたわね。子供っぽいわ。頭が弱いのもかもしれない。

「こおりいれてーきたよー」

カナデが黒い漆塗りの盆に、グラスを四つのせて戻ってきた。ヘレンは突然顔を上げて、カナデのほうをじっと見た。怯えの色が少し、ゆるんだ。

「それ、イエードよね」

ヘレンがカナデの首に掛かっている、丸い緑の石をつないだネックレスを指差した。

「ジェード。アケパリでは翡翠、という。これは人間の欲望の数だけ、並んでいる」

カナデが首から下げた数珠をつまみながら、少し得意げに笑った。「見ただけで何の石かわかるの？」

レーナが感心したように言った。ケレスはそんな会話には興味がなかったが、ヘレンが元気になったので安心した。

「いっつも不思議なのよね、そんな長ったらしいもの着てて、よく転ばないわねって」

「転ぶのわー修行が、足りんのだー」

「修行なんて古臭いのよ。そんなだからアケパリは古代国家って言われるのよ！」

「精神修行とテクノロジーは両立するのだー。アケパリはイシユハよりコンピューターに優れているぞ。これはひとえに精神鍛錬と忍

耐の賜物なり」

「それにしては最近不況でぱっとしないようですけど？」

「ね？変な人ばかりでしょ？」

ケレスとカナデの言い合いをよそに、レーナが小声でヘレンにつぶやく。ヘレンは口元だけの笑いを浮かべ、グラスを口に運んだ。

そして、あいかわらず『イエード』が気になるのか、ちらちらとカナデのほうを盗み見するように見ていた。

2-8 イアソン クラハ ミス・ベリル ポートタウンの館

イアソンの学校生活は、最初から混乱の連続であった。

まず彼が気付いたのが、自分には、書類を書くという能力が欠如している、ということだった。

文字が書けないわけではない。むしろ、クラハが驚くくらい上手だったのだけど、学校に提出する書類は結局自分で書けなかったのである。名前を書くべき所にミドルネームを書き（これは彼の境遇を思えば無理のないことではあるが）生年月日を書くべき所に今日の日付を書き、単語のつづりを間違え……というようなことを数十枚繰り返し返したあげく、先に我慢できなくなったクラハにペンを奪われてしまったのだ。

これはイアソンにとっては苦痛だった。こんな簡単なことができないと思われたのが屈辱であった。何でも人にやってもらっては、これから一人になった時、困る。

沈んだ顔で廊下を歩いていると、広間の階段からミス・ベリルが降りてくるのが見えた。

いつもとは違う、足がすっかり隠れる長い黒のドレスを着ていた。スカートはほどよく広がり、金色の糸で豪華に花が刺しゅうされている。そして肩にはやはり黒いショールをかけて、胸元にはいつものベリルのブローチが光っていた。全身がほとんど隠れるドレスなんて珍しい。

そんな恰好のミス・ベリルは、いつもの危うさが影をひそめ、身分の高い貴婦人のように見えた。

今日、何かあるのか？

「まだ二時ですよ」

探るような目をしながらイアソンが言った。

「昼間起きちゃいけないみたいない方だね」

「そんなこと言ってません」

「これ、あげる」

ミス・ベリルが胸の谷間に手を入れ、何か取りだした。

彼女が取りだしたのは白いケースだった。上がガラスになっていて、中に、小指の爪くらいの大きさの、楕円の、黄金のような色の透き通った石が輝いていた。

「何ですか、これ」

イアソンは宝石そのものよりも、取りだした元の場所が気になった。

「ゴールデンベリル」ミス・ベリルがいきなり、自分の顔を彼の顔に近づけ、意味ありげに微笑みながら言った「通称、予言者の石、さ」

「何に使うんですか？」

「何に使うかだって？」半ばせせら笑うような声だった「宝石なんてのは、眺めてきれいだと思っていれば、それで十分なんだよ」

「そうですか」

「いらなきや、学校の女にでもくれてやったらいいのさ」

「じゃ、ヘレンにあげます」

「ヘレン」雷の夜を思い出したのか、ミス・ベリルの顔の困ったような笑いが浮かんた「前もヘレンって言ってたけど、誰？」

「僕のパートナーです。これから会います。いつになるかわからないけど」

ミス・ベリルの顔から笑いが消えたが、彼の話を信じていないからではなかった。むしろ彼女は、自らの経験と、もって生まれた直感で、それは真実になると確信していた。イアソンを驚きと共に見つめる目は、彼にこう言っていた。

『あんたには、その子がもう見えているんだね？そうだろう？』

イアソンはその顔に答えるように、手元のケースを振って、にっこりと笑った。

ミス・ベリルはふと、さみしそうな笑みを浮かべると、歩き出して、玄関から外へ出て行った。

「クレハータウンのお友達に会いに行ったから、一週間くらい帰ってこないわ」

と、あとからクラハに聞かされた。

「一週間!?!」イアソンは不愉快そうに叫んだ「僕がここを出るの、明日ですよ!?!」

「だからよ。さみしいんじゃない? それか、別れ際に何を言っているかわからないから、先に自分からいなくなっちゃったのよ」

困った人だわあ。でもいつものことよ。と、クラハはいつも通りのんきだった。

「車の手配しましょうか? それとも一人で行ける? 一緒に行きましようか?」

「一人で行けます!」

珍しく語気を荒げたのは、子供扱いされるのが嫌だったのと、クラハが学校まで本当に『のんきに』ついてきたら大変だからだ。

2-9 頭に船を乗せた男

そして今、イアソンは『一人で』アルターの西側にある学生寮にたどりついたのだった。

事務員はいかにもこの『新しい生徒』に興味がなさそうだった。むしろ、自分の時間を取られて迷惑だと思っているように見えた。

「ここは全て二人部屋です。開いている部屋にはすでに一人ずつ住人がいます。部屋は三つ。自分で三人に会って、一緒に住めるかどうか説得してください」

事務員が何の挨拶もせず、暗唱した文章のように抑揚のない声で言った。

「でも、三人ともだめだと言ったらどうするんですか？」

「こちらから一緒に暮すよう、どれか一人に命令します。その権限は学校にあります」

感情が全く感じられない声でこんなことを言われて、イアソンは怖くなった。

「それだと、最初から二人とも不愉快な思いをすることになりませんか」

「不愉快でない共同生活などあり得ないからいいのです」

もう何も言い返せない。三人の部屋番号と、学校の敷地の地図、寮の見取り図を渡された。事務員は用事があると言って、彼を放置して奥に消えてしまった。

廊下は暗く、空気が淀んでいた。季節は夏で、気温は三十八度を超えていた。灰色の、歩けばどうでもいいというような、何の装飾もない廊下。まるで牢獄のようだ！あの館の二階でさえ、暗くて暑かったが、こんなに不快ではなかった。

とにかく、部屋の主を探さないと、今日は宿なしになってしまう。歩き出そうとした時、何かが見えた。

頭の上に船を乗せた、人のよさそうな、メガネをかけた男の姿だ。

これから出会う人間か？

何者だ？

どうして頭に船が乗ってるんだ？

敷地内の地図を見ると、図書館が近くにあるではないか。寮のすぐ隣だ。数分でたどりつけるだろう。

出よう。とにかく、ここを出るんだ。

出口を探す。このよんだ空気の中には一秒たりともいたくなかった。

ようやく外に出た時、言葉に言い表せない解放感がイアソンを包んだ。日差しが強く、寮の中より気温が高いはずなのに、空は雲ひとつなく、風があった。

いい天気だ！

道をまっすぐに歩く。すぐに図書館にたどりついたが、あまり天気が良かったので、本当はそのあたりを歩き回ったかった。

しかし、すぐに部屋の問題を思い出し、気分が暗くなってしまった。三人のうち一人を探し出して、説得しなくてはいけないのだ。それに、来週はさっそく学年を決める試験がある。このことは、列車の中で会った、同じ学校の生徒だという少年に聞いたのだが、イアソンはこの少年が好きになれず、できれば二度と出会いたくないと思っていたのだった。やたらに卑猥な話ばかりしてきたからだ。た。彼が話したがっていたことといえば、『女と寝たことはあるか？』『どうやって彼女をベッドまで誘い込むか』そんな話題ばかりだった。ミス・ベリルのこともあってか、彼はこういう話を極端に嫌った。

暗い気分のまま図書館に入る。受付にはだれもいなかったが、異常なほど冷房がきいていて、寒気がするほどだ。閉館しているのかと思うくらい人気がなかったが、奥の棚の近くの席に、何人か読書中の生徒が見えたので、そのまま奥に進むことにした。

ヘレンが持っていた本がどこかにあるんじゃないかな？

『女神像に頭を割られる』という夢を思い出した。しかし、夢で見

ただけのおぼろげな表紙の色だけで、この膨大な本棚から一冊を割り出すのは、不可能に思える。

「サルマニャ・レゾリカ号は、アケパリの南方三百キロメートル、管轄区エスタリカ東方百七十メートルに沈んでいるが未だに引き上げが成功せず……」

本棚の裏から声がする。イアソンはその声を知っていた。いや、今知ったのであるが。

この声はさっきの『船を頭に乗せた男』だ！

鼓動が速くなるのを感じながら、本棚の裏に回る。

そこには大きなテーブルが3つあり、それぞれに椅子が8個ずつついていた。そのうちのいくつかには人が座っていた。窓から晴天の光が差し込んで、静寂の中に輝いていた。

「個人で潜水調査を進めてきたリサ・シュタイナー博士や、アケパリのアツシ・キリノ博士ら、関わった人物は次々と、発狂し、暗殺され、病に倒れ」

ぶつぶつと本を朗読しているのは、赤黒いしわだらけのスーツに、これまたしわだらけの白いシャツ、折れ曲がった跡のある縞模様のネクタイという、丁寧なのかぞんざいなのかわからない服装の、赤毛の少年だった。小柄だけでも、イアソンよりは年上に見える。茶色の、ぶあつい縁の眼鏡をかけ、手に持っている本には、古風な、昔話に出てくるような、大きなマストのついた船が、載っていた。

「船に積まれていた当時の王宮の調度品、黄金、数々の宝石が、それでも人々を魅惑しつづけ」

「宝石なんてくだらない！」

イアソンは自分の大声に驚いた。そんなことを言うつもりはなかった。

本を読んでいた数人が顔を上げてイアソンのほうを見たが、すぐに無視するように顔を手元の本に戻した。

例の少年は朗読をやめ、本から顔を上げて、イアソンを薄い茶色の目で見た。

顔には、警戒と好奇心が、同時に現れていた。

「僕が興味あるのは船だよ。宝石じゃない」

平坦で穏やかな声が、静かな館内に響く。

「ごめん、声に出すつもりはなかった」

「君、学年は？」

一瞬責められているのかと思ったが、少年の顔に浮かぶ好奇心を見て取ったイアソンは、たぶん怒ってはいないだろうと判断した。

「まだわからない。今日ここに来ただけだから。来週試験があるんだ」

「来週……？」少年が記憶を探るように目を上に向けた「もし君が編入試験を受けるんだったら、それは来週じゃなくて、明日だよ。今休暇中で、あさってには職員がいつせいにいなくなるんだ。だから来週なんてありえない」

「えっ」

「あーあ、君、だまされたんだ」赤毛の少年が同情するように言った「試験の正確な日付は、事務に確認しないとだめだよ。この生徒はみんな嘘の日付を教えるのさ。それで相手が試験を受けられなかったら、自分の勝ちってわけだ。気をつけたまえ」

「でも、彼もこれから学校に入るって言ってたぞ」

「それも、よくあるだまされ方。僕がここに来た時もそうだったよ。実はそいつは上級学年の小柄な男で、新入生を突き落とすのが趣味なんだ。僕は学校の事務に確認したから助かったけどね」

「君を信用していいのか？」

「疑いなよ。構わない。それくらいじゃないとここでは生活できないよ。今すぐ、学校の本部の二階にある事務所に行くんだね。僕ここにいるから、誰が正直か確かめるといいんだ」

イアソンは図書館を飛び出し、地図を見ながら事務のある、敷地内で一番大きな建物（つまり学校の校舎）に飛び込み、事務に走って事情を説明した。事務の職員は寮の職員とは違い、にこやかに対応し、てきばきと日程を確認すると、印刷してイアソンに渡してく

れた。

船の少年が正しかった。編入試験は明日の午前中だった！

ふらふらと図書館に戻ってきたイアソンを見て気の毒になったのか、赤毛の少年の声は慰めと同情に満ちていた。

「よかったじゃないか、ぎりぎり間に合って。そんなに落ち込むんじゃないよ」年長ぶった話し方だ「きみ、イシュハ人じゃないね」

「ポートタウンだよ。管轄区側に家がある」

あれを家と呼んでいいんならな！

イアソンは館のことを思い出してそう叫びたくなった。疲れてイライラしていた。

「管轄区側。だろうね、そんな気がしたよ。君、生活感なさそうな外見してるもの。イシュハ人はね、表面的にどんなに立派そうでも、顔つきに出るんだよ、俗っぽい、文化のない生活が。発音もイシュハと管轄区じゃ、違うよ。それとも、ポートタウンは統一してたかな？」

「発音？」

「これ、何て読む？試験に出るよ？」

赤毛の少年がスーツのポケットからメモと鉛筆を取り出した。かなり傷んでいるところをみると、しょっちゅう何か書きこんでいるのだろう。

メモにさらっと何か書いて、差し出す。そこには『J E D E S K A』と書いてあった。

「ジェデスカ？」

「違う、イエデスカ。北のほうにある町。イシュハではJをイと読む。これは？」

今度は『Z E R N I T』と書いてあった。

「ゼルニット？」

「ツェルニット」赤毛の少年はため息をついた「イシュハご自慢の空母の名前。僕はああいうのを船とは認めないけどね。それはともかく、イシュハと管轄区は同じ言葉を話すけど、発音が結構違うん

だよ。それに、外国からの移民が多いから、人名はもっと複雑で……」

少年がなにかまた書いた。『TOUSSANT MAJOUR』
「読める？」

こういう試され方にはイアソンはうんざりしたが、もっとうんざりするのは、その二つの単語の読み方が、全くわからないということだ！

「トゥ……何？」

「トゥーサン・メイヨール。僕の名前だよ、祖父と同じ名前なんだけど」少年がまた何か書いた、そこには『RONHART』と書いてあった「ロンアル。イシュハ風に読むとロンハルト。これが僕ら一家の故郷で、ロンハルトではHと最後のTは発音しない。まあ、トゥーサンが呼びずらいから、みんなテリーって呼ぶけどね」

テリーが立ち上がって右手を差し出し、笑った。

「イアソン……ウェストン・アンシューン」イアソンは喜んで少年の手を取ったが、突然自分の名前が恥ずかしくなった「語呂が悪いけど、これには深い理由があるんだ」

「イアソン」テリーがメモに書き込む「部屋は決まった？」

「いや、これから一人身の男を説得しなきゃいけない」

「目の前にいるじゃないか。話が早い。ほかの二人は最悪だから僕の部屋がいいよ」

「ほんと？……最悪ってどんな？」

イアソンは内心大喜びだったのだが、あまり子供だと思われたいなかったたので、まだ決めかねるね、という感じで冷静に尋ねた。

「一人は十八にして酒乱。アル中さ。もう一人は女気違い。女子寮から定期的に何人か通ってきてるっていう噂。もう一人は船マニア」
「最後のでもいいよ」

イアソンは酒乱も女気違いも十分見過ぎていたから、即答した。「じゃ、ちょっと待っててくれたまえ」テリーが偉そうに言った「この本、借りる手続きをしてくるから、最近コンピューター処理に

なつて係りの人がいなくなつたから、かえつて面倒なんだよね」

本を抱えて走り去るしわだけのスーツ姿を見ながら、こいつとは長い付き合いになるな、とイアソンは感じていた。

なぜなら今、大人になつたテリーと、彼の太った妻と、小さな娘の姿が、イアソンには見えたのだ。

2-10 ヘレン レーナ ケレス カナデ 女子寮

一週間後の日曜日。

「イシュハは核兵器の誤認使用、その結果としての実験失敗、それによる崩壊大陸の汚染の放置、被害者の受け入れにおける年齢制限など、常に無責任です。兵器の保管、使用方法についてもモラルに欠けており、数年前のロンハルトの空爆、その後の侵攻にはなんらの正当性もありません」

部屋でしゃべっているのはカナデ・アンジである。夏休み中だが、暇なので文章の練習をしていたのだった。ただしケレスとカナデだけ。ヘレンとレーナは傍らでそんな『奇怪な趣味』の二人を眺めているだけだった。

季節は真夏だが、部屋はクーラーの効きすぎで寒い。

「ねえ」ヘレンが好奇心いっぱい目の目で隣のレーナに向かった「どうしてあんなにはっきり意見を言える人が、いつもは、へろへろした話し方になるの？」

「外国人なんだからしょうがないでしょ？イシュハ語ってアケパリ人には難しいんだって。ああいう難しい文章のほうが、話し言葉より楽しいよ」

「普段も今くらい正確にしゃべってほしいものだわ」

ケレスが皮肉っぽくつぶやいた。

「それはあーむづかしーのだ」

「ああ、戻ったわ」レーナが笑った「みんなでポートタウンにでも行かない？私買うものがたくさんあるの。一人で持てないから手伝ってほしいんだけど」

「いいわよ、でもあと十分待つて」ケレスが手元の新聞をめくりながら言った「カナデ、その正当性とか、武器の使用方法を具体的に言わないとだめ。イシュハ政府の主張としては、ロンハルトの王制は現代における最古の搾取制度であり、国民を抑圧しているがゆえ

に」

「民主主義を言い訳にした、他国の文化の否定と破壊ではないのか」
「その文化、というのは？人を抑圧するような風習や強制が文化と呼べるのか？文化という言葉の定義が必要だわ」

「ねえ」レーナが大きくため息をついた「先に私たちだけ行つていい？今九時でしょ？十二時半にポートタウン駅の南口で待ち合わせね？」

「いいわよ」

「わかったーよ」

二人が新聞から顔を上げずに同時に返答した。

「行こうヘレン。今なら、十時半の映画が見れるかも」

「うん」

ヘレンはレーナと一緒に部屋を出たが、本当は二人の話をもっと聞きたかったのだ。全く自分には関係のない話題だけれど。

でも、ほんとうに関係がないのかしら？

歩きながらヘレンは思う。

ロンハルト空爆の決定を出した時、この国の大統領は誰だったか？
そんなことは考えなくても分かる。

「本当に変なの、あの二人」レーナが伸びをしながら言った「でも真剣だよ。二人とも政治家志望で、国がイシュハとアケパリでしょ？」

「イシュハとアケパリのどこが大変なの？」

「今は同盟国だけど、いつまた敵同士になるかわからないって」

「どうして？」

「さあね、でも、カナデも同意見らしいわ、アケパリの国内には反イシュハの勢力もあるんですって。あの二人、常にお互いが敵に回った時を意識して一緒にいるの。だからすごく真剣だし、時々怖い」

「すごいよね」

「しかも二人とも上級3年だし。来年一気にカレッジに進んでしま

うかもね」

「ふうん」

たいして興味がなさそうな返答をしたヘレンだが、実はほんとうに感心していたのだった。

どうしてそういうことに真剣になれるんだろう？

2-11 ヘイツキ登場

イアソンは、買ったばかりのイシュハ文法書と発音表を眺めていた。編入試験はあっさりと終わったが、結果はまだ分からない。ただ、将来に関する質問にうまく答えられず、試験管の失笑を買ったのが未だに忘れられないのだ。

「気にすることないさ、あいつらはいつだって人を笑ってるよ」

「わかってる」

イアソンも本から目を離さずにつぶやく。

最近気がついたのだが、彼は未来の事は予知できても、それが『どうして起こるか』がわからないのだ。たとえば、どうしてミス・ベリルが彼のところへ現れたか、（あるいは、どうして彼と別々に暮らしていたのか）がわからない。弁護士になっている自分が見える、でも、どうして弁護士なのか分からない。ヘレンがパートナーだという確信はあるが、どうしてヘレンなのか分からない。

そしてあの恐怖の夢。『朽ちた手』の夢。

どうしてあんなことが起こるんだ!?

部屋は暑い。うだるように暑い。窓は開いているが風が入ってこない。普段は図書館に涼みに行くのだと、最初案内された時テリーが言っていた。

「暑いのも寒いのも慣れてるよ」

イアソンはそう答えたのだが、彼が育った街は、冬は極寒だが、夏はあまり気温が上がらなかったため、やはりこのアルターの高温にはまいていた。

それでも部屋から出る気にならないのは、外に出てもだれもいないからだ。

休暇中は、普通の生徒は自分の故郷に帰ってしまう。残っているものはたいてい『一人になりたい』人間ばかりだ。仮にイアソンが図書館で誰かに話しかけたとしても（実際彼は目が合うとだれにで

も話しかけた）たいてい、不愉快そうに逃げてしまうのだった。

つまり、テリーに出会ったのは奇跡だった。彼は年末年始だけ、内陸の山奥にある家に帰るのだという。それ以上は話したがらなかった。イアソンも無理に聞く気はなかった。

ドンドン、とドアをたたく音がした。

「テリーはいるかな？」

「いるよ」

模型から目を離さずにテリーが答える。

「ノレーシュ語の判定試験、いつ？」

「あさつての二時、事務の確認」

「音楽部のコンサートは？」

別な声が聞こえる。

「今夜の夜七時。事務にも確認しなよ」

声がやんだ。こんな質問をしにやってくるものが大勢いて、そのたびにテリーは、手元の船から目を離さずに、正確に答える、ただし『事務に確認しろ』と付け足すのも忘れない。

「何でも覚えてるのか？」

「何でもじゃない。試験とか、イベントの日程だけ。事務に確認しろって言ってるんだけど、なぜか僕に聞きに来る」

「テリー」また外から声「いるんなら開けてっ」

なんだかずいぶんふざけた口調だな、とイアソンは顔をしかめた。

「カギ開いてるから自分で開けて入りなよ、ヘイッキ」

「また船様の整備？おや？」入ってきた男がイアソンに気付いた「新しい人？」

「そうだけど」

イアソンは入ってきた男に不快感を覚えた。背がひよろりと高く、姿勢が悪いのか背中が前に傾いていて、もとは白かったと思われる、半ば変色したシャツとよれよれのジーンズを着ていた。肌は焼けたのか浅黒く、目も髪も真っ黒だ。大きな鼻と不釣り合いな小さい口。ひげがだらしなく伸びてその口を隠している。目はぎょろりと大き

く、まるで獲物を探しているようだ。それは明らかに、別世界の人間の顔だった。

どこかで見たような顔だな？どこだ？夢か？

「ずいぶん顔色が悪いねえ、病み上がり？」

男が外国語なまりの声で言った。イアソンは、どこかで同じなまりを聞いたことがあるような気がしたが、どこだったかは思い出せなかった。

「しばらく飢えてたんだよ」

ヘイツキの声が軽蔑を含んでいたので、イアソンも強く言い返した。

「あーら、それじゃ君も外国からの難民？仲良くなれそう」

「俺は難民じゃない！」

「あのさー」テリーが振り返って、模型の部品を持った手を振りながら言った「細かい作業中にケンカしないでくれない？」

「もうすぐできそう？エクレシアノスタルジーナケラックメナ号」

ヘイツキが尋ねた。イアソンは、ヘイツキがこのややこしい船の名前を覚えていることに驚いたが、無視して本に視線を戻すことにした。

「あと数日だね」

「へえ。そうそう、ビッグニュースがあるわけよ」なぜか声をひそめてヘイツキが言ったとても楽しそうだ「大統領のお嬢様がわが学校にやってきたって」

イアソンが驚いて振り返ったが、テリーもヘイツキも船のほうを見ているので顔が分からない。

「あの大統領……あんまり好きじゃないなあ」テリーが頭をかいた「それで？」

「レーナと同室になったらいいのよ」

「レーナ」テリーの声が弾んだ「ちょうどいいじゃないか。彼女、面倒見がいいから。どんな子？お嬢様は」

「なんかぼけーつとしてるのよ。心ここにあらずって感じね。さっ

き一緒にポートタウンに行くって、駅に向かって歩いてたところに偶然会ったわけ」

「ほんとに偶然？ 見張ってたんじゃないの？いつものように」

「いつものことなんだからぐちゃぐちゃ言わない、言わない」ヘイッキは軽い冗談のように言った「話しかけても、喋らないんだな。社交的じゃなさそう。ただ、目が変わった色なのよ。オレンジ。レーナがほめてたよ。きれいな目だって」

そうだ、ヘレンはオレンジ色の綺麗な目をしている。イアソンは誰よりもそれを知っている。

「レーナならそうするだろうね。もちろん。学年は？」

「それがけっこう頭いいのよ。君やレーナと同じ、上級2」

「ふーん」

テリーはあまり興味がなさそうだったが、イアソンはあわてていた。

そんなに上？

ちなみにこの学校は、初級が3年、中級2年、上級が3年ある。

「ところで、その好奇心いっぱい難民君は、何が知りたいの？」

ヘイッキが突然、イアソンのほうを向いてにやりと笑った。イアソンは真っ赤になって顔を本に戻した。

「人を難民呼ばわりするなよ。俺はポートタウンから来たんだ」

「それじゃ純粹に都会の人なわけ」

ヘイッキがイアソンに近づいて、左手で彼の肩たたいた。イアソンは顔を上げたが、できるだけ本心が顔に出ないように、と願った。ヘレンが近くにいます！

「何だよ？」

「まあまあ、さっきの無礼は許してよ。おれっち、なんでもおちゃらかさないと生きていけないのよ、なんせ苦勞人だから」

「もういいよ」

「人生はすべからく地獄ってね」ヘイッキが芝居のせりふのような、本気だか冗談だかわからない声で語り始めた「おれっちなんて、生

まれ故郷はなんだかわからない爆弾で汚染されて国ごと吹っ飛んじやったし。親も死んだし、ようやく入った学校はこんな灼熱の下、クーラーもないわけよ。ちなみに、敷地の反対側にあるいたいけな女性寮と、はるか北にある金持ちの坊ちゃん方が入るでかい寮には、クーラーも売店もカフェもあるわけよ。知ってた？」

「それは初めて聞いたな」

国ごと吹っ飛んでなくなった、なんて話を軽く、自慢するように話すヘイッキを、どうしてもイアソンは好きになれない。しかし、

『お嬢様』の話が聞きたいとも言えなかった。

「この学校自体がイシュハの階級社会を表しているわけ。そのトウーサン・メイヨール君も大変だったのよ、ロンハルトの反乱の時変な連中に部屋を荒らされて」

「そんな話はしなくていいよ」

テリーが珍しく大声で言った。

「悪い悪い、話が脱線した。それよりね」ヘイッキが意味ありげな笑いをイアソンに投げかける「あのミス・ベリルのご子息が、なぜかこっちの寮にいるって聞いたんだけど……キヤッ！」

イアソンはヘイッキを両手で突き飛ばし、部屋を飛び出した。

後ろからかすかに「お前が悪い、ヘイッキ」というテリーの声があった。

2-12 ヘレン レーナ レフレリータ通り

ヘレン、どこに行ったのかな？

ポートタウンのイシュハ側、メインストリートであるレフレリータ通りで、レーナはベンチに座って、ヘレンが戻ってくるのを待っていた。映画が予定より早く終わったので、別々に買い物をして、この通りのカフェのベンチで待ち合わせたのだが、時間を過ぎても戻ってこない。

そろそろ駅に行かないと、ケレスたちが来る。

レーナは立ち上がり、ヘレンのいそうな場所を探すことにした。まず、本屋だよね。

レーナは日曜日の、絶え間なく道を埋め尽くす通行人の間を、すり抜けるように進み、大きな本屋に入った。

「すみません」目に入った店員に尋ねた「大きな帽子をかぶった、髪の毛の長い人を見ませんでしたか？私の友達なんですけど」

「長い髪……腰まで長い髪で、白いロングスカートの子？」

「そうです」

やっぱり目立つんだなあ、あの格好、とレーナは思う。

「さっきアケパリ語の本を買って、出て行ったわ」

「本当ですか？ありがとうございます」

レーナは外に出ながら思う。アケパリ語？カナデに言えばいくらでも持つてるじゃない。それとも本格的に勉強する気？

次に行きそうなところ……宝石店？ジュエーストーンの店？この通りにはないわ。そこまで行ったら待ち合わせに遅れてしまう。

レーナは汗をぬぐいながら時計を見た。もう十二時になる！

携帯電話を取り出したが、ヘレンが携帯電話を持っていないことを思い出した。

ああ、どうしよう。どうしてあの子、携帯持とうとしないんだろう……？

最初に会った日に携帯電話の番号を聞いたら『電話は嫌い』と一蹴されたのだった。

あたりを見回す、ヴィンテージジーンズの店、ファーストフード、違うわ。ミュージックウェイブ……音楽はどうだろう？

レーナは入ってみることにした。暑くて、これ以上外にいたくなかった。そしてヘレンは入ってすぐ見つかった。

試聴コーナーで、ヘッドホンをさかさまに耳に当ててしっかりと握りしめ、とても幸せそうな顔で、目を閉じて何かに聞き入っていた。

……あんな顔、始めて見た。すごくかわいい。

ヘレンは白い頬をうすくピンクに染めて、口元には自然な、リラックスした笑いが浮かんでいた。レーナは、ヘレンがまともに笑っているのを、初めて見たような気がした。

じゃましちゃ悪いけど、もう時間がない！

「ヘレン」

レーナが声をかけると、ヘレンが目を開いた。笑いが顔から消えた。

ヘレンは『あなた、だれだっけ？』という顔でレーナを見た。

「いいところ邪魔して悪いけど、もう時間がないよ。駅に行かないと」

「これだけ買ってきていい？」

ヘレンは今聞いていたらしい、ロンハルトのピアノ曲のCDを指差した。

「いいけど、急いでね」

ヘレンがレジに走って行った。レーナは、携帯のカメラでさっきの顔を撮っておくんだったと思った。

そういえば、カナデがアケパリのデジタルカメラを安く売っていたような……

ヘレンを追ってレジに近づいたレーナは、あっと声をあげそうになった、ヘレンが支払いに使った金色のカード。

あれって、使用無制限のカードじゃない！？お金持ちしか持っていないはず……。

レーナはなぜか気を引き締めた。あんなぼんやりした子がこんなものを持つてたら、変な人に悪用されるかもしれない。本人も無駄遣いするかも。気をつけなければ。

2-13 イアソン テリー 図書館

イアソンはアルターの駅に向かうとしたのだが、行ったところではないか、と思い直した。あまりにも暑かったので図書館に行った。テリーに会った日よりさらに人が少なかった。

ありったけの、探し出せるだけの、過去の雑誌や新聞のストックを引っ張り出し、イアソンは『エブニーザ』と『ミス・ベリル』という名前を探した。出てきた記事はどれも、目をそむけたくなるようなものばかりだった。特に、管轄区の新聞はどれも悪辣で、そこに書かれた記事からイアソンは、エブニーザという人間がどれだけ『常識に外れた儲け方』をし『女神の存在を公然と否定し』『他人の利権を巧妙に奪い』『関わった人間を次々と死に追いやり』そしてどれだけ『恨まれているか』確認した。

そして死亡記事。何者かに撲殺されたと報じている新聞があるかと思えば、通り魔に刺されたとか、取引先で撃たれたとか報じているものもある。どれもそうくさい。管轄区側の新聞記事は、まるで呪われた悪魔に解放されたかのような、祝いのような歓喜に満ちた文体で彼の死を報じていた。

イシユハ側の新聞はもっと冷静だ。経済市場における影響力だとか、新しい価値観をもたらした人間として彼をほめてはいたが、それでも、何か面白いことが起きた、という文体だ。

イアソンは全ての新聞を乱暴に、たたきつけるように元の場所に返し、椅子に倒れこむように音を立てて座り、机に前のめりに突っ伏した。

まさか、ここでミス・ベリルのことを聞くとは！

でもどうして逃げだす必要があるんだ？俺は、あの人が世間で言われているような人間じゃないと知っている。

でも、この連中はそうは思っていない。

それに、エブニーザ！

ああ、どうしよう。

シャツのポケットから、ミス・ベリルにもらった『預言者の石』を取り出して眺めた。きらきらと金色に輝く、透き通った丸い石。

あの二人だ。

イアソンは思った。

前の予言者のものだ、これは。

ついこの間まで美しく思えたあの二人の『恋人』が、ほんの数日こちらにいただけで、すでに何か忌まわしい重荷に変わりつつあるのを、イアソンは暗い気分を感じていた。

ミス・ベリルだけならまだいい。イアソンは、性的な話題に集中するミス・ベリルの記事から、一種の羨望を見て取った。かつての愛人の財産をまんまと引き継いで（上手く始末した、などと書いている記事もあり、イアソンはショックを受けた）自由奔放に生きていくリリックことミス・ベリルは、非難され軽蔑されながらも、上流階級の人間として人気が高かった。

イアソンは、エブニーザの死因を確かめるために十五年前の新聞記事をめくっているうちに、気になる文面を見つけた。

エブニーザの死の直後から一年間、リリック・アンシューン（ミス・ベリルの本名）は行方不明だった。全く人々の前に姿を現さず、どこかで死んでいるのではないかと噂されていた。

十五年前。

イアソンは息をのんだ。ちょうど自分が生まれたころじゃないか！

しかし一年後、姿を隠していた彼女が突然管轄区の大聖堂に現れた。布地がところどころ裂けていて体のラインがほぼ丸見えの、かなり『猥雑』『不謹慎』『女神の肉体美』（これはイシユハの新聞記事の見出しである）と呼ばれたドレス姿で。

『女神を信じていなかったエブニーザに習って、教会をからかいに来たに違いない』

と書かれていた。

教会の人間たちは怒り狂い、彼女は大聖堂に入るところか、『破

門』を言い渡された。しかし、世論では逆に彼女の人気は急上昇し、同じデザインのドレスがイシュハで飛ぶように売れた。いつも大きなベリルを身につけているために『ミス・ベリル』と呼ばれるようになった。いった。

驚いたのは、管轄区の貧しい地区に、毎年驚くべき金額を寄付しているという記事だ。そして、全く服を着ず、宝石だけ身に付けた『淫靡な女王』の写真まで発見してしまった。

ああ、見たくない！見るんじゃないかった！！

新聞をまた乱暴に棚に放り込む。

やっぱり俺を生んだのは、あのミス・ベリルに違いない。

でもなんでわざわざ身を隠す必要があるんだ？それに……。

なんであんなひどい男に自分の子を預けたんだ？

エブニーザの事まで人に聞かれたらどう答えればいいんだ？

みんなにとっては悪人なんだ……。

「それ、何？」

声が出た、振り返ると、テリーがいた。メガネが傾いていた。走ってきたようだ。

「ゴールデン……何だったかな？忘れた。預言者の石」

イアソンは『ベリル』という名前をわざと省略し、テリーに箱を渡した。

「へえ。高そうだね。カンイヤスレミフレノー号の紋章に似てる」

「カン……？何？」

「伝説の船の名前。透き通った金色の石が船首にはめ込んであるんだ。魔よけにね」

「魔よけ……」

それにしても、変な人間ばかり引き寄せている気がするが……。

「ヘイッキはもう出て行ったよ。あいつ本当に貧乏だから、仕事してるんだ。アルバイトさ」

忘れていた！彼はヘレンの話をしていたじゃないか！

「大統領のお嬢さんね」

何でもないことのように言いながら、本当は、今すぐにも会いに行きたいと思った。

でもなぜヘレンなんだろう？

「本当なのかなあ？でも、ヘイツキはあれでも真面目だから、まず嘘は言わないよ。ジャーナリスト志望なんだ。でも人の事に頭を突っ込みすぎるね」

「君の部屋が荒らされたってのは？」

「あれね」テリーが苦笑いした「ロンハルトと紛争状態だったときに、僕自身はイシュハ人なんだけど、一応親の代はロンハルト移民だから、いろいろ言われたよ。ある日、部屋に戻ったら、船の模型がみんな木っ端みじんに破壊されてた」

「それはひどいな」

「別に、模型なんて作りなおせばいい。ただね……」

「ただ？」

「何でもない」テリーは『預言者の石』をイアソンに返した「とにかく、何事も気にしないんだよ！」

そう言いながらテリーは足早にその場を去った。イアソンはまた石を眺めながらぼんやりと考え始めたが、ふと、テリーが『ミス・ベリルの息子』や、ヘイツキを突き飛ばした彼の態度について、全く触れなかったことに気がついた。

きっと何か気づいたんだろうな。

イアソンは箱をポケットに戻すと、立ち上がり、外へ出た。

日差しはめまいがするほど強い。

2-14 ヘレン レーナ ケレス カナデ テラスヴォリ

ケレスとカナデは、すでに駅で待っていた。

「カナデの服装が変だわ」

ヘレンがつぶやいた。カナデは髪をまとめて、普通の、水色のTシャツとジーンズ姿だった。ケレスは白い保守的なブラウスと黒のタイトスカート。

「え、どこが？今は普通じゃない？」

「似合わないわ」

「まあ、似合わないかもしれないけど、本人に言わないほうがいいわよ」

「きこえてえーるのだー」

「げっ」

カナデが腰に手を当てて口をすぼませた。

「いまーわー外国人風のかっこうはあーねられやすいーのだ」

「あんた、発音乱れ過ぎよ」ケレスが冷たく言った「早くどこかに入りましょうよ。暑くてたまらない。今日40度越えるって言うってたわよ」

「うっそ！」

レーナが大げさに驚いた。

「その『テラスヴォリ』にしましょ。チョコワツフルが食べたい」ケレスはいつも真っ先に行き先を決める。

三人は意気揚々と先頭を歩くケレスの後について店に入った。店員はきつと、ケレスがこのグループのリーダーだと信じて疑わないだろう。

「ブレンドとチョコワツフル」

席につくなり叫ぶ。これはケレスだ。

「こおりのはいったコーヒーをおねがいします」

これはカナデ。旅行ガイドの棒読みのような発音だ。

「わたしもそれ、お願いします」

レーナははじめてカナデとここに来た時、『氷の入ったコーヒー』がなんのことかわからなかった。コーヒーカップに氷を入れたものが出てくるのだろうかと思ったが、グラスに入ったアイスコーヒーというものが出てきて、それでようやく何のことかわかった。イシユハにはコーヒーを冷やして飲む習慣がもともとなかった。グラスに入れたコーヒーを氷で冷やすのはアケパリとロンハルトだけなのだが、最近観光客や移民が増えたため、イシユハでもアイスコーヒーが出現し始めたのであった。

そして、夏の暑さがすさまじいポートタウンやアルターでは、一般市民も普通に『冷たいコーヒー』を飲むのだ。

「オレンジジュース……」

今にも消え入りそうな声はもちろんヘレンだ。

こういうお店に入ったことがなさそうだなあ、とレーナは思った。

「午前中何してたのよ、あんたたち」

「映画よ！」レーナがケレスに向かって言った「でもあまり面白くなかったのよね。『レンケル』なんだけど」

「あれは監督が豚なのよ」

「ケレスはきびしすぎるーのだ」

「ヘレン、どうだった？」

「寝ちゃったからわかんない。音がうるさかった。どうしてスピーカーなんか使うの？」

数秒の、奇妙な沈黙が、四人の間に流れた。

「……とにかく」ケレスが場を立てなおすように大声を出した「あの監督はだめなのよ。話も単調なら演出も最悪なもの」

「でもそのたんちょうーがイシユハ人はお好みのようにで」

「うるさいカナデ！とにかくあれは駄目なの！駄目！」

ケレスがまとめるように宣言したとき、飲み物が届いた。

話題がカナデの故郷アケパリに移った時、ヘレンがバッグから、買ったばかりの『アケパリの言葉』という本を取り出した。

「あっ！」

「おうっ！」

ケレスとカナデが同時に変な声を上げた。ケレスは手で目を覆って上を向いた。まるで何か悪いものが目に入ったみたいに。

「どうしたの？」

レーナはこういうケレスを何度も見たことがあるので、そのしぐさが『ああ！駄目！』と言っているのはわかった。

「それ、私も使ってたの、だけど」

「まちがーいだらーけよ。ベストセラーのくせーに」

カナデがせせら笑うように言った。

「そうなの？」

ヘレンが口を開いたが、あまり驚いているように見えない。

「文法は間違ってないけど、使えない表現満載よ」

「ぜんぶなおしーてあげたのよ」カナデがヘレンの本を見て笑った

「かしてくればなおすよ。でも一週間はかかーるね」

「お願い」

ヘレンは全く迷わずにカナデに本を差し出した。変な本を買って恥ずかしいとか、そういうことは考えないようだ。

ケレスの時は一週間愚痴ってたね。

カナデはあとで、レーナに小声で囁いた。

「勉強したいなら私も一緒にするわよ。私は学校でもアケパリ語を専攻しているし、カナデにも教わっているのだから」

ケレスがえらそうに言った。つまり、私のほうが上なんですからね！という態度だった。ヘレンはおそらくそんなことには気がつかなかったのだろう。笑って『ありがとう』と、かろうじて聞き取れる大きさの声で、言った。

「それーと、イエンに手紙書いておくれー。私の友達」カナデが突然思いついたように身を乗り出した「彼女、病気で外に出られないからたいくつーなのよ」

「いきなり手紙書くのは無理よ」

「おまえーは半年でかけたじゃないのよ」

「ヘレンはまだ一秒も勉強してないでしょうが！」

「書くわ、勉強してから」

ヘレンが平坦な声で言った。

「なんならイシュハ語でも、ロンハルト語でもいいんだよー。あつちは3ヶ国語ばっちり」

「3ヶ国語？」

外国語に興味があるヘレンは、目を輝かせた。

「すごいロンハルト趣味なの、その子」ケレスがうんざりしたように言った「向こうは文化的なものがお好みらしいですけど、私は政治家ですから」

「手紙書くわ、すぐにでも」

すっかりやる気のヘレンを眺めながら、レーナは『単純な子……』
と思っていた。

「あとで住所わたすーよ。でもこまったことに、イエンは電話もメールも大嫌い、というより、電化製品みんな大嫌い。許すのは車と電卓と時計と音楽だけ。紙に書いてね」

「だからアケパリは原始的だって言ってるのよ」

「イエンだけだっつーの！アケパリは世界最先端のハイテク機器をつくーり」

「わかったってば、二人ともそういう話題は帰ってからにして！」

また政治談議に突入しそうになったので、レーナがあわてて割って入った。

「今日、買うものたくさんあるんだからね！忘れないでよ！」

2-15 イアソン ヘイツキ テリー 男子寮

夏の休暇が終わって、寮に生徒が戻ってきたころ、イアソンはやはり手当たり次第に誰にでも話しかけていた。図書館と違い、寮の学生は話しかけてもそんなに嫌がらなかった。中には、休暇中自分がいかに楽しんだか（あるいは家族と一緒にいかに窮屈だったか）誰かに話したくて仕方がないという様子の生徒もいた。

イアソンは初級3年から始めることになった。教室は十歳くらいの、子供としか言いようがない顔ぶればかりだった。話が合わず、結局、寮に帰ってから同じ年頃の人間を探し出して会話をし、夜更けになったら部屋に戻って勉強して寝る、という生活を続けていた。

イアソンは基本的に、一日に何人かと話をしないと、生きていけない人間だ。

そうやって一カ月経ったころ、面白いことに気がついた。

イアソンはあの、ヘイツキについていろいろな人に聞いてみた。

ヘイツキはあのあと、あまり姿を見せなかった。どんな人間か確かめようと思った。

すると。

「ああ、あのおっさんみたいな、おもしろい男だろ？」

「げっ、あんな汚い奴の話やめろよ！」

という、正反対のどちらかの反応が必ず返ってきた。中には、ヘイツキの滅びた祖国や、その後の彼の苦勞について、同情的に話す人も多かった。

「イッシュハ人として唯一情けないのが、あの核実験の失敗なのだ」ある年長の男がそう言った。国を一つ消滅させたという割には、話し方が軽いなとイアソンは思った。まるで、皿をうっかり落として割っちゃった、そんな軽さで、この人間はヘイツキの故郷の話や、核実験や、空爆や、ドウロソ侵攻の話をする。

そして、もっと面白いのは『いい奴だ』『やな奴だ』『きもちわるい』『おもしろい』という人間ばかりで『ヘイッキ？誰？知らないな』という生徒は一人もいなかったということだ！好かれるか嫌われるか、どちらかで、この学校の全ての生徒に、ヘイッキは知られていた。

知り合いを増やしたくてしょうがないイアソンは、このことに驚き、どうやったらそんなことになるのか調べることにした。

「ああ、あのひげの生えた、二十歳すぎの中級の人でしょ？」

つい最近来たという、同じ学年の小柄な少年がそんなことを言い出した。

「二十歳すぎ？」

「うん。いろいろ苦労して、十代では学校に行けなかったんだって。僕に『君は恵まれてるから頑張りなさいよ』って言ってたよ」

イアソンはこのあと、姿勢の悪い歩き方で寮の廊下をうろついているヘイッキをみつけるやいなや、飛びついた。

「お前、二十歳過ぎてるってほんと？」

「あれ？言ってなかった？おれっちもう二十四歳」

おどけた顔のヘイッキを見る。浅黒く焼けた顔の黒いひげが、小さな口を隠していて、目は喜劇役者のような雰囲気備えていた。確かによく見ると、十代の顔ではない。

「聞いてない」

「驚いた？」

ヘイッキは『やった！おどかしちゃった！』という、おどけた笑顔を見せた。

「驚いた……」

「でもさ、年上だからって、いきなり丁寧な『あなた』みたいな呼び方はやめてよね」

「心配するな！誰もお前にそんな話し方しようと思わないよ！」

イアソンはそう言ってから、自分の横柄さに驚いた。顔には出さなかったが。

「そりゃよかった」ヘイッキは本当にほっとしたようだ「年を聞くとすぐ『あなたさま』よばわりするのがいるのよ。いゃんなっちゃう。おれっち、あの丁寧言葉嫌い」

「ヘイッキは、いくつでここに入ったんだ？」

「今年でちょうど3年目よ」ヘイッキが真面目な顔に戻って行った「年少の最低の一年目から、やりなおしてるの。おれっちそれまで字もうろ覚えだったから」

「そうなのか……」

「一年に2つづつ飛び級してるのよ。勉強家だから」

「へえ」

遅れて学校に入ったことを気にしていたイアソンは、すっかり安心した。

世の中にはもっとすごい人間がいるのだ！

「それより、何でお前、このあらゆる人間に知られてるんだよ？」

「知られてるんじゃないよ。おれっちがみんなを知ってるのよ」

「どうやって？」

「調べ物」

ごく当然のことのようにヘイッキが答えた。

「調べ物？」

「そう、おれっちこういう顔のオッサンだから、だれにも話しかけられないでしょ？自分から話しかけても嫌がる人もいるしね」

イアソンは改めてヘイッキの顔と、全身から発せられているむさ苦しさを見て、最初にヘイッキが部屋に入ってきたときの不快感を思い出した。第一印象は確かに悪い。

「でも、前にね、行方不明の犬の搜索を手伝ったことが合ったのよ。それで、目に入った人間全員に聞いてみたら、みんな大いに興味あり。で、頼みもしないのに、学校中の人を探してくれたわけ」

「それで？」

「犬は見つかった。それで知り合いが増えた。気がついたのよ。みんな、自分に関係のないことには、けっこう寛容」

「どういう意味？」

「いかにも、お友達になりたーいなんてふうに近い行ったら、相手はプライバシーに踏み込まれた気分になるらしいね。逃げていく。だけど、関係のない、たとえば犬の捜索とか、授業のレポートとか、政治問題の資料とか、そういうことには、なぜか引っかけにくれるの。かたいことを勉強している人ってね、誰かに自分の知識を披露したくてしょうがないのよ。質問にはすぐに答えてくれる」

「へえ」

「おれっちジャーナリスト志望だから、今からいろいろ『関係ない資料』を拾い集めてるの。それで、素性も分からないながらも人とはあっさり仲良くなれるわけ。資料とか、ゴシップをネタにしてね。ちよっとおばさん風だけどね……。それと、トウーサン君の船もそうだな。どうしてテリーが女の子にもてるかというところ」

「もてるの？」

意外な話になったな！イアソンは思った。もっとも女性から遠い位置にいるのがテリーだと思っていた。根拠は特にないが。

「もてるというか、安全なのよ。船にしか興味ないでしょ？間違っても女の子を襲ったりしないだろうって、レーナが前に言ってた」

「レーナ」

ヘレンのルームメイトだ！イアソンは急にヘレンの事を思い出した。

「知らない？女子寮のリーダー。トウーサン君の親友」

「親友なの？」

「テリーはそう言ってるよ」ヘイツキが周りを見回した「おれっちバイト、じゃーね」

ひよこひよことした歩き方で、ヘイツキが急に去って行った。

「余計なことばかりしゃべるなあ」

後ろから声がした。振り返ると、テリーが船の写真の入った大きな箱を抱えて、苦々しい顔で立っていた。

「聞いてたのか？」

「聞いてたよ」テリーが箱を振った「新しい模型。ちょっと最初の木材を張るのが面倒なんだ。手伝ってくれない？」

「いいよ」

二人で部屋に戻る。廊下を歩く間、二人とも一言もしゃべらなかった。

2-16 ヘレン レーナ ケレス カナデ 学校にて

ヘレンは前の学校の記憶が頭から消えず、授業の始まる日が恐ろしかった。でも、前と違い、友達がいるのだ。しかもレーナは同じ学年、同じ教室。

とりあえずついていけばいいんだわ、とヘレンは思った。

そして、全く不自由を感じることなく、新しい学校に溶け込んだ。ここでは、散歩をしても、ぼうつとしていても、ほとんど文句を言わない。

授業中に消しゴムを落とし、前のように座ったまま身体をくねらせて拾おうとした。先にだれかが拾った。それはイシュハ文法の先生だった。

怒られる！

しかし、教師はヘレンに向かって笑いながら消しゴムを差し出し、こう言った。

「落としたものを拾うときはちゃんと立って拾いに行っているのよ。あなた、まるで曲芸みたいに身体を曲げてたけど」

教室がくすくすという笑いに満ちたが、それは悪意のあるものではなかった。

それにしても、レーナって不思議。

レーナはいつも忙しそうに、寮の中をかけまわっていた。だれかが熱を出した。誰かがけんかした。そんな話を聞くと飛んで行ってしまふ。人の世話をするのが自分の使命だとも思っているのだろうか？ヘレンには全くわからない感情だった。そして、レーナは同室のヘレンにはそういう『崇高な行為』を一切強要しなかった。ヘレンが床に寝ているのを見て、最初レーナは驚いていたが、そのうち自分も床に転がって考え事をするようになった。

「これ、使う？」

ヘレンは箱から水晶を取り出して、レーナに渡した。

「使う？どうやって」

「額に乗せるの、それか、具合が悪いところにあてるの」

「ふうん……」

怪訝な顔をしながらも、レーナは水晶を右肩に乗せた。肩が痛いんだそうだ。

そしてある週末には、レーナは、寮の部屋の数と同じだけの、ほうき、ちりとり、シート、雑巾、タオルを持って（夏休みの大量の買い物はこれだったのだ！）前部屋を回ってひととおり掃除していたのだ！新しく来た人間には寮の決まりを説明し、最初からついている家具の手入れの仕方を説明し、『ほこりはこまめに払うように』と指導もする。

「アルバイトよ。みんな掃除なんて真面目にやらないし、中には掃除なんて生まれてから一度もやったことがないなんて子もいるくらいよ。だから学校で経費を出してるの」

「だからってなんであんたがやるのよ！ 私たちまでやらないといけなくなるじゃないの！」

窓を磨きながら文句を言っているのはケレスだ。

「嫌なら帰っていいって言ってるでしょ、いつも」

「ケレスは選挙の点数をかせぎたいーのだー」

床を猫のような姿勢で拭きながら、カナデがにやにやしている。

「うるさいカナデ！」

ケレスが怒鳴ると、カナデは『ひゃ〜』とふざけた声を上げ、床を拭きながら、動物のように四足で走って行った。

夏休みは、4人で掃除をして終わった。

一か月後、もらった金額を4人で均等に分けたのだが、ヘレンは紙幣を渡されても、まるで見たことのない書類でも見たように、きょとんとしていた。

「代金よ！掃除の！」

レーナが大声で言った。それでヘレンも我に返った。

そーっと、こわれやすいものでも持つように紙幣を受け取ると、

ヘレンはすぐにそれを、石の入った箱の底に隠した。

「ヘレン！」レーナが驚いた「そんなところに入れちゃだめ！誰かが見つけてもっていったらどうするの？ちゃんと財布に入れて！……ねえ、どんな財布使ってるの？」

喋っている途中で、レーナははっと思い出した。買い物の時も、カフェの支払いの時も、いつもヘレンはあの無制限のカードを、無造作にバッグから出しただけだった。

ヘレンはバッグを手に取り、中をしばらくごそごそと探ると、やはり、カードだけを取り出した。

「それは、カードよ、財布、こういうの」

レーナは自分の、茶色い革製の財布（母親のお下がりでところどころ擦り切れているが、立派なブランドものである）を手にとって振った。

「もってない」

「えっ」

「ねえ、これどうやって使うの？」ヘレンが箱の底から紙幣を取り出した「カードと違って磁気がないみたいだし」

レーナは、驚きのあまり目を見開いたまま、財布を持ってふりあげた手をそのままに、突然くるりと向きを変えて、廊下に飛び出した。

「ケレス！ケレス！大変！」

火事でも起きたかと思うような強烈な叫び声が、廊下に響いた。

「何よ、うるさいわね」

ケレスが機嫌の悪そうな顔で廊下に出てきて、叫んでいたレーナをにらんだ。彼女は稼いだ金をカナデと二人で数えて、法律書全集を共同で買おうと交渉していたのだ。でも、カナデは新しい翡翠、つまり、『イエード』の指輪を買うつもりだったらしい。

「あんだ、もうたくさん持ってるじゃないの！その首のジャラジャラは何？」

「翡翠は一つに願いを一つだけかけるの！願い事がふえるーと買う

の！」

「そんな金があったら、貯金して別なことに使ったほうが、願いだつて早くかなうでしょうよ！」

「ケレスは宝石の力をわかってない」

「だからあんたは原始的だつて言ってるのよ！」

それでケンカが始まろうというときに、レーナのけたたましい叫び声が聞こえたというわけだ。

「財布！財布よ！」

「財布が何よ？盗まれたの？手に持ってるじゃないの」

叫ぶレーナを見て、ケレスはあからさまに不愉快な顔をした。

「そうじゃなくて、ヘレンよ！」

「ヘレンがさいふおとしたーの？」

何の騒ぎかと不思議に思つて出てきたカナデが言った。

「違ふの！財布持っていないのよ！使ったことないのよ！紙の紙幣！」

「冗談でしょ？いくらヘレンでもありえない」

ケレスはそう言いながら、ヘレンが取り残されているレーナの部屋に向かつて歩き出した。

「そういえば、テリー・メイヨールがあんたを探してたわよ。さつき図書館にいたわ。何か借りたいみたいだったけど」

「あっ！」

レーナは急に思い出した。図書館でテリーと会う約束をしていたのだ！

「ヘレンの相手は私がするから、早く行きなさいよ」

「お願い、ちゃんと説明してね、貨幣経済。具体的に」

「私を誰だと思ってるのよ」

ケレスが自信ありげに笑った。レーナは財布を持ったまま、玄関に向かつて駆け出した。

2-17 イアソン 他の生徒 図書館

遅れた分を取り戻さなければいけない。

イアソンはとりつかれたように、図書館で勉強ばかりしていた。最近、知り合いを増やしたいとも思わなくなってきた。ヘイツキに『友達になりたいと思うほど相手が嫌がる』と聞いたことも影響している。

今日は人が多いな。

新聞が置いてある場所に学生が群がっている。イアソンは理由を知っていた。あの、ミス・ベリルの館にあった『アメシストの女神アニタ像』が、管轄区のシュタイナー・メルケリ社によって発見されたという記事が、どの新聞にも一面に載っていたのだ。女神像はそのまま、管轄区最大の美術館へ送られるという。

「我々イシュハ人の女神なんだぞ、どうしてファナティ教のやつらの手にわたさにゃいかんのだ？」

誰かが年寄りのような口調で叫んでいた。

「いや、イシュハ政府はもう買い取りを申し込んだそうだし、別な誰かが言った。」

「どこに？シュタイナーに？」

「いや、美術館に」

「やつらが手放すもんか！」

「どこで見つかったんだ？」

「公表されていない」

「管轄区の奴ら、自分で盗んで『発見した』なんて言ってるんじゃないか？」

そんな会話が、図書館の中に響いていた。『図書館内では静かに』という決まりを、今日はみんな忘れてしまっているようだ。

そうか、ここはイシュハなんだっけ。

イアソンはあらためてそのことを思い出した。そして、女神像と、

バリー氏とクラハ・メイシンのことも。

あの二人、うまくいかないだろうなあ。バリー氏は敬虔なファナティ教徒だけど、ミス・メイシンはそんなことは信じないんだ。女神とか、水晶とか。

イアソンは、何十年もそこに住んでいたかのように、館の住人の事を思い出した。

「なあ」

誰かがイアソンに声をかけた。イアソンは顔を上げ、自分が数人の、大柄な生徒に取り囲まれていることに気がついた。

「何ですか？」

「君、あの、ミス・ベリルの息子だろ？」

緊張が背中に走る。何で知ってるんだ！？ヘイツキか？

「どうして知ってるんですか？」

「見ればわかるさ。あの悪魔にそっくりだ」一番体格のいい男がわざわざるように言った。周りの男たちも笑っている「愛人の子供ってわけだ」

「だから何ですか？」

イアソンは震える声で言った。一番話題にしたくないことを言われたからだった。

一目見て明らかかなほど、自分はエブニーザ、彼らが言うところの『悪魔』に似ているのだ！

「君、ここに来る前はどんな生活をしてたんだい？さぞお楽しみだったんじゃないか？ぜひ詳しく聞きたいな」

「母親が男を鞭打ってるって、どんな気分？それとも君も？」

男たちがつきつきといやらしい笑い方をした。

イアソンは啞然とした。

こんな恥知らずなことを口にできる人間がこの世にいるのか！？

「別に、普通に暮らしてただけです」

イアソンは、自分の今までの悲惨な生活をすべて写真入りの本にでもして、目の前の男たちにたたきつけてやりたくなった。

お前たちは飢えた事なんて絶対にならないだろうが！生きるために必死になったこともないだろう！

「普通ねえ。あの女と一緒に暮らして『普通』ってのは何だい？」

「普通と言ったら普通だ！」

悲鳴のようなイアソンの声が館内に響いた。女神像について語っていた生徒たち、本を読んでいた生徒たちが、一斉にイアソンのほうを向いた。

彼を取り囲んでいた男たちは、イアソンがうろたえているのが面白くてしょうがないようだ。大声で笑い続けている。イアソンは真っ青な顔で館内を見回す。そこにいる生徒、司書、全員が、何か好奇心に満ちた顔で自分を見ている。ここにいる全員が！

ああ、なんてことだ！みんな勝手に卑猥な想像をしてるんだ！とんでもない想像を！

彼は突然思い出した。ミス・ベリルについてクラハ・メイシンに尋ねた時、大声で笑われたことを。そして、彼女が言った言葉を。『ええ、そうよ、みんなあの人を通して自分を見るだけよ！嫌っているように見えてみんな、あの人イメージが大好きなのね！』

イアソンは急に、恐怖や興奮が引いて行くのを感じた。

冷静に、もう一度、周りを見回す。

ミス・ベリルという記号。それに反応する人々の好奇心。

下品な男たちの顔にあるのは、彼らの欲だ。つまり、ミス・ベリルを話題にしているように見えて、そうではないのだ。自分の興味の向くところに欲望を向けているだけだ！

なんだ、そんなことか。

イアソンは、まるで何も起こらなかったかのように、涼しげな顔に戻り、手元の法律書を探り始めた。刑法だ。ちょうどいい。

「お前ら、女、知らないだろ」

冷たい声でイアソンが言い放った。周りから笑いが消えた。イアソンは困惑し始めた周りの人間を、まるで別人のような目で見ていた。彼自身は気づいていなかったが、それは他人の弱点を知って、

わざとそれを指摘して挑発する顔つき、つまり、あの『ミス・ベリル』の、余裕いっぱい勝ち誇るあの目つきであった。

「人の性癖をどうこう言うのは勝手だが、やりすぎると名誉棄損になるんでね」

そう言うのと、イアソンは周りを無視して本に目を通し始めた。

視界の隅に、テリーと、金髪の、頬のこけた女が入ってくるのが見えた。

「イアソン！ ちょっと手伝ってくれよ！ 海洋調査の資料がないんだ！」

大声を上げているテリーの顔が恐怖に引きつっているのを見て取って、ああ、助けに来たんだな！ とイアソンは思った。

「ああ」イアソンは立ちあがった「失礼」

啞然としている男たちと、館内の好奇心の目を無視して、イアソンはその場を立ち去った。

廊下を抜けて、裏口から外に出る。案内したテリーとレーナ（イアソンは彼女を知っている。ヘレンのルームメイトだ！）を追い越して、早足で歩く。誰とも目を会わせなくなかった。部屋に閉じこもってしまおうと考えていた。人々が自分に示す興味の正体がつかめたが、それは不愉快極まりないものだった。そして、そういう人間を挑発的に見た自分自身も、ひどく汚いものを感じられた。

「イアソン」テリーが後ろから声をかけた「大丈夫だったのかい？ あいつら乱暴なんだ。先月もけが人が出てるんだよ」

「何でもない」イアソンは急に立ち止まり、振り返った。驚いた顔のテリーとレーナがいた「聞いてほしいことがあるんだ。海洋調査より暗い話だけど」

「いいよ」

イアソンの顔つきがあまりにも深刻だったせいだろう。テリーは即答した。

「私、帰ろうか？」

レーナが首をかしげながら言った。

「いや、いいよ。いてくれたほうがいい」

イアソンがそう言ったのは、レーナがどんなに真面目で、同情的な人間か知っていたから、それに、ヘレンとつながりのある人間だったから。でも、ほとんど初対面のレーナのほうは、何で私？という疑問の顔をしていた。テリーも困惑の顔をしている。

2-18 ヘレン 自分の部屋

ヘレンはようやくケレスの『貨幣経済の成り立ちとキャッシュフロー』という長い講演から解放されて、部屋の床に寝転がっていた。難しい話を延々と聞かされたせいで頭がぼうつとしていた。手には先ほど渡された『紙幣』を持っている。紫一色で、細かい模様が入っている。

お金。

こんなもののために、みんなが必死になっているのね。

ヘレンは紙幣をバッグの中に無造作に突っ込むと、ふたたび倒れるように床に横たわった。

私を『お金持ちのお嬢様』呼ばわりする人たちが求めているのも、こんな紙きれの束なんだわ。なんてつまらない。本のほうが面白いわ。

あ、そうだ、本を買うのにお金があるのね。

ふたたびヘレンは起き上がった。くしゃくしゃになった紙幣を取り出し、数えた。

107クレリン。

授業用の文法書の値段を見る。10クレリン。

なんだ、それっぽっちで買えるのか。

本を買おう。ありったけ。

時計を見る、ああ、だめだ、もう6時を過ぎている。

暗くなってきたているわ。ああ、秋なのね。

ヘレンは黄金色に染まる草や葉を思い、そのあとに来る、嫌いな冬を思う。

家には帰りたくないわ！ずっとここにしよう……。

ヘレンは一人きりでそう考えていた。誰にも邪魔されなくて横たわっていられる、この寮の部屋を、ヘレンは既に愛し始めていた。でも、窓の外から、暗くなり始めた空も、木々がざわめく敷地も、

彼女を呼んでいた。
散歩に行こうか。

2-19 イアソン テリー レーナ 本部裏ベンチ

本部裏の林にあるベンチに三人が座ってから、もう数時間経過していた。あたりは真っ暗になっていて、本部から漏れる窓の明かりと、街頭で、お互いの顔が青白く見えた。

「それじゃ、ほんとうにイアソンは」テリーが深刻な顔で言った「エブニーザの息子なんだね？」

「はつきり言わないけどそうなんだ、きっと」

イアソンは下を向いたまま笑った。今までの精神的な混乱を一気に吐き出すように、彼は二人に、これまで起こったことを全て話したのだった。未来が見えることも、貧しい町での生活も、横暴で、今ではほとんどどうでもいいあの父親の存在（でも、本当の親じゃないことをもうイアソンは知っている）隣の老人、死んだ老婆、ミス・メイシンとミス・ベリルが予言通り現れた事。館の幽霊。あの二人。ただし、ヘレンについてと、あの忌まわしい『朽ちた手』については言わなかった。ただでさえ憔悴しているときに、そんなことを話したら、二度と立ち上がれないような気がしたから。

レーナは彼が話している間。落ちつかない様子で両手を合わせて揉みながら『ウッソー』とか『信じらんない』と、いつもの口癖を連発していた。テリーはずっと下を向いて、彼の話に耳を傾けていた。

テリーやレーナ、いや、ほぼイシユハ人全員にとって、エブニーザは別世界の存在だった。管轄区の教会や女神ファナティの信者にとって彼は金の亡者で、悪魔の化身だった。ただし、自由主義イシユハの中には、彼を崇拝する人間が多かった。善人か悪人かは別として、エブニーザは、伝説の主人公だった。既成概念を打ち破り、女神を否定し、伝統にとらわれない癖に魔術的なもの（宝石、植物、薬草、呪術書、音楽）を好んでいる。取引には冷酷だが、友人や家の使用人には異常なほどの愛情を注ぐ。大統領と古くからの親友で、

互いの家に行き来するほど仲が良い。株の乱高下を正確に予測し、莫大な資産を築き、しかも『完璧なまでに妖艶な』愛人までいる。そんな人物像を、だれも見聞きしていた。その伝説の関係者が目の前にいる！

しかも母親がミス・ベリルだ。彼女はイシユハではセレブリティで、ただの成功者なのだ。それなのに破門されたはずの『お堅い管轄区』に頑固に居座っている奇妙な存在でもある。

「でも、その父親って何者なの？遊び人の癖に子供を追い出しもしない」

「こっちが頑として出て行かなかっただけ」

「ひどいね。よく今まで生きてこれたな。奇跡的だよ」

テリーが笑って、拳でイアソンの肩をつついた。

「ちよっと待って」レーナが半分立ちあがるように上を見た「聞いたことがある」

「何を？」

テリーとイアソンがそろって怪訝そうな顔でレーナを見た。

「保育の授業で習ったと思うんだけど、管轄区の貧困地帯にはね、子供を持った貧しい独身者に、生活費を援助する団体があるの。教会がらみだけど。そこに子供を連れて行って、貧しいから援助してくれって言うと、生活資金が出るの。でも、だいぶ悪用されているっていう噂……」

「なるほど」テリーがずれたメガネをなおしながら叫んだ「金が目的か！」

「そのためによその子供を引き取ったのね！最低ね！」

二人がミステリーの話でもするように興奮気味に話すのを、イアソンはぼんやりと聞いていた。

それがあの、父親と名乗る男の正体か。

それだけのために、自分の人生は、こんなにややこしいことになってるんだ！

「でも、あの男に俺を渡したのは誰？」

イアソンが冷ややかにつぶやく。沈黙が三人の中に生まれた。

「何かあったんだよ。事情が。そう考えようじゃないか」

テリーがいたわるように、微笑みながら言った。

「そうね。悪い人じゃないんでしょ、ミス・ベリル」

「まあね」

イアソンは答えながら思った。ミス・ベリルと一緒にいたのは半年のうちの、夕方のほんの数時間だけだ。自分は何をわかっているのだろうか？イアソンは考える。二階で見た幽霊を思い出す。

ああ、何かが起きたんだ。でも何があったんだ？どうして誰もかれも話そうとしないんだ？新聞もそれぞれ違う死因を書きたてて、どれが本当かわからない。何で誰も死因を追及しないんだ？だれも知らないのか？

「似てるな、とは思ったんだけどね。エブニーザに。それに、ヘイツキがミス・ベリルの話をしたときに」

「ああ、そうだ、突き飛ばしたんだ。ヘイツキが言いふらしたのかな？」

「違うんじゃない？」レーナが割って入った「そんなこと気にするヘイツキじゃないでしょう？きっと事務から漏れたのよ。だいぶ前から噂が立ってたわ」

「事務から……」

イアソンはつぶやきながら、ああ、レーナもヘイツキを知ってるんだ、と思った。

「ほんと？僕は聞いたことがない」テリーがレーナを驚きの顔で見た「僕がヘイツキに聞いたのもつい最近だよ？あいつだったら知ったらすぐに教えてくれそうなんだ」

「それもそうね、でも、女子寮はゴシップが好きな子ばかりでしょ？話してたわ、どうしてあんな金持ちなのに息子を貧民だらけの寮に入れるの？って」

「貧民だらけ」

テリーとイアソンが苦笑いした。

「気を悪くしないで、私はそう思っていない」レーナがあわてて弁解した「ただ、不思議だったのよ。あんなにお金持ちだったら新しいほうの寮に入れるはずなのに、下品な子たち、それも女王様の趣味だって言ってたけど」

「ああー勝手に言ってる！」イアソンがわめいて頭を抱えた「もうたくさんだ！」

誰もかれもが勝手に想像を膨らませてわめきたてている！そう思うとそれだけで疲れてしまう。

「ごめん。もう言わない。たぶん教育的配慮だわ。新しい寮にはあなたは向かない。育ちはいいけど偉そうな人ばかりなんだもの。さつきあなたにからんてきた連中もみんなそこよ。同じ年なのにみんなおじさんみたいなの。母親としては当然の配慮だわ。若いうちは苦労したほうがいいのよ」

レーナが健康的に笑った。まだ少女のはずなのに、大人の女のような笑い方だ。

イアソンもつられて笑う。

「それにしても、不思議だな」テリーが街灯を見上げながら言った「ミス、ええと、なんだっけ、迎えに来たほう」

「ミス・メイシン？」

「そうそう。彼女が来るのが見えたなんてさ。しかも僕も」

「船を頭に乗せてた。でも最近ほとんど何も見えないな。競馬も当たらないし」

イアソンはたまに、新聞で競馬の欄を見ていたのだが、レースの結果が見えることはもうなかった。前ははっきり見えたのに。勝つ馬の番号が。

あの老人はどうしているだろう？イアソンは急に隣の老人を思い出した。彼がいなければ今の自分もないのだ。無性に会いたくなってきた。

「必要なくなったからだろうね」

「そうよ！そんなことしなくたって生活できるから！」レーナが突

然、宣言するように厳しい声で言った「賭けごとはだめよ！最近破産する人間多いんだから！私が禁止します！」

イアソンとテリーは顔を見合わせると、同時に笑いだした。

「ちよっと！笑い事じゃないでしょ！」

むきになって怒るレーナの声に、二人はますます激しく、手足をばたつかせて笑った。

2—20 ヘレン ハイッキ 夜の学校

学校って不思議。いろんな人が集まるのに、みんな帰ってしまうと静かなのね。

夜八時。

ヘレンは外に出たくなって、寮から、教室に向かった。だれもない教室。前の学校では送り迎えがあって、遅くまで残ることはなかった。

玄関も廊下も、がらんとしている。いくつかの部屋が、サークル活動に使われているのか、まだ明かりが灯っていた。でも、この時間、ほとんどの部屋は暗い。

ヘレンは、昼間自分がいた教室に向かった。

あら？ かすかに光ってるわ。

中を覗くと、教室の真ん中の席に、男が一人座っていた。机に古臭い大きな懐中電灯を置いて、必死に鉛筆を動かしていた。

こんな時間にこんなところでお勉強？

でもあれ、誰かしら？ 学生にしては……老けてる。

ドアを半開きにして中を覗いていると、男が顔を上げた。口髭の生えた、コメディの主人公のような面白い顔の男が、ヘレンに気付いたのか、目を大きく開いた。

「あら、シュッティファントのお嬢様じゃない」

「お嬢様じゃないわ！」

ヘレンが神経質な叫び声を上げた。

「失礼。ええと、ヘレンだ。この前会ったよね。レーナと一緒に」
「覚えていないわ」

「じゃ改めて」男が立ちあがった「おれっち、ハイッキ・ストロンベリ。ゲルトリーズ人」

「ゲルトリーズ」逃げようと思っていたヘレンは、その名前を聞いて気が変わった「あの、滅んだ国の人なの？」

ゲルトリーズ、バカなイシュハが核実験で消滅させた国。美しい海岸の国。

「そうなの。難民なの。だからこんな年になって中級2年」

「まあ！」私より下の学年だわ！「ゲルトリーズ語はわかる？」

「うーん、難しいなあ」ヘイッキは真面目な顔で頭をかいた「物ごころついた時には別なところにいたのよ。一人でまねっこイシュハ語をしゃべってた。母国語も勉強しなおしてるけど、かろうじて本が読めるくらい」

「本が読めれば十分だわ」

外国語の最初のゴールは本、そうヘレンはどこかで読んでいた。ヘレン本人も多くの外国語を勉強していたけど、一番得意なノレーシュ語でさえ、本が読めるだけで話すことはできない（もっとも、母国語でさえヘレンはまともに人の目を見ながら会話ができない）

「そうね、滅びた国の言葉で誰も会話なんかしない。生き残りは散り散りになっちゃった」

ヘイッキが皮肉めいた声で笑った。

ヘレンは心配になる。

きつとイシュハを恨んでいるに違いないわ。だったら私も憎まれるに決まってるわ！

「そういう意味で言ったんじゃないわ」

「わかってますよ」気にしない、と言うようにヘイッキが片手を振って見せた「こんな時間に学校で何してるの？忘れ物？」

「散歩してたの」

ヘレンが教室に入って、ヘイッキに近づいた。自分から、何かを突き崩したいと思ったのだ。それが何かはわからなかったけれど。

「不思議だわ。昼間あんなにうるさいのに、夜になるとこんなに静かで、美しいほどだわ」

「美しい」ヘイッキが何かを探るように教室を見回した「そりゃ初めて知った」

「あなた何してるの？どうしてここの電灯をつけないの？」

ヘレンはこの、年長の奇怪な男にまるで警戒心を覚えなかった。遠くから来た友人に話しているような口調で、何気なく、尋ねた。先ほど感じた、恨まれるのではという心配も、消え始めていた。少なくともこの髭面の男からは、何の悪意も感じられない。

「お勉強ですよ。夜はサークルで使う教室以外は節電してて、つかないのよ、電気。それに、おれっちの寮の部屋、地下にあるの。空気が悪いのよ」

「地下？」

「おれっち一人が好きだし、相部屋嫌だし、安上がりになりたいから地下とか屋根裏はないのって聞いたの。そしたらほんとに10クレリン一枚で地下に決定。夏暑く冬寒い」

「紙幣一枚でそんなことができるの？」ヘレンは昔読んだ童話の主人公みたい、屋根裏に行きたいと思った「女子寮にも屋根裏か地下室があるかしら」

「あそこはご立派な近代建築だから、そういうのはないと思うな」

「つまらないわ」ヘレンが心底つまらなさそうな顔をしてつぶやいた「いつまで勉強するつもり？」

「十二時まではするよ」

「そんなに？」ヘレンが目大きく見開いて驚いた「疲れないの？」

「疲れる。だから深く眠れるの。そして朝早く起きれる。アルバイトに行けるよ」

「遅く寝るのに早く起きれるの！？」

そんなのって奇跡だわ！毎日十時間以上眠っているヘレンはほんとうに驚いた。どうしてそんなに起きていられるんだろう？疲れないんだろう？

「おれっち頼るもんがないのよ。自分だけが頼み。だから勉強してるのよ」

ヘイッキが本を振った。ヘレンが覗く『スカルテツケリ時代の偉人』

「この本、読んだわ」

「ほんと？」今度はヘイッキが驚いた「もう絶版になってるらしいのよ。誰も知らないと思ってた。次の巻は見つからないし。図書館にも見当たない。この時代だけ歴史が空白になっちゃう。ほら、イシュハって女神を否定していた時代が百年くらいあるじゃない？管轄区と戦争をするずーっとずーっと前、国家として成立してない古代のちよつと後に。おれっちその時代のレポート書いてるの、この時代の、歴史の宿題ね」

「私持ってるわ、全巻」

「ほんと？」

「貸してあげる！持ってくるわ！待っててね！いなくならないでね！」

ヘレンが叫びながら駆け出した。

「十二時までここにいろよん」

ヘイッキがふざけた声で叫んだ。

2—21 ヘレン イアソン レーナ 道へ女子寮

ヘレンがヘイッキに本を渡して、寮に帰る途中。

すっかり暗くなった道に、誰かが、立ちはだかるように道の真ん中に立って、こちらをじっと見ているのに気がついた。

「ヘレン？」

男の子の声だった。ヘレンが驚いて立ち止ると、声の主がゆっくりと歩み寄ってきた。暗くて顔が良く見えない。

「ヘレン、ヘレンだ！」男がうわごとのようにつぶやいた「やっと見つけた！」

相手は喜んでいようだったが、ヘレンは恐怖を感じて、一歩後ろに下がった。

この人、何？

そう思った瞬間、相手が飛びかかってきた！

「やめて！」

ヘレンは相手をつきとばして、道を走りだした。

何なの！怖い！

「待って！」

後ろから声がする。

やだ、追いかけてくる！

必死で寮の中に飛び込み、廊下を全力で走る。

「ヘレン？」

ちょうど食堂から出てきたレーナにぶつかりそうになった。

「どうしたの？」

「だれかが」ヘレンが肩で大きく息をした、顔が真っ青だ「とびかかってきたの」

「えっ？」

レーナの顔に恐怖が走った。何それ？痴漢？通り魔？

「追いかけてきたからまだ外にいるかも」

「部屋に戻ってて」

レーナはそれだけ言うと、玄関に向かって走って行った。
窓から外を覗く、そこにいたのはなんとイアソンだ。

「何をしているの!？」

レーナが窓から叫ぶ。イアソンがレーナのほうを向いた。困り果
てている顔だ。

「ヘレンは？」

「怖がってるわよ! 飛びかかれたって言ってるけど!？」レーナ
が怒りを込めて言った「何が起きたの?」

「いや、会えたのがうれしくて、つい抱きついたら、突き飛ばされ
て」

「何ですって!？」

レーナがヒステリックに叫んだ。

「違うんだ、これにはいろいろ事情が」

「事情? それならさっき聞いたわよ! ！だからって女の子に抱きつ
いていいわけじゃないわよ!」

「そうじゃない!」

「とにかく、ヘレンは怖がってるんですからね! むやみに近寄らな
いでよ! 普通の子よりずっと繊細なんだから!」

「そんなことは俺だって知ってる!」

「なんであんたがヘレンを知ってるのよ!」

「それは……」

「とにかくもう帰りなさい! さもないと痴漢呼ばわりして人を呼ん
でやるわよ!」

イアソンが言い返す前に、窓はピシャリと閉められた。ほかの窓
からは、騒ぎを聞きつけたほかの女子生徒が、くすくす笑いながら
こちらを見ているのが感じ取れた。

イアソンは肩を落として、とぼとぼと自分の寮に戻って行った。

2-22 イアソン テリー ヘイツキ 男子寮

季節はあつという間に冬になる。白いものが空から降りだした頃、試験の終了と共に、年末の休暇がやってきた。

「テリーは実家に帰るんだっけ？」

「そうだよ、さすがに年に一度は帰らないと」テリーは完成した模型を眺めながら言った「あんまり帰りたくないけどね」

「どうして」

「けっこう面倒なんだよ。親戚がみんな同じ場所に集まるっていうのは」

テリーは心底憂鬱そうにそう言ったが、イアソンには理解できない感情だった。家族に囲まれるというのはどんな気分だろう？ ついこの間まで、冬は老人の家で寒さに震えていた。食事をした記憶があの頃にはほとんどない。

「新年祭って管轄区にもあるのかい？」

テリーがイアソンに尋ねた。

「あるよ。教会に行く。新年の前の晩に人が集まって、夜中の零時の鐘でいっせいに騒ぐ、その瞬間だけ、ワインとパンがタダで配られる」

「ワイン？」

「その日だけさ」

「飲んだの？」

テリーが苦笑いした。イアソンも同じ表情を返した。

「飢え死に寸前だったし、あの騒ぎの中じゃ、誰も子供に酒飲ますな、なんて注意はしないんだ」

本当はそれだけではなかった。道を通る人全てが、不思議なほど優しくなる日だった。教会を中心にしてまとまっている管轄区だからこそ、信仰が薄くとも、貧しすぎて神学の知識どころか自分の名前もろくに書くことができない人間も、その日だけは同等に並ぶの

だ。

食べ物だけが目当てで通りに集まる人間は、あの町にはいない。たいていの人間は、知らない誰かと、新年まで生きられたことを祝い合うために集まってくるのだ。次の年にはもういなくなっているかもしれない、そんな、生きるだけで精一杯の人たちが、無数に。イアソンはあの、貧しい町に帰りたくなっている自分に気がついた。でもそれは良くないことのような気がした。なぜかはわからない。自分は今、十分恵まれている。そんなことを考えてはいけない。そう自分に言い聞かせる。

館のミス・メイシンからも、たまには帰ってこいという手紙がよく来ていた。イアソンも電話はしょっちゅうしていたのだが、肝心のミス・ベリルからは何の連絡もないし、ここに来て以来育ってしまった、あの二人への暗い感情が、彼を館から遠ざけていた。

せっかくヘレンを見つけたのに、嫌われたままだ。

あの一件以来、ヘレンを学校で見かけることもなく、たまに会うレーナもイアソンを避けているようだった。テリーはただ『気にするんじゃないよ』を連呼するだけだ。

何もかも見えているのに、何もかもよくわからない！

「へえー。イシュハも似たようなもんだよ。ただ、こっちの女神はアニタ様だから、いろいろ必要以上に派手なんだよね。僕はああいう騒がしいのは好きじゃないな」

心底嫌だ、という顔でテリーが言った。

「騒がしいってどういう」

「花火とか、バンドとか、ダンスとか、カウントダウン……まあ、とにかく、うるさいものは全て新年に集結するんだよ」

「いいじゃないか、華やかなのは豊かだからだよ」

「だからって下品になっていいってもんじゃないさ」

テリーは『図書館に行く』と言って部屋を出て行った。

入れ替わるようにヘイッキが入ってきた。手に雑誌を持っている。「俺は帰らないぞ！」

「まだ何も言っていないじゃない」ヘイッキが困ったような真面目な顔をした「何を怒ってるの」

「なんでもないよ。いろんな人間に、年末はどこで誰とどう過ごすんだって聞かれるからうんざりしてるんだ!」

おそらく、みんなミス・ベリルのところへ行くと思ってるんだろ
うな!

「しょうがないじゃない。君のお母様が興味深すぎるんだもん」

「そういう言い方はやめろ!」イアソンが軽い口調のヘイッキを睨んだ「何の用?」

「おれっち、この冬はローローデンでアルバイトするんだけどさ」

「だから?」

「一緒に行ってみない?」

ヘイッキが手に持っていた雑誌を振り上げながら言った。それは『ローローデン観光案内』だった。

「は?」

予知していない話だったので、イアソンは目が点のようになった。「つまりね」ヘイッキが芝居のセリフのように抑揚をつけて話し始めた「北国の雪かきをしに行くわけよ。ローローデンは降雪量イシユハンバーワン。しかし高齢化が進んでだね、毎年雪に埋まった家の中でおじいさんやおばあさんや子供が死んじゃうわけ。だから、若者を雇って雪をどけるアルバイトというものがあるわけよ」

「勝手に一人で行けばいいじゃないか!」

「それがね、二人一組なのよ。テリー君は里帰りしちゃうじゃない?」

「他を当たってくれない?」

こんなおしゃべりと、長い間過ごすのはたまらないので、イアソンは断る気満々だ。

「じゃ、聞けどさ、イアソン君。この冬をどこで過ごす気?」

「ここに残るよ」

「この寮、十二月十八日には閉まるのよ」

「えっ」

ヘイッキは無表情で『やっぱり知らなかったか』という目つきをした。

「年末年始にね、改装と点検、やるのよ。ここの寮だけね。古いからねこの建物。毎年改装してる割には何も新しくならないけどね。とにかく、一月十五日まで、ここ、追い出されるのよ」

ヘイッキが憐れむような目で、驚愕のあまり思考停止したイアソンを見た。本来、帰る家も家族もないヘイッキのほうが大変なはずなのだが、誰かがその場に居合わせたら、イアソンのほうに何か悲劇が起こったように見えただろう。

「どう？書類の心配ならいらぬ。おれっちが書くから。もちろん無料で。それと、防寒具とか、必要なものはぜんぶ向こうにあるし、旅費も、後払いだけど、出るよ。とりあえず、ローローデン行きの列車予約しちゃっていい？早めに予約しないと混むのよ」

うれしそうに、早口で話し始めたヘイッキを、イアソンは呆然と見つめていた。

結局、一週間後には、イアソンはヘイッキと同じ列車に乗っていた。

2-23 ケレス カナデ レーナ ヘレン 女子寮

カナデとケレスがケンカを始めた。きっかけは、アケパリがイシユハに、ロンハルト侵攻のための兵力と軍事資金を提供したというニュースだった。

「ロンハルトへの空爆には反対していたくせに、何で資金提供するのよ」

ケレスがテレビを見ながら呆れた声で言った。

「たぶんみかえりーを期待しているんだと思う。貿易摩擦してるから」

カナデは苦しそうな顔をしている。祖国のこの行動は彼女の、いや、アケパリの人々の信念に反していると考えたからだ。意味のない暴力に我が国が加担するだって？

「結局金で動くのね、アケパリって」

「そんなことはない」カナデが不愉快な顔をした「ロンハルトの攻撃に反対したのは正当性がないからだ。アケパリ人は侵略が嫌いだ。賛成なんかーしない」

「資金を出したんだから賛成したのと同じよ」ケレスが避難した「しかも軍隊まで出したわね。侵略を承認したとは思えないけど。それとも、アケパリもロンハルトの資源を狙っていたのかもね」

「そんなのありえない！」

ニュースが終わってからこんなやり取りが一時間以上続き、それから、里帰りしようと思って荷物を整理していたレーナのところに、二人がやってきたのだった。

「部屋交換して！」

ああ、またか、しかもこんな時に。

レーナはため息をついた。いつも、この二人がけんかすると、どちらか一人がレーナの部屋にやってくるのだ。

「一晩離れてゆっくり頭を冷やすのよ。いちばん平和な解決方法で

しょ？」

ケレスはそう言うが、レーナにとってはいい迷惑である。

そして、今回はヘレンがいるのだ！ヘレンは、ケレスが何の事をしゃべっているのかさっぱり分からず、レーナを『説明して』という目でみつめていた。

「ヘレン」レーナは二度目のため息をついて言った「今日はケレスと一緒に過ごして、カナデのベッドで寝て。一日だけカナデと入れ替わるの」

「えっ」

ヘレンは恐怖の顔でケレスを見た。ケレスも困惑していた。彼女はレーナと一緒にいるつもりだったのだ。

「ちよっと待って、カナデとヘレンが一緒のほうが合うんじゃない」

「おまえーはこのまえーレーナと一緒にだったじゃーん」

カナデが間延びした発音で抗議した。

「そういうこと。順番よ」

レーナが荷造りを再開した。彼女は明日の夕方には列車に乗るのだ。

2-24 イアソン ヘイツキ 列車内

雪以外、何も見えない……。

ローローデン行きの列車の窓から見える景色は、本当に、真っ白だ。窓に雪がこびりついてしまつて外が見えないのだ。前日から猛吹雪に襲われ、列車は今、止まっている。

「もう3時間も経つたぞ」

イアソンがいらいしながら周りを見回した。同じアルバイトらしき学生数人と、老人、親子連れが同じ車両にいるのだが、みんなうんざりした顔をしているか、不安げに下を向いている。

「冬なんだから列車はよく止まるのよ」ヘイツキは列車が止まったときからゲルトリーズ語の本を読んでいた「めずらしくないよ」

「本当にローローデンに行けるのか？このまま列車ごと雪に埋まるんじゃないか？」

イアソンは、苛立ちが不安に変わるのを感じながらわめいていた。「ああ、ありうるね」後ろの学生が身を乗り出してきた「去年、ローローデンから首都に向かう列車が雪に埋まったんだ。乗客の救助に3日かかったらしいよ」

「3日……？」

イアソンの顔が青くなった。学生がその顔つきに驚いてあわて始めた。

「いや、いや、心配するなよ！それは去年の、別な路線の話だよ！」

「じたばたしても何も変わらないんだから、何か読んでれば？」

ヘイツキがどこからか雑誌を取り出した。どことなく黄ばんでいるそれは、なんと、20年前の日付が入ったゴシップ雑誌だった。しかも、イアソンが読めない言語で書かれている。

「なんだよこれは！」

「イアソン君に見せようと思ったのよ。ノレーシュのタブロイドなんだけどね、女王様と噂になっている例の悪徳商人の写真が載って

るのよ」

「何だって？」

イアソンはヘイッキの手から雑誌をひったくり、ページを乱暴にめくり始めた。

あまり美人とは言えない女性の写真、何を書いてあるかさっぱりわからないコラムのような囲み記事……そして。

エブニーザと、美しい、上品なベージュのドレスを着た、褐色の肌の女性が並んで映っている写真があった。

「このタイトルだけだね」ヘイッキが写真下の太字のフォントを指さした「『エブニーザ・デリス、我らが女王陛下を訪問！』って書いてあるの。おれっちの翻訳だからあまり正確じゃないかもしれないけど、このノレーシュって国はかなりな自由主義でね、エブニーザもここでは悪人じゃなくて、ただの変わったお金持ちだったみたいね」

「なんでお前、ノレーシュ語なんかわかるんだ？」

イアソンが低い声でつぶやいたが、そんなことは本当はどうでもよかった。

これがエブニーザ！

あの幽霊だ！同じ人物だ！

イアソンの手が震えた。

「情報集めのため。ノレーシュかアケパリかロンハルト、どうせ上級に上がったらどれか選択しないといけなくなるのよ」

「そうなのか？でもおまえまだ中級だろう？」

イアソンが心ここにあらずの声で言った。周りの学生が彼を好奇の目で見つめていることにも気がつかないようだ。

これが俺の父親かもしれないんだ！

あの幽霊は、確かに生きて存在してたんだ！

イアソンは、ほかの写真もくまなく見て見たが、ほかに知っている人物は映っていないようだった。注目されていたらしく、かなりの枚数の写真が掲載されていたが、ほとんどが女王のドレス姿（1

0種類以上載っている!)で、エブニーザが映っているのは2、3枚。どれも黒っぽいスーツ姿で、同じような社交的な笑顔で映っているだけだ。

やっぱり目が灰色だ。しかもかなり色が薄い。写真の内一枚は、光の加減なのか、瞳がほぼ真っ白に見えるものもあるくらいだ。

……不思議だな。どうしてこんな色なんだろう?

「ジャーナリストに外国語は不可欠。のんびりテリーちゃんだってロンハルト語勉強してるのよ? 知らなかった?」

「それはあいつがロンハルトの移民……おい!!」

ヘイツキが雑誌をイアソンからとりあげた。

「あとでコピーしてあげる。いくら田舎でもコピー機くらいあるでしょ、どっかに」

「できれば翻訳も欲しい」

「最初の一日の給料おれっちにくれる?」

「金取るのかよ!」

「あつたりまえじゃない」

ヘイツキはさも平然と、おもしろそうな顔でそう言った。

二人のやり取りを聞いていた学生たちが、大声で笑い始めた。

2-25 ヘレン パニックを起こす

ケレスの部屋。

本来ならカナデの部屋でもあるのだが、今日はヘレンがここにいます。二人でキッチンのカウンターに並んで座り……黙り込んでいる。かなり気まずい空気だ。

この子、まともに会話できるんだろうか……。

ケレスは横目でちらりとヘレンを見る。不安そうにうつむいて、動く気配がない。

動く気配どころか、気配そのものがないわね。本当に生きてるのかしら？

「ヘレン」

思い切って名前を読んでみる。ヘレンがビクッ、と身体を揺らした。

「何か飲む？カナデがアケパリから変なジュースを輸入してるのよ」

「それ、アケパリ語！？」

ヘレンが急に顔を上げて目を輝かせた。そして、立ち上がって、スキップのようにはずみながら冷蔵庫に走り寄ると、勢いよくドアを開けた。とても楽しそうだ。

何？この変貌ぶり……語学オタク？そういえばアケパリ語の本買ってたわね。

冷蔵庫を探っているヘレンを、ケレスはうさんくさい目で見ています。

「これ？」ヘレンが紫色の缶をケレスに向けた「紫色の野菜が入ってるって書いてある」

「あ、そう」

それくらい、パッケージの絵を見たらわかるわよね、ラベル読めなくても。

「ねえ！これ！ノレーシユのチーズでしょ！」

こんどは青カビチーズを取り出してきた。

「ああ、それは、私の母が送ってきたのよ」

「添加物一切なしって書いてあるわ。食べていい？」

「朝食用なのよ！明日の朝にして！……ノレーシュ語わかるの？」

「本は読むわ」

へえ……。大統領ご一家の教育ってやつかしら？

ケレスはヘレンを試すような目で見始めた。

何か、おもしろいことを聞き出せるかもしれない……。

ヘレンは紫色の缶を二つ持ってきて、ひとつをケレスに渡した。

「どうも」

ケレスはヘレンを試すような目で見始めた。友達を見る目ではない、重要参考人を招致して尋問するような目だ。

「ヘレン」できるだけ優しい声でケレスはヘレンに話しかけて見た

「前にパーティーで見かけたんだけど、本当に覚えてない？」

「パーティー嫌い」

缶を開けながらヘレンが答えた。

「うちの……ヘステシアの家は、代々シュツティファントと関わりがあるのよ。ほんとにお父様から何も聞いてない？」

「知らないわ。もう何年も話してないもの」

……何年も話してない？

「そういえば、『一緒に住んでない』って言ってたわよね？どうして？」

いくら大統領でも、わざわざ娘だけ遠くに住まわせるなんておかしい。

何かある、とケレスは思っていたのだ。

「リュエフのせいよ」

「リュエフ？」ケレスが身を乗り出した「リュエフ・シュツティファント？」

ケレスはヘレンの兄を知っていた。というより、学校の生徒はみんな知っている。大統領の息子で、成績優秀だが、気が短く、すぐ

怒鳴るのでみんな怖がって近づかない……ただし、ケレスはそんなことでひるむ人間ではない。

「統治論のディクテーションで対立したことがあるわよ」ケレスが得意げな顔でしゃべりだした「たしかあれは……去年の12月？新年の休暇に入る直前ね。決着がつかなかったのよ。見せてあげたかったわ！今時まともに議論できる人間なんて珍しいわ。やっぱり政治家の子だから？そういうえば、最近法律の授業にイアソンがいるんだけど、彼も結構議論できるわよ。テリー・メイヨールのルームメイトなんだけど、知らない？」

「リュエフなんて嫌い！」

ヘレンがすさまじい大声で叫んだので、ケレスはびっくりして缶を落としそうになった。

「乱暴だもの！人を平気で撃ち殺すわ！私を撃ったのよ！」

ヘレンが震えながら、かすれた声でそう言うのと、なんと、わああーと声を上げて泣き出してしまった。

その泣き方の異様さに、ケレスは慌てた。

やばい、変なこと思い出したのかも？

……待て。

今何て言った？

「あなたを撃った？」ケレスはヘレンの背中を撫でながら、慎重に聞いた「リュエフが？」

「そうよ！」ヘレンがまた叫んだ「私だけじゃないわ！止めようとした使用人を撃ったのよ！3人も！そのうち一人は死んだわ！」

「何ですって？」

あのリュエフ・シュッティファントが……大統領の息子が、人を殺した？

「それ本当？いつ？」

「ずっと昔、まだ小さかった。そのあと私だけ別な家に閉じ込められたわ！」ヘレンが涙でぐしゃぐしゃになった顔でケレスを見た「どうして私が閉じ込められるの？拳銃を撃ったのはリュエフなのに、

人を殺したのもリユエフなのに！？どうして捕まらないの？やっぱ
り親が大統領だから？何をしても許されるの？そんなの変だわ！」

ケレスは泣きじゃくるヘレンをなだめながら、今聞いた内容の深
刻さを考えた。

スキャンダルなんてもんじゃないわ。大統領の息子が人を殺して、
しかももみ消したなんて。しかもヘイゼル・シュッティファントの
政権はもう十数年続いていて、国民の信頼も（多少労働者問題で揺
らいではいたが）厚い。

もしこんなことが公になったら、イシュハの国政に関わる大問題
になる！

「ヘレン」ケレスはまた慎重に、低い声でヘレンに尋ねた「このこ
とを知ってる人は、あなた以外にいる？」

「お父様と、館にいた人と、私だけよ」

「絶対誰にも話しちゃだめよ！」ケレスが強制的な語調で言った「
私だからまだいいけど、他の人にこんなこと聞かれたら、あつとい
う間にスキャンダルになるわ！あなたの家だけじゃなくて、イシュ
ハ全体が揺らぐわよ！いい？絶対に誰にも喋っちゃだめ！どうして
も喋りたくなったら私にして。レーナもカナデも駄目よ！わかった
？」

ヘレンは、何の事だかわからない、という顔でケレスを見た。

「イシュハが」ヘレンが当たり前のようにこう言った「そんなに大
事？私はどうでもいいわ」

「ヘレン！」

「こんな国、嫌い！」ヘレンがまた叫び出した「よその大陸に爆弾
を落として、ゲルトリーズを滅ぼして、環境を汚染して、ロンハル
トとドウロソを侵略して……」

「ヘレン！落ちつきなさいよ！」ケレスが怒りだした「残念だけど、
あなたはシュッティファントに生まれてきちゃったのよ。大統領の
娘である以上、発言には気をつけないと、今後だれに上げ足を取ら
れるかわかったもんじゃないわ！もうすこししっかりしなさいよ！

……とりあえず、この話はもうやめましょうよ？ね？」

終わりのほうで優しい声になったケレスに、ヘレンは無言でうなずいた。

ケレスは困り果てていた。

とんでもないことを知ってしまった！

でも、と思い直す。

これは使えるわね……。あの優等生リュエフが人殺し！

人の本性ってわからないものね、面白いわ……。

ケレスは、今後リュエフに会ったらどうしてやろうかと考え……ニヤニヤし始めた。

携帯電話を取り出す。

『なんのーようなのだー』

まだ機嫌の悪そうな、カナデの声が返ってきた。

『冷凍のスシ、ヘレンと全部食べちゃっていい？』

『……おまえーはともかくヘレンならしょうがーないねー』

『ありがとう』

電話を切る。

「冷蔵庫のアケパリスシ、食べていいって」

「スシ……」ヘレンがまた、急に目を輝かせた「食べた事ないわ！」

「ほんと？」ケレスはまた驚いた。世界各国の料理を食べつくしているのかと思っていた。少なくとも、大統領はそうしているはずだ

「でも冷凍だから、味は期待しないほうがいいわ。しかも輸入元がカナデだし」

冷凍庫から、奇妙な花模様のパッケージを二つ取り出して、ヘレンのほうに振って見せながら、ケレスがニヤリと笑った。

2-26 イアソン ヘイッキ ローローデン

ローローデンの仕事は、意外にも、イアソンに向いていた。

とにかく老人が多く、みな余計なまでにおしゃべりをしたがり、しかも若い人を見つけると飛んできてかまいたがるのだ。他の学生は、最初は相手をしていたが、2、3日もすると相手のしつこさとうんざりしてくる。

でもイアソンは違った。なんせ、貧しいあの町にいたところから、老人や老女と話すのが日課だったのだから。

「私も昔、アルターの学校にいたんだよ」

雪の下から『掘り出した』家の老夫婦が、イアソンとヘイッキに夕食を勧め、二人は素直に応じて食卓に座っていた。台所からはベーカーコンの焼けるにおいがする。

「そうなんですか」

二人はほぼ毎日、雪の下から『救助』した老人たちと夕食を食べていた。みんな彼らに何か食べさせたがり、自分の人生を語りたがり、なかなか帰そうとしなかった。みんな会話に飢えている。

「あそこで物理学を教えていたんだ。20年前に引退したがね」

「20年前まであの学校にいたということは」ヘイッキが好奇心いっぱいの目をした「大統領が在学してたんじゃないですか？お勤めの間に」

「いたよ、いたさ、ああ……何十年前も前だ、いつだったかな」老人が遠くを見るような目をした「よくサボってたけどな」

「そうなんですか？」

「よく友達とサッカーに逃避してたよ。そうだ、3人で同じ部屋だった。有名だったんだ。ヘイゼル・シュッティファント、アングレ・レノウス、エブニーザ・デリス……」

イアソンがビクツと身を震わせた。

こんなところでエブニーザの名前を聞くとはい！

「アンゲル・レノウスは僕知ってるな」ヘイッキが隣のイアソンを横目で見ながら言った「管轄区では有名な精神科医だったんだよね。たしかフアナティ教の熱烈な信者に刺し殺されたんじゃないかな。何冊か本を読んだことあるな」

「そうそう、あいつの本はみな素晴らしい。私も読んだ。大学の連中はみんな読んでたな。私はあいつの葬式にも出た。三人の中では一番まともだった。まともな人間ほど早く死ぬもんなんだ」

イアソンは『エブニーザはまともじゃなかったのか?』と思ったが、口には出せなかった。

「ヘイゼルなんてひどい男だよ。在学中から器物損壊の常習犯でね。学費より壊したものの弁償金額のほうが多かった」

「ほんとに?」

ヘイッキがおおげさに驚いた顔をした。イアソンはそれを胡散臭いと思った。

「大人になっても変わらん。あれは酷い男だよ。アンゲルの葬式の時も、黙って座っていられずに、こっそり抜け出して、近所の子供とサッカーをしてたんだからね。みんな怒ってね、エブニーザは彼をかばっていたが……とにかく」老人がため息交じりにつぶやいた「あんなのが大統領になるとは」

「あのう」イアソンが控えめな声を出した「その、3人は、どうして有名だったんですか。なにか学校で問題でも起こしたんですか」

「いや……。問題を起こしたのはシュッティファントだけだ。あとの二人は成績優秀だったんだ。まあ、目立つから三人とも注目の的さ。ただ、ヘイゼルとアンゲルはサッカー狂いでね。大きな試合があるたびに学校をさぼって、置き去りにされたエブニーザだけ一人で、なぜか三人分のノートを持って授業にやってくるんだ。私が『あの二人はどこだ』って聞くと『文句はサッカー協会に言ってくださいよ!』と泣きそうな顔で叫んでたな」

3人分のノートって……そんなに気が弱かったのか?

イアソンはまた思ったが、やはり口に出せなかった。

「どうして、あの、一人だけ、残ってたんですか？」

『エブニーザ』という単語を口にしたくないイアソンが、とぎれとぎれに尋ねた。

「スポーツに興味がないからだろう？有名な話だよ？そうそう」老人が何か思い出したように、顔を赤らめて笑いながら続けた「業界のパーティーでもね、男たちがサッカーの試合に夢中になっている間、エブニーザはずっと女性たちと仲良く喋っていてね、試合が終わって男たちがやっと目当ての女性に目を向けると、みんなエブニーザに夢中というわけだ。女性には人気があったな。色男だったかな。だからみんなに嫌われたんだな、可哀相に」

ははは、と愉快そうに笑う老人だが、イアソンはとても笑う気になれなかった。

「できましたよ。ここの名物ですからね」

老婦人がスープと、エスレブという、聞きなれない名前の肉料理を運んできた。

ヘイツキが老婦人に『このレシピを教えてよ。女の子に教えるともてるから』と軽口をたたいている間、イアソンは、老人が何か探るような顔で自分を見つめているのに気がついた。

もしかして、エブニーザに似てると思っているのか？

「君のご両親はどこに住んでいるのかね」

老人が突然口を開いた、イアソンは驚いてむせた。

「あつ、あの、ポートタウンの、管轄区側です」

「管轄区側……」

老人が何か考え込むように、フォークを置き、視線を斜めに向けた。

何だ？やっぱり気がついたのか？

2-27 ヘレン ケレス カナデ 女子寮

朝。

ヘレンは上機嫌で、ケレスが切ったパンに『ノレーシュの青カビチーズ』を塗りたくって、ニヤニヤしながら口に運んでいた。これで6枚目だ。相当気に入ったらしい。

昨日泣いてたのと、同一人物には見えないわね……。

ケレスは目の前の、能天気すぎてますますボケて見えるヘレンと、昨日泣いていた『シュッティファントの娘』を比較して、あまりの違いに呆れていた。

でも。

「ねえヘレン」ケレスが険しい表情をした「昨日私が言ったこと、覚えてるわよね？」

「お母さまからもらったチーズ？」

「違うわよ！」ケレスが声を荒げた「あんたの家族の話！」

ヘレンの顔から笑いが消えた。

「絶対、誰にも言っちゃだめよ？ わかった？」

「……わかってる」

不愉快な顔をしながら、ヘレンがもぐもぐと口を動かした。

さーと。

ケレスは考える。冬の休暇いっぱい、作戦を立てなきゃ。これからどうするか……それにしても、あのリュエフ・シュッティファントがね！こんな情報、使わない手はないわね。でもむやみにつきつけても刺激過剰になるかも。どうしてやろうかしら……。

今度はケレスがニヤニヤし始めた。

「どうしたの？」

ヘレンが尋ねる。他人の様子を察するなんて、彼女にしては珍しいことだ。

「なんでもないわ。休暇をどう使おうか考えているだけ」

「そーのはなしーなんだけどー」

変な発音の聲がしたと思ったら、ドアが開いていて、紺色のゆかた姿のカナデ・アンジが立っていた。寝起きなのだろう、ただでさえ長い髪が、寝ぐせでうねうねと乱れて、墓からよみがえったお化けのように見える。

「何の用？ 食事中よ」

ケレスが冷たく言い放った。ヘレンは『うねうね髪のお化け』を見て、驚いて低く何か叫び、持っていたパンを落とした。

「いいかげんなかなおりしろーってレーナが」カナデが部屋に入ってきて、ヘレンの隣に座った「ヘレン、アケパリにこない？」

「えっ？」

「前聞いたはなしーだと自分の家にはー帰りたくなさそうだしー。アケパリにいくつか第二持家、あ、こちらでいうと別荘というのかなー？ それがあるから。来ない？ アケパリ語も学べるし、うちいちおう政治家だからセキュリティは問題ないーよ」

「ずいぶん急な話ね」

ケレスが不愉快な顔をした。また自分だけ仲間外れになっているような気がしたからだ。

「おまえーも来るかー。前にも来たような気がするけどー」カナデが少々意地悪な笑い方をした「たいして言葉おぼえてないーしー」

「そんなてきとうな発音の人に言われたくないわよ！」

「てきとーじゃなーい！ こっちの言葉はいろいろむずかーしいのーだー」

「アケパリ語だって難しいわよ！」

「行く！ 行くわ！」

言い争いを始めた二人に割って入るように、ヘレンが叫んだ。甲高い声でぎゃあぎゃあ言われるのに耐えられなかった。ヘレンは人が争っているのを聞くのが苦手なのだ。

「じゃあーきまりー、三人でアケパリ行きねー」

カナデが満足したように、今度は自分の部屋のドアに消えて行っ

た。

「……ヘレン」ケレスが不安げな、何かを懸念する顔をした「ほんとにいいの？」

家族に相談しなくていいの？いくら普段会っていないからって……。

「いいの。アケパリ行ったことないし」ヘレンはうれしそうだ「はじめてだわ。外国に行くの」

「えっ？」

待て、大統領の家族なのに……いや、ヘレンは家族と行動を共にしていないんだっけ。でも……。

ケレスは、ヘレンの発言に強烈な違和感を感じた。

「アケパリ語、復習しておかないといけないわ」ヘレンが立ちあがった「部屋に戻って勉強する！……そういえば、何日に出発するの？カナデ？」

ヘレンは、カナデが入っていったドアに向かって、変なスキップをしていた。ケレスは呆れながらその後ろ姿を見守った。

大統領の娘がいきなり海外を訪問したら、どういう騒ぎになるか、本当にわかってんのかしら！？

しかし、ケレスはわかっていた。問題はヘレンではなく、カナデにあるということ。

いきなりヘレンをアケパリに連れて行くなんて、絶対何か企んでいるわね……両国の関係強化に利用するとか？それとも他に何か……。

考えながら、ケレスは無意識に青カビチーズをつまんで口に入れていた。

2-28 イアソン ヘイッキ ローローデン

「ここに来て今日が初めてだ」雪の中をかき分けるように進みながら、イアソンがいらいらした様子で言った「早く部屋に帰りたいと思っただけは！」

「しょーがないじゃない、お父様が有名人すぎるんだもん」

「そういう言い方はやめろ！！」

「はいはいはいはい」

「ヘイッキ」

「何？」

「どこに行っても、俺にはあの二人がつきまわってくるんだ」

「二人って？」

「エブニーザとその愛人だよ！言わなくてもわかるだろう！」

イアソンが雪をやたらに引っかきながら、ヒステリックに叫んだ。

「自分の親を愛人なんて言わないほうがいいんじゃない？」

めずらしく真面目な答えが返ってきた。

ヘイッキははるか前方を進んでいる。どうしてあんなに進むのが速いんだろう？イアソンも必死で、全力で雪をかき分けながら進んでいるのだが、降りやまない雪のせいで視界が悪いうえに、想像以上に積もっている雪が重たく、なかなか進めない。

「何も聞かれなかったんだからいいじゃないー？」

前方から叫び声がした。

「でもあの顔はぜったい」イアソンも叫びながら進む「何か疑ってたろ！？」

「おれっち知らない。ご婦人に夢中だったからね」

「何をばかなことを！おい！」

ヘイッキが完全に視界から消えた。目の前は真っ暗、足元、いや、腰の高さ以上に積もった雪は、真っ白だ。

「ヘイッキ！どこだ！？」

軽い恐怖を感じながら叫ぶと『こっちだよ〜ん』というふざけた声が返ってくる。

その方向に行ってみると、いつの間に作ったのか、雪だるまらしきものに衝突する。

まともに顔面に雪がぶつかった痛さでもがいていると、クククと笑い声が聞こえる。怒り狂ったイアソンが、雪だるまの頭を笑い声に向かって投げつける。

ヘイッキは全力で逃げて行く（しかし、逃げながらも新たに雪玉を転がしている！）イアソンはまた『どこだ！？』を叫ぶ……。

そんな間抜けなことを何度も繰り返したせいで、寮にたどりつくまでに2時間以上かかってしまった。

部屋に着くなり、二人ともぐったりとベッドに倒れた。いつも通り筋肉痛だが、今日はそれに加えて、いつもにはない暗い疲労を感じる。

リュエフ・シュッティファント、アンゲル・レノウス、エブニーザ！

イアソンは、聞いた瞬間に脳に焼きついた三人の名前を、頭の中でつぶやいた。

3人とも仲が良かった。つまり、シュッティファントとレノウスのことを調べれば、あの館の幽霊の事もわかるんじゃないか？

「ヘイッキ」

「何？」

寝ぼけた声でヘイッキが答える、さすがのヘイッキも連日の重労働で疲れているのだ。

「アンゲル・レノウスの家族に会えないかな？」

「会ってどうするの？」

「エブニーザの事を聞くんだよ」

「聞くのはいいけど……」ヘイッキが顔だけイアソンの方に向けた、目が半分寝ている「肝心のアンゲルが亡くなってるし、家族に聞いでもあまり分らないと思うよ」

「そうだけど……」

「大統領に聞いたほうが早いんじゃない？ まだ生きてるし」

「どうやってイシュハの大統領に近づくんだよ！？」

「ヘレンちゃんがいるじゃないの」ヘイッキが、急に目が覚めたように起き上がり、オカマのような声を出した「お父様のことも聞ける、お嬢様とも仲良くなれる、一石二鳥」

「簡単に言うな！」

イアソンがいらいらした声で叫んだ。ヘレンの話になると冷静でいられなくなるのだ。

どうせ嫌われてるからな！

イアソンは毛布にもぐりこんでしまった。

「いやだゝすねちゃゝ」

ますますおもしろがってふざけるヘイッキ。完全に目が覚めてしまったようだ。

「うるさい！ 早く寝ろ！」

イアソンはヒステリックに叫んだ。

何かが間違っている！ と心で叫びながら。

2-29 ケレス ヘレン カナデ 飛行機の中

アケパリ行きの飛行機の中。ビジネスクラス。

ヘレンは窓際の席で、ずっと外を眺めている。

真っ青。雲が下にある！すごいわ、今、私は、空の中にいるんだわ……！

空に夢中のヘレンを白けた横目で見ながら、ケレスは、ヘッドホンでアケパリ語の会話を聞いている。カナデは里帰りだから余裕だ。さっきから大口を開けて居眠りをしている。

「ヘレン」ケレスがヘッドホンをはずしながら話しかけた「外ばかり見てて楽しい？ ずーっと同じ景色じゃないの」

「雲が動いてるわ」

当然のようにヘレンがそう言った。

「そう？」

ケレスは外の景色に興味がなかったので、またヘッドホンを戻そうとした。

いや、待てよ……。

「ヘレン」ケレスはおそろおそろ聞いてみた「まさか、飛行機に乗るの初めて！ なんて言わないわよね？」

「初めてよ？ 海外に行くの初めてって言ったでしょ？」

「えっ……」

ヘレンは窓の外を見たまま、少しも動く気配がない。

大統領、何を考えてるのかしら……いくらヘレンでもそれはないわよ！ 奥様とリュエフはたしか、ノレーシュやアケパリには同行したことがあるはず……そういえば、娘がいるっていう話も、ここ2、3年で急に出てきたのよね……やっぱり、発砲事件を隠すため？ そのためにヘレンは存在を消されてたってこと？ それとも単に頭が弱いから？

「カナデ、起きなさい」

ケレスが居眠りしているカナデをゆすった。むにゃ〜という間抜けな声がした。

「起きろっつーの！」

ケレスが十センチもあるヒール靴でカナデの足を蹴った。カナデが悲鳴を上げて跳ね起きた。

「なーにをするのだあ〜!?!」

カナデが変な声でわめいた。

「ねえ、アケパリで、大統領の家族についてどう報道されてる？」

「は？」カナデは何の事だかわからないと言う顔をしている「何それ」

「アケパリで、イシュハの大統領の家族について、どんなふうに報道されてるかって聞いているの。ヘレンの事も報道されてる？」

「えーと、ヘレンの事は知らなかったーから、報道されてーないと思うーな」

カナデが半分寝ぼけた声でそう言ったかと思うと、突然はつとしたように、

「もうアケパリの領空に入りましたので、アケパリ語で会話しましょう」

と、流暢な（アケパリ人だから当然だが）アケパリ語で宣言し、にやりと笑った。

「うっ……」ケレスは何か言おうとしたが、とっさに単語が出てこなかった「えーと、やっぱり、報道されてーないんですね？ヘレンについてーは」

「変な抑揚！」カナデがせせら笑うように目を細めて笑った「ない。こちらの報道では、大統領の家族は、奥方のフランス、息子のリュエフ、それだけだ。アケパリ訪問の時も3人で来た」

「リュエフが？アケパリに来たことがあるの？」

ヘレンが突然二人に気づいてこっちを向いた。

「ここはアケパリでございます、お嬢様。アケパリ語でしゃべってくださいまし」

「そういうのを慫慂無礼っていうのではないのですかあ？」

丁寧に話すカナデに、ケレスが変なアケパリ語で抗議した。

「私だけ置いて行ったのね。そうよね。お母様は私が嫌い」

ヘレンが、かなり自然で流暢なアケパリ語を発したので、二人が驚いた。

「お母様？」

「フランシス・シグノー。シグノー家のご令嬢だったのです」ケレスが説明を始めた「大統領といつもケンカをします。そのたび、私の父親が仲介を」

「そうなの？」

「金切り声をあげて物を投げていました」ヘレンが視線を窓の外に戻した「空を、見ていたいから、静かにしていただけませんか？」

その口調が、ヘレンにしては妙に偉そうだったので、ケレスは違和感を感じた。

「なんかヘレン、態度が変わってナイ？」

「あんたの発音おかしくナイ？」

ケレスの発音を真似てカナデがにやにや笑いはじめた。ケレスはきつい目つきでカナデを睨むと、ヘッドホンを耳に戻し、アケパリ語の会話本で顔を隠した。

2-30 イアソン ヘイッキ 輸送中

ローローデン。

新年を祝う準備のため、除雪と並行して食糧の配達も始まった。

イアソンとヘイッキが倉庫に行くと、大量の食糧、特に、ステーキ用の大きな牛肉の塊や、北方の海で獲れる大きなカニの足、壁一面に積まれたワインやシャンパンの箱……に圧倒された。

「すごいな」

「これ全部運ぶのね」ヘイッキがワインケースの山を見上げた「途中で割ったら殺されそう。雪が真っ赤に染まっても、血だかワインだかわかんないね」

「カニがあるのはやっぱり神話の影響？」

神話では、女神アニタの食卓にはかならずカニが並ぶ。北方らしい話だ。

「もともとはそうだったんだろうけど、今じゃただの贅沢品だ。新年じゃなくても普通にパーティーに出されるよ」

うしろにいた年上の学生が、そう言いながら割り込んできた。

「トラックにワインを積むから、手伝って」

イアソンは予想以上に重いワインケースに苦戦しながら、去年の新年のことを思い出していた。

……凍えて死ぬ一歩手前だったな。

「おい！そっちじゃない！こっちだ！」

叫び声にはっとすると、自分が誘導されていたのとは反対のトラックに向かっていることに気がついた。慌てて戻る。

1時間ほどかかって荷物を積むと、イアソンとヘイッキは、先輩が運転するトラックに乗り込んだ。

しかし、雪は予想以上のペースで降り積もり、イアソンたちを乗せたトラックは、雪にはまって動けなくなってしまった。

年上の学生が必死で無線のやり取りをしている間、イアソンとヘ

イッキは、狭い車内でじっとしてはならなかった。いつもむさ苦しいヘイッキが、今日はさらに邪魔……いや、スペースを食っているように思える。

「それでも、去年よりずっとましだ」

イアソンは無理矢理、自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「どうしてたの、去年」

「となりのじいさんの家で凍えてたよ。競馬は休みで燃料は買えないし、食べるものもなかった」

「そりゃ寒いね」

「でも、新年には教会でワインがもらえる」

「へえ」

「ヘイッキは？ 十代の時、どうやって暮らしてたんだよ？」

「主に路上。たまに軍隊」

「軍隊？」

「管轄区に外国人部隊ってあるでしょ。路上生活してた時に勧誘されて、喜んでついていったら、あっちの人って、ファナティ教徒以外人間だと思っただけなんだよね。一応おれっちゲルトリーズ人だし、ゲルトリーズもファナティ教だけど、どうも、外国人一般、人間だと思っただけでさ、もう、過酷な重労働よ。ダムを作らされたら決壊するし、道を舗装したら、貴族のお偉いさんが無視して突っ込んできてはねられるし」

「そんなにひどいのか。知らなかった」

イアソンは、フレアの兄のうちの一人が、管轄区の軍隊に入ったことを思い出した。外国人部隊ほどひどい扱いではないだろうが、きつといい生活はしていないだろう。

「それでも、その間がいちばん裕福な生活だったよ。給料は出るからね。問題は、3年しかいられないってとこなのよ」

「そのあとは？」

「イシュハの工場を転々としてたけど、結局路上に戻ったな」

「イシュハで路上って……冬は？」

イシュハは管轄区より北にある。冬は日中も氷点下だ。

「地下鉄の通気口があつてさ、その上がかすかに暖かいから、みんなでそこに野宿するわけよ。でも、人が集まりすぎて通気口がふさがっちゃって、地下鉄の職員がホームレスを追い出しに来るわけよ」

ヘイツキは、どうでもいいような声で話し続けた。

「それからどこに行くんだ？」

「どこにも」

「どこにも？」

「だって、行くところないじゃない。職員が帰ってから、またみんなで通気口に集まり始めるの」

「でも、また来るんだろ？職員が」

「次は警察が来るんだよね」

「捕まったの？」

「捕ままないよ。警棒持った集団に追いかけて回されるだけ。要は、いちいち捕まえてるとすぐ留置場がいっぱいになるから、たたきだすか追い落とすか、そんなもんなのよ」

「それからどこに行ったんだよ？」

「どこにも」

「また？」

「通気口じゃなくて、地下通路」

ヘイツキが何かを思い出すような遠い目をして、雪しか見えない窓を見た。

「先客がたくさんいて、スペースが足りないんだけど、おれっちまだそのときは子供だったからね。ホームレスにも、気のいい奴と悪い奴がいて、さらに、気のいい奴は、子煩悩と孤独好きと変態に分かれるんだけど」

「そんな分類はいいよ」

話を聞いているうちにイアソンは嫌になってきた。自分も酷い環境で育ったが、少なくとも、居場所があった。

「生きた抱き枕兼暖房を探している気のいい人と、一緒に寝かせてもらうわけ」

ヘイツキはさらっとそんなことを言った。イアソンはぞっとした。「ここで人選を間違うと、貞操あるいは人命の危機になるわけよ」「おいおいおい」

「幸い、くさいガキンちよを襲うような趣味の人には出会わずにすんだよ。それに、その地下通路で奨学金の情報も得たわけよ。ゲルトリーズ出身者向けのね……学校のためというよりは、生きるために申し込んだのよ」

「よかったな」イアソンは顔をしかめながら言った「そんなひどい目にあって、どうしてそんなおちゃらけた性格でいられるんだよ！？」

「知らない。おれっち、最初からこういう人間だも〜ん」

おちゃらけた声で言い返されてしまった。

お互いの不幸話合戦をしている間に、除雪車が救助にやってきた。「今日はこれで5回目だ。輸送車を掘り出すのは！」

運転手が嫌そうに叫んだ。

実際、雪は延々と降り続き、除雪が追い付かず、配達も除雪作業も『予定の半分も進んでない』という。

輸送車が、除雪車とともに動き出した時、先輩が腕時計を見て、

「あ」

と声を上げた。

「何ですか？」

「もう新年になってる」

先輩が時計が二人に見えるように、後ろに腕を向けた。
0時36分。

「カウントダウンしなかったのは今年が初めてだ……くそっ」

先輩が悔しそうな声を発した。

「ワイン飲まないの、今年がはじめてだ」

イアソンがつぶやくと、先輩がきつい目で後ろを振り返り、

「お前、今いくつだ？法律違反だぞ」と怒りのこもった声で言った。

「遊び人だもんねーイアソンちゃん」

ヘイツキがふざけた声で言った。イアソンは苦笑いするしかなかった。

2-31 ヘレン ケレス カナデ 預言者イェン アケパリ

ヘレンはアケパリのアンジ家の別宅で、仲睦まじいアンジの家族らと新年を迎えていた。

アンジの家は、典型的な古代アケパリ風の木造家屋で、どの部屋にも新年を祝うためのしめ縄やもちが飾られていた。

応接間に集まった家族と、ケレス、ヘレンの前には、いかにもアケパリらしい、蔦模様の食器にもられたごちそうとが並んでいる。テーブルではなく、床に座って食べられるように、低く小さな机が人数分並んでいる。子供が座る側と、親が座る側に分かれていて、両者が向かい合うように席が配置されている。この国独特の食卓の配置だ。

派手な着物を着たカナデの母親（この人はイシュハ人なのだそうで、一人だけ肌の色が薄い）と、動きにくそうな黒い装束の父親が向かいにいて、どちらも企業の宣伝のような笑みを浮かべていた。カナデだけではなく、ヘレンとケレスも、借りた着物に着替えていた。

「ヘレン」となりのケレスが、小声のイシュハ語で尋ねた「今まで、新年、どうしてたの？」

「何もしないわ」

「何もしない？」

「いつも通り。気が付いたらカレンダーが変わっているの」

怪訝な顔をしているケレスに、カナデが近づいてきて、

「イシュハ語は禁止です。5クレリンいただきまゝす！500円でもいいよ？」

と言いながら、にこにこ笑いながら手を差し出した。ケレスが舌打ちした。

ヘレンは一人考える。

どうして私だけ、大統領の外国訪問に連れて行ってもらえなかつ

たんだろう…？

やはりリュエフのせい？

それとも、私が頭のおかしい子だから……？

そうだ、きっとそうだわ。

「ごはん食べたなら、堂家に行こう」

カナデがそう言うのと、暗かったヘレンの顔に赤みが差した。

文通相手の円に会いに行けるのだ！

「堂家？」ケレスが怪訝な顔をしたが、すぐに何か思い出したようだ「ああ、円ね。あんた、正月から敵対している政党の党首の家に行っていいわけ？」

「あいさつくらいするのが礼儀。それに、私と円は友人だから何も問題はない」

何も問題はない……はずだったのだが、ケレスは食事と一緒に出された酒に酔って寝込んでしまい、結局、カナデとヘレンだけで堂家に向かうことになってしまった。

アンジの家とほぼ同じ大きさ（デザインもほとんど同じだ！）の堂家にたどり着くと、冷ややかな目の使用人に迎えられた。あとを追って中に入ると、まっすぐな、両側に障子戸がどこまでも続く、長い長い木張りの廊下を抜けて行く。古風なランプがところどころに下がっていて、なんと、電気ではなく、ろうそくの火がともっていた。

まるで、別世界へ続く橋わたしのようだと、ヘレンは思った。

使用人は、二人を一番奥、桜の模様が入った戸の前に案内すると、一礼して去って行った。カナデが、あいさつもせず扉を開けた。

古代のような、地面をうねるほど長い黒髪の女が、文机に向かって何か書いていた。

「円。ヘレンが来たよ」

カナデの声で、ふり返ったのが、この家の娘であり『予言者』とも言われているイエン・ドー（堂円）だった。

目は細長く、アケパリですら古風すぎるのではと思えるような、

古い民族衣装を幾重にも重ねて身につけていた。堂家の一派は保守派、アンジの家は革新派だ。その違いが服装に現れているようだ。

ヘレンは最初、この『古代から出てきたような』女が怖かったのだが、すでに文通していて、お互いの趣味を知っていたため、意外と話は弾んだ。

マニアックなロンハルト語の話をしている二人を見ながら、カナデは、

「ヘレンがこんなにしゃべるの、初めて見たんだけど」

自分は話に入れないので、横で苦笑いしていた。

「あなたはもうすぐ、管轄区の予言者と出会おうわ」

イエンがふと、ヘレンにこんなことを言った。

「予言者？」

「人間、または神が、行いを間違えている時に、警告をするために地上に現れる。私と、あと数人いる。そのうち一人は、あなたの近くににいるわ」

「本当？」

ヘレンが興奮気味に叫んだ。こういう神話じみた話がヘレンは大好きだ。事実かどうかは問題ではない。空想の余地があればなんでも楽しい、それだけのことだ。

「覚えておきなさい」イエンが難しい漢字の並んだ本を開いた「予言者が何人も現れると言うことは、それだけ世の中が間違った方向に進んでいるということ。警告するのが私たち予言者の役目。でも、実際に世の中を変えるのはその他大勢の、そこらへんの人間の役目……政治に似てる。駄目な指導者が警告を間違えると、全員で地獄へ直行」

「誰に言いたいのかそれ」

カナデが苦笑いした。

「あんた以外にだれがいるの」

イエンがカナデを見上げて、せせら笑うような顔をした。

ヘレンが『駄目な指導者』と聞いて思い出したのはもちろん、父

親だ。

イシュハはおかしいんだわ。そうに決まっているわ。

「予言者が正しいとも限らない。ヘレン。見つけたらあなたが自分で判断しなさい。何が正しいか。予言者だろうと何だろうと、警告は参考にしかない。最終的に向かう方向を決めるのは自分よ。行く先が天国だろうと、地獄だろうとね」

「それってさ、予言者が存在してる意味あるの？どっちに転ぶかわかんないならさ」

「あなた、私にケンカを売るつもり？」

「いいえ？素朴な疑問ですけど？」

「二人は昔から友達なの？」

ヘレンが、皮肉を飛ばし合う二人の間に割って入った。

「生まれた時からね」

「因縁だね」

イエンとカナデがそろって苦笑いをした。二人は全く違う顔立ちだが、この時だけ、姉妹に見えるくらいよく似ていた。

2-32 イアソン ケレス ヘレン カナデ 図書館

冬の休暇が終わり、テリーとレーナ、他の学生たちが寮に戻ってきた。

試験があるので、イアソンは図書館で勉強していた。ローローデンでは仕事に追われて全く勉強できなかったのも、その分も取り戻さなくてはいけない！

と、ヘレンが友達と一緒^{カナデ}に歩いているのを見つけた。

イアソンはあわてて立ち上がり、ヘレンに向かって走っていった。しかし、イアソンの弱点を知っているカナデが、

「これってあんたのおかあさまうだよね」

ファッション雑誌の表紙にでかでかと載っている『ほぼ宝石しか身につけてない』ミス・ベリルの写真を、にやにやしながら突き付けた。

イアソンはそれを見たたん、真っ青になって、ふらふらと後退し、棚の奥に行ってしまった。

……なんだ、あのアケパリ人は！！わざとやってるな！

本棚にもたれて、怒りをおさえようと目を閉じた。

それにしても、なんなんだあの雑誌は！どうしてあの人はこんなことをするんだ？子供が見るかもしれないとか、考えないのか？

いらいらしながら本棚の間を歩くと、そこには、きつい目つきをしたケレスがいた。

イアソンが無視して奥に進もうとすると、ケレスがついてきた。

「法律の試験でディベートがあるから、議論の練習に付き合ってよ」「そんなの友達とやればいいだろ」

イアソンが力なく言い返すと、ケレスはますます厳しい声になった。

「あのね、あいつらは、民法が法律だってことも知らないわよ！」
「……言ってるね」イアソンは立ち止まった「あのアケパリの変人

は？」

「あいにく法律を専攻してないの。政治専門」

「政治やる奴が法律知らなくていいのか？」

「とにかく、手伝ってよ！……私はあるたの母親には興味ないわよ。議論の相手が欲しいだけ」

そのケレスの言葉で、嫌々ながらもイアソンは、議論の相手を引き受けることにした。

2-33 ヘレン カナデ 図書館

ヘレンは図書室で、ぼんやりと昔の神話をめくっている。大好きなノレーシュのものだ。

「神話に興味あるのーかー？」

とカナデが聞くと、ヘレンはまるで学者のように、流暢に説明を始めた。

「500年に一度、神話が再来するとノレーシュ人は信じているの。カーリーが人間の女に双子を産ませ、そのうち一人は悪い子だから、女神ファナティが『殺せ!』と命じて雷と共にカーリーを地上に突き落とす。カーリーに恨みのあるフレイグが、彼を追って地上に降りて来る。カーリーは泣く泣く息子の一人を殺し、その恋人も殺そうとするんだけど、女神アニタはそれを邪魔するの。フレイグがアニタのもとに帰ってきて、ファナティの話を報告すると、アニタは二人を憐れんで、殺された息子の魂を探し出し、恋人のもとに送り返してあげる……」

「そういうはなしーを信じる？」

「素敵だと思っわ。実際、500年前にこれに似た事件があったの。ちょうどイシュハが建国されたところに。だからそろそろ、また同じことが起こるはずだわ」

ヘレンがうきうきした様子で立ちあがった。

「もっと詳しい本があるはずよ、たしか500年前のものがこの図書館にもあるはずだわ! 持ってくる!」

ヘレンは、500年前の資料を取りに奥の棚へ走っていった。

カナデはその後ろ姿を見ながら、

長い話になりそうだな……。

心の中で呟きながら、ヘレンの向かいの席に座った。

こんなふうに仲良くしゃべってられるのも、あと数年……。

カナデにはわかっていた。自分たちの運命が。

時間は常に限られているということが。

2-34 ミス・ベリル クラハ・メイシン ポートタウンの館

ポートタウンの館。昼間。

ミス・ベリルは、黒いガウンを着たまま眠りこんでいた。

誰もいない部屋、何もない空中。

ふと、男の姿が現れた。

館の幽霊だ。

彼は、眠っているミス・ベリルの枕元にひざまづき、愛しげな表情で髪をそつと撫でた。

そして、耳元に向かって何かささやいた。

その瞬間にミス・ベリルが目を覚まし、幽霊の姿は消えた。

『リリック』が跳ね起きてまわりを見回した。

もちろん、誰もいない。

……確かに、今、誰かの気配がしたのに……？

沈んだ気分で、ガウン姿のままふらふらと一階に降りると、ちょうどクラハが買い物から帰ってきたところだった。

ブランドの名前が大きく入った紙袋をいくつも抱えている。

「何だよ、それは」

「セレブなんだから！ちゃんとしたブランドのバッグを持って！」

クラハが、有名ブランドのロゴが印刷されたバッグを、ミス・ベリルに向かってかざした。

「まだあきらめてなかったのか」ミス・ベリルは深い深いため息をついた「出歩くときは両手を開けておきたいし、自分より目立つものは持ち歩きたくない」

「あら？そうですの？」クラハは不満そうな顔でバッグを紙袋に押し込んだ「じゃ、私が保管してますから、気が変わったらいつでも言ってくださいね」

……どうせ全部自分で使うくせに。

「変な夢見た」

平坦な声で『リリック』がつぶやいた。

「変な夢？」

「エブニーザが『イアソンは戻ってこないんですか？』って……」
「まあ」

大げさに驚きながら、クラハは考える。

あの幽霊は、ご自分の子に会いたがっているのだわ……それとも
ただの夢かしら？

「夢の中まで敬語」

『リリック』がさみしそうに笑った。

外はまだ雪が積もっているが、木々の芽が膨らみだしている。
春は近い。

囚人11番 25番 独房

数カ月ぶりに、25番が掃除をしにやってきた。

どこから手に入れたのか、薄汚れたマフラーを二枚首に巻きつけていて、そのうち一枚を私にくれた。

「毛布の奪い合いに巻き込まれてね」

25番はくしゃみをしながらそう言った。

「凍死者は独房の方が多いつて聞いたから、あんたももう死んだんじゃないかと思ってたんだ」

「あいにくまだ生きてるよ」

「あんたは恵まれてるよ。11番」

25番が、お説教のような調子で言った。

「大部屋がどれだけ悲惨か知ってるか。俺の部屋は弱々しいジジイだらけだからいいがな。若いもののほうじゃ、食いものも毛布も奪い合いになって、弱い奴はほとんど食事もできずに弱って死んでいくか、変な趣味の奴に夜中に襲われるらしい。みんな気分が沈んでいくか、逆にすぐ興奮して、些細なことで、死ぬ寸前まで殴り合うようなケンカになる……」

確かに、私は、自分が特別扱いを受けていると感じてきた。

その理由にも、心当たりがあった。

しかし、今更独房から出て大部屋に入れと言われるくらいなら、首をつって死んだ方がましだ。

いや、私の事はどうでもいい。

続きを聞かせよう。

3-1 イアソン テリー 男子寮

半年が経過し、また夏が来た。イアソンがこの学校に来てから一年経ったことになる。ちょうどあの、異様な暑さがまた始まるころだ。

「一年で三学年上がるなんてすごいじゃないか。」暑さで顔が赤くなったテリーが、イアソンの試験結果を覗きこんで叫んだ「上級学年だ。中級をまるまる飛ばしたね」

イアソンは誇らしげに笑ったが、本当はヘレンのことで頭がいっぱいだった。去年から、彼女の周りの人間も警戒しているのか、学校の敷地内でヘレンの姿を見かけることすらなかった。彼も、わざとらしく女子寮の周りをうろろするのは嫌だったから、すっかり何もかも忘れたようにふるまっていたけど、本当は今すぐにでも彼女に会いに行きたかった。

こんなに近くにいるのに！

「ヘイッキも上級に上がってるし、おもしろくなりそうだね」

「……おかげで楽しみになってきたよ」

イアソンは皮肉を言って苦笑いした。今度からヘイッキと同じ教室！選択科目は違う（ことを祈る）から毎日一緒ではないだろうが、どうも憂鬱で、かつ愉快でもある。

「それに君、ずいぶん背が伸びたじゃないか。うらやましいな」

今、イアソンはテリーを胸のあたりに見下ろしているのだった。

「そういえば……そうだね」

「ひざが痛いって言ったのもそれだよ。急に伸びたからそうなるんだ。いいなあ。僕一回体験してみたいなあ。背が伸びる痛み」

「やめてくれよ。眠れないくらい痛かったぞ。しかも冬で、部屋の暖房は壊れてるし、しかもヘイッキの役に立たない『痛み止め』まで飲まされて。何だと思う？」

「風邪薬か何か？」

テリーはもう何回も同じ話を聞かされていたのだが、とぼけて質問した。

「観葉植物の葉っぱだったよ。どこかの部屋からむしってきたらしい。葉っぱだぞ？」

怒りをぶりかえしているイアソンに、テリーは苦笑いした。

「それに、あのさ、深く気にしないでよ」テリーが言いにくそうに言葉を切った「目の色が、変わったよね」

「目の色？」

「まだらに灰色になってるよ。普通の灰色じゃなくて、ちょっと変わった、白っぽい、前に聞いただれかの目みたいになさ」

「なんだって!？」

部屋の洗面台まで飛んで行って、ひびの入った鏡を覗く。そこには、青と灰色、いや、色が抜けたような白い斑点の交じった目をした、彼の良く知っているあの顔が、つまり、館の幽霊そっくりのあの顔があった!

それは一年前よりもさらに、エブニーザそのものになった自分の姿だった。

恐怖のあまり鏡の前に立ちつくしていると、後ろでどさっと、何かが倒れる音がした。

振り返ると、テリーが床に倒れていた。

「おい、どうした？」

「いや、ちょっとめまいがして……」

テリーは立ち上がろうとして、もがくように手を奇妙に動かしていた。

3-2 ヘレン レーナ ハイッキ 女子寮

世話好きのレーナはこの学校ですっかり『変人』にも『乱暴者』にも『自分こそナンバーワン病』にも慣れていたが、最近現れた『ヘレン気違い』の男たちには驚いてしまった。

よりによってこのぼんやりした子をよー！

そう思いながらも、ヘレンが妙に男の子たちに目をつけられる理由もわかる気がする。

大統領のお嬢様っていうのもあるかもしれないけど、それだけじゃない。

ヘレンはあいかわらず、周りをまったく気にせずにぼーっと林を散歩したり、そのへんに植えてある花や木に見入ったり、ノラネコを追いかけて校舎の裏を走りまわったり、時には芝生に寝転んで空を見ていたりする。その様子が奇妙で、時に神秘的なのだ。空や花とにかくヘレンがぼーっと何かに夢中になって歩いているのを、何人かの男の子が遠くからじっと見ている……そんな場面にレーナは何度も遭遇した。彼らの気持ちはわからないでもない。何かに夢中になっているヘレンは、妖精のように可憐だ。

恋する女は美しいのよね。でも、相手が人間じゃないけど！

どうしようかなあ。

それにイアソン。どうしたんだろう？ 気が狂ったみたいにヘレンのことばかり話して。予言で見たとかテリーには言ってるらしいけど。

でも駄目だわ。ヘレンがあんなに怯えてたんだから！ 本人が嫌がってちゃしょうがないよね！ 近づけないようにしないと！

レーナは勝手に決定した。

ヘレンは最近、やたらに近寄ったり話しかけてきたりする男の子たちにうんざりして疲れてしまい（ヘレンは話しかけられるのも苦手である）授業が終わると文字通り『全力疾走』で部屋に逃げ帰っ

てしまう。しかし、その、必死で走るヘレンの姿がまた、かわいらしい子供のようで人目をひいてしまうのだ。

今日のヘレンもいつものように、疲れ果てて床に寝ころんでいる。

「あなたって、男の子に興味ないの？」

「ないわよ、邪魔なもの」

邪魔、ねえ。きついわね、まあ、いいか。男大好きとか言われても困るし。

レーナがそんなことを考えていると、玄関ベルが鳴った。

「ヘイッキチャンネルー!!」

ふざけた男の声がインターホンから響く。

「今忙しいから帰ってくれる？」

レーナが冷たく言い放つ。

「いやん！冷たいっ！」ヘイッキは全く気にしていない様子だ「ヘレンに本を返しに来たんだってば。あけてちょ」

「本当にそれが用事？」

「本、貸したわ」ヘレンが起き上がった「入れてあげて」

「……しょうがないねえ」レーナは嫌々ヘイッキに話しかけた「入れてあげるけど、今そこにいるの、あなた一人？」

ヘレン目当ての男たちを、もちろんイアソンも含めて、レーナは警戒している。

「一人よもちろん」

しばし迷って、レーナは解錠ボタンを押した。

ヘレンが立ち上がって近寄ってきた。手には最近お気に入り、緑色の石を握っている。

「ヘイッキ、おもしろいのに、どうしてみんな嫌いなのかしら？」

「まさにその『おもしろい』が問題なんじゃないの？」

なぜほかの男が駄目、よりによってあの『ヘイッキおじさん』と仲がいいのか、レーナにはヘレンがさっぱり理解できない。

悪い奴じゃないけど、どうもなあ……。

数分後、ドアの外から『いれてちょ』という例の声がした。

「カギ、開いてるわよ!」

ドアが開いた。古ぼけた本と、手帳を持ったヘイッキが現れた。

「いやー! 涼しいなここ! こっちは暑くてたまらないのよ」

汗まみれのヘイッキはともうつとおしい。

「あ、そう」

早く帰ってほしいなあといいながら、レーナは腕を組んで立っている。

「本、ありがとう。おかげで今度の試験も完璧よん」

ヘイッキが両手でうやうやしく本をヘレンに差し出した。

「この学校の環境学、難しい?」

ヘレンは環境学を以前の学校で履修したので、ここでは取る必要がない。

「難しくはないよん。ただ、先生がジジイだからテンポが最悪。子守唄ね」

「ふうん……」

ちよつと、こいつと世間話しないでくれない? レーナはそう言いそうになったが、ふと、この二人は似たようなのんびり体質なのかもしれないと思う。

「それとレーナたん、氷もらっていい?」

「自分で買いなさいよ! 売店にあるでしょ!」

「さっきから冷たいなあ。テリーが熱出したのよ」

「え? そうなの?」

レーナの態度が豹変した。

「ただでさえ暑いのに熱なんて出すからもう、暑過ぎて死にそう」

「あとでお見舞いに行くわ、ちよつと待ってて」

レーナが氷を取りにキッチンに向かった。

「ヘレンちゃん、イアソン君って知ってるでしょ?」

レーナがいなくなった隙に、ヘイッキが『本題』に入った。

ヘレンは昨年『テリーのルームメイト』に追いかけられたことをすっかり忘れていた。あれから別な男たちにも追いかけられたので、

記憶が紛れてしまったのだ。

そういえば、レーナが気をつけろとか言ってたような……？

「そう？彼は君の事をよく知ってるみたいなんだけどね。最近夢まで見ちゃって大変らしいのよ、なんせ彼らはお年頃だから」

「ふざけてないで早く持って帰ってよね！」

レーナが戻ってきて二人の間に割って入り、ヘイツキに氷の入ったやかんを押し付けた。

「ありがとレーナ！」

言いながら、ヘイツキが部屋を飛び出した。廊下から女の子たちの悲鳴が聞こえた。レーナは深い深いため息をついた……。

3-3 イアソン テリー ヘイツキ レーナ カナデ 男子寮

イアソンは、ベッドで死んだように眠っている赤い顔のテリーを見ながら、昔、自分が高熱を出したときのことを思い出していた。

いつものように放り投げられたっけ。

それは彼がもっと小さいころの冬の話で、雪の上に放置されていたイアソン（いや、まだ『ウェストン』だったが）を発見したのは、あの隣の老人だった。自分の部屋にイアソンを引きずりこみ、何を思ったのか酒を飲ませ、よけいに彼の高熱を上げてしまったのだった。

『あんた何を考えんのっ！子供にこんなもん飲ませて！』

近所の母親の怒鳴り声を聞きながら、彼はうつすらと笑ったものだった。母親についてきた、歩けるようになったばかりの小さい子が、自分の顔を大きな目で覗きこんだ。目が合った。この瞬間だけ、二人は兄弟だった。

自分を心配してくれる人間がこんなに（といっても2、3人だが）いる！

『だってよお、酒であつたまるじゃねえか普通は、人間はよ』

あの声が今でも聞こえてくるようだ！

「おまたっせ♪」陽気なヘイツキが入ってきた「やかに氷入れてくれるなんて、レーナったらやさしいというかなんというかね」

「いい人だね」イアソンは、やかんをそのままテリーの頭の上に乗せようとしたヘイツキを制止した「それでさ……いや、何でもない」「わかってますよ。お嬢様でしょ？お元気ですよ。部屋で昼寝なさってたらしいよ」

「あ、そう」

「ヘイツキ」テリーが起きた「悪いけど水、持ってきてくれない？」
「あいよ」

ヘイツキが外に出ていった。

「大丈夫か？」

「熱くないなんでもないよ。来週までに治さないとパーティーに出られない」

「出るの！？」

イアソンは驚いた。

テリーは人の集まるところが嫌いだから、てっきり欠席だと思っていたのだ。

パーティーとは、この学校の生徒（のうちの上流階級の子供たち）と、各界の大物、なんとイシュハの大統領までが出席する、年に一度のビッグイベントなのだ。去年イアソンが来たのはそのパーティーが終わった直後だった。

「出るよ。なんせ会場が『セントエルイエツエラカロ・ケルレッシズイエスパカルビルシモウツトキャ号』だよ？100年前の伝説の豪華客船がそのまま改装されて大ホールとしてだね……」

「ああわかった。船上だった。わかったよ。早く治せ」

船の長ったらしい名前に拒否反応を起こすイアソンだった。そして、彼自身はこのパーティーには行かないつもりだった。

この夏は一年ぶりに、ポートタウンのあの館に帰るのである。帰る、か。半年くらいしか住んだことないけどな。

冬はヘイッキとローローデンに行ってしまう、館には帰らなかった。

今度こそ、ゆっくりとあの館や、そこに住む人、特にミス・ベリルと話す機会を逃さないようにしよう。

イアソンはそう心に決めていた。もう、人の噂なんかどうでもいいという気分、最近になってようやくなったのだった。

どうせあいつらは何も知らないんだ！

「イアソンは来ないの？パーティー」

ヘイッキが戻ってきて、持ってきた水の入ったグラスを机に置き、やかんから取り出した水をそのままテリーの頭に乗せた。看病しに来たのかいたずらしに来たのか、よくわからない男である。

「行かないと思うけど、まだ決めてない」イアソンはグラスをテリーに渡した「まさかヘイッキは行かないだろうな？」

「おれっち行くよ」

「何しに？」

「アルバイト。ウェイターやるから見かけたら声かけてちょーだい」
「行くかまだわからないけど興味がわいてきたよ」

「あんたたち！せっかく氷あげたのになんて使い方を！」

ドアがいつの間にか開いていて、怒り顔のレーナとカナデが立っていた。

「おや、アケパリのお嬢様も来てくれたのね」

「おまえーはじゃま」

カナデもヘイッキが苦手らしい。露骨に嫌な顔をしている。

「じゃまはないじゃない、じゃまは。それよりテリー君がお待ちかね」

「ヘイッキ！」赤い顔のテリーが叫んだ「静かにしてくれない？レーナ、来てくれたのはうれしいけど、風邪がうつったら困るから帰ったほうが」

「そういうこと言わないの」

レーナはテリーの頭に乗っている氷をすぐ取り、持ってきたタオルで彼の顔をふいた。

イアソンは二人の様子を黙って見ていた。一体レーナとテリーの関係はなんなのだろう？

そこで思い出した。最初にテリーに会ったときに見えた彼の奥さん……たしか太ってたな。大人になったテリーの二倍くらい体積があったような気がする……。

イアソンは、目の前の、やせぎすのレーナを見ながら『この二人いつか別れるな、そもそも付き合っているのかな？よくわかんないな』と思った。

ふと横を見ると、カナデがイアソンを、何か意味ありげな目で見てにやにやしていた。

「何？」

「きみーは予言者だね？」

「何だって？」

思いがけない言葉に驚くイアソンにカナデが近付いてきて、手に持っていた扇で口元を隠しながら、彼にしか聞こえない大きさの声で話し始めた。

「私の友人に同じような予言者がいる。お前の事も彼女から聞いたのだ。ヘレンを追いかけているんだろ？」

「何の話？」

言葉がわからないのかと思っていたカナデが流暢に話し始めたのと、話している内容に心当たりがあることが、イアソンを混乱させていた。

その時、一瞬だが、イアソンの目に、長い黒髪の女が見えた。見たことがない形、柄の長い服と、手元の扇子、うつむいていて顔はよく見えない。

……わかったぞ！アケパリの予言者！ヘレンの文通相手だな！

「彼女の予言だと、お前の運命もかなり過酷だ」

「何だって？」

「『朽ちた手』が見えなんだか？」

一番見たくない光景が、イアソンの目の前にまざまざと映った。白茶けた土の上で、干からびて骨がむき出しになっている、人間の手。

いや、かつて手だったもの。

「話したくないようだな。まあいいわ、そのうちわかる」

「帰ってくれ」

イアソンはカナデを睨みつけてそう言おうとしたが、声がうまく出なかった。

「我々も長い付き合いになりそうじゃ……」

フフ、と妖しく笑って、カナデはレーナのほうに戻った。

「なんかー食べるもの買ってくるかー」

発音が雑に戻った。

「いいよそんなに気をつかわなくても」

テリーが消え入るような声で言った。具合が悪いのか恥ずかしいのか、毛布にもぐりこんでしまつて顔が見えない。

「暑くないの？こんな日にそんなものかぶつて」

「暑いけど、寒気もするんだ」

「それ、よくないわね……」

「お医者ちゃんに行ったほうがよくない？」

ヘイッキがめずらしく真面目な声で言った。

「もう少し様子を見ましようか、ヘイッキ！」

「様子見てろつてんでしょ？わかつてますよ」

レーナはどうして自分に話しかけないんだろう？

イアソンは思った。ヘイッキよりよっぽど病人の事を理解している自信があるのだが。

もしかして、去年の事をまだ怒っているのか？

「じゃあ私帰るから。何かあったら携帯に電話して」

「ありがとう」

「またくるよー」

部屋を出る時、カナデがイアソンに向かって、また不敵な笑いを浮かべた。

何なんだあれは。アケパリの予言者？何が言いたいんだ？運命つて何だ？

「気にしないんだよ」

声がしたので見ると、テリーが毛布から顔を出して、イアソンを見て笑っていた。

イアソンは驚いた。話が聞こえていたのか？

「何の事？」

「何でもない。熱で頭がおかしくなってるかなあ」

テリーはまた毛布にもぐつて、そのまま眠ってしまった。

3-4 イアソン ヘイツキ 男子寮

ヘイツキは夜も二人の部屋にとどまっていた。

「もう自分の部屋に帰れよ」

「やだもん。おれっちレーナに命令されてんだもん」

「レーナはお前の何だ!？」

テリーはずっと目を覚まさなかったが、彼ら二人は夜通し起きていた。全く眠くならない。二人ともそれぞれ考えることがあったのか、無言だった。

「どうしてトウーサン君はあんなに穏やかなんだろうね」

真夜中にふと、ヘイツキがつぶやいた。テリー本人は死んだように眠っている。部屋は暗い。ヘイツキが持ち込んだ懐中電灯と本が、闇に妙な形の影を浮かび上がらせている。

「さあねえ、生まれつきかな。それともロン……なんだっけ? 別な国の気質?」

「ロンハルト人はみんな古風で頑固らしいよ。妙に美意識が高いというか、悪趣味なの」

「悪趣味?」

「キラキラしたものはたいていロンハルト趣味なのよ。宝石とか、ドレスとか、社交界とかね。あと香水と美女も、ね。最近はロンハルト移民の多いキュプラ・ド・エラがそのロンハルト趣味の本拠地ってわけ。でもテリーちゃんはそういうの好きじゃなさそうね」

キュプラ・ド・エラは、管轄区の西にある国で、カーリー・フェイウという神をあがめている国である。カーリーは肉体が男性、心は女性と言われ、その影響で、キュプラ・ド・エラは、同性愛者の方が数の多いマジヨリティだ。

「よく知ってるね」

「おれっち移民の専門家なの」ヘイツキがえらそうに言った「おれっちの仲間はみんな移民か難民よ。国ごと爆弾がふっ飛ばしちゃう

たもん」

「前にも聞いたな、それ」

二人ともまた黙り込んだ。夜だというのに気温が下がらない。汗が二人の頬や背中を流れていく。

「そうだ！思い出した！」

イアソンが突然大声を上げた。

「何を？」

「ヘイッキ、お前の発音だよ！どこかで聞いたことがあると思ったら、昔隣に住んでいたじいさんの発音にそっくりだ。競馬が好きな」「ふうん。その人きつと吹っ飛んじやった国の移民なんじゃない？」ヘイッキはなぜか最近、自分の祖国の名前をはっきり言いたがらない。

「そうなのかな？昔の事はほとんど話してくれなかったけど」

見事に馬と、食べ物の話しかしなかったなと、イアソンは、かつて『ウェストン』と呼ばれていた当時をなつかしく思い出していた。なにせ、彼は老人がなんという名前なのかすら知らないまま、別れてきてしまったのだ！

親より長い時間一緒にいたはずなのに。そういえば、あの町の人にはだれも、あのじいさんの名前を呼んでなかったな……だれからも『じいさん』『じい』『おっさん』あとは何だっけ？『ペテン師？』『ケチ』『詐欺師』それは競馬場の連中だけか……。

「サボテン持ってた？その人？」

「サボテン？」イアソンは老人の玄関のサボテンを思い出した「ああ、持ってた。何で？」

「サボテンはあの国の国民そのものだから」ヘイッキが空中をぼんやり見ながらつぶやいた「孤独と乾燥に強く、湿気と過保護に弱い。独立心旺盛。おれっちの地下室にも手のひらサイズのサボテンがあるよ」

「そうなの？」

「でもつらいのよ、話すの」

「だろうね」

「おれっち思うんだけど、テリーちゃんが君をこの部屋に入れたのは、君がイシユハ人じゃないからじゃないのかなーと」

「つまり外国人だからだと」

「そうそう、根拠はないんだけど。彼どうも、イシユハが好きじゃないみたいなんだよね。まあ、おれっちも好きじゃないけど」

「じゃあなんでイシユハの学校にいるんだよ!？」

「奨学金よ。学費は出てるのよ。自分で稼ぐのは食費と本代」

「そっか」

「イアソンはイシユハ好き？」

「好き……って言われても、わからないな」

「そのうち悩むよ。おれっちみたいないな移民じゃなくても、ここにいる人、悩むらしいよ」

「どうして」

「そのうち、わかるよ」

寮は人が少ない。外の敷地も夜中は誰も通らない。完全な静けさが部屋を支配している。

「まるで俺ら以外、だれもないみたいだな」

「実際、だれもないのよ」

「いや、そういう具体的な意味じゃなくてさ、全宇宙に三人しかいなくて、俺らだけがこの闇の中で暑さにあえいでいるような気がする」

「そうね。でも思い出してよね。今頃レーナとお嬢様は、クーラーのがんがん効いた部屋で冷え症になりながら寝てるってことを」

「嫌な話だな」

「そんなもんよ、世の中」

「お前と話すと何でも冗談になるな! 本当に!」

「いいじゃない。世の中真面目に深刻に悲惨すぎるんだから。おれっち一人くらい冗談やってたって」

「あーそうだな! いっそこの世が全部冗談だったらいいんだ!」

イアソンの語気が荒くなる。二人とも暑さに耐えられなくなってきた。

「それよりさ、この暑さの中で毛布にくるまって寝てるトゥーサン君って、どうなのよ？」

ヘイツキがテリーを指差した。テリーは全く動かない。

「まさか死んじやいないだろうな？」

イアソンがそう言うのと同時に、ヘイツキが寝ているテリーの鼻をつまんだ。

数秒の沈黙ののち、テリーが苦しげに『ううつ』と唸ると、眠ったまま寝がえりをうった。

「生きてるみたいね」

「お前……最悪だな！」イアソンは心底呆れて言った「お前が一人部屋でよかったよ！」

「なんで？一番害のない方法だと思わない？病人たたき起すわけにいかないし」

ヘイツキが真面目な顔で言った。イアソンは大声で笑い出した。

夏の夜はこうやって過ぎていく。

3-5 アンデル ハイゼル エブニーザ 男子寮

ヘレンは憂鬱だった。大嫌いなあのパーティーというものにまた出なくてはいけないのだ。しかもそれには大統領も、あの兄リユエフも出席するのだ。学生たちに社交の機会を与えようだかなんだか、そんな名目で。ヘレンにとってはただの迷惑でしかないが、学校中の生徒はこのパーティーのことで頭がいっぱいだ。

「ケレスなんか、セカンドヴィラで新しいドレスをかうって。お父さんの許可が出たとか。カナデは本国からあの、新しい、なんだったっけ？」

「キモノ？」

「そうそう！」レーナが朝食用にハムを切りながら言った「キモノを取り寄せるんですって。ちょっとした戦いになるかもね」

「レーナは」

「私、行かないわよ、実家に帰るもの」

「えっ」

ヘレンは手に持っていたパンを落とした。顔が真っ青になる。

「ヘレン」レーナが苦笑いしながら言った「あなたも、行きたくないんだっいたらはっきりお父様にそう言うべきだわ」

「何度も言ったわ！手紙出したけど読んでくれないもの！」

「じゃあ、強硬に行かないとか、部屋から出ないとか、その日だけ失踪するとか」

「簡単に言わないで！」

ヘレンが泣きそうな顔で叫んだので、レーナはそれ以上しゃべるのをやめた。

3-6 ケレス セカンドヴィラ

「今回は……ヘレンが主役かしらね？」

セカンドウィラ。北イシユハの中心地にて、真っ赤なドレスを試着しながら、ケレス・ヘスティアはつぶやいていた。あれほど嫌いだった『大統領のお嬢様』だが、実際に『ヘレン』という個人として一年つきあった結果、すっかり同情の対象になっていた。いや、正確に言えば『恐るるに足らない』と言うべきか。

ヘレンを前に出して、サポートに回ったほうが、後々のために印象がいいかもしれないわね。だからって地味な格好なんかしないけど！

胸元の大きく開いた、大きくフレアーの広がった真っ赤なドレスに、大粒のガーネットを使ったピアス。ケレスは宝石が大好きだ。偉大な人間になるためには見栄えが欠かせないことを知っていた。人々が中身の誠実より、見た目の美をよく好むことも！

大きく波打った長いブロンド、大きな青い目。鼻が少し高すぎるかしら？ま、いいわ。私は女優になるわけじゃない。政治家になるのだから。口元はいつも完璧！

目の前の鏡を決意を込めた表情で睨む。その姿は神々しいほどだった。まるで女神アニタ・ロウが現れたようだ！

髪は紫じゃないけどね！

「これにするわ！」

試着室のカーテンから顔を出して、ケレスは店員に向かって叫んだ。

見てなさい、リュエフ・シュッティファント！

だれがこの国にふさわしいか、その目で見るがいいわ！

ケレスはあいかわらず、大統領の息子リュエフに敵対心を抱いていた。

そして、闘争心が目に宿るケレスは、まぶしいほど美しいのだ！

3-7 ミス・ベリル クラハ・メイシン ポートタウンの館

「お出かけですの？ 今日イアソンが帰ってくるのに……」

「夕方には戻るよ。それとね……」 不満げな顔のクラハにミス・ベリルが楽しそうに『リリック』の顔で笑いかけた「ヘイゼルの娘の名前、ヘレンっていうんだよ。聞きおぼえないかい？」

「ヘレン……ああ！ もちろん！ 覚えてますよ！ もしかして……」

クラハも意味ありげな顔で『リリック』を見た。

「面白くなりそうだろ？」

ミス・ベリルは、何か企んでいるような意地悪な笑みを浮かべた。

3-8 イアソン クラハ ポートタウン

イアソンが館に帰る日がやってきた。テリーとヘイッキが駅まで見送りに来た。

「隣の町なんだからすぐ帰れるんだよ!」

と言いながら別れたが、短い間とはいえ、彼らに会えないのが予想以上に寂しい。

それに、一年同じ学校にいながら、ヘレンにはほとんど会えていない。

あの、走って逃げて言ったヘレンの後ろ姿だけは、はっきりと脳裏に刻まれていたのだが。ヘレンは、イアソンの事をまるで誘拐犯か何かを見るような目で見ていたのだ。彼はそのことを思い出すたびに苦痛で暴れ出したくなる。

それから、図書室でカナデ・アンジが……ああ! 思い出したくない!

そしてまた考え始めた。どうしてヘレンなんだろう? 確かに彼が物どころついたところからずっと見てきた夢にも似た予言は、みんなヘレンという風変わりな女の子の事だった。

ずっと見えていたけど、だからって恋人になるとは限らないってことか? じゃあなんでヘレンが見えるんだ? でも、最近の前ほどヘレンが何をしているか見えなくなった。そうだ、昔は、森をさまようヘレンや、部屋の中にこもっていたヘレンが、まるで傍にいるように、同時に見えたのに……。

列車の外の景色を眺めながら、そんなことを考える。

あつという間に、列車はポートタウンにたどりついた。

「あ、あら、あら」

駅の雑踏の中から、なつかしいのんきな声が聞こえた。

「ミス・メイシン!」

暑い日だというのに、黒いロングスカート姿で白い日傘をさした、

全く前と変わらないクラハ・メイシンの姿が、そこにあった。彼女の緑色の目は驚きに輝いていた。

「大きくなったのねえ！」イアソンに抱きつきながらクラハが言った「私より背が高くなったんじゃない？ たった一年で！」

「そうですか？」

「まるで急に大人になったようだわあ……」

クラハが何か、遠くにいる人間を見るようにぼんやりした目つきをしたとき、イアソンの背中に何か冷たいものが走った。

きつと、エブニーザに似てると思ってるんだな！ 俺じゃなくて彼を見てるんだ！

彼自身、テリーに指摘されたこともあって、目の色や顔つきがエブニーザに似てきたことを自覚していたのだが、クラハのこの反応を見て、急に館に帰るのが怖くなってきた。

ミス・ベリルは、あの人は、どういう顔をするんだろうか……？

「どうしたの？ ぼけーっとして。暑いものねえ」

「え？ いや、なんでもないんです」イアソンはじつと彼を見つめているクラハから目をそらした「ミス・ベリルはお元気ですか？」

「ええ。仕事も恋も絶好調でウハウハって感じよ」

「……真面目に答えてください」

「あらあ真面目よお」クラハがすねた子供のような声を出した「すごい大物とつきあいがあるのよ。あの人、古い友人でね。二人で何をしてるかは知らないけど。館に彼は来ないから」

「じゃ、ミス・ベリルが出かけていくんですか！？」

イアソンは不愉快になった。ミス・ベリルが男のところに通う、そういう光景は、彼にとってあまり見たいものではなかった。

いや、男が館に来るのだって嫌だけど……。

「そうそう。で、明日パーティーがあるのよね。その方主催の」

「明日？」

イアソンは顔をしかめた。大統領のあのなんとか号のパーティーも明日だ。

大統領とエブニーザは友人だった。

もしかして……。

「あなたも行くことになってるらしいわよお」

「えっ」

「お相手の方があなたに会ってみたいって言うから。もう承知しちゃったのよ」

「どうしてそういうことを勝手に決めるんですか！」

「いいじゃないの！さ、乗って乗って！」

駅前に黒塗りの車が止まっていた。見覚えがある。後部座席に乗り込む。

最初にこれに乗った時は、死にかけていたっけなあ。

イアソンはそんなことを思い出し、今の自分の境遇を不思議に思う。

3-9 イアソン クラハ 館の中

館は全く変わっていなかった。

一年前と同じように庭にさまざまな色の薔薇が咲き誇っていた。中に入ると、かつて女神像があった場所に、かわりに白い大きな花瓶があり、淡い色の大きな花があふれるように飾りつけてあった。

「女神像はあのと、どうなったんでしたっけ」

「シュタイナーの博物館よ。えーと、どこだったかしら？ ザンムルのちよっと北の……いやだわあ、新聞にも載ってあれだけ騒いでたのに、町の名前が思い出せない……」

そういえば、学校でも騒いでるやつらがいたな。

イアソンは、図書館でのあの不愉快な出来事を思い出した。そして、ミス・ベリルのことも。

「まだ寝てるんですか？ ミス・ベリルは」

「いいえ、出かけてるのよ。たぶん例の方のところに」

「いいかげんその男の名前を覚えていただけませんか？」

「いやだあ。有名すぎるもの。本人に聞いて」

なぜ有名だといけないのかよくわからないが、イアソンがそれ以上聞く前に、クラハは部屋を出ていってしまった。

あいかわらずだ、あいかわらず……ベッドに天井がある！

イアソンは一年ぶりの豪華なベッドに倒れこみ、仰向けになって、女神と天使を眺めた。

夕飯までに時間があるから、少し眠ろうと思ったのだが……。

……寮のベッドで十分眠れるのに、一体この天井に何の意味があるんだ？

今のイアソンには、目前の芸術作品が単なる『ムダ』にしか見えない。

天蓋の女神ファナティはいつもかわらずそこに立ち、手には水晶を持っている。

イアソンは思い出したように、胸元のポケットからあの、『予言者の石』の入った白いケースを取り出した。

こんなものを一年間、持ち歩いてたんだな。

その金色の輝きを、目の上にかざした時、彼は何か、そこに映るはずのないものを見た。大きな広間。くるくると回る着飾った人々。なんだ、これは。

さらに目を凝らす。場面は変わって、白い壁の通路。ああ、これは船だ。海が見える。

そこには椅子がいくつかけられ、小さなテーブルには淡い色の花が飾ってある。

そして椅子に座ってうつむいている金髪の、紫のドレスの女。

あれはヘレンだ！

そして、きつと夜なのだろう。暗闇の、星空の下で、先ほどとは違う、もっと似合う青いドレスを着たヘレンが、彼に向かって笑いかけた。

彼がヘレンの姿をはっきり見ようとさらに目を近づけた瞬間、映像はすべてかき消えた。彼の手元には、妖しい光を放つ、金色の石だけが、あった。

心臓が早鐘のように異常な早さで強く打つを感じた。彼は確信した。

明日だ！明日！あのパーティーだ！ヘレンに会える！とうとう！ケースを元の場所にしまいこみ、服の上から握ったまま寝がえりをうった。しかしもう目がさえてしまって眠れそうにない。

起き上がって部屋の中をうろうろと歩き回り始めた。

落ちつけ！落ちつくんだ！パーティーは嫌いなはずだ、ヘレンは。きつと困惑してあそこに座っているに違いない！

どうする？何て話しかけよう？ああ！

3-10 ヘレン 自分の部屋

紫色……私に似合わないのに。

ヘレンは、明日着てくるようにと届けられたアクセサリーとドレスに幻滅していた。それは、おそらく女神アニタを模したもので、胸の大きく開いたホルダーネックのドレスだった。胸のほとんどないヘレンには似合うはずもない。しかも、顔色の悪い、ばさばさの金髪のヘレンが、この薄い、ラベンダーのような紫を着ると、ほとんど死体のように見えてしまう。

死んだ人に布がかかっているようなものだ、とヘレンは思った。

レーナはもう田舎に帰ってしまった。ケレスもカナデも自分の家から直接会場に来るので、ヘレンだけ、寮に取り残されているのだ。まるで世界でただ一人だけ、置いていかれてしまったかのように。

ヘイツキもいるらしいけど、働いてるそうだから忙しいだろうし、誰も助けてくれないわ。

ヘレンは紫のドレスをつかんだまま、ため息をついた。そして、大粒のアメシストのイヤリングやネックレスには目もくれずに、ベッドに倒れこんだ。

こんなことがいつまで続くんだろう……？

このままずっと、誰かに命じられるまま、大嫌いなパーティーに出たり、人のいるところに出ていかなくてはいけないのだろうか？ヘレンは青い空の夢を見ていた。ターコイズの空。燃えるような夕陽。いつも押されているだけで、自由のままならない風。だからこそ彼女を慰める心地よい風が恋しい。

このまま起き上がらずに済めばいいのに。

そんなことばかり考えているヘレンは、当然、よく眠れない。

3-11 夜の女王

夕方、はりきって作られ過ぎた（クラハの）料理を無理して平らげたイアソンは、具合が悪くなって部屋で横になっていたが、頭は別な考え事でいっぱいだった。

きっと、ミス・ベリルの相手の男は、大統領だ。

そう思うと彼は不愉快だったが、きっと深い仲ではないだろう、と自分に言い聞かせていた。もしそうだったら、これほど嫌なことはない。

あんな男！しかも、ヘレンの父親だぞ！

イアソンが、学校や新聞から知った、大統領の良くない噂を一通り頭で反芻したところ、窓の外から物音がした。車だ。

ミス・ベリル！

イアソンは部屋を飛び出した。広間を走り抜けて玄関に向かう。そこに現れたのは、まるで、一年前に出かけて今日、ようやく帰ってきたかのように、あの日と同じ、金色の糸で花が刺しゅうされた黒いロングドレスとレース、ベリルのブローチを身につけた、女王、ミス・ベリルだった。

夏の夜は私のものだ、と、その周りを取り巻く空気が語っていた。何も知らない人間なら、これがあの『淫靡な趣味』の女だとは夢にも思わないだろう。夜の、厳格な女王の誕生だと、思うだろう。既に闇に包まれた外の世界から、浮かび上がるようにそのシルエットを現したミス・ベリルは、もはや人間には見えなかった。何か、もっと上の世界から降りてきたように見えた。きっと道を間違えて地上にやってきたに違いない。

「おかえりなさい！イアソンも帰ってきてますわ！」

後ろからクラハの叫ぶ声がした。その声にぴくり、と反応するように、すらりと伸びたミス・ベリルの身体が、イアソンのいる方向に、向いた。

彼女の顔は驚愕に満ちていた。目はイアソンの顔を見つめたま動かず、同時に、何か待ち受けた、重大な事実が、彼女の目に飛び込んだような、不思議な光を反射して輝いていた。眉尻が下がり、両手が、何かを求めるように、かすかに動いた。

「お久しぶりです」

イアソンはそれしか口に出せなかった。

ああ、彼女も今きつとエブニーザを見ている！

それを思うとたまらなかった。自分自身を見てほしかった。

「おかえり」ミス・ベリルが低い声とともに優しく笑った「ずいぶん成長したじゃないか」

「一年も経ちましたから。なんせ環境がだいぶ改善しましたし」

「あいかわらず偉そうな話し方だ！」

ミス・ベリルが近寄ってきて、彼の顔を右手で触った。香水のにおいがする。

きっと大統領に会っていたんだ！

イアソンの顔が苦痛に歪んだ。

「どうした？ 私に会うのが嫌？」

拒否された子供のような悲しみが、ミス・ベリルの顔に現れたので、イアソンは慌てた。

「いや、そうじゃなくて」イアソンは赤くなりながらクラハのほうを見た「その、だれか男のところへ行っている、と聞いたので、それに明日の」

「クラハ……」

ミス・ベリルは眉を歪ませてクラハを横目で睨んだ。

「だってえいずれわかることじゃないのお」

のんきな声のクラハに、ミス・ベリルはため息をついた。

「大統領だよ、イシュハの」彼女はあっさりとそう言った「勘違いするんじゃないよ、大統領は客じゃない。ただ、古い友人なのさ、エブニーザの」

「エブニーザと大統領が関係あるんですか？」

「関係あるも何も、親友だったんだよ。学校でいろいろ調べたんだろ？昔のことは新聞でも読んで知ってるだろ、どうせ」

イアソンが固まった。

なんでそんなことを言うんだ、この人は。

「まあ、そんなことはどうでもいい」

ミス・ベリルが二階へ向かう階段を上がり始めた。追いかけてやろうとしたイアソンに向かって振り返り、止めた。

「詳しい話は明日。夕方からあんたはパーティーに行く。知ってるだろう？あんたの学校の連中がみんな来る」

「あなたも来るんですか？」

「まあね」

ミス・ベリルが、不敵な、挑発的な笑みを浮かべた。

あの口さがない連中の中にあなたが来るんですか！？

とイアソンが言う前に、ミス・ベリルは颯爽と二階に消えてしまった。

3-12 ヘレン 女子寮くパーティー会場

ヘレンは子供っぽい抵抗を始めていた。

目が覚めてもベッドから出ず、当然着替えながった。大嫌いな女中やスタイリストと名乗る男が部屋に入ろうとしても、カギを開けなかった。やってきた『大統領の手下』たちが職員を呼んでドアを開けさせ、嫌がって暴れるヘレンを部屋から担ぎ出した時、時刻は既に昼を過ぎていた。寮にいたほかの女の子たちは、まるで誘拐事件でも目撃したような気分になり、しばらくは興奮した面持ちでこの日の出来事を噂した。

「まるで無実の罪で死刑執行される前の罪人みたいだったわ、あの日のヘレンって」

とにかくヘレンは連れ去られた。『セントエルイエツエラカロ・ケルレッシズイエスパカルビルシモウットキャ号』の、上等な客室に連行されて化粧をされたころには、もう抵抗する気力もなくなっていた。皮肉なことに、氣力を失くしてぼんやりしているヘレンの目つきは、かえって彼女を思慮深く見せたのだった。

「パーティーが終わるまで、そのまま、今のままでいてくださいよ！」

『大統領の手下たち』は、一通り準備が終わると、疲れて呆けたような顔をしたヘレンにそう言って、消えた。

きつと、お父様カリユエフのところに行くんだわ。ああ、あの二人から永久に逃げられないのかしら……。

ヘレンは、壊れた人形のようにだらりと身体を椅子から落とし、床に倒れた。

3-13 イアソン ミス・ベリル 会場入り口

ミス・ベリルとともに、遅れて車で会場についたイアソンは、周りの好奇の目が絶えず自分に突き刺さってくるのを感じていた。

「心配しない。私はこのまま奥に引っ込んであの男を探すから」

ミス・ベリルはそう囁くと、好奇心の塊のような若い学生たちを一瞥し、好色な笑いを浮かべながら、船の入口へまっすぐ進み始めた。

彼女は、その完璧なスタイルを見せつけるかのように、ほとんど布地のない、レースに宝石を星のようにちりばめたドレスを着ていた。布地は全く使われていない。まるでダイヤモンドで編んだように見える。その網目から、美しい肉体がちらちらと見える。

彼女の前に立ちあがることはできる人間などここにはいない。ましてや、ここに居るのは年少の学生ばかりなのだ。みな、波のうにさーっと、後ろに引いていく。

ミス・ベリルがそんなふうに颯爽と船の中に消えたところ、イアソンは入口にたむろしている学生が、今度は一斉に自分を見ていることに気がついた。

冗談じゃないな！こんなのは！

たまらなく恥ずかしくなったイアソンは、ものすごい勢いで船の中に飛び込んで行った。

3-14 リュエフ・シュッティファント ケレス 大統領 パーティ会場

数時間後、ワルツが始まった。学生のカップルが数组、踊りだした。

イシュハの大統領ヘイゼル・シュッティファントと、その息子リュエフ・シュッティファント、そして秘書のノーマン・ヘステイアは、学生たちが踊っているのを、一段高い特等席から眺めていた。

「お前は踊らないのか？」

大統領がリュエフに尋ねる。

「僕と踊れるような女がここにいますか？」

リュエフが軽蔑を込めた声で言った。大統領は自分が質問したことを即座に忘れてしまったかのように、興味がなさそうな顔でワインを口に運んだ。隣には、汚辱の象徴のような、全身をダイヤで飾った女、ミス・ベリルが座っている。

この変態女が！

リュエフは心で悪態をつきながら、遠くの、間拔けな顔で踊っているいくつかのカップルを眺めていた。彼はこの会場の誰もを気にいなかった。みな人形にしか見えない、しかも、彼の大嫌いな妹ヘレンが、呆けたような顔で、まるで体型に合っていないドレスを引きずるようにやってきたと思ったら、『頭が痛い』と言ってすぐに会場を出て行ってしまった。最初から来るなど言いたくなる。しかし、彼女が自分の意思で来たわけではないことは彼も知っていたし、父親も別にヘレンを呼びたかったわけではないのだ。側近の判断で、娘がいたほうが絵になるということになったただだった。

つまり、この父親も、他人のいいなりにすぎないのだ！

船ごと海に沈んでしまえばいい！

リュエフは湧き上がる苛立ちを抑えながら思った。

どうせこの馬鹿な人形たちが海に浮かんで終わりだろうに！生きる価値のある人間はここにはいない！どいつもこいつも……。

ワルツの演奏が途切れた。学生の集まりに妙なざわめきが起こった。

会場の入口から、真っ赤なドレスの女が現れた。白や紫、黒のドレスが多い中で、その赤はかなり目立っていた。そして、彼女の金色の髪は、そこだけ特別に照明を当てているかのように輝いていた。みな、ダンスの邪魔にならないよう髪をまとめているのに、その女はわざと乱したように、ゆるやかなウェーブを揺らして歩いている。『うわあ、派手!』という声がどこから聞こえた。『ケレスだ!』という声も。

「ケレス」

リュエフはその声に反応して、じっと赤いドレスの女を見た。彼女は周りの学生が目に入っていないかのように、まっすぐこちらに向かつて歩いてくる。

「すごいぞ、ヘスティア」大統領が驚いたような声を出した「とてもない美人だ」

「私の娘です。とんでもないわがままですよ」ノーマン・ヘスティアが顔をしかめた「私はいつも、もう少し控えめにするようにと言ってるんですよ。なのにあんな派手な格好をして」

「いいじゃないか、似合ってるんだから」

父親に反抗してるな、あの女。

リュエフがニヤリと笑った。ケレスが階段を上がってやってきた。彼女は、大統領も、父ノーマンも無視し、リュエフに向かつて歩いていって、挑発的な視線を送って微笑むと、手を差し出して、こう言った。

「次の曲、テンポが速くて難しいですけど」ケレスは自信満々の笑顔だ「あなたに踊れるかしら?」

その高慢な、ある意味無礼な誘い文句を聞いて、リュエフは妙な興奮を覚えた。よそよそしく、何も知らない癖に人を怖がり、実は軽蔑しながら自分を避けていく『人形たち』とはまるで違う。

彼に向かつて反発しながらも突撃してくる、生きた人間!

ここにいた！生きている女が！目に闘争心が宿る女！

周りの学生はケレスを見て『なんて命知らず！』とささやいていた。なんせ相手はあの冷酷な『リュエフ・シュツティファント』なのだ！

誰もが、ケレスがぶざまに断られるところを想像して、楽しみにすら思いながら、じっと様子を見守っていた。

しかし、リュエフはケレスの挑発に乗った。自らも攻撃的な笑いを浮かべて、彼女の手を取ったのだ。

会場がどよめいた。ノーマン・ヘスティアが「ちょっと待ちなさい！大統領に挨拶をしないのは無礼だぞ！」と言いながら、階段を下りる二人を追いかけようとしたが、大統領が止めた。

「かまわん、こんな面白いものが見れるとは！」

大統領は、どうせあの暗くて性格の悪い息子には、まともな相手なんかいないだろうと思っていたのだ。それと、この平凡な秘書の娘が、予想以上に魅力的であることにも、興味を抱いていた。

ああいう娘がいたらよかったんだがなあ……。

音楽が始まった。テンポの速い、そしてかなり高度なステップを要求される曲だ。つまり、踊るカップルの数がさつきより少ない。この奇妙な組み合わせが目立たないはずがなかった。

しかも、仲良く踊っているわけではないのだ。二人とも笑ってお互いを見つめているが、その笑い方は友好的ではない。

宿敵を挑発する戦いの笑い！

ケレスは十分にレッスンを受けたのか、絶対にステップを外さないし、もちろんリュエフだって一流の教育を受けているから、うまくリードしている。全く非の打ちどころのない、映画のワンシーンのような、それでいて相手を絶えず試し続ける、敵意に満ちた踊り！いつしか踊っているのは二人だけになった。ほかの学生は、この二人の『戦争』を、はらはらと、興奮しながら、見守っていた。

3-15 イアソン テリー 船内通路

船の中は宮殿のような悪趣味な（これがロンハルト趣味ってやつか？それともイシュハか？）とイアソンは思った。装飾がされていた。壁は白と赤。金色の縁飾りがいたるところにある。絵がいくつか飾られている。大理石らしい彫刻が置いてある……それがどれも女性のヌードなのである。花が飾られている花瓶の持ち手までが、女性の、おそらく女神をかたどった彫刻でできていた。

ほかに興味のあるものがなかったのかな！？ここに関わった芸術家は！

「イアソン」

通路の奥から、赤茶色のスーツ姿のテリーが走ってきた。

「よかった。人が多すぎて会えないかと思った」

「これのどこが人が多いって？」

通路を見渡すが、数人の男が立っているだけだ。

「中を見てないのかい？こっち」

テリーについて奥の階段を上ると、通路に出た、驚いたことにこの船、大きなコンサートホールのように、真ん中が平面になっている、その周りに三階席があるのだ。

テリーが言うように、三階も、二階も、その下の席も、すべて埋まっていた。

「ここから中の様子が一望できるんだな？」

「そう」テリーが下で踊っているカップルを指差した「あれ、リュエフ・シュッティファントとケレスだ」

「えっ？」

イアソンは柵から身を乗り出した。燃え上がるような赤いドレスを翻しながら、意気揚々と踊っている女と、上手くリードしている男がいる。二人の顔は良く見えないが。ほかに踊っている学生がいないのと、大群が二人を囲んでじっと見守っているのは、遠くから

見ても分かった。

「なんだろうね、あの二人」

「なんだろうって言われても」イアソンは突然自分の目的を思い出した「ヘレンを探すよ」

「ヘレン」テリーはまた、あの困ったような、視線を上にあげて考えるようなしぐさをした「見かけないな、今日は来てないんじゃないの？ パーティー嫌いらしいよ」

「いや、今日は来ているはずなんだ」

「それは、予言？ それとも誰かに聞いたの？」

「予言だよ。でも確実だね！」

イアソンはテリーを三階席に残して、外側の通路に消えた。

3-16 テリー 船内地図

ケレスもイアソンも、たいしたもんだな！

ヘレンを探しに走り去ったイアソンと、あのリュエフを誘って颯爽と踊るケレスを比べながら、テリーは思った。ああいうふうに、人をおっかけてパーティーを楽しめるということが、内気な彼にはどうも理解できない。

それより……。

テリーは赤茶色のスーツの内ポケットを探り、一枚の大きな紙を取り出した。

それには、

『セントエルイエツェラカロ・ケルレッシズイエスパカルシモウツトキヤ号内部見取り図』

と書いてある。

まさに今日この日のために、わざわざ遠くの図書館から送ってもらった、船の内部地図のコピーなのだ。

さてと！ 厨房の下は今の持ち主も見えていないという話だから……。テリーは地図を見ながら、にんまりと笑う。

3-17 イアソン カナデ ミス・ベリル 大統領 船内

通路は海に面している。風が強く吹いている。いかにも、間違つて来てしまったという顔の、浮かない連中がたくさんうついていて、海を眺めたり、備え付けの椅子にすわりこんで下を向いている。確かに、こんなパーティーのどこが楽しんだろう？ 家族や恋人と一緒にならともかく、一人でやってきて、派手な格好でとりとめのない会話をして、帰りに惨めになるだけじゃないか。

イアソンは一人でそんなことを考えた。

「おまえーは何をしとるーか？」

聞き覚えのあるなまりのある声が風に乗って聞こえた。潮風に長い服の裾を揺らしながら、カナデ・アンジが笑っていた。紫のキノを着て、耳に大きな緑色のクリソプレーズのイヤリングをつけていた。

「おまえこそ何してるんだここで」

「夜風にあたってーいるのだ」その顔つきには前のような皮肉や意地悪は感じられなかった「今日はケレスが主役のようだ。音楽が始まってすぐ、磁石のように、あの二人がくっついて踊りだした」

「リュエフとケレス？」

「そうそう。もちろん恋人同士じゃない。敵同士ってやつだねー」

「どうしてそう言える？」

カナデの話し方があまりにも断定的なので、イアソンは聞き返さずにいられなかった。

「踊ってる二人を見ていればわかるーよ。ケレスは敵意の中で美しくなる女」

「そう」はつきり言って、イアソンはあの二人には何の興味もわかない「ヘレンは？ 来てるだろ？」

「さっき大統領のとなりに座ってたーよ。すぐ出てったけど」

「どこにいる？ 大統領は？」

「一階の真んなかの特等席。『派手な女』が一緒だ。おまえのよく知ってる」

カナデが意味ありげににやにやし始めたのでイアソンは不愉快になつてその場を離れた。

ミス・ベリルだ！知つててあんな顔をしてるんだな、あいつは！階段を下りて、人が集まっている正面からホールに入る。

通路とは全く違う世界が、そこに煌めいていた。

たくさんの学生や、客がいて、どのテーブルにも見た事がないほど色とりどりのごちそうや、花があつた。でも、みな踊っている二人を熱心に見ていて、手元には興味がないようだ。

あんなの見て何が楽しいんだ？

イアソンは、まるで自分たちの『特別さ』を見せつけるように踊る二人をちらつと見て、顔をしかめ、すぐに、ミス・ベリルと大統領がいる中央の段を見つけ、そちらに向かつて歩き出した。

「おや！私の息子がやつと来たよ！」

ミス・ベリルが大声を上げたので、大統領の周りの人間が、一斉に、好奇心と軽蔑の交じつた顔で彼を見た。

「大声を上げないでくださいよ」

イアソンはミス・ベリルに向かつてそう言った後、大統領を見て、すぐに、相手が自分の顔をじつと、奇妙な表情で見ていることに気がついた。

「そっくりだろ」ミス・ベリルが色気のあるうつとりした顔で、大統領に向かつて吐息のような声でささやいた「なつかしくならなにかい？」

それを聞いてイアソンは思い出した。大統領はエブニーザを知っている！

一瞬不愉快になつたが、すぐに考え直した。おどかしてやろう！「はじめまして！大統領閣下！」イアソンはわざと、挑発的な笑みを浮かべ、丁寧ながらも横柄な声で言った「イアソン・ウェストン・アンシューンです」

「そ、そうか、話には聞いていた。彼女の養子だそうだね」

「養子ということになっています」イアソンはわざと曖昧な言い方をした「私は大統領を前から存じておりました。お会いできて大変嬉しく思っています」

大統領だけでなく、ミス・ベリルも、これには困惑した顔をした。イアソンは目論見通りの反応を見えますにやにやした。

本当なら大統領にエブニーザの事を聞き出したいが……今はヘレンが優先だ！

「ところで、ヘレン、お嬢様はどこですか？」

「いや」大統領は『ヘレン』という単語に露骨に不快感を表した「娘は来ていない」

「何言ってるんだよ！さっきここに座ってただろ？」ミス・ベリルがすぐに、大統領の反対側の席を指差して抗議した「具合悪いって出て言ったよ。あんた、探しておいで」

「いや、探す必要はない！」

大統領が声を荒げた。まるで不正でも指摘されたような顔だ。

「探してきます」イアソンはわざと、以前見た、エブニーザの幽霊に似た表情を作った「せっかくのパーティーなんですから」

不愉快そうな顔の大統領に一礼して立ち去る時、彼はミス・ベリルに近寄って、小声でつぶやいた。

「言いくいんですけど、お金貸してもらえませんか？」

「はあ？」

「ヘレンのドレス。全く似合ってなかったはずですよ。見ませんでしたか？」

「ああ、あの、女神の紫色」ミス・ベリルが大統領に聞こえないように小声になった「あんなの今時、幼稚園児でも着ないね。はつきり言って」

ミス・ベリルは何か企むような笑いを浮かべると、胸の間に手を入れて、金色のカードを取り出した。

「使いな。サインはいらないはずだ。なんなら私の名前出してつけ

にしてもいい。この船の店はだいたい私を知っているからね」

どうしても胸の間から取り出すんだろうとイアソンは思った。

「店があるんですか？船に？」

「あんた、それ知らないでどこで買い物するつもりだったのさ。上だよ」

ミス・ベリルが呆れた顔をした。

「それと、胸になんでも突っ込むのはやめたほうがいいと思うんですが」

「何で？あんたもクラハみたいに、私にブランドのバッグを勧める気？私嫌いな、ああいう、持ち主より目立つものは」

だったらその宝石ドレスもやめてください！とイアソンは叫びたかったが、大統領がこちらをじろじろと見ていることに気がついたので、足早に特等席から降りた。

さつきとは反対側の通路に出た、こちらは港を向いている。風がほとんどない。そのせいか、長いドレスをひきずった女の子がたくさんいる。

どこだ、ヘレンは。

通路の壁沿いに並んでいる椅子と、座っている人間を一人一人じっと観察しながら歩く。

「イアソン」

後ろから声。振り返ると、ヘイツキが、変な黒いベストに赤い蝶ネクタイをして、手に盆を持って立っていた。彼は今日ウェイターのアルバイトをしている。

「おまえ……似合わないなあーその格好！」

目的を邪魔されたことを忘れるほど、その服装は、ただでさえコミカルなヘイツキを、ますます喜劇役者のように見せていた。まるで、演劇のわき役が自分で作った変な衣装のようだ。

「いいじゃない。それより何か注文してくれない？」ヘイツキが沈んだ声を出した「おれっち、疲れたから、奥に引っ込みたいわけよ」
「ああーわかったよ！」イアソンがうんざりした声で、偉そうに叫

んだ「注文だ！お茶でも何でも取りに行つて、二度と帰ってくるな！」

「了解しましたっ！」

ヘイツキはうれしそうに、踊るように飛び上がりながら走り去つた。

こんなことしてる場合じゃない。

イアソンは奥に向かって歩く、船の最後尾が近付いたとき、夕闇にまぎれて、長い髪をたらしたまま、うつむいている女が目に入つた。椅子に座っていたが、上体が深く前に傾き、今にも前に倒れてしまいそうだ。

ヘレン！

彼は立ち止った。ヘレンの姿を見たたん、彼がそれまで見てきたヘレンの姿、つまり、過去に見た幼い、物語の中にだけ住んでいたヘレンや、学校で友人のいいなりになっていたヘレン、それから未来の、彼と一緒にいる、大人になったヘレンの、本を振って笑う姿が浮かんだ。彼の中では、過去も未来も、同じように混ざった状態で存在していて、その中でヘレンは、つねに中心にいるのだ！

どうしてヘレンという一人の人間の人生だけが彼に見えたのだろう？それを彼は今までずっと不思議に思っていた。

理由なんて必要ない！彼は今、確信した。ヘレンが目の前にいる！それでいい！

歩き出そうとしたとき、彼はもう一つの映像を思い出した。

乾いた黄色い土の上に、干からびて横たわる『朽ちた手』

立ち止まる。どうしてあんなことが起こる？それが彼にはわからない。しかしそれは彼にとって恐怖の象徴だ。

今なら逃げ出せる。

一瞬そんな考えが浮かぶ。このまま彼女に一切関わらずに、やりすごすこともできる。そうすれば……。

いや、そんなことは絶対に起こらない！絶対に阻止する！

そのためにここに俺がいるんだ！

イアソンは、急に自分が、何かの使命を帯びたように感じた。そして、そのために自分が強くなったような、そんな気がした。深呼吸する。ヘレンにゆっくりと近づいていく……。

3-18 ミス・ベリル 大統領 パーティ会場

「リリック」大統領がミス・ベリルを、昔馴染みの名前で呼んだ「あれは本当に、養子か？」

「どうでもいいじゃないか、そんなの」

ミス・ベリルは、ワインを一気に飲み干し、ふう、と息を吐いた。「言わなくてもわかってるだろ。『予言の書』に書いてなかったのかい？」

「『リリックが養子を取る』ってな……しかし、それにしては、あまりにも似すぎている。まるで本人が復活したみたいじゃないか」

「それしか書いてなかったのか」ミス・ベリルが怪訝な顔をした「だから何だったのさ。似た顔ならいくらでもいるよ。それに……あ」

ミス・ベリルの目が空中を見つめたまま止まった。彼女は気がついたのだ。先ほどどうしてイアソンがあんな曖昧な言葉を使って、変な態度をとったのか。

ヘレン。そうか。彼女を予言で見たのなら、父親の大統領だって知ってるに決まってる。

「それより」ミス・ベリルが余裕たっぷりの妖艶な笑みを浮かべて身乗り出し、大統領の頬を指で突つついた「あの子ねえ、あんたのお嬢さんに夢中なんだよ」

「ヘレンに？」大統領が人を馬鹿にするような笑いを浮かべた「あの『障害児』にか？ありえないな」

「どうしてさ、とにかく夢中なんだ。いい話じゃないか」ミス・ベリルがあくどい笑い方をした「古い付き合いの二人の子供たちがさあ」

「じゃ、あの男はやっぱエブニーザの」

大統領の顔に恐怖が走った。

「今更うるさいよ。わかってたくせに何をそんなに驚いてる？」

ミス・ベリルはウェイターを呼び、ワインをもう一本持ってくる

ように言った、大統領と並ぶ彼女を撮影しようと、報道関係者がカメラを持って、近づいてきた。

3-19 ヘレン イアソン 船内通路

ヘレンは疲れ切ってしまった。人の渦、音の渦、そしてあの父とリュエフに。

とにかく外に出たい。

ふらふらと会場から歩いて出て行き、三階席にたどりついたとき、階下のケレスの登場を見た。金髪と赤いドレスが光って見えた。それから、なんとかこの通路にたどりついたのだった。人の少ないちばん奥の椅子に座り、人と目を合わせたくないから、ずっと下を向いている。

こんな船、沈んでしまえばいいのよ！

皮肉なことに、彼女は大嫌いな兄と同じことを考えていた。

どうしてみんなあんなに楽しそうなのかしら？ どうしてケレスったらあんなに勇敢にあのリュエフなんかと踊れるのかしら？ そもそもどこでダンスなんか覚えたの？ みんな知ってるみたいだった……どうして私だけいつもはずれているのかしら……。

「こんばんは」

それにしても、カナデはどこへ行ったんだろう？ レーナがいないから、あと話ができそうなのは彼女だけなのに。

「ヘレン？」

ヘイツキも見かけないし……。

「具合が悪いんですか？」

ヘレンは、誰かが自分に向かって声を発しているのに気がついた。誰？

怖くて、顔を上げることができない。

「ここは寒いから、中に入ったほうがいいんじゃないですか？ 誰？ どうしてほっといてくれないの！？」

ヘレンは泣きそうになる。一人きりになりたかったのに！

「ここは人が多いから、一緒に甲板に上がりませんか？」

優しい、男性の声がした。ヘレンは顔を、おそろおそろ、上げた。青とグレーの混ざった色の目をした、背の高い男が、微笑みながら立っていた。ヘレンが顔を上げたのを見て喜んでいようだ。

「誰？」

「えーと、何て言ったらいいか……」男は少し迷っているようだ「同じ学校で、テリーのルームメイトの」

「テリー」ヘレンはその単語から、レーナを連想した「レーナのお友達？」

「そう」

レーナは俺のことを友達だと思ってはいないだろうが……。

「じゃ、あなた、イアソン？」

「そう！そう！」

イアソンはヘレンが自分の名前を知っていた事を喜んだが、ヘレンは困惑していた。

確かレーナが、彼に近づくと言ってたような……。

しかし、テリーとヘイッキは逆に『一度会ってあげなよ』と言っていたのだ。

「それより、上に行かない？」イアソンは急に友人のような口調になった「上に店があるらしい。それに、俺は踊れないから、会場にいてもやることがない」

「私も踊れないわ！」

ヘレンが急に元気になった。私だけじゃないんだわ！

「そうなんだ。とにかく、上に行こう、一番上に行ったら、星が見えるかも」

「行くわ！」ヘレンが立ちあがった「こんな横の通路じゃなくて、広い所に出たいの」

「それじゃ」イアソンはヘレンの手をうやうやしく取った「参りましょう」

にやにやして、なんか、変な人。でもいいわ。

楽しそうなイアソンとは違い、ヘレンは半ばやけになって、通路

を歩き出した。

3—20 テリー ヘイッキ 下層の厨房

テリーは厨房のある、船の下層まで降りていった。おそらくアルバイトなのだろう。やる気のなさそうな、同じ制服の男たちがたむろしていた。熱気と悪臭が漂うその中に、床に座り込んで半分目を閉じているヘイッキを見つけた。

「ヘイッキ！」

「あ、あら、トゥーサン君じゃないの」ヘイッキは急に目が覚めたように、目を丸く見開いた「どうしたの？ ワインが足りない？」

「僕は酒なんか飲まないよ！」テリーは呆れた顔で、手に持った見取り図をヘイッキに向かって振った「これ見てよ」

「船の地図。もしかして、船の見物するためにここに來たの？」

「ほかに理由があるもんか！」テリーが当然のように言った「それより、厨房のさらに下に行きたいんだけど、床下に通じるところが厨房の床のどこかにあるはずなんだ」

「さらに下に行つてどうするの。ここ十分空気悪いよ」

「この船は昔客を乗せてたんだよ。一番下に、機械室と、客席とは名ばかりの、貧民の乗った第四客室っていう、狭苦しい板張りのスペースがあったんだ。でもそこは、今の持ち主に船が渡ってから、調査がされなかった」

「手つかずのまま残つてゐるわけね」

「その可能性が高い。しかも、その最下層に乗っていた、無名時代の偉大なる小説家、エルツコ・シデクラは、ここで小説の構想を書いたノートを紛失してるんだ」

熱心に話すテリーは気がついていないが、周りのアルバイトたちも、話を聞こうと彼の周りに集まっていた。

「でもそんなの、他の客が持つてったかもしれないし、もうないかもしれないじゃない」

「でもさ、もし忘れられたまま最下層にあつたら？」テリーが興奮

の交じった声で言った「彼が船を降りた直後にこの船は今の持ち主に売られたんだ。不況で運航できなくなってね。それに、ノートが見つからなくても、古い時代の痕跡が残る部屋を見れるんだよ!」

「でも貧民の乗ってた汚いところでしょ……おっ?」

ヘイッキが周りを見渡すと、同僚がまわりに集まって、船の地図を覗きこんでいた。

テリーも彼らに気がついた。好奇心いっぱい男たちをぐるりと見回すと、いたずらっぽい笑いを浮かべて、言った。

「手伝っていただけませんかね」

3—21 イアソン ヘレン 船内の店

「うん、やっぱり青いのが似合うよ、ヘレンは」

船の中にあるブティックで、青い帽子とワンピースを試着したヘレンを見ながら、満足げにつぶやいたのはもちろん、イアソンである。

幸い、他の学生はこの店にはいないようだ。きっと若い人間が入れるようなところではないのだろう。イアソンが入った時も、中年の女店員が怪訝な顔をしたが、カードの名前を見せたたん、対応が急ににこやかになった。『噂は聞いておりますわ。でもあの人に子供がいるなんて驚きだわ』とまで言われたのだった。

「でも、いいの？ 私のカードもあるわ」

「いいんだよ！」イアソンが慌てて言った「ヘレン、あまり簡単に自分のカードを人に見せちゃいけないよ！」

そういう自分も、ミス・ベリルに簡単にカードを渡されたのだが、彼はそんな矛盾には気がついていない。

思いがけなくドレスを買ってもらって困惑気なヘレンとともに、船の一番上に上がった。視界を遮るものがない。海に面した景色が見えた時、ヘレンの顔が喜びに輝いた。

「星が見えるわ！」

ヘレンが、イアソンに向かって、叫んだ。

ああ！この顔が見たかったんだ！

イアソンはヘレンが笑った時、自分でも予想しなかった大きな歓喜の渦が自分の中に湧き上がるのを感じた。なにせ、ヘレンはドレスを見ている間、ずっと不安そうな顔をして、お気に入りの空色の服を見つけた時ですら、笑わなかったのだ。

風に飛ばされないよう、青い帽子を手で押さえながら、疲れを忘れたように星空に見入るヘレンを、イアソンも満足と共に眺めた。風になびく髪や、いとしげに空を見つめる彼女の瞳が、かけがえの

ない星のように、輝いて見えた。

3-22 カナデ・アンジ 船内通路

「予言者。イアソンもケレスも悲惨な人生だ。なあ、円」

カナデ・アンジは、通路で夜風に当たりながら、友人であり、予言者でもあるイエンの名前をつぶやいた。彼女は病気で家からめったに出ることができない。なのに、世の中のいろいろなことを予知できる。カナデはそんな友人の予知にしたがって、アケパリからイシュハにやってきたのだった。

「もっとも、悲惨なのは私も同じ、か」

カナデはアケパリ語でつぶやいて、苦痛に耐えるように目を細めた。

彼女は、既に自分の、そして友人たちの運命を、この不幸な友人から聞いて、知っていた。

3—23 テリー ヘイッキ 調理場の人々 船の下層

「ここ！ここだね！入口は！」

厨房の床、工事の人間くらいしか使わないであろう古いマンホールのような通路の蓋を開けて、ウェイターの一人が叫んだ。調理師まで仕事を放棄して彼らを見物している。

「よし、入ろう」

「いいの？そんな上等な服汚して」

「いいのよ、いつも同じ服着てんだもん、テリーちゃんは」

ヘイッキが同僚に言った。テリーは迷わず下に降りていく。どこから持ってきたのか、懐中電灯を持った男まで、あとからついてくる。

厨房の地下は暗く、かび臭く、ほこりだらけだった。数十年間放置されていたのであろう、木箱や樽が、地面を覆うように並んでいた。

男が懐中電灯を、あたりを一通り見るように回した。奥の壁に、金属の色をした錆びたドアがある。

「開けてみよう」

懐中電灯を持った男とテリーが、ドアに近づくために、木箱の上を慎重に渡って行く。

錆びたドアノブをテリーがつかんで回そうとしたが、固まってしまっている。

「ドアごとぶち抜いたほうがはやくねえか！」

あとから降りてきた調理師が叫んだ。

「そういう破壊行為はちよつとなあ」テリーが振り向いて、調理師の姿を見て驚いた「あなた、仕事はいいんですか？白い制服が汚れますよ」

「もう十分食いものは作ったよ。どうせ奴らは美女と踊ってんだから、食い過ぎちゃステッブも踏めないだろう」

「それもそうか」

懐中電灯の男がドアを蹴り始めた。

「ドアと壁の間に、何か細いものを入れてみたらどうだ？ おい！ 包丁か、平たいもの持ってこい！」

調理師が上に向かって怒鳴った。すっかりやる気だ。

報道のカメラに向かって、ミス・ベリルと並んで笑っている大統領が、

「別世界の二人が並んできると君たちも記事が書きやすいだろう。でも邪推はいけないよ」

などと冗談を言っていたところに、イアソンと、青いドレスのヘレン、そして、踊り終わったケレスとリュエフが戻ってきた。

「あら、私の息子が美女を連れて戻ってきたよ！」

ミス・ベリルが大声を上げたので、カメラが一斉にイアソンの方を向いた。

「大声を出さないてくださいって！」

「あら、あなた、いつ着替えたの？」

ケレスが汗まみれながら、満足げな顔で（なんせ目的はみごとに達したから！）ヘレンに笑いかけた。

「つい、さっき。着てたドレスは合わないんだもの」

ヘレンがケレスに笑いかけた。大統領は驚いた。自分の娘にこういう『まともな反応』ができるとは思っていなかったのだ。しかもこの美女と知り合いとは！

リュエフは黙って、イアソンとヘレンを交互に見つめていた。『障害児』ヘレンと『変態女の息子』イアソン。史上最強に醜い組み合わせだ。

男にだまされて、のこのことついていくような女だったか、こいつ。

「いや、それにしても」大統領がヘレンから目をそらしてケレスに言った「すばらしいダンスだった！ええと」

「ケレス・ヘスティアですわ」

「踊る前に名乗れって言っただろうに」

ノーマン・ヘスティアが小声で言ったが、気がついたのはリュエ

フだけだったろう。

こんな間抜けからケレスが生まれるとは、驚きだ！

「僕と踊れるのは彼女だけですよ」

賞賛と言うよりは『それくらい当然だ』という口調でリュエフが言った。それを聞いていたイアソンは思った。

足を引っかけてやればよかったのに！ケレス！

隣のヘレンは、大統領の隣にいるミス・ベリルの『ほとんど宝石しか身につけていない』姿に見とれていた。どの宝石も一粒一粒、きらきらと輝いてヘレンを誘惑するのである。

ミス・ベリルがその視線に気がついた。大きなライトブルーの石がついた自分の手の甲をヘレンに差し出して、妖しく笑いかけた。

「ブルーダイヤだよ。十カラット以上あるんだ。触ってごらん」

ヘレンは言われるまま。好奇心いっぱい顔を、その手の甲に近づけた。あまりに顔を近づけすぎて、周りの人間には、ヘレンがミス・ベリルの手の甲に『口づけ』しているように見えたのである。

大統領とその弱気な秘書がおおいに焦ったが、遅かった。報道陣のカメラが一斉にその光景をしっかりとカメラに収めた。フラッシュの光が二人を包み、ただでさえ煌めいていたミス・ベリルの衣装、つまり無数の宝石が、魔法のような光をばつと放った。

もちろんヘレンはそんなことに気がつかない。ただ、じっとダイヤを見て「きれいなね」とつぶやいて、顔を上げ、ミス・ベリルに笑いかけただけだった。

ケレスとイアソン、そしてヘレンも、大統領の席を離れた。リュエフは、自分の仕事はもう終わったとばかり、自分の席に戻って、報道陣の質問にはてきとうに答えていた。ケレスはもともと彼をこれ以上誘う気はないので『もう帰るわ！一杯飲んでからね！』と、上機嫌で会場を去って行った。

本当に何なんだろう、あの二人は。

イアソンだけでなく、おそらく会場の生徒ほぼ全員が思っているだろう。

「私も帰る」

ヘレンが眠そうな目でつぶやいた。

イアソンは焦った。

そうだ！もともとパーティーが大嫌いで、具合が悪くなるのがヘレンだ！今日は長く居過ぎたんだ！

「寮まで送るよ」

「一人で帰れるわ」

それはないだろう！とイアソンは言いそうになったが、自分を抑えた。彼女は今日まで俺を知らなかったんだ。警戒されても仕方がない。

そうだ、ヘレンは俺のことを名前以外何も知らないんだ。どうして今まで忘れてたんだろう？

「ヘレン、外で何か飲んで、少し休んでから帰ろう。せっかくここで会えたんだから、もう少し何か話をしようよ。ケレスを探してもいいし」

「ケレスは一人で満足してるわ」

……確かに。

イアソンがなんとかヘレンを引きとめようと言葉を探していると、ホールの入口から女の悲鳴がした。見ると、汚い服を着た男の集団が入口にたむろしているのが見えた。

あれは……ヘイッキとテリーじゃないか！

「ヘイッキ！」

ヘレンが叫んだ。しかも嬉しそうに。イアソンはショックを受けた。

どうしてヘレンの口からヘイッキの名前が出てくるんだ！？

二人が汚い男の集団に近づくと、赤茶色のスーツと頭を埃まみれにしたテリーがうれしそうに手を振った。何か、紙の束を持っている。

「イアソン！やったよ！」テリーが大声を上げた「エルツコ・シデクラのノートだ！」

「昔の人の忘れものもあるのよん！」

同じく埃まみれのヘイッキが、どぶのような色の袋を振った。他の男たちも、汚い箱や、古いアンティークのような飾り、ろうそくが載ったままの錆びたキャンドルホルダーを両手に掲げて、歓喜の声を上げた。

「エルツコ・シデクラ！」ヘレンがうれしそうに大声を上げた「知ってるわ！」

彼女はテリーに駆け寄った。大統領とその周りの警備も、どうやら彼らが強盗でもなんでもないことに気がついたらしい。

イアソン一人、なんのことだかさっぱりわからずポカーンと立ち尽くしていたが、とりあえず、ヘレンを引きとめることには成功したようだ。

「見せて！見せて！」

興奮しているのか大声を上げているヘレンに、テリーが手に持った、ぼろぼろの、黒ずんだ表紙のノートを開いて、見せた。

「何の騒ぎ？」

ケレスが、ワイングラスを持って近寄ってきた。自分が未成年だということをつかり忘れて飲んでいたようだ。

「エルツコのノートだよ！」テリーが叫ぶ「知らない？」

「もちろん、知ってるわ、イシュハ人ですもの。ねえイアソン」ケレスが得意げな顔でイアソンを見た。

「残念ながら知らないね。こっちの生まれじゃないんだ」

「あら、そうなの？読みなさいよ。イシュハにいて彼を知らないなんて大変よ。『バスカの丘』がいいわ。突拍子もない話だけど」

「夢のある話、と言ってほしいね」

後ろからノーマン・ヘスティアが近づいてきた。彼も大作家には興味があるのだ。

「冒頭で女性が襲われる話のどこに夢があるの」

「苦労して成功する過程を言ってるんだ、いちいち突っかかるな」ノーマンが不愉快そうに言ったが、一番不快な顔をしていたのは

イアソンだった。

肝心のヘレンがノートに夢中で、彼のことを完全に忘れていたから。

3—25 イアソン テリー ヘイッキ 男子寮

次の朝。ヘイッキが寮に届けた新聞（そしてテリーから小銭を稼いでいるのだ！）には、偉大な作家のノートをかかげて笑う『船大好き少年とウェイターたち』の写真と『淫乱の女王にキスする大統領の娘』そして、『踊り狂う美女と大統領の息子』が、並んで掲載されていたのだった。

「おかげさまでインパクトが減ったというべきか、かえって注目されて迷惑だというべきかな？」

大発見の興奮のあまり、また熱を出して寝込んでいるテリーに向かって、イアソンがつぶやいた。新聞の写真を見て苦笑いしながらミス・ベリルの館に戻る予定だったのに、ヘレンを女子寮に送った後、この暑苦しい部屋に戻ってきてしまい、一夜明けたらテリーがまた熱を出したのだった。

「まあ、いいじゃないか、ヘレンに会えたんでしょ？」

「まあね」

「今度は逃げられなかったじゃないか」

「まあね」

そう、念願のヘレンに会えた。あの夜空を見上げるヘレンの美しさを、イアソンは思い出した。でも、同時に、ヘレンの『いつも別な何かに夢中な』態度も思い出した。

ヘレンは本や空や、そんなもののばかりに夢中なんだ。昨日だって、まるでこっちを見ていなかった。どうしたら、俺を見てももらえるんだろう？

「レーナちゃんいないから水でがまんしてよね」

ヘイッキが水の入ったコップを持って入ってきた。

「珍しいなあ。いつも夏休みはいるんだけど、やっぱりカレッジの話が難航してるのかな？」

「カレッジの話？」

「進学したくないらしい、レーナは」

「何で？」

「早く働きたいんだって。変わってるよね」

「おれっちはもう働いてるのにっ！」

「うるさい、ヘイッキ」

そんな話をしながらも、イアソンはヘレンの事を考えていた。レーナがいない。ならヘレンは今一人で何をしてるんだ？ケレスだって、また自分の故郷に帰ったはずだ。ケレスとカナデは二人ともカレッジに合格し、準備をしている。寮を出てからも二人で部屋を探して暮らすのだと、ケレスが言っていた。

「そのほうが家賃が浮くし、いい議論の相手なんてそうそういないでしょ？」

あなたもその貴重な一人だけど、と笑いながら付け足した、ケレスの自信ありげな声を思い出す。政治と法律、分野は違うが二人はよく授業で顔を合わせ、よく議論したのだ。

あれくらいの才覚がヘレンにあったらさぞ面白いだろうな、とイアソンはふと思って、あわててその考えを頭から打ち消す。そんなのはヘレンに失礼だ。

3-26 ヘレン 自分の部屋

ヘレンは部屋で一人、床に寝ころんでいた。昨日のブルーのドレスを着たままだ。着替えずにそのまま眠ってしまったのだ。

何だったのかしら、昨日は。

短時間にいろいろなことが起こりすぎて、ヘレンが理解するには時間が足りないものであった。似合いもしないドレスを着せられて、パーティー会場に拉致されて。ケレスとリュエフが踊って……。たしか、テリーのルームメイトの、イアソンが、上に連れて行ってくれて、服を買ってくれて、それから、星を見て。

ヘレンは目を閉じた。昨日見た美しい星空、快適な海辺の風が、彼女の周りによみがえった。

それから、なんだったかしら。

そのあとが、どうも思い出せないのだ。たしか、お父様の横にキラキラした人がいて、それがイアソンのお母様で、ダイヤモンドを見たわ。海のように青い。

それから、そうだ！エルツコ・シデクラの幻のノート！

ヘレンは起き上がった。偉大な作家エルツコは、このノートを紛失したことを死の間際まで後悔していたではないか！『私の最も優れた作品になるはずのものが』と、どこかで読んだ記憶があった。

ヘレンは大作家の本はおおよそ読みつくしていた。

あのノート、読みたいわ！警官が持っていていっちゃったような気がするけど……テリーは中身をもっと見たかしら？

ヘレンは一瞬迷ったが、立ちあがった、服を着替えずに、そのまま部屋を出た。

3-27 イアソン テリー ヘレン 男子寮

ドアをノックする音がした。

「誰？」

テリーが船の本から目をそらさずに聞いた。いつもの予定確認の生徒かと思ったのだが、

「テリーの部屋はここ？」

廊下から聞こえたのは、女の子の声だった。イアソンとテリーは驚いてドアの方を見た。

この声は……。

「ヘレン!？」

イアソンがドアに飛びついて開けると、そこには、昨日と全く同じ、青いドレスを着たヘレンが立っていた。

驚きのあまりイアソンが立ちつくしていると、テリーが苦笑いしながら言った。

「ヘレン。だめだよ。ここは男子寮なんだよ？ 女性はいれないんだ。どうやって侵入したの？」

「玄関からふつうに入れたわよ」ヘレンは平然と言ったのけた「エルッコのノートは？」

「は？」

ヘレンは、イアソンを無視して、直線的にテリーの机まで歩いて行った。

「きのうあなたが見つけたノートよ！ 読みたいの！」

「あああれかあ」テリーが困った顔で頭をかいた「もう警察が持つて行っちゃったよ。今頃どこかの研究機関にでも届いてるんじゃないかな。イアソン、調べてあげたら」

「えっ？」

「警察に電話して、今あのノートはどこにあるか聞いてあげなよ」

テリーがそう言うと、ヘレンが、期待に満ちた目でイアソンを見

た。どうやら、気をきかせてくれたらしい。

イアソンが連絡して聞いたところによると、国立大学の図書館に送られたが、国民の関心が高いため、数か月で書籍になるのではないかとのことだった。

「本になるのを待つしかないの？」

ヘレンは子供っぽいふくれっ面になった。

「そうみたいだね」テリーも、こどもをあやすような声で言った「ま、でも、そんなに長く待つ必要ないさ。僕らがアルターにいるうちに出るよ」

「それもそうね……」

ヘレンはそうつぶやくと、二人に全くあいさつをせずに、黙って部屋を出て行った。

本にしか興味がないのか……？

イアソンは不安になってきた。

「心配するんじゃないよ」テリーが年長ぶった言い方をした「そういえば、ヘイッキがよく図書館でヘレンとしゃべってるのを見かけるけど」

「えっ？」

……よりによってヘイッキ？

あとで、廊下をうろうろしていたヘイッキにそのことを聞いてみると、

「おれっちもよくわかんない。でも、前にも言ったでしょ？ いかにも友達になりたいって顔で近づいていくと相手は困惑して引くのよ。おれっちは年が離れてるオッサンだし、本の貸し借りしてるだけだから心配しないのよ。ヘレンちゃんは特に人見知りするタイプだから、ストレートに攻めるのは逆効果だと思うな。今度見かけたら本の話でもすればいいじゃない」

とのことだった。

こういうとき『だけ』イアソンは、ヘイッキがだいぶ年上なんだなあと実感する。言動は軽くても、指摘する内容はたいい体験に

基づいていて、かなり正確だからだ。

3-28 ヘレン ケレス 女子寮

ヘレンが部屋に戻ると、なぜかケレスが戻ってきていた。カレッジの近くに部屋を借りたので、荷物を取りに来たのだった。

そういえば、配送業者みたいな人がうろろしていたような……。

「ヘレンも来年にはカレッジに来るでしょ？」

「そうなの？」

きょんとしているヘレンを見てケレスが呆れた。しかも昨日と同じドレスだ。

「あんた、いくらお気に入りだからって、着替えなさいよ！」ケレスがにやっと笑った「それとも、イアソンにもらったものだから脱ぎたくないとか？」

「イアソン……」

だれだっけ、それ、とヘレンの顔に書いてある。

「ヘレン？ねえ、まさか誰だかわからないとか言わないわよね？テリー・メイヨールのルームメイトでしょ？きのう一緒に歩いてたじゃないの！」ケレスが本気で心配になって叫ぶようにまくしたてた

「彼、あんたに夢中らしいから、うまく捕まえておくといいわよ。かなり頭がいいわ。私と議論できる男は珍しいのよ、ねえ、ヘレン、聞いている？」

もちろんヘレンは、何も聞いていない。

エルツコノート、あと何カ月で読めるんだろう……？

「何ーを叫んでいるのだーケレス」

カナデの遠い声がする。彼女はもうすべて荷物を運んでしまったのだ。

「今出るわ！」ケレスが外に向かって叫んだ「ヘレン、これ、私たちの新しい住所。携帯とメールは変わらない。これから仲良くするわよ。そうでしょ？」

「もちろん」

ヘレンは、ケレスから、妙に装飾の派手なメモ帳をまるごと渡された。イシュハ・ヴァイオレットと黒の花模様で、最近人気のある若手デザイナーのブランドだ。

「レーナをあんまり困らせるんじゃないわよ！」

ケレスが余計なひと言を発して去っていったため、ヘレンは、私、レーナを困らせてるの？何が？いつ？

と考え始めてしまった。

自分が誰かを困らせているなんて、ヘレンは夢にも思っていなかったからだ。

受け取ったメモ帳を無意識にめくると、そこにはケレスとカナデの新居の住所、二人の電話番号とメールアドレス。

そして、なぜか、イアソンの電話番号とメールアドレスまで書いてあった。

……なんだろう、これ……？

3-29 イアソン レーナ テリー 電話

「余計なことだと思うんですけど、どうしても忠告したいことがあるの」

レーナが妙に改まった声で電話している相手は、イアソンだ。レーナは夏の休暇中、実家にいることになってしまい、その間ヘレンが一人寮に残るのを心配していた。ケレスとカナデも別なところに引っ越してしまった。

「何だよその変な口調は」

レーナの慇懃無礼な口調に、イアソンは不快感を覚えた。

「ヘレンなんだけどね」レーナが深刻な声で話し始めた「一緒に暮らしているとわかるんだけど……知能は高いと思うの。すごく頭が いいの。学校の勉強はよくできるし、外国語なんてあつという間に覚えるの、驚異的。でもね……」

「わかってるよ。勉強以外の事は全くできないって言いたいんだろ？」

「精神年齢が低いだよ。5歳くらいだと思うわ。何でも好き嫌いで判断するし、他人にまるで興味が無いの。自分の興味のあることしか目に入らない。それはあなたもなんとなく感じてるんじゃない？もし本当にヘレンの事をよくご存知ならね！」

イアソンは口ごもった。レーナの口調が非難するような響きを持つていたからだ。

「私思うんだけど」レーナは急に相手を憐れむような、穏やかな口調に戻った「ヘレンが他人に、それこそ、男の子に興味を持つようになるのって、たぶん、あと5年か10年は先だと思う。それまであなた、待てる？無理じゃない？発達の授業で習ったんだけど……たまにいるのよ、そういう子。ある部分は年相応、いや、もっと早く大人になるのに、ある部分はまるで発達せずに子供のまま。何か脳の発達の障害だったと思うんだけど、原因は幼少期に何かシヨツ

クを受けたとか、あるいは先天的に脳に何か傷があるか……とにかく、ヘレンなんていかにもそんな感じよ。外国語とか歴史に限って言えば、もう学者レベルなの。大人。だけど、他の、人間関係とか、情緒とか、判断能力とか……全然ダメ。一緒にいるとあまりにも幼くて不安になる」

「レーナ」イアソンはイライラし始めた「要するに何が言いたんだ？俺にヘレンに近づくなって言いたいのか？話が長すぎて要点がつかめない」

「そうじゃないの、そうじゃなくて……」レーナは何かためらっているようだ「あなたが追いかけている女の子は、普通の子じゃないって言いたい。つまり、普通の女の子みたいに一緒にデートに誘って、とか、一緒に勉強するとか、恋愛するとか、そういうことが通じない相手なの。いつも夢の中にいるみたいで、周りにまるで興味がないし、そもそも、きちんとしようっていう気もなさそう。かなり、配慮が必要だし、まわりの人間が気をつけないと本人も何をしているか自分でわかってないことがあるのよ。そういう人間と付き合うにはけっこうな覚悟がいるって言いたい」

「俺はもう何年も前から覚悟してるよ」

イアソンは確信を持ってそう言った。なにせ彼は幼いころから、ヘレンの姿を見て育っていたから。ヘレンがどれだけ変わった人間かはよく知っている（というより、イアソンにとってはヘレンこそが『ふつうの女の子』なのだが……）し、ヘレンを助けられる人間がいるとすれば自分だけだと思っている。

レーナは黙り込んでいる、何か考えているのだろう。

「レーナ」イアソンはできるだけ苛立ちを抑えようとした「友達のことを心配するのはわかる。でも、ヘレンを追いかけるのは俺の問題だから、ほっといてくれないかな？」

「そうね」弱々しい返事が返ってきた「でも、くれぐれも、焦って無理矢理誘い出すとか、乱暴なことはしないでね」

「そんなことしない」

電話を切ったあと、ため息をついたイアソンに向かってテリーが。
「レーナはたぶん心配なだけだよ。ヘレンだけじゃなくて、君のこともさ。余計なおせっかいかもしれないけどね」

「かもしれない？ まったくもって勝手なおせっかいだよ！」

あくまで穏やかな顔のテリーに向かって、イアソンがうんざりした顔で叫んだ。

3-30 ヘレン ヘイッキ 図書館

「私って、レーナを困らせてるの？」

ヘレンがこんな質問をした相手は、ヘイッキである。

図書館で本を探していたヘイッキの近くに、ヘレンが近づいてきた……が、回りをうろろしながらこっちを見ているばかりで、一向に話しかけもせず、でも離れようもしないので、ヘイッキが不審に思っ『何か用？』と聞いてみたら、こんな質問が返ってきたのだ。

「何を突然」ヘイッキが目を丸くした「言っとくけど、レーナは誰にでも困るよ。もっとちゃんと掃除しろ、くさいから毎日風呂に入れ、髭をそれ……」

言いながら伸びた髭を引っぱって笑ったヘイッキだが、ヘレンはにこりともしないで不安な顔をしている。

「ケンカでもしたの？」

「違うわ」

ヘレンがヘイッキから目をそらして、また本棚の間をうろろし始めた。

「誰だって誰かを困らせてるもんなのよ」ヘイッキも本棚の方を見ながらつぶやいた「何が起きたのか知らないけど、気にしなくていいんじゃない？」

「ヘイッキってどうしてそんなに強いのかしら」

ヘレンがそっぽを向いたまま、ひとり言のようにつぶやいた。

「強い……」ヘイッキが首をかしげた「それは初めて気がついた。身寄りがいないからじゃない？天涯孤独」

「私だって似たようなものだわ」

「何言ってるの。ものすごい大物がバックにいるじゃない」

ヘイッキがこう言ったとたん、ヘレンが振り返り、鋭い目で睨みつけてきた。

「まあまあ、怒らない怒らない」ヘイツキが両手を前に突き出して盾を作るようなポーズをした「おれっちが言いたいのはね、ヘレンちゃんが親と仲がよかろうと悪かろうと、大統領の娘だという事実がある限り、人々はそこを見て怖がったり、おべっかをつかったり、利用しようとしたり、逆に大いに保護してくれたりするってことなのよ。実際に助けてくれるかどうかは関係なく、親がいるって言うのは、守られているってことなのよ。実際、ヘレンちゃん、この学費は大統領が出してるんでしょ？おれっちにはそういう存在自体がもうないじゃない？」

ヘレンは黙り込んだ。

そう、私は一人では生きていけない……でも。

「ほんとにヘイツキには」またヘレンがひとり言のようにつぶやく「一人も身寄りがいないの？」

「さあね。親が死んだのは確かだけど、ほかに親戚がいるかどうかは覚えてないなあ」

「私だって、味方はもういないわ」

「イアソン君はどうなのよ？おれっち、お勧めするよ。なんせヘレンちゃんに夢中だし」

「……どうしてみんな私にイアソンの話をするの？ケレスのメモにも書いてあったわ」

ヘイツキは、目の前の『お嬢様』がどうして自分にこんなあけすけな話をするのだろうと不思議に思ったが、悪意は全くなさそうなので真面目に考えてあげることにした。

「いい奴だから。おれっちの友。テリーちゃんの友。レーナはテリーちゃんの友、ヘレンちゃんはレーナの友。うん。だから既にイアソンもヘレンちゃんの友達であるわけだ。うん」

「そういうことになるの？」

「まあ、そういうことでいいんじゃない？」

ヘレンはよく理解できなかったが、いちおうヘイツキに向かって、「そうね」

と言った。

図書館は静かだ。静かすぎて、いろいろな考えや、過去や、聞こえないはずの音や声が、ヘレンの頭の中に響いてくる。ゲルトリーズ崩壊の新聞記事。放射能汚染。昔住んでいた館。リュエフが撃った拳銃、目の前で倒れた男たち。冷ややかな『大統領』の視線。『この子を遠くへやって!』と叫んだ母親の声。昔自分をいじめた前の学校の生徒たちの笑い声。一度も味方になってくれなかった主治医。ここに来て初めてできた友たち、レーナ、ケレス、カナデ、ヘイッキ、テリー……パーティで会ったイアソンと、買ってもらった青いドレス、エルツコ・シデクラのノート……それから……それから……。

3-31 イアソン ヘレン 道

ヘレンがぼんやりと道を歩いているのを見かけたイアソンは、声をかけてみた。

「ヘレン」

振り向いたヘレンは怯えた顔をしていた。イアソンはがっかりしたが、顔には出さず、当たり前障りのない会話をしながら女子寮まで歩いた。

「本が好きなんだね」

「そうね」

「ヘイッキに何を貸したの？」

「ヘイッキの知り合い？」

ヘレンが急に明るいう顔になった。イアソンはそれがいやだった。

「友達だけど……」

「ヘイッキが、自分の友達は私の友達って言ったの」ヘレン声から、怯えが消えていた「だから、あなたも私の友達ですって」

「ヘイッキ……」

イアソンはかなり困惑していた。

どうして判断基準がヘイッキなんだ！？

「違うの？」

ヘレンがちよっと不安げにイアソンの方を見た。

「いや、いや！違う。あいつが正しい。うん。そういうことだ」

イアソンが慌てて弁解したが、自分から『友達』という単語を口にしたくなかったのでよくわからない返答になってしまった。

「そう」

ヘレンが早足で歩いて行く。イアソンも後を追う。

「今でも、床で寝てるの？」

ヘレンが立ち止り、不思議な顔でイアソンを見た。

「なぜ知ってるの？」

イアソンは立ち止って、無言でヘレンを見つめながら苦笑いした。小さいころから見えてたんだよ。君が。床に転がって石ころや本をながめている君の姿が！まるで目の前にいるみたいに！

イアソンはそう言いたかったけど、言えなかった。

また変態扱いされては困る。

「なんでもないよ。帰ろう」

イアソンは歩き出し、こんどはヘレンがイアソンのあとを追った。どうということだろう……？

ヘレンは歩きながら考える。やっぱりレーナが言ってたみたいに、変な人なのかしら？部屋を覗いていたとか？でも、そんなことしたらすぐ寮の人に見つかると思うし……。

それに、どうしてイアソンは、自分に興味を持つのだろうか？パーティーの時も……。

「ねえ！」

ヘレンが声を上げた、イアソンがふり返る。

「あなたのお母様って……」

イアソンがピクリと全身を震わせた。

「宝石を売ってるの？すごいドレスを着ていたわ。全身ダイヤモンドの」

「えっ？」

「船上パーティーで会ったとき」

「あゝ」イアソンは焦った「まあ、そう、そんなもんだらうね」知られたくない！鞭を持った女王様だとは知られたくない！

イアソンはパニックで半ば頭が真っ白になってしまい、ヘレンがあ有名な『ミス・ベリル』を全く知らないという驚くべき事実には気がつかなかった。

「お父様と仲がいいのね。並んで座るなんて」ヘレンはイアソンの隣にくっついてきた、珍しいことだ「お母様ですら隣に寄りたがらないのに」

「お母様？」

話題が最悪ながらも、イアソンはヘレンが近づいてきたのを嬉しく思った。しかし、大統領に妻がいることを意外に思った。子供がいるのだから当たり前だという気もするが。

確におかしい。どうしてパーティの時に気がつかなかったんだろう？大統領と息子と娘がいるのに、ファーストレディが座るべき席にあのミス・ベリルが座っているなんて、おかしいじゃないか。

まさか大統領夫妻が仲たがいでいるのもあの人のせいじゃないだろうな……？

「あの二人、つきあっているの？」

「えっ？」

驚いたイアソンがヘレンを見ると、好奇心いっぱい目でこちらを見つめているではないか。

「ない、それはない、絶対ない、ありえない。ないよ。うん、ない」

イアソンは呪文のようにそんな文句を繰り返しながらまた早足で歩き始めた。

冗談じゃない！

なんで俺がこんな質問をされないといけないんだ！？しかもヘレンに！

「二人でしゃべっているのを見たけど、楽しそうだったわ。お母様とは物を投げ合うケンカをしているところしか見たことがないのに」

「物を投げ合う？」

過激な夫婦だな、とイアソンは思った。

「7年前の話よ」

無表情でヘレンがつぶやいた。いつのまにか、二人は女子寮の前に着いていた。ヘレンは何も言わずに、イアソンのもとを離れて、女子寮の入口に消えて行った。

イアソンはその後ろ姿をじっと見つめながら思った。

今度ミス・ベリルに会ったら『もう大統領と会うな！』と忠告してやる！

それとも、いますぐ電話するべきだろうか？まさか、今頃また会

いに行ったりしないだろうな……？

3-32 ミス・ベリル 大統領 官邸

「奥様はどこへ行ったんだ？ 大統領閣下」

イシュハ。大統領官邸の一室。

ミス・ベリルがワインを傾けながら質問した。悪女のイメージを意識した濃いアイメイクをして、黒い、メッシュを多く使った透けたドレスを着ている。指には大粒の宝石がはまった指輪がいくつも並び、胸元にはもちろんあの、ベリルのブローチが光っている。

大統領は、壁に掛かっている絵を見つめている。

自分と妻が並んで微笑んでいる肖像画で、結婚式の直後に描かせたものだ。上品な、しかし、意思的な、つり上がった目の美女が、自分の隣で幸せそうに微笑んでいる。

この絵を見ただけは、この上品そうな女が『怒ると金切り声をあげて物を投げまくるヒステリー女』だとは、誰も思わないだろう。

「シグノーの実家に入り浸ってるよ」絵から目をそらさずに大統領がつぶやいた「リュエフに何かあった時だけ帰ってくる。あいつが好きなのは息子だけさ」

「ヘレンは？」

「あの障害児の話はよそうじゃないか」

「よそうじゃないか、じゃないだろ？」ミス・ベリルがワイングラスを乱暴にテーブルに置いて立ち上がった「イアソンには、昔からヘレンの姿が見えていたのさ。エブニーザが私の姿を見ていたようにね」

大統領が驚愕の顔で振り返った。

「わかるだろ？ 運命だよ」ミス・ベリルが大統領に近づいて、上目づかいで微笑んだ「私の娘みたいなものさ……だから、これ以上『障害児』なんて呼び方をしたら許さないよ。自分の子供だろ？ もっと丁寧に扱いな」

大統領が目を見開き、震え始めた。

「本当か？本当に見えていたのか？イアソンにヘレンの姿が？」

「本人がそう言ってたよ」

「それが本当なら、やはりあいつはエブニーザの……」

「わかりきったことを聞くな」

「母親は誰だ？」部屋を出ようとしたミス・ベリルを大統領が制止した「あの、真面目で潔癖な、聖人のような男が、どこの女に子供を産ませたんだ？どこでイアソンを見つけたんだ？」

「何を寝ぼけたことを言ってるんだよ」

本心から呆れた顔のミス・ベリル……いや、『リリック』が軽蔑の交じった笑いを浮かべた。

『今頃気づいたか、バーカ』という顔だ。

その目つきは、パーティーでイアソンが大統領に向けたあの、挑発的な視線と全く同じだった。

「まさか」

「そろそろ時間だろ」ミス・ベリルがドアに向かってまた歩いて行く「お偉方が集まってるんだろ？待たせるとまた支持率が下がるぞ」

呆然と立ち尽くす大統領を置いて、ミス・ベリルは颯爽と部屋を出て行った。

4 囚人11番 25番 独房

寒さが、ようやく和らいできた。

いつかは毎日のように聞こえていた悲鳴や暴れる人間の物音も、なくなった。

風が強くなり、無音の独房には、時々、鋭い風の音だけが響く。

25番は相変わらず、週に一度掃除に来て、ノートをめくって、帰って行く。

最近口数が少なくなった。年のせいかな、長引いた寒さで疲れているのか。

この老人と知り合ってから何年経つか考えてみたが、まるで思い出せないことに気がついた。

私自身も、長い間、ここにいるからだ。

何日経ったか、何年経ったか……そういえば、定かではない。

そんなことはどうでもいい。

アンバランスな二人の話をしようか。

4-1 イアソン ヘレン 図書館

休暇。

レーナがいなくなったのをいいことに、イアソンは、図書館にいるヘレンに毎日のように話しかけていた。ヘレンは無表情ではあるが、前みたいに逃げたりはしなかった。

話しているうちに気がついたのだが、ヘレンは、イアソンの身の上話が気になったようだ。貧しい町の老人や近所の人たちの話や、ミス・ベリルのところに引き取られた話をする、ヘレンは、童話を聞いている子供のように目を輝かせた。

「信じられない。自分の部屋がないなんて。しかも外に投げ捨てられるなんて」

「でも、本当にそうだったんだ」

「よかったわね。迎えに来てくれて。その……ミスなんとかさん？」

「ミス・メイシン」

「優しい人たちね」

「……ちよつと変人だけどね」

イアソンは、ヘレンの反応を、自分に関心が向いてきた証拠だと判断して喜んでいたが、ヘレンにしてみれば、イアソンの話は『面白い物語』でしかなかった。つまり、面白い本を偶然見つけたようなもので、物語としては気に入ったけど、イアソン自身に興味があるわけではなかった。

まあ、そんな、若者にありがちな誤解が発生していたわけだが、そんなことには全く気がついていないイアソンは、ヘレンに、

「ポートタウンの館に来ないか」

と言ってみた。

「休暇中だし、ミス・メイシンやミス・ベリルにも会えるし、絵も本もあるよ」

「いいわよ」

なんでもないことのように、無表情で、ヘレンは承諾した。

あまりうれしそうでもないが、ためらっているようでもなかった。

……何を考えてるんだろう？よくわからないな……。

イアソンは反応のなさに困惑したが、とりあえず拒絶されなかった。たのほつとした。

そして、当日。

隣のヘレンは、明らかに憂鬱そうだった。

特に文句は言わなかったが、

『私は館じゃなくて、もっと広い所に行きたいの』

と、その憂い顔は語っていた。

彼女が行きたがっているのはあくまで青空の下か、森か、あるいは、ノレーシュなどの外国だった。

いや、厳密に言えば、ポートタウンの南側は管轄区だ、イシュハではない。

だからここも外国なのだが。やはり言葉も同じで、距離も近すぎる。外国に來た気分にはなれないのだろう。

隣のイアソンにも、ヘレンの憂いが伝染した。しかし、彼の憂いは、ヘレンがあからさまに館に來るのを嫌がっている（少なくとも、楽しみにしていないことは態度から間違いないとイアソンは思った）ことと、他に行くところがないから『仕方なく』一緒に來ているのではないか、という疑惑が頭から離れないということだった。

相変わらずヘレンは、イアソンに、他人に、興味が無い。

愛想笑いなんてヘレンにはできない。わかつてる。

わかつてはいるが、ずっと不愉快な顔をされてはたまらない！

それでも、ヘレンがああ館に來る、つまり、ミス・ベリルやミス・メイシンに会って、いかにもあの館の中が世間で言われているのと違うか、わかってもらえるだろうという期待、それだけで、今のイアソンはもちこたえているのである。

車が館の前に到着した。クラハ・メイシンが迎えに出てきていた。白い日傘に、いつも変わらぬロングスカート姿だった。

「おかえりなさい！ようこそいらっしやいませ！」

イアソンとヘレンに交互に挨拶したクラハは、いつもより改まっ

た口調だった。

「はじめまして」

ヘレンが消え入りそうな声で言った。緊張しているらしい。

「ああ、ミス・メイシンには会ったことがないんだっけ」

「クラハ・メイシンですわ。クラハと呼んでかまいませんのよ？ 女同士であればね」

クラハは急に親しげな、のんきな声で『ヘレンだけ』に話しかけた。

「おや？ とイアソンは思う。」

ファーストネームで呼べ？ 自分には、そんなことを言ったことは一度もないのに。

ヘレンは、困惑したような、歪んだ笑いを浮かべながら『クラハ』を見た。

玄関から中に入った時、イアソンは後ろから飛び出してきた何かにはねのけられた。危うく倒れるところだった。

「エリ・クレマーシュ！」

玄関ホールの絵まで（イアソンを突き飛ばして）走り寄ったヘレンが、顔を輝かせながら叫んだ。

それは、女流画家エリの有名な絵で、黒髪の女性が黄色いローブを着て、物憂げに肩に頬を傾けている。彼女はルカといって、武神フレイグの従者だそうだ。

美術史の本でヘレンはこの絵を見たのだ。

「ああ、よく知ってるのね」

クラハは、ヘレンの突然の行動に驚きつつ、のんきな声を保っていた。

「これ、本物？」

「ここの持ち主は偽物が嫌いだったらしいから、本物だと思うよ」
起き上がったイアソンが、いまいましい顔をして言った。

「やっと笑ったと思ったら、絵に夢中か！」

「エリの作品なら、まだホールにたくさんかかっているわ」

「ミス・メイシン！」

イアソンが怒鳴ったが遅かった。ヘレンは、どこにホールがあるかも知らないだろうに、ものすごい勢いで廊下を走っていった。途中、洗濯物を運んでいたアキにぶつかりそうになり、か細い叫び声が響いたが、それで走るのをやめるヘレンではない。

「あらあら！」クラハはここに至ってようやく、相手がかなり変わった人間であることに気がついた「ホールはそっちではありませんよ！目の前に入口があるじゃないの！」

「もう遅いですよ」

玄関の正面にある大きなドアを指差して呆然としているクラハに、イアソンが不愉快そうな低い声でつぶやいた。

「何の騒ぎだい？」

ミス・ベリルの声がドアの向こうから聞こえた。彼女はめずらしく昼間起きて、二人が来るのを待っていたのだった。

クラハはドアを開けた。広間には、黒一色のスレンダーなドレスに、宝石をたくさんつけたベルトやネックレスを身に付けた、いつものミス・ベリルの姿があった。両手を、手に付けたたくさんの大粒の宝石をみせびらかすように、かざして見せて、挑発的に唇を突き出し、いたずらっぽく微笑んだ。

「昼間から一体何をやってるんですか？」

「お客が来るんだからこれくらいしてもいいだろ？宝石好きだって言ってたじゃないか、ヘレンはどこ？」

「ここ！ここよ！」

ようやく道を間違えた事に気がついたのか、ヘレンが戻ってきた。

「あーらお久しぶりなこと」ミス・ベリルがドアの外に出てきて、廊下を走ってくるヘレンに手を振った「何を探してるんだい？」

「エリ・クレマーシュ！」

「ああ、そこにかかっているよ」

ミス・ベリルがドアの向こうに見える、広間の絵のいくつかを指し示すと、ヘレンは臆せず広間に飛び込んだ。

広間には絵が二つある。右側に、キュプラ・ド・エラの神カーリーの立ち姿、左にはアケパリの武神フレイグが、刀を腰に差している立ち姿の絵がある。

「昔はこの間にねえ、女神アニタがいたんだけど」

「ああ、あの女神像ですね」イアソンは、今初めて二つの絵と、かつてあった女神像の位置関係に気がついた「どうしてよその国の神ばかりなんですか？」

「さあねえ、特に意味はないんじゃない？」

ミス・ベリルが興味なさそうに言った。おそらく前の持ち主の趣味なのだろう。

「本で読んだわ。カーリーって、肉体が男性で精神は女性なのよね」ヘレンが右側の絵を見つめながら目を輝かせている。

「本がお好き？」

「大好き」

「ふうん」ミス・ベリルも一緒に絵を見上げた「カーリー・フェイウ。同じ名前の金持ちが実際に今キュプラ・ド・エラにいるよ。しかもオカマなんだ」

「ほんと？」

「まあ、そんな話はいいさ」ミス・ベリルは話題を変えた。表情が険しい「私はあまり好きじゃないんだ、こういう絵は。イアソン、部屋に案内しておあげ」

ミス・ベリルが急にイアソンに向き直って言った。有無を言わさない語調だった。

4-3 イアソン ヘレン 廊下／イアソンの部屋

「好きじゃないなら外せばいいのになあ、あの絵」

廊下を歩きながらイアソンが言うと、ヘレンが驚いて彼を見た。

「だめよ！もったいないわ！」

「そう？今思い出したけど、俺の部屋にファナティの絵もあるんだ。ベッドの天蓋に」

「ほんと？」

ヘレンの目が再び輝いた。

「うん、この屋敷、いろんな神の絵があるから、わけがわからなくなるよ。そのうち、どれがこの国の神だったかなって」

「ここって、管轄区だから、ファナティでしょう？」

「まあ、そうだね」

イアソン自身は信仰心などまるでないのだが、一応返事をしておく。

ヘレンが気にしないといいんだが。なんせ、イシュハはアニタ信仰だけど、ほとんどの国民は無宗教だ。そして、管轄区のファナティ信仰は『狂信的』で『気持ち悪い』と思われる。

「そういえば、ノレーシュの神話やアケパリの昔話では、四人の神はみな対等なんですって」

「そうなの？」

「そうよ。東の海の果ての、リユンシャンっていう島に一緒に住んでいるの」

ヘレンはどうやら、イシュハの常識より、ノレーシュの神話を信じているようだ。

イアソンは部屋のドアを開けた。

「どうぞ」

ヘレンはちょっとだけ不安な顔をイアソンに向けて、ゆっくりと部屋に入ってしまった。

「おとぎ話みたいな部屋ね。暖炉があって、机もベッドもアンティークみたい」

ヘレンが部屋を見回しながら言った。

「そうだね、初めてこの部屋に来た時はびっくりしたよ。あまりに派手で」

「初めて来た時……」

ヘレンはどうやら、イアソンの境遇をようやく思い出したようだ。

「で、ファナティ様はあちらに」

イアソンがベッドの天蓋を覗き見るようにしながら、水晶を持った女神を指差した。

ヘレンが近寄ってきて、同じように天蓋を見た。ファナティと、天使がそこにいた。ヘレンはしばらく無言で眺めていたが、突然、ベッドに仰向けになって倒れると、寝転んだまま天蓋を見て、ぼんやりし始めた。本格的に絵に夢中になっているようだが……。

無防備すぎる……。

イアソンは苦笑した。ヘレンは、男が目の前にいるのに、仰向けにベッドに倒れてぼんやりした目をしているのである。

おそらくヘレンは、絵の世界に入ってしまったて、イアソンの存在など忘れているのだろう。しかし、横になってぼんやりしているヘレンはとても、扇情的に見える。

イアソンは目をそむけた。どうすればいいか迷った。

「ヘレン」

目をそむけたまま呼んでみたが、返事がない。

「そうだ、奥にたしか、エリの画集があったはずだ。取ってくるよ」

イアソンは逃げるように自分の部屋を出て、図書室に向かった。

でも、廊下を歩いているうちに、ひどく情けなくなってきた。

何をしてるんだ、俺は！

4-4 ヘレン 部屋へ書斎

ヘレンは、部屋のドアが開けっ放しになっていることに気がついた。

人が通ったら嫌だから、閉めなきゃ。

ベッドから起き上がり、ドアに近づこうとした時、廊下から人が現れた。

イアソンだ。

しかし、グレーのスーツを着た彼は、いつもと雰囲気違った。どうして着替えたのかしら。それに、いつもだったら意味もなく明るいの、何か、違うのね。表情が暗いわ。

彼の目はいつもより色が薄くなっているように見えた。その目が、ヘレンをじっと見つめている。顔は笑っていたが、どこかに憂いを含んでいるように見える。いつもの、好意に満ちた目つきとはどこか違っていて、寂しそうなのだ。しかし、ヘレンはいつも以上に、その目に好奇心と、優しさに似た深さを感じた。

彼は手を軽く上げて、ついておいで、というしぐさをした。

どうしたのかしら？ いつもなら、大声で余計なことまでしゃべるのに。

それでも、ヘレンは好奇心に取りつかれて、彼の後についていった。

彼は階段を上がっていく。ヘレンも追いかけていく。二階は驚くほど暗い。まるで夜のようだ。二人の足音だけが響く。それでもヘレンは、前を歩く彼の後を、恐怖心も感じずについていった。

一番奥のドアが開いた。ヘレンにはそれが、触らずに勝手に開いたように見えた。彼は、振り返ってヘレンがついてきているのを確認すると、微笑んだ。その笑い方はいつものイアソンではなかった。まるで、別な、偉大なものが笑いかけたようだった。ヘレンの顔は真っ赤になった。何か優しいものが背中を伝って、彼女を撫でたよ

うだった。こんなことは今までなかった！

どうしたのかしら？ イアソン。変だわ……。

部屋の中へ入っていく。ヘレンも中に入って、驚いた。その部屋は、四方の壁が全て本なのだ！ しかも、外国の本ばかりだ！

「まあ、まあ……」ヘレンは興奮して四方の壁を見回した「これ、ロンハルト語だわ」

ヘレンは本を取り出して、古臭い革の表紙をめくった。

「王宮の本だわ！ それにこれは、ノレーシュ語！」

ヘレンが本を取り出して、顔を輝かせながらイアソンに向かって言った。しかし、彼は相変わらず一言も口を開かず、ただ静かに笑っているだけだった。

どうしてしゃべらないのかしら？ まあ、いいけど。

彼はヘレンに向かって、また、こちらへおいで、という仕草をした。

「なあに？」

ヘレンが彼に近寄る。と、彼は少し脇にどけて、ある本棚と本棚の間の、二センチほどの隙を指差した。

「ここが、どうかしたの？」

彼は何も言わずに、両手で何かを右側に押しのけるような仕草をして、笑った。

「ここを押すの？」

ヘレンは試しに隙間に手を入れて、右に本棚を押してみた。すると、本棚がゆっくりとずれた。まるで横開きの扉のように！

そして、その後ろからは、古ぼけた、傾斜の急な階段が出てきた！

「まああああ！」ヘレンは興奮の頂点に達したような大声を上げた「すごいわ！ 隠し通路なのね！ まるで物語みたい！……あら？」

振り返ると、イアソンはいなくなっていた。

本だらけの部屋には、誰もいなかった。

「変だわ……」

ヘレンは階段を見た。

もしかして、彼もう上がっていったのかしら？この奥に何があるのだろう……？

ヘレンは階段に足をかけた。湿った空気だが、閉じ切った空間特有のにおいや、滞った暗い空気はなかった。

風が、上から、ゆるやかに流れてくる。ヘレンの髪がゆれる。

ああ！風！

ヘレンは微笑んで、階段を駆け上がる。

4-5 イアソン ミス・メイシン ミス・ベリル 館の中

「ミス・メイシン」

イアソンはクラハの部屋に、不安そうな面持ちでやってきた。クラハはあいかわらず、何か大きなレースを、黒い糸で編んでいた。

「どうしたの？ ヘレンを一人にしちゃだめじゃない」

「それが、いないんですよ」

「いない？」

「本を取りに、俺が奥の部屋に行ってる間に、部屋から抜け出したみたいで」

「まあ、館で迷子になっちゃ困るわ」

二人が廊下に出ると、ミス・ベリルが階段を下りてきた。

「ミス・ベリル！」

「何だよ？ 妙に慌ててるじゃないか」

「ヘレンを見ませんでしたか？ いなくなったんですよ」

「そういえば」ミス・ベリルが階段の上を見上げた「さっき足音がしたような気がする」

「二階で？」

「もちろん」

「まずい」

イアソンがミス・ベリルの横をすり抜けて、二階に上がって行った。

「なにが、まずいのかねえ」

ミス・ベリルがクラハに向かってさも不思議そうに笑った。

「あなたのお仕事部屋に紛れ込んだら大変だっという意味じゃない？ ショックで倒れちゃうかも」

「私の仕事なんてみんな知ってるじゃないか」

ミス・ベリルがふてくされた顔で、また二階に上がっていった。クラハもにやにやしながらそのあとを追った。彼女はこういうハプ

ニングが大好きなのだ。

二階に上がったイアソンが見たのは、暗闇の中で開いているあの書斎のドアだった。

よりによってあの部屋か！

廊下を走って書斎に飛び込む。中には誰もいない。何冊かの本が床に投げ出されている。そして、驚いたことに、

「何だ、あの階段は」

「ああーら。お嬢様は頭がよろしいこと」後ろからミス・ベリルの声がした「隠し階段をみつけちまうとは」

「隠し階段？」

「館の屋上に通じてる。懐かしいねえ。昔よく二人で登って星空の下でいろいろやったもんさ」

「そんな話はあとにしてください！」

イアソンは真っ赤になってミス・ベリルに向かって叫んだ後、ものすごい速さで階段を上って行った。

「いい話なのにさあ」

「何をしていたんですか、屋上で」

のんびりと追いついたクラハが言った。

「いろいろ、だって。それだけ言ったらわかりそうなもんだ」

「いろいろ……いやだあーもうリリックったら！」

クラハがふざけた声を上げて、手で肩をたたく真似をしたので『リリック』が大笑いに笑った。

何を勝手に想像してるんだか。二人で星を見て涼んでただけだったのに。

一方、同じように余計な想像をして、悪しき映像を振り払うようにイアソンが乱暴な足取りで階段を上っていくと、突然視界が真っ青になった。屋上だ！

出口にはドアはなかった。日の光がもろに当たる屋上に、一部分平らなところがあり、階段はそこにつながっていた。

ヘレンはそこにいた。緑色の床に寝ころんで、目を閉じて、幸せ

そうにまどろんでいた。それは、今まで彼が見た事のなかった、天使のような表情だった。まるで今、女神に抱かれてまどろんでいるような。大きな満足を得て、眠っているような。そして手がだらりと身体の横に置かれている。

ヘレンの手、開いた手。

イアソンの脳裏にあの『朽ちた手』が浮かんた。目の前が真っ暗になった。

「ヘレン！」

悲鳴のような声で彼は叫んでいた。

4-6 ヘレン イアソン 屋上

一面、青い空だわ。こんな場所があったのね。

屋上で仰向けに寝転んだヘレンは、視界が全てスカイブルーになったのを喜んでいた。

高い塔や飛行機なんかより、ここの方がよっぽど空に近い気がするわ。

ヘレンは満たされた笑いを浮かべながら目を閉じた。風もちょうどよい加減に吹いているて、まともに照りつけている日光もそれほど暑く感じなかった。

まさに最高の天気！このまま空に溶けてしまえたらいいのに。

「ヘレン！」

甲高い声でヘレンは我に返った。

ああ、せっかくの空が！邪魔！

大きな足音がした。だれかが歩いてくる。振動が背中に伝わる。

視界にイアソンの顔が入ってきた。

あら、顔が青いわ。

「大丈夫かい？」

「私は楽しんでたのよ！」ヘレンは不機嫌な顔になったが、すぐ安らいだ顔に戻った「ここ、最高ね。空が近い」

「ヘレン」彼は困ったような顔をした「悪いけど、降りて来てくれないか？ここ、ちょっとといわくつきの場所なんだ。さっきミス・ベリルに聞いたんだけど」

「戻るって、さっき案内してもらったばかりなのに」

「案内？」

「あなたよ！」ヘレンが起き上がった「あら、あなたまた着替えたの？」

「俺は朝からずっとこの格好だよ」

イアソンはブルーのシャツを引っ張りながら言った。

「だって、さっきグレーのスーツを着てたじゃない！」

「グレーのスーツ？」

「そうよ、それで、本棚を押して、って手でこう、やってたじゃない」

ヘレンが手を、右側に何かを押すように動かした。

「それ、俺じゃない」

イアソンが呆然とした表情でつぶやいた。何か強いショックを受けたかのように、顔が蒼白になっていた。

「どうしたの？」

「俺じゃないんだ、それは」

くるりとヘレンに背を向けると、イアソンはよろよろとした足取りで階段を下りて行ってしまった。ヘレンは不安になって、名残惜しいその空間をあとにして、彼を追いかけて館の中に戻った。

4-7 イアソン ミス・ベリル クラハの部屋

「よりによって、どうしてヘレンの前に姿を現すんですか？あの幽霊は！」

ここはクラハの部屋。ミス・ベリルとイアソンが話をしていた。ヘレンは、クラハに連れられて別の部屋へ行ってしまった。たぶん、幽霊の正体を説明されてるのだろう。

「幽霊かあ」ミス・ベリルが寂しそうにつぶやいた「クラハやお嬢さんの前には姿を現すのに、私の前には出てこないんだよ、いつも」「そんなことはどうでもいいんですよ！」

イアソンが怒りの表情でミス・ベリルに詰め寄った。

「そんなに怒るんじゃないよ。もしそれが本当にエブニーザだとしたらね。きっと、お嬢様が見たいものを真っ先に見せたかったに違いないよ」

「見たいもの」それはイアソンもよく知っているはずだった。空だ！「それにしても、まず俺に教えてくれたってよさそうなんだ！」

「そりゃ無理だろうよ。あいつはね、相手が望んでいることを絶好のタイミングで、素早くやらずにいられない男なんだ。きっと、ヘレンお嬢さんは外に出たくてたまらなかったんだろうよ。それと、本が好きだって言ってたじゃないか、ホールで。きっと聞いてたのさ。喜ばすためにやったのさ。それしか考えられないね」

「でも」

「生きていたところからそうだったよ。何でもタイミング良くやりすぎる男なのさ。だから、目の前でいい場面やチャンスを持って行かれた奴らにこぞって逆恨みされて、攻撃されることになる。ああ、ちょうど今のあんたみたいのがうようよと現れてね！」

ミス・ベリルが椅子に座ったまま、上体を大きく後ろにそらせて、伸びをした。

イアソンは何も言い返さなかった。たしかに、ヘレンはここに来

た時はとても憂鬱そうだった。それが、あの屋上の笑顔だ！

イアソンは、自分が今怒りにとらわれているのは、幽霊が現れたからではなく、あの極上の、愛するヘレンの笑顔が、自分によって現れたのではない、というその一点だけだということに、気がついた。

「俺はどうすればいいんですか？」

「私に聞くんじゃないよ」ミス・ベリルが呆れたように言った「幽霊の話でもして盛り上がったらどう？書斎のカギは開けっぱなしだからもう一度二人で行って見たら？いいきっかけじゃないか。いろいろ知ってもらえる」

「まあ、そうですね」

イアソンは返事をしながら、力ない足取りで部屋を離れた。

どうしよう、ヘレンまで、あのエブニーザを通してしか俺を見なくなったら……。

4-8 イアソン ヘレン イアソンの部屋

ヘレンは、一足先にイアソンの部屋に戻っていた。

ミス・メイシンの話は、ヘレンには信じ難かったが、さきほどのイアソンだと思っていた男が、実は館の前の主だと聞いたとき、あの奇妙な表情の違いが思い出されて、納得してしまった。

そして、ぼんやりと、夢でも見ているような顔で、ヘレンは、先ほど会った幽霊のことを考えていたのだった。

いい人だわ。とてもいい人。どうして死んじゃったのかしら？

ヘレンはそれが気になっていたので、聞きそびれたのである。有名な悪人の悲惨な死だから、彼女も知っていそうなものだが、ヘレンは世間の評判には目もくれない人間だ。すべては直感で、判断されるのだ。

とにかく、おもしろかった！ 大声を出したら消えてしまうってわかっていたら、静かにしていたのに。きっと退屈しているんだわ。こういう館は退屈。首都の私の家みたいに。

ヘレンは書斎から取ってきた、ノレーシュ語の本を開いた。それはミス・ベリルが『持って行きな、どうせ私には読めないから』と彼女にくれたものだった。

本の単語を目で追いながら、うろ覚えの例文を小声でぶつぶつと呟いていると、ドアの開く音がした。

イアソンだ。

彼は何も言わずに、ヘレンをじっと、暗い表情で見ている。

ヘレンは彼を見て。さっきの幽霊と比べてみた。

……顔はまったく同じなのに、何かが違うのね。そうだ、別人だわ。何かしら……？

4-9 イアソン ヘレン イアソンの部屋

「あなたってお父様にそっくりなのね」

「お父様？」

「さっきの幽霊。お父様なんでしょ？あなたの」

「あ、いや」イアソンは、自分が養子扱いになっていることを思い出した「似てるからそう思ったんだろ？厳密に言うとは違うかもしれない」

「厳密になんて言う必要ないわよ。同じ顔だもの」

「そうだね」

なぜかイアソンは、ヘレンと目を合わせたくなかった。視線は天井を泳いでいる。

今、ヘレンは間違いなく、俺とエブニーザを比べているに違いない！どうしよう。自分より幽霊のほうがいいとヘレンが言い出したら……。

「でも、ずいぶん違うのね」

「どこが！？」

イアソンが急にヘレンを見た。テーブルまで勢いよく駆け込んできたので、驚いたヘレンが本を抱いて後ろにのけぞった。イアソンは今まで『エブニーザに似てる、似てる』とだけ言われ続けていて『違う』と言われたのは初めてだったのだ。

「どこが違う？」

「どこがって。ただ、今、入ってきた時、違うなと思ったの。それに」

ヘレンは急に顔色を変えたイアソンに驚きながら、手に持っていた本の間に挟まっていた紙の束を取り出して、彼に向かって振って見せた。

「何か書くのが大好きみたいじゃない、お父様は」

「それ何？」

「単語帳」ヘレンが神の束を見ながら笑った「ノレーシュ語の単語と、意味が書いてあるわ。難しい単語を調べて書き出していたんじゃない？おかげで本が読みやすいわよ」

ヘレンが子供のような顔で、おもちゃのように、髪の手をイアソンに差しだした。そこには、活字のような几帳面な字で、単語とその意味と、類義語が見やすく並んでいて、その束自体が一冊の本になるくらい厚かった。

読むだけで頭が痛くなりそうな細かい文字が、何枚も何枚も、同じ活字で書かれている。

ああ、とイアソンは叫びそうになった。

俺とは全く違う性質の人間だ！これを書いたのは！全くの別人だ！イアソンはめまいがした。苦手な書類を見たからではない。この文字を書いた男と、自分は全く異質の人間だということをはっきり認識したからだだった。もちろんそれは、彼とあの同じ顔の『お父様』のつながりを否定することではない。むしろ、逆だった。同じ顔で、性質の違う男。彼の容姿と予知能力だけを自分は受け継いだのだ。残りの、目立ちたがりの、人を挑発する癖は、別な、彼のよく知っている人間のものだ。それが何を意味しているのか、イアソンにはすぐわかった。

このために彼はヘレンの前に現れたのか？あの『父親』は！

「ヘレン」

「なあに」

ヘレンは既に本に夢中だ。ノレーシュ語の世界に入ってしまったているようだ。

何にも気がついてないんだな。こっちはこんなに救われているのに。まるで他人に興味がないんだ。

イアソンは自分を笑った。一体何に嫉妬していたのだろうか？ヘレンがほかの人間のことなんか考えるわけがない！他人に興味を持つ余裕がないほど、夢中になることがほかにいくらでもあるんだから！空に、外国語に、絵画、石ころ……。

「俺も読んでいい、それ。一緒に」

「いいけど、あなた、ノレーシュ語専攻？」

本から目を離さずにヘレンが言った。

「いや」イアソンは気まずそうに小声で言った「外国語はまだ専攻してないから、全くわからない」

「困ったわね」

ヘレンはそう言ったが、特に困った様子でもなく、本を見ながら何かぶつぶつと呟き始めた。イアソンは黙って、その聞きとりにくい、でもかわいらしい声を聞いていた。

『ノレーシュの美しい姫に魅了された教会の僧侶が、八月の夜に……』

4-10 ミス・ベリル ミス・メイシン 館の中

「困った男だねえ。息子の女に手を出すなんて」
お茶を運んできたクラハに、ミス・ベリルが愉快そうに笑いかけた。

「そんなのんきなことを言っていていいんですか？」

「いいじゃないか。なるようになれ、だ。それにしても、ヘレンは幼いね。というか、生まれつき色ごとに縁がないんだろうねえ。私とは逆の世界にいる女だ」

「それにしては、よく似ているわね、あなたに」

「どこが？」ミス・ベリルが意外そうな顔をしたが、まんざら嫌でもないようだ「あのお嬢様と私が似ているって？」

「なんというか、物事を直感でしか、見ないところですよ。ぼんやりしているように見えて、気に入ったら周りを蹴り倒してでも突進していくところもね。それにしても驚いたわあ」

クラハが自分で持ってきたお茶を飲みながら、あきれたような顔をした。

「さっき話してて気がついたんですけど、あなたのこともエブニーザ様の事も、何にも知らないんですもの。うわさでも聞いてない？　って尋ねても、知らない。新聞も読まないのかしら？　本が好きなら、あの方のお話くらいどこかで見つけてもよさそうなものだわ。それに、お友達やお父様から何も聞いていないのかしら？　ヘイゼルは何も話してないの？」

「へえ……」

ミス・ベリルの顔に、驚きと、子供っぽい好奇心が現れた。エブニーザの死はイシュハでも、管轄区でも、その他世界中でも大きく報道されたはずだ。

「ほら、その顔も似てますよ。好奇心丸出しの顔」クラハが笑った
「何なのかしら、女の好みも父親に似たのねえ。怖いわあ、私」

「何が怖いのか」

「なんでもないわ、ああ、怖い怖い」

クラハはどうやらまた、一人で勝手に想像して興奮しているようだった。何か楽しそうにぶつぶつ呟きながら部屋を出て行く。

ミス・ベリルは薄笑いを浮かべたが、すぐに、どこか神妙な、何かを憂いているような顔をして、窓の外を見た。

今もどこかで、私を見ているのか……？

部屋を見回してみようと思ったが、やめたほうがいいと思い直した。

どうせ誰もいない。失望して、寂しくなる。
きつと、そうなる。

外は晴れている。淡い光にあふれている。

館の中の薄暗さとは、あまりにも対照的だ。

囚人11番 25番 独房

「順番がバラバラだな」

25番が、紙の束をめくりながらつぶやいた。

「こっちじゃ学生だと思ったら、こっちじゃもう『年を取ってる』し、こちらは弁護士になったばかりときてる」

「そういうものだろう」

私は、25番が新しく調達してきた紙に鉛筆を走らせながら言った。

この紙は一体どこから持ってきたのか、それはわからない。
尋ねる気もしないし、彼も『戦利品』を自慢することはない。

「人は、昔を思い出すとき、順番には思いださないものだ」

「まあ、そうだな」

25番が、こちらに鋭い目を向けた。

「ここに描かれていることは、事実なのかな」

何回、同じ質問を受けただろう。

「そうだ」

何回、そう答えただろう。

続きを聞かせようか。

今回は、別な人物の話だ。

どこにでもいる、ひねくれた、普通の男の話だ。

5-1 オリビン・クウェルカー 国立公園

オリビン・クウェルカーは、国立公園を散歩しながら、自分の不確かな将来のことを思い悩んでいた。

金がない。

教育もない。

仕事もない。

さきほどから、いや、物ごろついたときから、彼の頭にはこの三つのフレーズが、呪いのようにつきまとっていた。

学校は中等学級の半分までしか行けず、そのあとは、工事現場や、ファーストフードや、唯一の能力である車の運転、つまりトラックの仕事など、転々としてきた。

彼はもうすぐ三十歳になる。どこにでもいる茶褐色の髪と目を持つ、体格のいいふつうの男である。

健康だが、疲れている。

ほとんど不眠不休で働いていた運送会社が倒産し、まだ給料が支払われていない。

そして今も失業中だ。もうじきアパートの家賃も払えなくなるから、案外この公園が次の住みかなのかもしれない。

公園の至る所に、汚い恰好でベンチを占領して眠っている浮浪者や、おそらく失業中なのだろう、ぼうっと座りこんだまま視線を宙にさまよわせている人間が目につく。

一体俺の人生は何だ？

このまま終わりか？

公園は秋の色彩に満ちていた。木々の葉が枯れ、風に揺れながらひとつひとつ落ちていく。彼は、その葉が自分のような気がしてきた。枯れて、地面に落ちて、踏まれて、粉々になって、それで終わって行く。

冗談じゃない！

道に積もった落ち葉を乱暴に蹴飛ばしながら、早足に林を通り抜ける。夕方になろうとしていた。夕陽の色はオレンジに変わりつつあった。人影は少ない。

視界の隅に、ふと、白い影が映った。

彼はあたりを見回した。いつのまにすれ違ったのか、彼の後ろを歩いていく、女らしい人影が見えた。大きな麦わら帽子、白いレースのドレスは地面につきそうなほど長く、夕陽と風に彩られてひらひらと輝いていた。髪はブロンドなのだろう。夕陽の中で金色に輝き、ゆらゆらとなびいていた。

なんだあれは。今時あんな恰好でこんなところを歩いてるなんて。夢遊病か？

しばし後ろ姿を眺めた末、彼は、その人影についていくことにした。

彼女はしばらく、公園内の舗装された道を歩いていたが、ある、草が平坦に生えている広場に出ると、突然道をそれて、草の上を走りだした。ものすごい勢いで。

何だ？ どうしたんだ？

彼は草原を走る女を咄然と眺めていた。

病人だ。

きつと気が違ったか、極端に夢見がちな女なんだ！

女が急に立ち止り、倒れた。

まるで流れ弾に当たった動物のように、突然身を後ろにそらせて彼は慌てて草原を走り、彼女に駆け寄った。声をかけようとして倒れている彼女を覗きこんだとき、はっとした。

女は目を閉じて、微笑んでいた。白い、美しい手足を広げて。

幸福が、その顔にあらわれていた。夕陽の草原の下で、全身に日を浴びて、横になっていた。何者も壊してはいけない安らぎが、その、子供のような、宗教画の天使のような顔に現れていた。

彼は驚いた。

驚きすぎた。

彼はこういう顔を、幸福を、まったく知らないで育った人間だった。そして、人目をなにも気にしていない、ただ全身で幸福を得るために行動できる人間を、初めて見たのだった。それも、金持ちになるとか、有名になるとか、そういうことではない。ただ夕陽の下で寝転んでいるだけだ！

しかし、それだけのことができない人間が、何と多いことだろう。雷に打たれたような衝撃を感じながら、オリビンは一步、後ずさりした。

彼女は転んだのではない。

もともとこうするためにここに来たのだ！

彼は足音をたてないように、そっと、その場を離れて道まで戻り、しばらく、女が横になっているであろうあたりをじっと、眺めていた。

いつ立ち上がるんだろう？

立ち上がらなかったらどうしよう？

オリビンはうろうろと、女が倒れているあたりを見たり、下を向いて考え込んだりしながら、草原の横の細い道を行ったり来たりしていた。遠くから彼を見た歩行者がいたら、きっと『何か頭に障害のある人』だと思ったに違いない。

それから一時間近く経って、日が落ちて暗くなったころ、女が立ち上がって、先ほどとは違う、重そうな足取りで、草原の向こうの林に向かって歩き出した。

どこへ行く気だ？

オリビンはあわてて後を追いかけた。

林を抜け、国立公園の裏門（オリビンはこの門の存在を今日初めて知った）から市街地に出ると、女の格好はさらに目だって、浮いて見えた。すれ違った人間が、何人も振り返って、その『異様な格好の女』を驚きの表情で見っていた。

女が駅前のカフェに入った。

中を覗く。男が座っている席に近づいた。

男のほうも気がついたのか、顔を上げて、笑って手を上げた。

オリビンは帰ることにした。

ふつうの女だったのか。

でも、やはり変だ。何か、変わっている。

彼女が男と会っていたのが気に入らなかったが、それでもオリビンの頭から、あの平和な、幸せそうな、夕暮れの彼女の顔は、しばらく離れることがなかった。

5・2 イアソン ヘレン カフェ

暗くなったころ、イアソンがコーヒーを飲んでいるカフェに、まっ白な格好をしたヘレンが現れた。髪の毛に枯葉がくっついていた。

イアソンがアルターに来てから、もう数年経過している。

二人とも大学生で、もうすぐ卒業というところまで来ていた。

ヘレンは夕陽の中で昼寝ができて、たいそうご満悦だったのだが、イアソンは元気がない。法律の試験の準備（つまり、天敵の書類の山との格闘）で憔悴していたのだ。

「少し休んだら？」

ヘレンがめずらしく、相手を気遣う言葉を口にした。それくらいイアソンの顔色は悪かった。

「いや、もう少しで書けると思うんだ。大丈夫だよ」

ちっとも大丈夫ではなさそうなかすれ声でイアソンは言った。

法律、あなたには絶対向いてないと思うんだけど……。

ヘレンはそう思っていたのだが、イアソンにそれを言うとは面倒なことになりそうなので、黙っていた。

「それより、レーナの話、聞いた？」

「レーナがどうかしたの？」

「妊娠してるんだって」イアソンは口元だけなんとか笑って見せた
「つまりね、テリーとレーナの子供が生まれるんだ。たぶん来年になるだろうけど」

「ほんと？」

ヘレンは驚いて目を丸く見開いた。レーナとは最近会っていなかった。レーナは働いているから、学生のヘレンほど行動の自由が利かないのだ。

「ほんと、さっきテリーに聞いた。女の子だよ。俺の予知ではね」
「そんなことわかるの？」

「テリーに最初に会った時には、見えてたんだよ。女の子と奥さんが。でも、奥さんがレーナだとは気付かなかった」

「どうして？」

「いや……」あんなに太るとは思わなかったから、とは、イアソンは言えなかった「まだ若かったから、大人になった姿がわからなかったんだよ。テリーは常に変わらないからすぐわかったんだけど」

「テリーは驚くほど変わらないのよね」

先日会った、造船会社の見学の話を熱心に行っていたテリーを思い出したのだろう。ヘレンがおかしそうに笑った。

ヘレンが笑うなんて珍しいとイアソンは思った。

「ヘレンだって変わらない」

「どこが？」

「どこもかしこもだ」イアソンが笑ったが、楽しそうではない「あいかかわらず自然に夢中で、人に興味がない」

「そんなことないわ」

ヘレンは驚いた。

人に興味がないですって？私？

「いや、気にしなくていい。やっぱり疲れてるんだ、俺は、余計なことばかり喋っている気がする」

「そんなのいつものことじゃない」

「いつものこと」

ヘレンが平然と放った言葉に、イアソンは苦笑した。

いつも余計なのか？俺は。

イアソンの、かつての疑問が復活した。

どうして、テリーやレーナの未来がはっきり見えて、俺とヘレンの事は断片的にしか見えないんだ？

彼は心底、自分たちの未来が見たかった。あの忌まわしい『朽ちた手』ではない未来を。ヘレンと二人の未来を。そのためなら彼は何だってするつもりだ。

でも、何も見えない。

5-3 ヘレン 自宅

ヘレンはタクシーを拾って館にたどりついた。年配の運転手が突然辞めてしまったからだ。そのほうが自由でいいやと思っていたら、玄関に入ったとたん注意された。

「タクシーなんて危険です。最近は強盗が多いのですから」

シュッティファント別邸の『支配人』だ。いかつい、しわだらけの顔の、それでいて背筋だけはぴんとまっすぐな、冷たい印象の男。ヘレンは、もちろん彼が嫌いである。

「だって、どうやってここに帰ってくればいいの？」

「月曜日までに臨時の運転手を雇います。土日は外出なさらないように」

いつも冷たい声の支配人が、ますます悪魔に思えてきた。

外に出るな、ですって？ 冗談じゃないわ！

ヘレンはいつものように走って自分の部屋に飛び込み、カギをかけて、床に倒れた。

疲れた。でも今日はいい日だった。夕陽に溶け込めた……。

ヘレンは公園で、夕陽の下で寝そべった時の、全身の暖かさを思い出した。そうすると、この冷たい部屋の中でも、少しだけ、全身が熱を帯びた気がする。

ヘレンは再び微笑んだ。

このまま眠ってしまおう。何もかも忘れて。

彼女はもうレーナの妊娠の事も、外出禁止のことも、イアソンのことも忘れていた。

5-4 オリビン 自宅アパート

オリビンはアパートを出ていくことになり、部屋にたまった雑誌を紐で結えようとしたが、かねてからの将来への不安や絶望が復活し、束ねたはずの雑誌を乱暴に床にたたきつけて、床に倒れた。

どうすればいいんだ！

このまま仕事が見つからなければ、公園で見かけた浮浪者の仲間入りだ。

床に倒れたまま、しばらく天井を見上げて途方に暮れていたが、ふと、昨日見た、あの、夕陽の中で寝転んでいた女の姿を、その微笑みを、思い出した。

あれは何だったんだ？

あれは誰だ？

目を閉じる。彼は途方もない空想をしていた。夕暮れに、草の上に寝そべって安らぐ。隣にはもちろん、あの女がいる。

しばらくいい気分で寝転んでいたが、すぐに我に返って飛び起きた。

ああ、くだらない！

部屋中に散らばった雑誌を拾い集める。と、あるページの写真を見て、目を疑った。

これは、あの女じゃないか！

それは、アルターの森林伐採に反対する『ヘレン・シュッティファント』の写真だった。マイクに向かってなにか演説をしているようだ。

オリビンは注意深くその記事を読んだ。5年近く前の記事だ。写真の少女はアルターの学校の上級学級の生徒で、大統領の娘だ。

あの間抜け大統領の娘！？

オリビンは、テレビでよく見かける大統領の顔を思い出した。シュッティファント大統領の政策は『貧乏人殺し』と言われている

るため、たいていの労働者は彼を悪く言うのだった。もちろんオリビンも例外ではない。

『生まれつき呆けているという噂があったが、演説をしっかりやってのけた。もともと自然愛好家で、よく国立公園を散歩しているそうだ』

呆けている、か。

オリビンは昨日の女の様子を思い出して納得した。

確かにあの様子では、正常な神経の持ち主には見えないな。

服装も変だった。

何より、あの倒れ方！

しかし、本当にあれが大統領の娘なのか？ 大統領に娘がいるなんて、今初めて知った。息子しかないんじゃないのか？ なんてあんなところをあんな恰好でのこのこ歩いているんだ？ 報道関係者は？ 警備は？ 他人の空似じゃないか？ だいいち五年前の写真と今がほとんど変わらないなんて、ありうるだろうか？

オリビンは注意深く写真を見た。目を近づけたり、逆に離したり、床に雑誌を置いてうろうろ歩きまわり、また戻ってきて写真を見つめたり……。

いや、あの女だ。

ほかにこんなのがいるわけがない。

しかし、五年間成長しなかったのか？ 全く同じだぞ。見た目が。それから三十分ほど、ほかの膨大な量の雑誌（数年分たまっているのだ！）をつぎつぎとめくって、他に女が映っている写真がないことを確かめると、彼は急に部屋を飛び出した。

『ヘレン・シュッティファント』がどこに住んでいるか調べるためだ。

オリビンは完全に、あの夕陽の幻に取りつかれてしまっていた。

5-5 イアソン テリー イアソンの部屋

テリーがイアソンの部屋に現れたのは、次の日の朝、ちょうど土曜日で暇だったからと前置きをして、大きなかばんを持っていた。

「決まったんだ」

テリーがにこやかにそう言った。

「決まった？……ああ」イアソンは一瞬考えて、造船会社のことを思い出した「それで、作るほう？売るほう？それともデザイン関係？」

「作るほう。でも職人じゃない。一言でいえば、現場監督見習いだ。でも、デザインも兼ねてる。数年仕事をしたら、歴史のセクションに移れるかもしれない」

「歴史？」

「古代の船を保存しているセクションだよ！」テリーが興奮気味に、劇のせりふでも語るように朗々と話し始めた「世界中の船を保管しているんだ。たとえばレウレカロイ・メッキョメシクレオアリア……」

「ああーわかったわかった、昔の船だろ？わかったよ」また長い船名が出てきそうだったので、イアソンは話を切った「おめでとう」

イアソンは『船マニア』テリーを心底祝ってそう言ったのだが、疲れていて声がうまく出なかった。

「ありがとう、でもこれからが大変なんだ」

そう小声で付け足したテリーは、とても楽しそうだった。うきうきしているのが彼の身体全体から伝わってくる。喜びで、飛び跳ねたくてしょうがないという顔をしているのだ。

「イアソン、顔色が悪いな。まだ書類と格闘してるの？」

「寝てないんだよ」

「ほんと、そりゃ悪かった。今すぐ帰るから寝ろよ」

「いや、待ってくれ」立ち去ろうとしたテリーをイアソンが止めた

「ちょっと、手伝ってくれない？間に合いそうにない」

「書類？試験の？」テリーが呆れた顔になった「いいけど、どうしてそんな深刻なことになる？自分で書くのやめろってみんな言うてるだろ？」

「いや、試験の時くらい自分で書きたい」

「いいじゃないか、試験だけ自力でやれば」

「そういう問題じゃないんだよ」イアソンはほとんど泣きそうな顔だ「あとで、ああ、あんな大事な試験の時も書類は人任せだったなあ、なんて思いながら人生を送りたくない」

「どうしてそんな大きな問題になるんだよ！みんな他人に書かせてるじゃないか。三十枚近くあるんだろ？ほとんどコンサルタント任せの人間だって……まあ、そんなこと言っても無駄か」

テリーはため息をついた。彼は良く分かっていた。

人に『書類を書いてくれ』なんて頼むこと自体が、すでにイアソンのプライドをズタズタにしているであろうということを。

「頼むよ」

イアソンは何かを探すように、机の上の書類や鞆の中をひっかき回し始めた。いや、単に顔を見せたくなかっただけかもしれない。

その様子はまるで、これから旅に出て、二度と帰ってこないいつもの人間のように見えた。

5-6 オリビン 高級住宅街の入り口

こんなところに別宅をお持ちとは、大統領閣下はさぞ金持ちなんだろうな！

オリビンは、高級住宅地の入口に立っていた。不審者の侵入を防ぐため、広い敷地がまるごと高い壁に覆われていて、入口は、まるで監獄のように、警備員に見張られている。

中に入るには、住民の許可が必要だ。

ここを出てくるのを待つか。でも、出てきたところで車だろうな。オリビンは、警備に不振がられないように距離を保ちながら、門をじっと見た。たまに、大きな新しい、あるいは単に派手な車が出てきたが、どれにもあの『ヘレン・シュッティファント』は乗っていないかった。

それにしても、ばかでかい車ばかり通るな。腹が立つ。

オリビンは、自分の、もうすぐ浮浪者になるであろう境遇を思い、目の前を通り過ぎていく、高価な車に乗りたいわば『特権階級』の人間を、半ば憎悪のこもった目で眺めていた。

「おおい！」

だれかが叫んだ。オリビンが驚いて茂みに身を隠す。

叫んだのは、門の内側の警備員だった。門の外側にいる警備員に向かって叫んだらしい。

「シュッティファントの運転手、やめたんだってよ」

門の外の警備員が甲高い声で言った。オリビンは思わず茂みから顔を出した。

「ほんとか？あの三段腹が？」

「ああ、お嬢さん相手だからつまんなかったんじゃないか」

「そんな理由で？お嬢さんがクビにしたんじゃないのか？」

「あのお嬢さんにそんな頭ねえよ。ボケてるんだから。運転手の都合だろ？」

ずいぶんな言われようだな、とオリビンは思った。

「それで、お嬢さんはこれからどうやってこっから出るんだ？」

「さあね、今運転手を募集してるらしいがね」

「そう簡単に見つかるもんかね」外側の警備員が困惑の声を出した
「大統領閣下ならいくらでも志願者がいるだろうが、あの呆けたお嬢様じゃな。あれは捨て子みたいなもんだろう？」

「あとう」

「ん？」

門の外の警備員が振り返ると、そこに立っていたのは、もちろんオリビンだった。

「お話中すみません。大統領が運転手を募集されていると聞いたのですが……」

「ほんと？」警備員はオリビンに疑惑の目を向けた「あんた、車は？」

「それが、僕の所有している車はここにはふさわしくないデザインなので、歩いて来い」と

もちろんそれは嘘だった。本当は、オリビンは車を持っていない。仕事で使っていたのはみんな会社の車だった。

「それにしても歩いて来いなんて言うかな……」

「ああ、あんた若いから、派手なのに乗ってるんだろう？」門の中の警備員が柵越しで話に割って入ってきた「真っ赤なやつかい？それとも最近出た、ええと、何だっけ？鷲の翼みたいなアケパリの車は」

「違います。アケパリの車は好きじゃない」

「そりゃ、イシュハ人ならそうだろうよ！」当然だ！というふうの内側の警備員がうなった「俺たちには、誰がなんと言おうと国産車がいいんだ」

「そうでしょうね。でも最近高くなってきた」

「そりゃ、性能がいいからさ。なんたってイシュハの」

「おい、ムダ話はそれくらいにしてくれ！」門の外の警備員がいら

ついた声で叫んだ「今日は人を入れる予定がない。明日、もう一度、履歴書を持ってここに来てくれ。シュツティファントには君が来たことを伝えておくから」

「ぜひ、運転手になりたいと、お伝えください」

「ああ、わかってるよ。心配しなくてもちゃんと運転手って言ってくよ。まさか屋敷の掃除がしたいわけじゃないだろう？掃除も募集してるけど」

給料が良ければ掃除でも別にかまわないのだが、オリビンは『いえ、運転手です！』と答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4198r/>

イシュハ

2011年11月27日15時54分発行